
堕ちます.....あなたと。

56

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

堕ちます……あなたと。

【Nコード】

N7323H

【作者名】

56

【あらすじ】

脅迫する者される者を描いたリーマン物のBL小説です。基本、平日は毎日更新予定です。ボーイズラブが苦手な方・15歳未満の方はご遠慮下さい。

堕ちてください（前書き）

ボーイズラブが苦手な方はご遠慮下さい。

性描写や暴力的な描写がありますので、苦手な方・15歳未満の方・義務教育中の方はご遠慮下さい。

教育上適切と思われる内容は殆んど含まれておりませんのでご注意下さい。

如何なる苦情・中傷もお受け出来かねますのでご了承下さい。

堕ちてください

地獄なんて所は、三途の川をいちいち渡らなくても、すぐに行ける。

欲しい物に手を伸ばしたら、バランスを失い

一歩足を踏み外して

ほら

真つ逆さま。

カビ臭い暗闇の中で、ブラインドからの下向きの光だけが、床にオレンジ色の縞模様を描く。

スチール棚がギシギシと小刻みにきしんでいる。

「ねえ……もっ……しんど、い……」

棚の縁をつかんでいる掌に、スチールの板がくい込んで来る。痺れる指先。

スチールに頭を付け、振動と共に痛みを伴う両手を少し緩めた。

「そうか？ 良さそうだけど」

背中からする余裕の声に答える様に、フラットな断面を額に擦り付けて、首を振る。

もう七月に入ろうというのに、会社から存在を忘れられた小さな資料室はヒンヤリとしている。

昔は休憩室として使っていたであろう狭い室内に、スチール棚が墓石の様に並ぶ。

部屋全体が喪に服している。

口から吐かれる熱風のせいで、年度数別に分けられた古いファイルから白い塵が舞い上がる。

埃臭い。

雨が降り始めた時の臭いがする。

項に吐息を感じた。

「香水臭えな。また昨日の夜も遊んでたのか」

耳のすぐ後ろで、低重音が響く。

静まり返った資料室の中で、場違いに上気する身体から昨日の情事に残り香が染み出している。

「関係ないだろ……」

誰のせいで毎晩遊び歩いていると思っただ。

「なんだ、俺だけじゃそんなに満足できないか？ 結構忙しい中、こつやって時間割いてただけだな——」

「うるせ、えよ。人助けみたいに、言っただじゃねえ。部下脅迫して、身体弄んで、何が楽しいんだよ」

足に力が入らない。

視界に映る、肩幅に開いた自分の革靴と、膝まで下げられたスーツのズボンと下着。

出来れば横目に見える傾いたソファーに今すぐ身を埋めたい。後ろで冷笑が揺れる。

「そりゃひどい言われ様だな。金取られるより身体の方がいいって

言ったのはお前だろ？」

確かに言った。

あの時、何故そんな事を言ったのか。

シユンの好きな奴と寝る事しか考えてなかった。

あいつの辛そうな歪んだ顔を拝む事しか頭になかった。

そんなくだらないことに夢中になって

俺は足を踏み外したんだ。

「それに最初に俺を誘ったのもお前だ。ハヤト」

抑揚の無い声と同時に脇腹から回りこんできた大きな手が、ネクタイを緩めにかかる。

驚くほど手際よくYシャツのボタンを外され、力任せにジャケツトごと引き剥がされ、肩を露出させられる。

よどんだ空気にさらされた敏感な肩に、煙草臭い犬歯が突き刺さる。

「んっ……ああ……」

「声、我慢しろよ」

楽しそうな声を合図にして、繋がりを強めるように肩にあった掌に力がこめられた。

視界が激しく上下に加速し始める。

ガンガンと脈打つスチール棚。

その振動で僅かに跳ねるクリアファイルの列。

声を逃がすように乾いた息を吐き出す。

発熱する二つの身体。

小さな水音。

声と快感を溜め込んだ身体が熱く重たい。

鼻先から汗が、歯を食いしばった口元から涎が滴り、粘度の違う水滴が、違う加速度をつけて床に落ちる。

「あつ……あつ……ん……」

唇の左下に開いた二つのピアスホールを隠す、透明の樹脂ピアス。その隙間から自分抑えている感情と声が、一緒に漏れそうになる。

やばい。

本当に堕ちそうだ。

こんな奴に。

こんな身体に。

あの日、どうして目覚めたんだ。

あの日、出会わなければ。

後ろから揺さ振られる、濡れた身体。

金属が擦れる鈍いリズム音。

正体不明の粘液が太腿を伝う。

漏れ出るテノール。

荒い息音。

ガクガクと痙攣しそうな膝から、ベルトの重みで、ズボンが少しずつ靴の上にずれ落ちる。

汗でぬめった指先に力を入れて、必死でスチールの薄い柵にしがみつく。

そうやって今日も、勤務時間終了後の資料室に熱放射して、乾いた空気を湿らす。

今週に入ってから三度目の時間外勤務。

床に射していたオレンジ色の光が、部屋の闇に同調していく。

廊下から聞こえる声で目が覚めた。
すりガラスの向こうに人影が動く。

廊下で誰かと携帯で話しているらしい男の声は、どうやら先程自分の背中できていた声と同じらしい。

『ああ？ おい、アツキ。お前、いくつになった？』

ぼんやりと差し込む廊下からの光で、いつのまにかずっと恋しかったボロボロのソファに横たわっていると気付いた。

服も適当にだが、着せられている。

自分のスーツの上から、もう一枚大きなジャケットをかぶせられていた。

『そうだよな？ 俺の五つ下だから二十七であってるよな。んで、脳ミソ腐って教師になった。あってるな？ うるせえ、「はい」か「いいえ」だ。……おう、じゃあ何で堅気になってからの方が揉め事が起こるんだ』

かぶさられたジャケットの持ち主が、廊下でえらくご立腹だ。

仕事に対しても他人に対しても、変に厳しい。

『そりや岡田組潰しかけたガキと同じガキか？ ああ？ 隣のクラス？ いや、もういい喋るな。詳しく聞きたくねえ、馬鹿がうつる。てめえは一回死んでちよつとはまともな……あつ。畜生……。』

今何だかやばい会話が聞こえた気がする。

裏でヤクザと繋がっているという噂が一瞬頭を過ぎった。

途中で一方的に切られた携帯を片手に、舌打ちしながら男が部屋に入ってくる。

部屋が暗いせいで男の表情は見えない。

「起きたか？」

廊下でしていた声とは違い、温もりのある低い声が小さい部屋に響いた。

黒いシルエットが頭に伸びてきて、大きな掌が髪をそつと優しく撫でる。

やめてくれ。

そうやって優しくされると、重心が揺らいでバランスが崩れる。

崖っぷちギリギリの足元が、また暗い谷底にぎりりと吸い寄せられた。

手を振り払うように上半身を起こして、かかっていたジャケットを差し出す。

「なんだ？ 物言いたげな顔してるぞ」

差し込む廊下の光で、相手からは俺の顔がよく見えているらしい。ゆっくりと逆光で見えない黒い影を見上げた。

「別に……。ただ……。早く堕ちて欲しいな、と思つて……」

さつさと俺の前から消えてくれ。

俺が本気になる前に。

「堕ちるって、何にだ？ お前の身体にか？ それなら見ての通り、もうとつくに堕ちてる」

影を見つめたまま目を細めて微笑み、首を横に振った。

「まさかお前の策略に堕ちるとか言っんじゃないだろうな。それなら無理な話だ、何度も言ってるだろ。大切なデータを横流しする訳にはいかない。

こつやつてお前の正体を黙ってやってるだけでも、ありがたく思え」

だるい身体をきしませ、声を上げて笑ってしまった。

お願いだから、はやく堕ちて下さい。

俺の身体に？

俺の策略に？

まさか。

地獄へだよ。

堕ちてください（後書き）

始まってしまいました。新連載。

アンケートの結果から今回はリーマンの受身で話を進めさせていただきます。

前回のコンセプトが「深海」であったように、今回も一応自分なりにコンセプトを決めておりまして……今回は題名の通り「お堕ちる」です。

いろんな「おちる」がありまして、恋に・罠に・あなたに・わたしに、涙も落ちれば月も落ちます。

本当は「落ちる・墜ちる・堕ちる」と使い分けるべきなのですが、今回はあえて堕ちるを使いたかったので「雪が墜ちる」なんて間違った使い方が多用されるかもしれませんが、外で使用されませんように願います。

いきなりの性描写ですが、相変わらず勇気が無くて、ゆるゆるな表現で申し訳ありません。

もう書かれてない部分は読者様の妄想で補って下さいませ。

基本的に読む人頼りな小説しか書けません。

第一話を読んで「ああ、腰痛緩和マッサージしてるんだ」と思われた方。それはそれで、もう正解です。（↑嘘つき）

初回は小説中盤のワンシーンを冒頭として書かせて頂きましたので「は？わけわからん……」と思われたかもしれませんが。騙されたと思って明日からの本編スタートにご期待下さい。そう言いながら本当に最後まで騙してしまう可能性も多々あり。完結まで騙されてお付き合い頂けますと幸いです。

K i s s i n t h e b o x

「雪菜先輩、何か飲みます——？」

女性社員を押しつけて、今日の主役が隣に陣取った。

同じ企画三課の一年目だ。

「いいよ、舞野。気使わなくて。今日は新歓なんだから」

「新歓なんて、オマケみたいなもんですよ。もう六月ですし。」

企画成功の打ち上げってみんな分かってます。はいっ、何にします？」

そう言いながら、見るからに新入社ですといった、学生の雰囲気が残る男は、飲み放題のドリンクメニューをひらつかせた。

新入社員と言っても、入社してからの二ヶ月半、新人研修そっち退けでほとんど毎日残業し、休日出勤の連続で忙しい日々を共に送ってきたのだから、もうちゃんとした一人前の社員といえる。

半年前に立案された大規模な新作導入の企画は、入社したての社員までもを動員して、先週やっと成功に結びついた。

よってもう六月も終わろうという今晚、先延ばしになっていた新入社員と新しく着任した課長の歓迎会が、会社から五分の居酒屋で催されている。

ただ、舞野の言うとおり、歓迎会なんていうのは名ばかりで、実際は企画成功を祝った打ち上げに近い。

二ヶ月も一緒に激務をこなしておきながら、いまさら初対面の挨拶というのも不自然で、聞こえてくる会話の端々に、二ヶ月半の疲れと大きな仕事を成功させた喜びが聞き取れる。

「じゃあ、俺は烏龍茶でいいよ」

A4サイズの裏表に目を通した後、舞野を見上げた。

「先輩、アルコール苦手でしたっけ？」

「うん……。あんまり」

アルコールというよりは、酒特有のツンとした香りが苦手だ。
ビールは頑張ればジョッキ一杯くらいは飲めるが、焼酎や日本酒はグラス半分で頭痛が始まる。

同じ顔と身体なのに、酒好きのハヤトが羨ましい。

「じゃあ、これ飲んでくださいよ。僕まだ口付けてないし。ほとんどお酒入ってないから飲みやすいですよ？」

ニコニコと人当たりの良さそうな笑顔で、白く濁った液体がたつぷりと注がれたグラスを差し出した。

「いいのか？」といいながら、それを受け取る。

「雪菜先輩って、なんか苗字が女の人の名前みたいですね」

舞野が立て膝を崩して、胡坐を組んで座布団に座りなした。

「うん、そうなんだ。小さい時はよく女の子に間違われたりした」

「へ……。……。今でも――」

そう言っって白い両手が顔に近づき、太いフレームの眼鏡を奪っていった。

裸眼で見る世界が眩しくて、眉をしかめる。

「そういう表情も可愛いですねえ」と、笑いながら眼鏡を返された。
女性社員人気ナンバーワンの癒し系キャラに言われるのも、どうかと思うが。

後輩にいいように扱われて、苦笑いしながら眼鏡をかけなおす。

「せっかく綺麗な顔してるんだから、コンタクトにしたらどうですか？ 前髪も切って。……。どんな表情してるか分かりにくいですよ」

栗色のサラサラした髪を揺らせながら顔を傾げて、俺を眺める。

うちの会社は、あまり服装や身なりにうるさくない。

特に営業で外回りをしない企画課は、視界に入るだけでも舞野を含め、茶髪や金髪がざらにいる。

あげく男性社員でもジャラジャラとシルバーのアクセサリーを付

けていたりするので、スーツを着ていなければ社会人の集まりには見えない。

最悪私服で出勤してきても、絶対に怒られるという確信がない珍しい会社だ。

だからファッション性の高い、太いブラックフレームの眼鏡なんて全く問題にはならない。

ただ俺の場合はお洒落ではなく、表情を隠すために眼鏡をして前髪を伸ばしている。

昔から人に見られるのが苦手だ。

一番見られたく無い内面まで見透かされている気分になる。

舞野は可愛い顔をして、意外と的確な事を指摘した。

新入社員の中でも仕事が出来る方で、男女問わず先輩から人気だ。「じゃあ、シユン先輩って呼んでいいですか？ それなら男ってわかるし」

「えっ、ああ。いいけど……」

後輩が自分の下の名前を知っていた事に驚く。

さすがに先輩人気をかつさらうだけあって、抜かりが無いな。

舞野に貰ったカクテルに口を付けると、きついココナツの甘味と、独特の苦味が口内に広がる。

確かにアルコール度数は低そうだが、個性の強い南国の味と香りが苦手だった。

奥のテーブルから沢山の笑い声が同時に湧き上がる。

目をやると、四月から新しく課長に就いた男を女性社員が取り巻いて、大いに盛り上がっていた。

仕立ての良さそうな広い肩のスーツに、自分と同期のOLが手を添えている。

少し胸が苦しくなって、敬遠していたカクテルに、もう一度口を寄せた。

「安藤課長、大人気ですね。……昔はラガーマンで、かなり遊んでいたらしいですよ」

同じ方を見ていた舞野がぼそりと言った。

「仕事も出来るし、頼りがいあるからね。女の人が放っておかないんじゃない？」

実際のところ、今回の成功は新任課長の功績だと言ってもおかしくない程、実力のある人物だ。

「そうですか？ 僕はあんまり好きじゃありませんけど……ああいうタイプ。ただの女好きですよ。バツイチだし」

舞野は一年目の割に毒を吐く。

「実力がなければ、うちの会社も企画途中から新しい課長なんて入れたりしないよ。今回もあの人がいなかったら成功しなかったさ」
「それは雪菜先輩も同じじゃないですか。先輩がああ廃案ねばって上げなかったら、絶対うまくいってなかったでしょ？」

さっき下の名前で呼ぶと宣言しておきながら、既に前の呼び方に戻っている。

下の名前で呼ばれるのも、女みたいな苗字で呼ばれるのも、どちらにしても恥ずかしいので好きにすればいい。

「最初会った時、ヤクザかと思いましたよ、課長のこと。怒ったら怖いし」

舞野の話を笑いながら聞いていると、ヤクザみたいな男と目が合ってしまった。

笑っていた表情を戻して、煙草を灰皿に擦り付けた後、膝に手をついて立ち上がるうとする。

やばい。こっちへ来る。

「ちょっとトイレ行ってくるよ」と言って、同じように膝に手をついて立ち上がると、視界がグニヤリと歪んだ。

「えっ、ちよっ先輩！ 大丈夫ですか？」

目の前にある舞野の肩に手をついた。

ひどい頭痛だ。

深呼吸を何回もして、もたもたしていたせいで、後ろから逃げたかった声に追いつかれた。

「おい、雪菜。どこ行くんだ？」

「すみません。ちょっとトイレへ」

「お前やけに俺のこと避けるじゃないか。そんなにオッサンと話すのは嫌か？」

ニヤニヤとした明るい顔に見下ろされる。

「いえ、そんなんじゃない……」

そんなんじゃない。

嫌いじゃない。

嫌いじゃないから、逃げてるんだ。

「課長！ 雪菜先輩にからむのやめてください！」

「おつ、出たな生意気ホープめ。さては二人で俺の陰口叩いてたな？」

「違います！ いや、違うないけど……」

安藤のたくましい腕が舞野の首に回った。

「ほお。その話詳しく聞かせてくれるか？ 舞野君」という声を後に、トイレに向う。

廊下の壁に寄りかかりながら歩き、やっとの思いでトイレに着いた。

洗面台に両手を置いて、正面にある鏡を見ないように、白い陶器を覗き込む。

吐きたいけど吐けない。

血液が沸騰しているように身体が熱い。

焦点が定まらず、洗面器の縁に額を付けて座り込み、少しでも熱を逃がそうと、熱い息を吐き出すことに集中した。

どれくらいの間、そうしていたか分からない。

「おい」と呼びかけられて、久し振りに瞼を開けた。

ぼんやりとしながら見上げると、安藤が立っていた。

「お前本当にしんどかったのか、悪かったな……」

「いえ、そんな」

「立てるか？ もうお開きだ。みんな二次会に向かったぞ」

そう言いながら、腕をこちらに伸ばす。

つかまらなければ立てなかったので、俺もしかたなく手を伸ばした。

身体を支えてもらいながら廊下へ出ると、社員らしいスーツ姿はチラホラ見えるだけで、殆んどが店を出たようだ。

顔のすぐ横に大きな肩がある。

その向こうに太い首。

その上に不精髭があつて、唇がある。

勝手に身体がバランスを崩して、そちらに向かおうとする。

「大丈夫か？」

低い声に身体を支えられる。

煙草と酒の香りが漂う襟元に頬をあて、目を閉じた。

温かくて、心地よい。

好きになつてしまふほどに。

「先輩？ 大丈夫ですか？」

目を開けると、さつきよりもずっと小さい身体に支えられていた。明るい箱の中。

さつきの居酒屋を出てエレベーターに乗り、一階の出口に向かつているらしい。

「舞野……」

同じ高さの肩に体重をかけるのは気が引けるので、身体を離そうとすると背中に戻った腕でギュッと引き寄せられた。

「もたれていいですよ。僕、合気道やってたんで先輩よりずっと力
ありますから」

「課長は？」

「階段で下りましたよ」

あの後余程からまれたのか、舞野の顔が歪んだ。

「安藤課長エレベーターに乗れないんですよ。知りませんでした？」
そういえばエレベーターで出くわしたことがない。

「ああいう人に限って怖がりなんですよ。先輩、あんまり課長に近
付かない方がいいですよ？」

すこしドキリとした。

俺が近付きたがってるみたいじゃないか。

「あのタイプは裏で何考えてるか分かりませんから。……僕みたい
に」

聞き流していた言葉の後に強い視線を感じて振り向くと、舞野が
いつも通りの爽やかな顔で笑っていた。

エレベーターから下りて、外に出た。

冷たい空気が気持ちいい。

暗いのが夜のせいなのか、自分が目を閉じているせいなのか分か
らない。

舞野の肩につかまっただまま話し声だけが聞こえてくる。

「お前は二次会だろ？ 雪菜は同じ社宅だから俺が送る」

「いえ。僕が部屋まで送ります」

「主役が二次会に出なくてどうすんだ」

「課長だって……」

「こういうのは下が気使うから、上の者は先帰るって決まってるだ
よ。さっさと行け。課長命令だ」

そのあと身体が何度か浮いて、車のドアが閉まる音がした。

目を覚ますと、タクシーの後部座席で安藤にもたれて、たくまし

い腕に抱きついていてた。

「あつ……。すみません……」

肌触りのよいスーツから顔を離れた。

「まだ着かないから、もう少し眠ってる」

その言葉に甘えて、もう一度二の腕に頬を寄せて瞳を閉じた。

何をしているんだ、俺は。

酔ったせいで自分に抑制がきかない。

こうなることを一番恐れていたのに。

やばい。

離れたくない。

離れたくない。

二カ月半、無理して目をそらせていた感情が見え隠れする。

違う。

俺は男なんて好きじゃないんだ。

脳が伝達変換ミスしてるせいで、上司に対する憧れを勘違いしてるだけだ。

だから会うだけでドキドキする。

考えるだけで身体が熱くなる。

憧れ以上の感情なんてない。

あったとしても受け入れられるはずがない。

その、目に映らない感情が、怖くて怖くて今日まで避けてきたのに。

こんな事ハヤトにばれたら最悪だ。

この人だけは失いたくない。
ずっと上司と部下の関係でいい。
優秀な部下として近くにいれるだけでいいんだ。

見えない感情の正体が、抱き締めている二の腕だと気付きそうになったが

閉じた目をしかめて、なんとかそれをやり過ごした。

タクシーを降りて安藤の腕につかまったまま、マンションのエン
トランスに入る。

社宅といっても、いくつかの部屋を会社が借りているだけで、普
通のマンションと変わらない。

開いたエレベーターに入り、五階のボタンを押すと、安藤は身体
を半分外に出した。

「お前の部屋は五階だったな。俺は階段で行くから、上で待ってる
そう言い残し、出て行こうとする。

エレベーターに乗るのが怖いというのは本当らしい。

両手から滑り抜けていこうとする二の腕が恋しくてたまらなかつ
た。

嫌だ。

離したくない。

酒のせいだ。舞野からもらったカクテルが合わなかった。
だからこんなにも人肌が恋しい。

全体重をかけて、離れていこうとする腕をエレベーターに引っ張
り込んだ。

「おいっ」という困惑した声と同時に、タイミング良く扉が閉まった。

「雪菜、俺はエレベーターが……」そういいながら、階数が書かれたボタンに伸びる手を制止し、安藤の首に正面から抱きついた。

背伸びをする

数センチに接近するお互いの顔。

唇しか見つめていなかったので、安藤がどんな表情をしていたのが見逃した。

「大丈夫。怖くないですよ。とっておきのおまじないがあるんです」

そう言ったと思う。

揺れる視界の中で、目の前の唇にキスをした。

完全に酔っている。

酒のせいだから、課長も許してくれるだろう。

酔っ払って裸になる人もいるんだから、酔ってキスする人間がいたっておかしくない。

やばいな。

このまま部屋に行くのは。

ハヤトに見つかるかもしれない。

いや、部屋の前まで送ってもらっただけなら問題ないか。

全ての問題を甘く跳ね除け、目を瞑ったまま唇の温もりと感触を楽しんだ。

ああ、なんて心地良いんだろう。

こんなに大胆になったのも、
こんな気持ちになったのも生まれて
初めてだ。

永遠に思える時間を貫き

上昇を続ける箱の中で

柔らかい温もりに触れたまま

深い眠りに堕ちた。

K i s s i n t h e b o x (後書き)

長い……。5500文字程あります。

二つに割るか悩みましたが、一話一展開を心がけていますので割らずに載せました。ドッセエ・(。ω。ノ)ノ・-エエエイ!!きりのいい場所で二つに割ると、片方が2000文字に達せず短くなりすぎるってのもありましたし。

まあ、言い訳はこのへんで。

お盆の間に「小説の書き方」という本を読みました。(- ㇏ -)

。㇏(フムフム(。ω。ω)(コクコク なるほど。結局書きたいように書いてことだな!??って事で、本の意図を大幅に勘違いしたまま今日を迎えております。アホタレ!(。ω。ω)ノ

アホな上に腐っているのもう普通の事が理解できず。残念賞。

そういえば、アホの56はベタベタの関西弁なので、たまに変な標準語を登場人物に喋らせているかもしれません。全員関西弁の設定にしてもよかったのですが、そうすると課長がますます本業の方みやーさんたくなってしまうので断念しました。

変な標準語に気付いた方は、幼少期に関西に住んでいたという裏設定を自由に加えて下さいませ。基本的に読者様任せです、そこそこ。(= ㇏ = ;) テメ…
では。

目覚めの夜

暗闇の中で目を覚ます。

手探りでつかんだ携帯を開くと、青白い光が夜の十一時過ぎを表
示していた。

もうこんな時間か。

よく眠ったはずなのに重たく感じる身体を持ち上げ寝室を出ると、
珍しくリビングの明かりがついたままだ。

シユンの馬鹿が消し忘れたらしい。

寝室の前の洗面所に寄って、顔を洗った後リビングへ向う。

ドアを開けると、驚いた事に人がいた。

がたいの良い三十過ぎの男がこちらを振り向く。

足を広げてソファーに腰をかけ、両膝の間に垂れ下がった手に、
煙草が引っ掛かっている。

高そうなグレーのスーツに、黒のYシャツ、ノーネクタイ。

全体がまとまって品良く見えるのは、一つ一つのアイテムが高価
な証拠だ。

総合的に判断した結果、この男はヤクザで間違いないだろう。

待て。俺は誰かに借金なんてしていたか。

いくら考えても、思い当たる節が無い。

かと言って、ヤクザと寝た記憶もない。

いや、記憶が無いだけで、もしかしてやっちまったのだろうか。
でも記憶が無くなるまで飲むなんて事、最近……

「もう、大丈夫か？」

ヤクザは案外、優しい口調だった。

「あんまり飲みすぎるな。二年目が新入社に醜態さらしてちゃ、後々舐められちまうぞ」

そう言って正面に向き直り、煙草を吸い付け、背もたれに身体をあずけて足を組む。

飲みすぎ、二年目、新入社。

何となく見えてきた。

そついや今日はシュンが歓迎会に行った日だ。

さてはあいつ、飲みもしない酒で酔っ払って、この男に部屋まで送らせたな。

どこまで馬鹿なんだ、あのヤロウ。

ってことは、この男はシュンの上司かなにかか。

俺の事をシュンだと勘違いしている。

まあ同じ顔だから仕方ない。

夜行性の俺とは違い、予想に反してこの男は昼の住人らしい。

昼でもヤクザみたいな奴がいるんだな。

こんな怖そうな男が、あの気弱なシュンの上司だなんて。少しシュンに同情した。

ソファアの前に回りこんで、絨毯に腰を下ろす。

壁の時計を振り返ると、もう十一時半だった。

早く遊びに出掛けたい。

さっさと帰ればいいのに。

だいたい、シュンが寝た後この部屋で何してんだ、この男。

テーブルの上の灰皿を自分の方へ引き寄せる。

テレビ台の引き出しから煙草を取り出して、一本口にくわえたのはいいが、ライターが見当たらない。

「ねえ、ライター貸して」と手を伸ばすと、男が怪訝そうな顔をする。

「あ、さーせん。ライター貸して下さい」

殆んど使った事のない敬語で再挑戦した。

「お前、吸うのか……」と言いながら、ジャケットの内ポケットを探った。

ああ吸うさ、俺は。

シュンじゃねえしな。

渡された物に目をやると、横向きの髑髏が彫りこまれている重厚なジッポだった。裏にはオニキスの石がはめ込まれていて、かなり細かく装飾が彫られてている。軽く見積もっても数万はするだろう。本当にただの会社員か？

ドッキリ好きのヤクザじゃないだろうな。

ジッポを返しながら、疑いの目で男の顔をまじまじと見上げた。

煙越しのすつきりとした顔に、薄い記憶が呼び覚まされる。

見た事あるな、この顔。

靄がかかった記憶を必死でローディングする。

見たのはこのマンションの廊下からだ。

下の駐車場を眺めていた。

車に乗り込むこの男を見ていた。

いや。厳密に言くと、それを見ているシュンを見ていた。そうだ。

こいつ、二階に住んでるシュンの直属の上司じゃないか。

名前は確か……。

思い出せ、思い出せ。

未練がましく見つめていた視線の先を。エントランスの郵便受けのネームプレートを。

「あん、どー……さん？」

「なんだよ」

いぶかしげな表情で、この男の名前が安藤だと判明した。
俺の記憶もたいしたもんだ。

「何か飲みます？ ビールでいいですか？」

嬉しくなって勢いよく立ち上がり、冷蔵庫へ向かった。

こんな面白そうなチャンスを逃がすわけにはいかない。

今部屋にいるのは、シュンが毎日のようにずっと見つめている男だ。

「おい、俺のさっきの話聞いてたか？ 飲みすぎるなって言ってるだろうが」

「まあ、そう言わずに。送ってもらった礼です」

缶ビールを二本取り出し、プルトップを開いて強引に勧めた。

渋々安藤がソファに座り直す。

「あんまり酔っ払ってキス魔になんの、もうやめろよ。そのうち変な輩に連れて行かれんぞ」

「えっ！ 何それ！？」

ビールを噴出しそうになった。

「覚えてないのか？ 俺にキスしたろ、エレベーターで。まあ、おかげで何十年かぶりにあの箱に乗れたよ」

なんだそれ。

シュンはこの男にキスしたのか？

あのヘタレが？

シュンは酒に弱い、酔って奇行に走る奴じゃない。

やっぱりシュンはこの男が好きなのだ。

でもそんな感情を素直に受け入れられる程、強い奴ではないと思っていた。そのせいで今まで散々痛い目を見てきているはずだ。

まさかいきなりキスするなんて……驚きだ。

「マジ！？ 笑える、それ。バカだ。全然おぼえてねえ……です」
もう笑いすぎて敬語が変だ。江戸っ子みたいになっちゃった。
ああ、もういいや敬語とか。
尊敬する人に使ってこそその敬語だ。初対面のオッサンに使えなくても罰は当たらない。

「お前……相当酔ってんな——」
腹を抱えて笑う俺を苦笑しながら見下ろす。
まずいますい。

シユンはこんな風に笑わないな。あいつは作り笑いしか出来ない
可哀想な奴だつて事を忘れてた。
何とか努力して笑顔を静めた。

安藤が大きく煙を吐き出し、テーブルに缶を置いた。
俺も痙攣が治まった腹をさすり、煙を吐く。
しばらく無音が流れる。

「雪菜。そっぴや、お前に一つ聞きたい事があるんだ。酔っ払いついでに答えてくれるか？」

声のトーンが変わった。

どこか遠くを見つめている。

「何？」

こんな面白い話を聞けたんだから、大抵の事には答えてやろう。

「お前いつも二時間ほど早く出勤してるだろ……何でだ？」

「は？ さあ……」

早くも難問だ。

シユンは毎日二時間も早く出勤しているのか。

あの時間が普通だと思っていた。毎朝早くて迷惑極まりない。
どうして二時間も早く出勤するのか、俺が聞きたい。

「毎朝俺のパソコンいじって、何してる？」

低く突き刺さりそうな声に息を呑んだ。

安藤はじつと正面を見つめている。

その視線の先にあるのは、シュンのタワー型パソコンだ。

「もしかして、パソコンの中、見た……？」

シュンを寝かしてから、この部屋に居座ったのはそのためか。

「あんなデータ持ち帰って、何に使うつもりだ」

紫煙を吐き出し、細められた視線で俺を見下ろす。

シュンが会社のデータを持ち帰って横流ししている事は、何となくだが気付いていた。

そうでなければ入社二年目のシュンが、社宅とはいえ寝室とリビングが分かれたお洒落な1LDKに住めるはずが無い。

仕事から帰って来ては、メモリースティックをパソコンに差込み、保存と書き込みを繰り返している。

そのデータを移し変えて、月に一度郵便の小包で送るのだ。

送り先は前働いていた会社の上司。

前の会社は、今の会社のライバル企業だ。

前の会社にいらなくなかった理由……それはまあ、有り体に言えば俺のせいだ。

シュンに告げてきた同僚の男を俺が寝取って、豪快に遊んで捨ててやった。

シュンもその気が無い訳じゃなかったのだから、「はい」といえば両思いになれたものを。バカみたいに自分の性癖を受け入れられなくて、もたもたしている間に、俺が頂いた。

相手は何の取柄も無い大人しい男で、全く俺のタイプじゃなかったが、シュンの泣き顔見たさに遊んでやった。

あの男に比べれば、この安藤という上司のほうがずっと俺の好みだ。

苦勞して入った会社をずいぶんとすんなり辞めたと思っていたが、きつとタイミングよく上からお声がかかったのだらう。産業スパイってやつか。

「それって……犯罪？」

安藤が膝に肘をついてニヤリとする。

「ああ。そうだな——不正競争防止法で10年以下の懲役または1000万円以下の罰金つてところか。窃盗か横領が認められれば、それ以上だな。そうなったら誰も助けてくれないぞ？ お前がデータ売ってる相手も、だ。脅されて嫌々してましたなんて通用しない」
「へえ——。詳しいね……」

これは本格的にやばくなってきた。

シュンのヤロウ、やるならバレないようにやりやがれ。

俺には関係無いとは言いたいところだが、そうもいかない。

シュンが捕まれば、俺もこんな生活出来なくなる。

築一年の綺麗な1LDKを手放したくはないし、シュンの金で毎晩遊び歩くのも無理になる。

それはまずい。

「安藤さん、その事、もう誰かに話しちゃった？」

「いや、まだだ」

「誰かに言うの？ 会社とか警察とか……」

「さあな。お前の出方次第だ」

「それって……脅迫？」

「……さあな。それもお前次第だ」

テレビドラマでよく見る展開が、実際自分に巡ってくるとは思わなかった。

これが二時間サスペンスなら、取り合えず俺はコイツを刺してから証拠を隠滅して、部屋を密室にしなければいけない。それでもって、なんか壊れた時計や留守番電話を使ってアリバイ工作に走る。

ところがダイイングメッセージや枯れた花とかでアリバイが崩されて、日本海の崖っぷちでお前が犯人だと指を指されなければいけない。そしたら俺は二時間分のストーリーを回想しながら分かりやすく手短に説明し、そしてナイフを握って言うんだ「あの時は……ああするしかなかった」って。

まあ無理だ。

まずこんなヤクザみたいな男、刺せるわけがねえ。

上手くいっても刺し違えて、そして誰もいなくなるって落ちだ。

そんな事で俺の人生にエンドロールは上らせねえぞ。

どうする。

脅迫ったって、金が無くなって夜遊び出来なくなったら、シヨンが捕まるのと一緒にじゃねえか。

「ねえ、安藤さん。俺さ——、お金無くなるの困るんだよね。病気の妹とか……いるしさ」

我ながら初耳だったが、いるかもしれない。病気の妹が。俺の知らないところにな。

腰を上げてソファアーへ向かい、安藤の隣に座る。

肌触りのいい生地越しにそつと腕を絡ませて、上目遣いで誘う。

一瞬眉を寄せて、横目で俺を見下ろす。

「こついうのは、どうかな……？」 黙っててくれたら、俺安藤さんの言う事何でも聞く……。安藤さんが喜ぶような事、いっぱいして

あげられると、思っただよね……」

耳元に口を寄せ、最大限に艶っぽく囁いた。

何も言わずに宙を見つめている。

男の喉の膨らみが上下に動いた。

いける。

堕とせる。

だてに夜の町で場数を踏んでいない。

脈があるか無いかくらいは、話さなくてもわかる。

この男は絶対に堕ちるし、堕とせる。俺の掌の上に。

自然と上がる口角を安藤の唇に近づけた。

舌の先端でやらしく舐めてから、口を合わせた。

太い首に両腕を回し、動かない唇をしばらく吸ったり舐めたりしている、突然分厚い舌が侵入してきた。

同時に強い力で抱き寄せられる。

ほら、もう堕ちた。

簡単だ。

シユンが知ったら悲しむだろうな。

自分と同じ顔が歪むのを想像するだけで、また口の端が上がってくる。

でも、これでシユンは今の会社にいられる。このマンションも出なくて済む。

俺も夜遊び出来るし、もひとつ言つと、わざわざ寝る相手を探さなくて済む。

今夜はゲイバー経由じゃなく、ベッドに直行できそうだな。
ちようど、そういう気分だし。

まさに、一石四鳥くらいだ。

シュンの苦しそうな姿が拝めるので、俺にとっては一石五鳥か。

「ねえ……、ベッド行かない？ もっと気持ちいい事、たくさん出来るよ……」

そうやって

俺は軌道から大きく一歩、足を踏み外した。

墮としたと思っていたら

自分の方が墮ちていた。

大いなる罠の中に。

目覚めの夜（後書き）

また長くてすみません。

自分には文章を短くスマートにする能力が無いようです。まあ、これも一つの実力の無さ。トホホ・（；、A、）ノー柱ー最近「自称」って言葉が気に入っております。自称プロサファーク……。プロだと自分で称する……。なかなか簡単そうで勇気のいる事でございます。「いや、私だけじゃなく、周りもそう言ってるですよ！」って言いたいだろうな（。°。；）

「まだ未確認ではございますが、本人の話によりますと……」という意味か「本人はこのようにほざいていやがりますが、まあ一人で言ってるだけなので放っておいてやって下さい」なのか、どちら寄りの「自称」なんだろう。完全に後者寄りで、私も有事の際には「自称人気ネット作家」と名乗りたいと思います。ニユースからこのフレーズが流れたら「ああ、あいつだな」って思っ頂きたいと思っています。

では明日、自称BL小説でお会いできますよう。ペコ

鏡よ鏡

朝目覚めると、もう七時をまわっていた。

慌てて飛び起き、寝室を出る。

いつもなら、もう会社で課長のパソコンに向かっている時間だ。

リビングへ入ると、毎朝散らかっているはずのテレビ前の空間が、今朝は昨日部屋を出た時の姿のままで落ち着いている。

珍しい。

いつも派手な服が脱ぎ散らかり、テーブルにはシルバーのアクセサリーやビールの空き缶が転がっている。

灰皿を覗くと、ハヤトが吸う煙草とは違う銘柄が何本か刺さっている。

誰か来たのだろうか。

でもハヤトは部屋に人を上げることは殆んどない。ハヤトが煙草の種類を変えたただけだろう。

洗面所に行つて、顔を洗い、歯を磨いた。

身体が重く、動く度にあらゆる場所がギスギスとひずむ。

昨日、俺はあれからどうしたのだろう。

トイレで安藤に声をかけてもらつてからの記憶が無い。

舞野に肩を借りていた気もする。

何か重大な事件を思い出しそうになったが、本能的にそれを抑え込んだ。時間もあまりない。

立ったまま朝食を済ませて、着替えをしに寝室へ戻る。

クローゼットを開けると、モノトーンの服が規則正しく並んでおり、その中から今日着て行くYシャツを取り出した。

視界の右端に入るカラフルな布の山の方に目を移すと、目が痛くなるような配色の服が、昨日の朝俺が掛けたままの状態で吊り下がっている。

やはり昨日ハヤトは出掛けなかったらしい。

スーツに着替えて、鞆の中のメモリースティックを確認してから部屋を出たのが、七時半だった。

マンションのエレベーターに乗り込むと、何かモヤモヤしたものが頭の中に湧き出してきた。

狭いエレベーターの中がやけに広く、寂しく感じる。

昨日の夜は誰かと一緒だった。

五階のボタンを押す指。

肌触りの良いグレーのスーツ。

布越しの硬い二の腕。

太い首に回る自分の両腕。

至近距離の不精髭。

酒と煙草の味がする、柔らかい温もり。

昨日の悪夢を思い出して、血の気が引いた。

夢だ。

夢だろう。

夢であってくれ。

自分の上司にキスをせまるなんて、正気の沙汰とは思えない。

そうだ。

あの時はひどく酔っていたんだ。
そのせいだ。

とにかく今朝一番で謝りに行こう。

安藤の性格なら、案外笑い話にして許してくれるかもしれない。

二日酔いの頭を更にふらつかせながら、エレベーターを降りた。

会社の自動ドアをくぐり腕時計に視線を落とすと、もう就業時刻四十五分前だ。

チラホラと出勤して来ている社員もいる。

これでは、あまり派手な行動は出来ない。

今日は安藤のパソコンに向かうのをやめて、自分のパソコンから他のパソコンのデータを覗くだけにしよう。

ポンと電子音を鳴らして開いた箱に乗り込み、向き直ってから八階のボタンを押す。

人が来ていない事を確認して「閉」を押した。

扉が外の景色を細長い長方形にまで切り取った時、足元の隙間に黒の革靴が割り込んで、大きな手が閉まりかけたエレベーターの扉を強引に開けた。

「課長……！」

急いでボタンから手を離すと、安藤が乗り込んできた。

よりによって一番会いたくない人に、朝一から出会ってしまった。

安藤が俺の左後ろに立つ。

背中 of 左半分がヒリヒリと強張る。

「あつ」という小さな声がしたので、もう一度閉まりかけた扉の向こうを見ると、年配の男性社員と目が合った。

エレベーターに乗ろうと、自動ドアの前からこちらに駆け寄って

来ている。

間に合いそうなので、扉を開けて待つていようと「開」ボタンに手をやった。瞬間、ダンッ！ とパネルを響かせて、顔の左横から現れた大きな掌が隣の「閉」ボタンを叩いた。

厚い扉が、慌てる男性社員を無情に立ち塞ぐ。

小さな箱が静寂切り取り、上昇を始めた。

「お、おはよう、ございます……」

俯いたまま、左後ろに頭を振った。

返事が無い。

やはり昨日の事を怒っているのだろう。さっき扉を閉めた行動も荒っぽかった。

それにしても安藤がこんな時間に出勤して来るなんて珍しい。

会社のエレベーターで出くわすのは初めてだ。

待てよ。そういえば安藤はエレベーターが嫌いだと昨日聞いた気がする。

その記憶がそのまま、初めて男と交わしたキスの記憶に直通しているようなので、考えるのをやめた。

とにかく謝ろう。

許してもらえるか、もらえないかは、謝罪してからだ。

「あの。昨日の夜はご迷惑を……」

思い切って左上を振り返ると、薄暗い蛍光灯の光が視界いっぱい影で遮られた。

何が起こったか分からなかった。

ただ、昨日以来の間近でする煙草の香りを、身体が思い出している。

気まずさの残る上司の顔が、目の前にあり、口元で繋がっていた。自分よりも少し高い体温を、唇で感じとる。

心地よい。

口腔内に滑り込んできた大きな舌に驚き、身体を離そうとすると、いつのまにか背中に回されていた腕で抱き寄せられる。

何故だ。

何故、こんなことになっているんだ。

怖くなって目を瞑る。

熱い異物が自分の歯列をなぞり、粘膜を犯していく。

数センチ先からの小さな水音に、聴覚が捕らわれる。

口内にまで広がる煙草の香りと味。

開く勇気が無い視界。

全ての感覚が捕らわれ、脳が麻痺していく。

腰に安藤の掌が添えられ、動けない身体を更に引き寄せられた。

気を失いかけたところで、到着を告げる音を箱が鳴らす。

先程までとは逆方向の力で、身体を引き剥がされた。

一通り口内を掻き混ぜて満足した舌が、一瞬透明な糸が光らせ、遠退いていく。

ドアが開くと、そこはまだ四階だった。

小柄な女性社員が一人、箱に乗り込む。

安藤は俺の前に回りこみ、「閉」を押してから、七階のボタンを押して点灯させた。

大きな背中の後ろで、フラフラの火照った身体を支えることで精一杯だった。

絶対に顔が真っ赤だ。

恥ずかしくてずっと足元を見つめる。

七階に到着して扉が開くと、安藤がエレベーターを降りて行った。喫煙所に行くのだろう。

その横顔が、何も無かったかのように無表情だった。

八階でやっと小さな箱から開放され、後目に閉じる扉を見ながら溜め息をつく。

俺はこれからエレベーターに乗る度に、今のことを思い出してしまうのだ。

自分のオフィスとは反対の方向へ廊下を歩いた。

安藤が出勤しているので自分の席でも他のデータを覗くのは危険だ。

それ以上に、一つの部屋に安藤と二人になるのは耐え難い。

トイレに向かいながら、何故こんな事態になったのかを考える。

どう考えても昨日の夜、マンションのエレベーターで安藤にキスしたのが原因だろう。

それに腹を立てて、俺をからかっている。もしくはその気になってしまった。

出来れば前者であってほしい。

後者の場合、俺にはどうも出来ない。自分で仕掛けたことなのに、もう一つの可能性として、ハヤトの顔が浮かぶ。

随分前にも、同じような事があったからだ。

嫌々脳を回転させて、二年前をリロードする。

男から告白されるのは初めてではなかった。

でも返事を悩んだのは初めてだった。

いつでも優しくかった一年上の先輩に告白されて、いつもならその場で断るはずが、どうしようかと本気で悩んだ。

先輩の事が嫌いではなかったからだ。それどころか、男同士なのに一緒にいれると嬉しいとまで思っていた。

しばらく返事を待ってもらっていると、ある日先輩の態度が急変する。今朝の安藤のように。

やたらと二人になりがる。暗い所へ行きたがる。

二人になると、急に身体を密着させてきて、キスをしたがる。

本来そういう人では無かったので、俺は戸惑った。

そうこうしていると、「昨日はすごく良かったよ」と、照れながら意味の分からない事を言い出す。

もうやめて下さいと言おうと思っていた矢先、ある日また先輩の態度が急変して、今度はまったく口をきいてくれなくなった。

それがハヤトのせいだと知ったのは、部長室に呼ばれて今の会社に入社してくれと頼まれる前日だった。

ハヤトは先輩と付き合っていたのだ。そして俺の立場も考えずに酷いふり方をして、先輩と別れた。

俺とハヤトは別人だと言う事を、一応ハヤトは先輩に伝えたらしいが、先輩は信じなかった。

あまりにもハヤトと俺の顔が似過ぎているせいだ。

先輩はずっとハヤトを俺だと思って付き合っていた。

それまでもハヤトのせいで友達を失う事は多々あったが、社会生活に支障をきたすようなことはこれが始めてで、俺は心身共に元々不安定だったバランスを崩した。

この事があってから、同じ生活空間の中で、俺は出来る限りハヤトから距離をおいてきたつもりだ。

それなのに、やっと心も身体もバランスを立て直し、ハヤトとの生活も安定してきた今になって、また重心が揺らこうとしている。

昨日安藤は酔っ払った俺を部屋まで送り届けた。

そこで絶対ハヤトに出会わなかったとは言えない。

もし、安藤がすぐに帰らず、部屋にしばらく居たとしたら……。

ハヤトは昨日の夜、外に遊びに出掛けていない。

もし安藤とハヤトが出会ってしまったら。

ハヤトを俺だと勘違いしていたら。

朝一番でキスしたくなるような関係に、二人がなってしまうていたら。

今朝の状況が、嫌というほど理解できるじゃないか。

トイレの洗面台に両手をつく。

下唇を噛んで、吸い込まれそうな白い陶器の中心を睨みつける。

怖い。

すべてが。

ハヤトも。安藤も。

何より、先程のキスにのぼせ上がっている自分自身が。

頭のとっぺんに、正面の鏡から強い視線を感じる。

背筋が凍り、全身の血液がざわつく。

恐る恐る顔をあげた。

狭いタイル張りのトイレの鏡に、自分の顔が映っている。

いつも見る、死人のような暗い表情ではない。

少し顎を上げて顔を傾け、勝ち誇ったように同じ高さから、こちらを見下げている。

ハヤトだった。

鏡よ鏡（後書き）

読んで頂き有難うございます。

今日は金曜なので、今週の更新はこれで終わりです。

おそらくブログの方では週末に予約投稿で一話更新しますので、またこちらが一話遅れそうです。（；・ω・、）ゞごめんなさい。

なんでここは予約できないんだ。。。（ノム、）。。。

ブログの週末予約更新は基本的に土曜の夜9時半です。

作者がテレビの世界不思議ハツケ（´・ω´+」ンに釘付

けの時間です。テレビに夢中で忘れてるうちに更新されていた方が気が楽だと思って、この時間に設定してます。でもたまに特番等で世界の不思議を発見できず、床にうずくまって挫折を味わう場合があります（#ム）

どうか明日の夜は、ヒトシ君人形（スーパーヒトシならぬクリスタルヒトシの方）に会えますように……（人・ム、〇）こんなに頑張っ

って腐った小説書いてるんだから……あ、逆にボツシユートか……

（´・ω´、）ムグッジョブ！

解離性

「おまえさあ。調子乗ってんじゃねえよ」

鏡の中のハヤトが目を細め、見下した表情で呟く。

こうやって面と向かって話すのは、二年ぶりくらいか。

余程大きな問題が生じた時以外は、俺達はお互いの顔を見て話さない。

相手の顔を見なかった二年間、ある意味安定していた時期といえる。

「ハヤト。昨日……、安藤課長に、会ったのか？」

静かに訪ねると、ハヤトは更に目を細めて口角を上げた。

「ああ、そうだ。言い忘れてた。俺、安藤さんと付き合う事になったから」

ニヤニヤと笑っている。

やっぱり俺の予想は当たっていた。

昨日の夜、俺がベッドで眠った後、同じ身体に目覚めたハヤトは安藤と出会ってしまったのだ。

「シユン、てめえ。俺の恋人にキスされて浮かれてんじゃねえぞ」

「付き合うつて……どうして……」

「どうしてって、お互い好きになったからだろうがよ。バカか、お前は」

くだらぬ事と吐き捨てる。

「それ……困るんだ。あの人は俺の上司だし。前の時みたいに関係が壊れるのは……」

「そう言われてもな——。もうエッチもしちゃったし。両思いだもんな——」

わざとらしく斜め上を見上げて、困った振りをする。

自分が朝まで寝ていた同じベッドが、起きる何時間か前まで、揺れる二人を支えていたと思うと、胸が苦しくなつて軽い頭痛を引き起こした。

「同じ顔と身体なのに、付き合うのがお前じゃなくて残念だったな――、シユン」

俺が俯いたのが嬉しかったのか、楽しそうに言葉を続ける。

「俺は……別に。課長のこと、そういう風に思ったことはない。ただの上司としか……」

「言つてろ。ただの上司に昨日エレベーターでキスしたのは、どこのだいっだよ！ バカも休み休み言え、バカシユン」

意外な事をハヤトが知っていて、顔が熱くなる。

俺が覚えていなかった事を、ハヤトが知っているとは思わなかった。

ハヤトは、俺の意識や記憶を夢のようにしか覚えていない。ショックを受けたり神経を使つたりして俺の意識に強く残る事は、努力すれば夢のように薄つすらと思ひ出せる程度で、俺の記憶にも残らない事はまず知らない。

それに対して俺は、ハヤトの記憶を全く思い出す事は出来ない。無理して思い出そうとすれば出来るのかもしれないが、男と寝るような気持ちの悪い夢をわざわざ思い出したくは無い。

よつて俺達二人が共有する記憶はほんの一握りだ。それでも一つの身体で何とか生活が成り立っているのは、十年にも及ぶ共同生活で、相手に干渉しないことが一番だとお互い気が付いたからだろう。昼は俺、夜はハヤトがこの身体を支配し、それぞれ自由に使ってきた。

「俺達のことは、課長に話したのか？」

「何だよ。俺達の事って」

「その……俺達が……二重人格だってこと……」

嫌いな言葉を聞いて、ハヤトが気分悪そうに目をそらす。

「ああ。一応な。でも信じてないだろ。信じてたら朝っぱらからお前の暗い顔にキスなんかするかよ。あいつと同じだ。え——と、誰だっけ……お前の元同僚、あのパツとしない男。もう名前も顔も思い出せねえけど。あいつも結局信じてなかったろ？」

「じゃあ、また前と同じように、酷い別れ方、するのかよ」

「さあな。二人の事に口突っ込むなよ。お前には関係無い。邪魔すんな」

面倒くさそうに言った後、正面から俺を睨みつけてから改めて口を開いた。

「あと、シュン。二重人格って言葉使うのやめろって、俺ずつと言ってるよな——？ 何度も同じ事言わすんじゃねえよ！ 俺とお前が元々一つの人格だったみたいに聞こえるだろ！？

たまたま何かの間違いで一つの身体に二人分の脳ミソが入ってるだけなんだ。俺とお前は全然違う、全く別人で、他人なんだよ！ 医療が追いついたら、まずお前と脳ミソ切り離して、俺は別の身体に移し変えてもらう。いや、お前が移し変えてもらって出て行け、この身体から。

いいか？ 消えるとは言わない。俺は働くのも嫌いだし、しょうもないスパイ活動コソコソやりたくねえしな。でも勘違いすんな。これは解離性同一性障害なんていう病気じゃない。二重人格なんて簡単な医療用語で片付けられてたまるか！

二度と俺の前でその言葉出すな。お前と元々一つだったなんて、考えるだけでも吐きそうだ」

「う……うめん」

一組のカップルがいて、その片方の中に全く別の人格が入ってい

る。

そんなこと、上手くいくのだろうか。

どう考えても、俺が邪魔者だ。

二人は両思いなのだから、俺が消えれば全て上手くいく気がした。どんどん意識が暗闇に堕ちていく。

何故同じ顔と身体なのに、いつも一緒に働いている俺ではなくて、出会ったばかりのハヤトを選んだのだろうか。

そんな醜いこと考えてしまいそうになる。

だめだ。

違う。

俺は男を好きになつたりしない。

もちろん安藤のことも。

これから出来る限り、二人の邪魔をしないように注意して生活しなければいけない。

それだけではなく、ハヤトに協力してやるべきだ。

俺がこの身体を占領するのが一日のうち半分以上。眠る時間を考えると、ハヤトがこの身体を使えるのは数時間しかない。

忙しく残業も多い安藤と付き合うなら、俺が協力してハヤトに少しでも身体を使える時間与えてやらないと、きっと二人は続かない。俺が協力して二人が上手くいくことが、今の俺と安藤の関係を保たせる条件でもあるような気がする。

ぼんやりと見上げると、ハヤトは消えていて、鏡に映っていたのは暗く、死人のような自分の顔だった。

洗面台の縁を両手でつかんだまましゃがみ込む。

いくつかの疑問と問題が解決したはずなのに、頭痛が治まらない。

約二年振りに体験する酷い偏頭痛と吐き気。

頭がふら付き、立ち上がれない。

口元を押さえ、もう片方の手で頭を抱える。

原因が精神的なものと分かっているにも、自分ではどうにも出来ないのだ。

汚い男子トイレの中に昨日と同じシーンを作り出す。

洗面台につかまって時間を忘れてうずくまる。

廊下から足音がして、誰かがトイレに入ってきた。

慌てて立ち上がるが、眩暈がして洗面台に体重をかけてもたれ掛かる。

「あつ。おはようございます。……大丈夫ですか？」

企画一課の一年目だ。

「ああ、おはようタケミチ君。……うん、大丈夫」

苗字は何だったか……。みんながタケミチと呼び捨てにしているので、そう呼んでいたが、タケミチは名前らしいという事を最近知った。

「二日酔いでしょ？ 昨日あれから大丈夫でした？ 舞野がえらく

心配してましたよ。安藤課長、雪菜先輩を人身売買所に売り飛ばすんじゃないかって」

そう言って新入社員は昨日の疲れを一切見せず、明るく笑った。

昨日あれから、どちらかと言うと大丈夫ではなかったが、適当に作り笑いを返してトイレを出た。

いつのまにか、あと十五分程で就業時間だ。

廊下は自分のオフィスへ向かう社員でこったがえしている。

歩いていると、少し先でエレベーターのドアが開き、最初に降り

てきたのが一番会いたくない上司だった。

エレベーターからも、安藤からも、今は視線をそらしたい。
俯いてやり過ぎそうとすると、腕をつかまれた。

「おい、大丈夫か？ 顔色悪いぞ……」

見上げると、安藤が眉間に皺を寄せている。会社ではよく見る表情だ。

どうして昨日の夜寝たばかりの部下を前に、普段通りでいられるのだろう。

今朝方から続く身体のだるさと痛みの責任の半分は、目の前にいる上司にある。

「……大丈夫です。ただの二日酔いです」

「そうか。まだ時間あるだろ？ 一本吸って来いよ」

ポケットに突っ込んでいた手を伸ばし、腕時計を覗き込んでいる。完全に俺とハヤトの人格が入れ替わっていることに気付いていない。いや、信じていないのだ。

ハヤトは安藤に、一つの身体に二つの人格が入っていることを話したと言っていたが。酔っ払いの言う事を信じる方が難しい。

「いえ、結構です。……俺、吸いませんから」

「別に会社でも遠慮せずに吸えばいい。その顔じゃ仕事にならんのだ。持っていないなら、やるよ」

そういつてスーツの内ポケットからこちらに差し出された煙草の銘柄が、今朝部屋の灰皿に刺さっていた煙草と同じ種類だった。

やっぱり昨日安藤は俺を寝かした後、あの部屋に居て煙草を吸っていたんだ。

そしてハヤトに出会ってしまった。

きっとハヤトの話は全て本当なのだろう。

疑っていた訳ではないが、心のどこかで嘘であってほしいと願っていた。

今朝エレベーターの中でキスをするほど安藤の心を動かしたのが、ハヤトではなく、昨日の自分の奇行であってほしいと思ったのかもしれない。もしそうだとしたら、俺は重症だ。

また割れるような偏頭痛が始まった。

顔を歪めて、頭に左手を添える。

「ダメなんです、煙草。……嫌いなんです」

空いている方の掌を前に出し、煙草を軽く押し返す。

「何でだ。昨日は——」

「嫌いなんです！ 煙草も。煙草吸ってる人も。吸ってる自分も……みんな」

安藤の口から昨日の話が出る事に耐え切れず、遮るように思わず声を荒げた。

嘔気を伴う頭痛が、脳ミソを弾けさせようとしている。

苦しい。

治まりそうもない。

様子がおかしい俺を安藤が不審な顔で眺めている。

そのうしろで、中からゆるりと光を放つ箱が、口をゆっくり閉じかけている。

「すみません。今日体調が悪いので、有休とらせて下さい。仕事、出来そうもないので」

「それは……まあ……」

課長の許可を聞き取らないまま、エレベーターに走った。

閉まりかけた扉の間から中に逃げ込み、立っていられずその場でしゃがみこむ。

大きな機械仕掛けの明るい箱が、俺の沈む意識ごと、下に引きずり堕ちていく。

解離性（後書き）

えっと……念のため補足させて頂きます。

解離性同一障害は解離・性同一障害だそうです。解離性・同一障害ではありません。

今回の題名のように解離性で切るのは間違いのようですが、この題名にピンときて使用してしまいました。

申し訳ないです。

では。

白夢中のはじまり

「ユキナちゃん。あ——そび——ましよ——」

廊下の方から、数人の男の笑い声と靴音が近付いてくる。

入学したばかりの中学校舎のトイレの個室でうずくまり、両膝を抱えて震えている。

新しい上下の制服がぐつしよりと汗で濡れていた。

トイレの前あたりで足音が止み、代わりにタイルを歩く音が近付いてきて、自分が隠れている個室の前で止まった。

下を向いて目を瞑り、呼吸を止める。

ドンっ！と激しい音をたてて、閉まったドアの鍵が揺れる。

身体がビクリと浮く。

タイルを歩いて来た靴底が、個室のドアを蹴ったのだ。

「ユキナちゃんさ——、そろそろかくれんぼ終わりにしな——い？
もついい加減飽きたし。そこから出てきてお兄さん達の相手して
よ——。かくれんぼより、もっと楽しい事教えてあげるからさ——」

そう言いながら、同じように二度ドアを蹴って音を立てる。

「おい、トモヤ——。もう放つといて帰ろうぜ——。リョウがマサ
トさんから召集かかるかもってさ——」

トイレの入り口の方から、ダルそうな男の声がする。

トモヤと呼ばれた個室の前の男は舌打ちをして、最後にもう一度、
全力でドアを蹴ってからトイレを出て行った。

クラブ活動の説明という言葉にだまされて、一度帰宅してから午後六時前に人気の無い校舎に足を踏み入れた。

どうしてこんな時間に説明会をするのだろうと、不信に思いながら教えられた教室を覗くと、他にも五六人の人が集まっていたので安心しながら中へ入る。

ところが集まっているメンバーは殆んどが私服で、同じ制服を着ているのは一人だけだった。いつせいにこちらを振り返った男達の顔が、自分よりかなり年上じゃないかと感じる。

「お——ほんとだ、マジ女の子じゃん！」
「なっ？」

机の上に腰を下ろしている男が、制服の男に話しかける。

説明会の集まりで間違いないのか聞こうとしたが、その前に向こうで雑談が始まってしまった。

可愛いとか美味そうとか、何の話かさっぱりわからない。

「あの……」と勇気を出して呟くと、また静かになって全員がこちらを振り返った。

振り返向いた沢山の瞳が、肉食獣のように飢えた色をしていた。

「あ、いいです。すみません……」

本能的に一步後ずさり、入ってきたドアに向き直る。

すると背中椅子や机がガタリと動く音がして、すぐ後ろに気配を感じた。

肩を強くつかまれる。

それを振りはらって、廊下に走り出る。

よく分らないが、危険なことだけは理解出来た。

笑い声を上げて追いかけてくる男達を振り切って昇降口に急ぐと、向こうから男が一人歩いて来た。

「リヨウ——、ちょうどいいや！ そいつ捕まえて——」

すぐ後ろまでせまっている足音の方から声がかかると、前から歩いてきたリヨウと呼ばれる男が立ち止まり、ポケットから両手を出

してニヤリと笑った。

足を止め、身体の向きを変えて階段の方へ走る。

一段飛ばしで駆け上がり、四階のトイレの個室に入って鍵を閉めた。

個室の前からトモヤと呼ばれる男が去って、どれくらいがたっただろう。

あまりの緊張で疲労し、便器にもたれ掛って一眠りしてしまった。すりガラスからの自然光で薄明るかったトイレの中が、いつのまにか真っ暗になっている。

ドアに顔をつけて耳を澄ませしてみるが、人の気配はない。

静かに鍵を開けて、外に出る。

足音を立てないようにしてトイレの外の様子を覗くと、そこも暗闇だが人はいそうにない。

一步廊下に踏み出た瞬間、煙草の臭いが鼻につき、真後ろの高い位置から腕が回りこんできて羽交い絞めにされた。

「はい。ユキナちゃん、つかま——えた——」

出口の横の壁にもたれ掛っていた男は、抵抗する俺をすごい力で締め付けた。

そのままトイレ横の教室に連れ込まれる。

中庭からの照明で少し目が慣れても、やはり男の顔はよく見えな

い。
煙草の赤い火だけが、蛍の光のように弱まったり強まったりを繰り返している。

綺麗に並んだ机と椅子に向かって身体を突き飛ばされ、派手な音

を立てて背中から床に倒れこんだ。

何箇所も同時にはしまった痛みに耐えながら、急いで体制を立て直し立ち上がる。

教室の後ろ側に走り、ドアに手をかけた。

開かない。

最初からこの部屋で俺を追いつめるつもりだったのだろう。

ゆっくりとした足音が背中に迫る。

急いでロックを解除しようと暗闇に目を凝らすと、肩に手がかった。

「かくれんぼの次は鬼ごっこか？」

笑いを含んだ声に身体を引っ張られ、また後ろに倒れこんだ。

馬乗りになる男に、俺は殴られるのだと思っていた。

入学早々、学校の先輩を怒らせるような事をした覚えは無いが、とにかくごめんなさいと謝った。

ところが伸びてきた手は、顔のすぐ下で止まり、なぜか襟首をつかんでボタンを飛ばしながらカッターシャツを引き裂いた。

それからの展開はあまりにも早すぎて思考がついて行かず、何をされているのか、中学生の頭では理解出来なかった。

ただがむしゃらに動かせる身体の部位全てを動かし、叫び声をあげて、押さえ付けてくる強い力と皮膚を這うぬめりや痛みに耐えていた。

途中から下半身を引き裂くような激痛が一定のリズムで身体を貫き、その加速に耐え切れず意識がとんだ。

暗闇で浅く早い呼吸が遠ざかっていき、いつのまにか何人もの男の笑い声が聞こえていた。

うつすらと目を開くと、沢山の大きな手がこちらに伸びてきている。

声を出す力も残っておらず、されるがままに身体が何度も浮いたり激しく揺れたりして、体温の違う人肌が何度も入れ代わっていた。

途中、頭を靴で小突かれ一度意識が戻り、携帯の明かりを顔に近づけ照らされて、二度シャッター音を聞いた。

気がつくと教室の片隅に裸で一人、横たわっていた。

口の中を含め身体を覆う表面全てが両生類のようにねばついていて、生臭い。

自分の身体が、ただの肉の塊に思えた。

どうやって家までたどり着いたのかは覚えていないが、それから何日もの間、身体に残る内出血の痕と、トイレに行く度に起こる疼痛と出血に悩んだことを覚えている。

一生このままで、もしかしたらそのうち死ぬのではないかと怯えて暮らした。

六年以上も義務教育を受けておきながら、自分の身に起こった事がどういう種類の災難だったのか分からないまま、ずいぶんと時が流れた。

普通に生活している上で知りえるどんな犯罪の名前も、自分が男達にされたこととは微妙に一致しなかった。

それが、男による男のレイプだと偶然判明したのは、皮肉にもク拉斯の男友達に友情以上の感情を持ち始めた自分が病気なのではないかと、ネットで心の病について検索している時だ。

最悪だった。

犯されたという事実も、自分が自分を犯した男達と同じ種族だということも。

きつと身体だけではなく、頭の中までおかしくされてしまった。

男のことを好きになる。

自分を犯した男達と同類の人間になる。

俺はどうしてもそれが受け入れられなかった。

そんな異常な感情を忘れるために、必要以上に男友達と仲良くすることを極力避けた。

中学生のくせに、女の子に告白されてデートしたりもした。

自分は正常なんだ。

あいつ等とは違う種類の人間だ。

そう思いたかった。

努力のかいあってか、徐々に自分が恐れていた異常な感情をもつ機会は薄れていった。

その代わりなのか、家でも学校でも昼だというのに夢を見たり、意識を失ったりすることが多くなる。ただそんな事は、男を好きになる病気に比べれば、大した事じゃない。

それから何故か周りの人間が急に俺を避け始めて、元々少なかった友達の人数が激減した。そうかと思えば、見慣れない顔がやけに慣れ慣れしく話しかけて来たりする。自分のことを誰かと人違いしているらしく、覚えもない話をふられる。

身の回りで徐々に不可解なことが増え始め、それがどうやら俺とそっくりな男の行いによるもの、らしい事がわかってきた。

その俺と顔も身体もそっくりな男の正体が分かったのは、中学三年の時だった。

それを教えてくれたのは、毎週金曜の夜に家に来る家庭教師の大学生だ。

「この前の写真できたよ」と明るく言って、勉強を始める前に封筒を差し出した。

よく分からないまま封筒を開けて、中の写真に目を通す。

初めて見る自分の曇りの無い笑顔に啞然とした。家庭教師の男と二人でにつこりと笑い、遊園地のアトラクションか何かに乗って、こちらにピースをしている。

口の周りを汚しながらソフトクリームを食べたり、遊園地のマスコットらしき人形を抱いて手を振ったりしている。

最後の二枚の写真はどこか知らないホテルのベッドで眠る自分の寝顔だった。毛布から自分の小さく白い肩が覗いている。

自分自身でも見た事の無いような表情ばかりだが、まぎれもなくそこに写っていたのは自分だった。

怖くなって男にさり気なく聞くと、先週の日曜に一日二人で遊んだと言う。

確かに先週の日曜の記憶は無い。丸一日寝ていて、気が付いたら真夜中だった。

「あの時会った俺の友達いただろ？ あいつがさあ、ハヤトのこと可愛い彼女だなんて言ってたよ」と男が笑う。

誰だ、ハヤトって。

同じ身体で同じ顔、でも性格も名前も違う、もう一人の自分。いつの間にか部屋にある、気にも留めなかったベッド脇の人形が、写真の中でもう一人の自分が抱き締めていた遊園地のマスコット人形だと気が付き、血の気が引いた。

「さっ、早く勉強終わらせて、ベッドに行くぞ」

男の腕が俺の腰に回った。

また夢に引きずり込まれるように、頭がぼんやりとしてくる。

ゆきな しゅん
雪菜 隼。

誰かが間違えて、ユキナ ハヤトと呼んだ。

どちらの読み方もできる、紛らわしい漢字だ。

でも、ちょうど名前を探していたもう一人の俺は、それを自分の名前だと思った。

それからしばらくして鏡の中でハヤトと会話が出来るようになり、お互いが自分達の体質を理解した。

それぞれの生活に干渉しないように、身体を使用する時間帯を決めようと提案したのはハヤトだ。

俺は日中に身体を使い、夜俺が眠ってからハヤトが身体を使う。睡眠時間として最低三時間を確保し、土日はハヤトが望めば一日自由により身体を使える。

連絡事項は携帯や固定電話の録音機能を使うことにしている。

俺がハヤトから目を背けたいように、ハヤトも俺を酷く嫌っていた。

ハヤトは男が好きだとはつきり口にする。毎晩飲み歩いては、男と寝る。

俺とは全く逆の底抜けに明るい性格で、俺に出来ない輝くような笑顔を作り、冗談を言ったり出来るらしい。その分、俺には嬉しかったり楽しかったりという感情が少ないように思う。ハヤトがよく鏡の中であらわにする怒りの感情も、自分はあまり感じたことがない。逆に俺にはある、悲しみや辛いといった感情が、ハヤトには欠けているのかもしれない。

何年間にも及ぶ二重生活。

一度安定しかけていた、俺の身体と心がまた重心を失い始めている。

壁の掛け時計に目をやると、まだ昼前だ。

会社のトイレでハヤトと話し、その後安藤と出会ってエレベーターに逃げ込んでから、まだ二時間しかたっていない。

スーツのままリビングのソファに沈み込んでいる。

引きちぎられ、窓から辛うじてぶら下がるカーテンの間から、眩しい初夏の光が射し込む。

ソファーからぶら下がった右の手首がズキズキと痛い。

腕を持ち上げて顔の前に手首を置くと、無数の浅い傷からまだ少しだけ血が滴っている。約二年ぶりの手首の痛み。

あの時と同じように、リストカットと私物の破壊を繰り返して、頭の割れるような頭痛と嘔気を逃がした。

やっと楽になった身体を持ち上げ、冷蔵庫からハヤトのビールを取り出し、ソファーに座って飲む。

半分も飲まないうちに眠たくなってきた。

視界の下側に広がる、床にひっくり返った灰皿から、ハヤトのものでは無い吸殻が数本転がっている。

眠りに堕ちる前の最後の力で、半分以上残ったビールの缶を吸殻目掛けて放り投げた。

白夢中のはじまり（後書き）

長いのに読んで頂きましてありがとうございます。

日々腐っていくこの小説。いいのだろうか……（＝Д＝；）

そして、もうこの一話の長さが止められない。

そろそろ押絵の一つも落書きしたいな～なんて思っております。
このリニユールはいつになるのだろう（´ェ´）ン……

有給休暇

リビングのソファアーの上で目覚めると、驚いたことにまだ昼間だった。

それもスーツを着たままだ。

「うあっ」

あまりの部屋の散らかり様に驚き、一人なのに声を出してしまった。

シュン……あのヤロウ。

右の手首がヒリヒリとするので、嫌な予感がして腕を上げる。

思ったとおり、ジャケットとYシャツがめくり上げられて、剥きだしの白い手首に赤い横線が無数に入っている。血は固まっていた。二年前と同じだ。あれからシュンは何も成長していない。

床に散らばった吸殻とビールの池を避けながら台所へ行く。

手当たり次第にあった物を床に叩きつけたらしく、皿やコップの破片が散乱している。俺の箸まで落ちているところが腹立たしい。

幸い大切にしていたバカラのタンブラーは無事だった。

シュンの金ではなく、自分の身体で稼いだ金で初めて買った自分へのプレゼントだ。

冷蔵庫を開けると、俺のビールが無い。

シュンが床にぶちまけたのが最後だったらしい。

転がっていた携帯を拾い上げて開くと、まだ昼の一時半を表示している。

昼間に目覚めるのは久し振りだ。

月に一二度は丸一日使って買い物へ出掛けるが、今月はシュンが休日出勤をしたのと、残業続きで疲れたシュンの身体、もとい俺の身体を休めるために、たまの休みは大人しくしていた。

それでも俺なりに仕事しているシュンには、気を使っているつもりだ。

それなのに平日の今日、昼間からリビングで寝ていたということは、今日シュンは仕事を休んだのだろう。

まあ理由は大体分かる。

この部屋の荒れようから見て、今朝どこかのトイレで交わした俺との会話がもとで、精神的に弱ったのが原因とみて間違いない。

そんな感情的な理由で会社つてのは休んでいいのだろうか。俺が言うのも何だが、責任とかいうのがあるんじゃないのか？

まあいいや、関係ねえ。

せっかく手に入れた自由時間なのだから、有効的に使うとしよう。

日頃、夜にしか顔を合わせない友達に電話して、昼間しか行けない場所として、とりあえず男二人で遊園地に行く事にした。

あの遊園地に行くのは、中学生の頃に家庭教師の男に連れて行ってもらって以来だから、かなり久しぶりだ。

寝室へ行って、爆音で音楽をかけながら鼻歌交じりにクローゼットを開く。

昼間外に出るのが久し振りなので、外の気温がどれくらいなのか見当がつかない。

日差しを見ると暑そうだが、リストカットした手首を見せびらかして歩く訳にもいかない。薄手のロングTシャツとクロップドデニムで手を打とう。

畜生、シュンの奴。

勝手に身体に傷を入れやがって。

勝手に身体をピアスホールだらけにして、タトゥーまで入れた自分は棚に挙げ、モノトーンの服の列を睨みつける。

せめてもの嫌がらせで、脱いだスーツを規則正しく並んだ服の下に、皺加工を施すようにぐちゃぐちゃにして放っておいてやった。

洗面台へ行き、うっとうしい長さの髪にワックスを付けて前髪をかき上げ、後ろ髪はゴムで一つ結びにし、首筋にブルガリのプールオムを吹きかける。

唇の左下に二つ、両耳に三つずつ、形も大きさも違うピアスをつけた。

シルバリングを左手の中指と人差し指にはめて、クロスのシルバーネックレスをする。

二時ちょうど。

一ヶ月ぶりの太陽の下に踏み出した。

平日の遊園地は空いていて、男二人でも存分に楽しめた。
まさに夢の世界だ。

こんなに楽しいのに、シユンは一度も遊園地で遊んだ事がない。
せっかく昼間、身体を自由に出来るのに勿体無い。

男二人ではしゃぎまわって、意味不明にポップコーンを首から掛けるタイプのケース付きで買い、懐かしいマスコットの人形と、シユンへの自慢を兼ねて土産のクッキーを二缶買った。

遊園地を出た後友達と別れて、薬局とスーパーに寄り、マンションに帰って来たのは夜の七時過ぎだった。

見慣れた夜の世界が広がり、すこし落ち着いた。

蛍光灯も無いのに周りが自然光で明るいというのは、落ち着かな

いものだ。もうそれだけでワクワクして、ガキみたく浮かれてしま
う。

マンションのエントランスでエレベーターを待っていると、入り
口からスーツ姿の知った顔が入って来た。

昨日の晩に激しく体を重ねたばかりなので、忘れるはずが無い。

「あれ、安藤さん。今帰り？」

安藤は驚いて立ち止まり、顔をしかめてこちらを見つめた。

どうやら俺だということに気付いていないらしい。昨日の夜はシ
ユンのスーツ姿だったので、仕方がないか。

「雪菜……か？」

安藤は白葱の飛び出したスーパーの袋を提げている。

そういえば、今夜の夕飯を考えていなかった。食事は主にシユン
の担当で、俺は飲むだけだ。

スーパーに寄ったのに、ビールしか買ってこなかったことを反省
する。

「お前……何で今日仕事休んだんだっけ？」

俺の姿を上から下まで眺めて聞いてきた。

「いや、知らないよ。何で仕事休んだの？ 俺」

シユンのことはどうでもいい。

「今まで、どこに行ってた」

「見りゃわかるでしょうよ。スーパー行くのに首からポップコーン
提げてるやつ見た事あんのだよ。遊園地だよ。友達と。……ねえ、
それより今から夕飯？」

安藤の眉間の皺が深くなり、スーパーの袋を提げたままポケット
に両手を入れた。

「雪菜。ちよつと俺の部屋寄れ」

声が低い。何か気分を害したのだろうか。

そんなことより夕飯にありつくチャンスが得て、俺はニヤニヤし
た。

よし。今晩は夕飯食うまで安藤の部屋に居座ろう。自分の部屋はシュンのせいで足の踏み場も無い有様なので調度いい。

黒いオーラ漂う安藤の背中に続いて二階まで階段を上がり、廊下を渡る。

自分の部屋とは左右真反対の造りの部屋に上がった。

一見片付いているように見えるが、よく見てみると積み上げられた本の上に埃がたまっている。三十路男の一人暮らしの部屋はこんなものか。

今はぐちゃぐちゃだが、いつも綺麗で塵一つないモノトーンで統一された自分の部屋を思う。シュンはあれで割りと潔癖症だ。台所と洗面台に一つずつアルコール除菌のボトルがある。

「お前。ちよつとそこ、正座して座れ」

夕飯の交渉をどう切り出そうかと考えていた矢先に、テーブルの前の空間をビシッと指差された。

正座なんて殆んどしたことがないので、洪々横座りで腰を下ろすと、正面に安藤が胡坐をかいて座った。

「いいか？」と始まった説教が一時間。

体調不良と偽って会社を休んだ事から始まり、当日急に休む事で周りにかかる迷惑と会社としてのリスク、あと社会人としての自覚部下を脅迫する割には、いかにもまともそうな口調で説教してくる。

俺は人からこんなに説教された事が無いので、逆に新鮮で面白かった。

途中二度程「それ、シュンの話だろ？俺には関係ないよ」と言ってみたが、余計に怒らした上に、最終的には人格どうのこうの問題じゃないと一喝された。

やはり俺とシュン、二人の人格があることを信じてはいないらし

い。

「わかったよ、もうしませんから。ねえ、煙草吸っていい？」

安藤は呆れた様な顔つきで立ち上がり、スーパーの袋を台所へ運んだ。

テレビの上に置いてあつた灰皿をテーブルの上に乗せる。

「安藤さ——ん。ライター貸して——」

舌打ちが聞こえて「結局吸うのか」という声と共に、向こうの方から重たいジツポが飛んできた。

火をつけた煙草を吸いつけ、最初の煙を吐き出す。

いつ見ても高そうなジツポを眺める。

「このライターいくらぐらいすんの？ 結構高いっしょ？」

「まあな。気に入ったならやるよ」

「ほんとに！？ いいの？」と振り返ると、冷蔵庫に野菜を入れている後姿が見えた。

「ああ。俺は今日から禁煙だ」

「うそ。何で？」

冷蔵庫前の身体が頭だけで振り向き、一瞬目が合ったと思ったら意味ありげに失笑して、また向うに向き直った。

安藤の気が変わらないうちにと、ジツポをポケットの中にしまう。

「ね——、今日の夕飯なに作るの——？」

「買ってきた惣菜とカレーうどん、だな」

「じゃあ出来上がったら起こしてくれる？」

絨毯の上に横になった。

「おい。何でお前まで一緒に食べるつもりになってんだ」

「だってお腹空いたし……」

「その首からかかっているポップコーン食っとけよ」

「あっ、これ食う？ 安藤さん。キャラメルフレーバー」

「ポップコーンにキャラメルかけて何が楽しいんだ。もう黙って寝

てろ。料理の邪魔だ」

お許しを頂いたので、首にかかっていたカラフルなポップコーン入りをテーブルに置いて、横になる。

あ、寝るのはいいけど、シュンが起き出すってことはないだろうか。

まあ……それはそれで面白そうだけだな。

台所の方からトントんと、包丁がまな板上で弾む音がする。

何かいいな、こういうのも。

懐かしい感じがして、落ち着く。

余計眠たくなる。

堕ちる瞼に逆らわず、瞳を閉じた。

ライスじゃない方

「おい。出来たぞ」

背中を軽く蹴られて目を開けると、安藤がどんぶり鉢を両手に持って立っていた。

カレーのいい香りがする。

どうやらシユンはお目覚めにはならなかったようだ。

「結構早かったね」といいながらテーブルの前に座り直すと、パツクに入った惣菜が並び、ビールが一缶置かれている。

「あれ、安藤さん飲まないの？」

ビールと冷えたジョッキを手に取る。

「いいな、お前は。羨ましいよ。仕事ずる休みして遊んだ後に、上司のビールを飲もうとする神経がさ」

そう言っただけで座りながら、俺の手からビールとジョッキを抜き取っていく。

「え——、俺のビールは？」

「次同じこと言ったら、お前の分台所へ下げるからな」

まあいいか。さっきスーパーでビール買ってきたし、部屋に帰ってから飲みなおそう。

「大人気ねえな——」と呟くと、目の前に置かれたどんぶりが、大きな手によってもう一度浮いたので、両手で捕まえた。

捕まえたどんぶりを覗くと、中にカレーが入っている。

カレーの中からはみ出しているのは……まさか麺、なのか？

「これ……何？」

「何って、カレーうどんだろ」

「えっ！ カレーにうどん入れちゃったの！？ 何考えてんだよ」

さつきキャラメルフレーバーのポップコーンを憤慨した事を本気で謝ってほしい。

「お前、カレーうどんも食った事無いのか？」

「無いよ。そんなもん」

みなさんご存知の、みたいに普通に言うけどさあ。カレーといったらライスだろうが。

カレーライスで一つの言葉なんだから、カラーとライスに分けて後半を麺類に変えるとか勝手が過ぎるだろう。

いつもなら夕食は、シユンが起きている時間に済ませる。

例えば俺が食べる場合でもカレーかけうどんは無い。これでもおごって貰う場合がほとんどで、結構舌は肥えている。

箸でカレーの中を探ると、本当にうどんが出現した。

まさかこんな所でうどんに出会うとは……出会いたくなかった。

「嫌なら食わなくていいぞ」と、不機嫌そうにカレーが付いたうどんをすすっている奴が信じられない。

「た……食べるよ。いただきます」

一口食べてみると、そう悪くない。

案外美味しい。

うどんとカレーの取り合わせ以前に、カレー自体が美味しい。

「このカレー安藤さんの手作り？」

「ああ、一昨日の残りだ」

「ふ——ん……ちょっと甘口だけど美味しいね」

出来る事ならカレーライスとして出会いたかった。

カレーとしても、うどんの上に自分が乗つかるとは思っていなかっただろう。俺もカレーも、お互い残念だ。

「なんだ、辛いほうが好きか？」

「うん、実は激辛好き。でもいけるね、これ。自分で考えたの？」

うどんカレー。販売したら絶対売れるよ。会社の昼休みに売れば？」

「からかってんのか？」

「おっさんの割にはアイデアが斬新だよな——。カツ丼とか寿司のご飯も、うどんに変えちゃったりするわけ？」

「いいから、黙って食え。お前の相手してると頭痛がする」
褒めてやったのに、何故か怒られた。

初体験のうどんカレーを食べ終えて、テレビを見ながら一服する。
「さつさと帰って寝ろ。明日は絶対出勤しろよ」

食器を片付けながら安藤が言う。

「え——つまんないよ」

普段なら、今からが俺の行動時間だ。

「ねえ、一緒にお風呂入ろうよ。で、出たらそのままエッチしよ——」

どんぶりを持ったまま突っ立ち、啞然としてこちらを見つめる。

「雪菜……本当に一回医者に診てもらえ」

「なんだよ、昨日はあんなに夢中になってくれたのにさあ」

「俺はお前の恋人か何か？」

一応シюнにはそう言っている。

「忘れてました。部下を脅迫して、心と身体を弄ぶ極悪上司でした」

「あ？ その極悪上司に夕飯作らすつてのは、どういうことだ。脅し甲斐の無い野郎だ」

「こつちだつて脅され甲斐が無いよ。もつとさあ、なんかこう嫌がる俺を無理やりって感じが欲しいよね——」

流し台に食器を置いて帰って来た安藤が、大きく息を吐きながら立て膝をして座る。

「そうだな……」といい、俺のポップコーンケースを眺めている。

「じゃあ、今週末ちよつと俺に付き合え」

「えっ、今週末？　ちょっと急すぎない？　それ」

「無理やりがいいって、さっき言っただろ」

「そういう無理やりは遠慮したいんだけどな——」

まあシュンに予定がなければ大丈夫か。

「俺は風呂に入るから、その間に帰れよ」

「一緒に入ろうよ——」

「湯船に沈めんど」

風呂場に向かう大きな背中を見送りながら、舌打ちをした。

夕飯にはありつけたものの、何だか面白くない。

自分からベッドに誘って、断られた事がほぼ無いに等しいからだ。シュンに嘘でも安藤と付き合っていると云った以上は、安藤にも俺に夢中になってもらわなくては困る。

携帯を取り出して、自分の部屋の固定電話にかける。

留守番電話のアナウンスが流れて電子音がした後、シュンに今週末デートで身体を使うとメッセージを入れた。

土産に買ってきたクッキーを開けて、食べながら絨毯に寝転がる。テレビを見ていると浴室のドアが開く音がして、安藤が下着のままりビングに入ってきた。

「まだいたのか」

バスタオルで髪を拭きながら近付いてくる。

引き締まった筋肉に、少しドキリとする。

昨日は寝室が暗くて気付かなかったが、こうやって見るとかなり良い身体だ。

昨晚の事を思い出して、顔が火照る。

「これ遊園地のお土産。安藤さんのために買ってきたクッキー」

本当はシュンのために買ってきた分だが、シュン一人では二缶食

べきれないかもしれないので、一缶ここに贈呈しよう。

「俺のために買って来た土産が、どうして既に半分無いんだ」

「あつ、あとこれもあげるね。夕飯のお礼。マスコットキャラクタ
ーのゴンちゃん。」

本当は部屋に置きたいけど、シュンの奴こういうの好きじゃないから雑な扱い受けんだよね――。安藤さん一人暮らしで寂しいからちようどいいだろ?」

積まれた本の上に、オレンジ色のカバのぬいぐるみを座らせた。

「おい! 変な人形置いていくな。人を孤独死前の年寄りみたいに言いやがって……自分の上司を何だと思ってんだ」

「さあ。そんなの真剣に考えた事ねえよ」と真面目に答えた。昨日会ったばかりだしな。

「おい、雪菜君。俺は今からまた一時間、お前を正座させてもかまわないんだぞ?」

「やだよ。何で一時間も半裸のおっさんに説教されなきゃいけないんだよ。ベッドの上でおしおきってんなら、受けてたつけど?」

ニヤつく俺を睨みながら、床のテレビリモコンを取り上げる。

たくましい右肩に、背中まで達する大きな傷跡があった。

「安藤さんて、本当はヤクザだったりする?」

「バカか、お前は。あんな噂信じてんのか」

やっぱりそういう噂があるんじゃないか。

「どうやったら普通のサラリーマンがそんな大きな怪我できるわけ?」

バスタオルを肩から垂らし、俺が見ていたお笑い番組をニュースに変える。

「うるせえ。お前こそ入社二年目の会社員が身体中穴だらけで、タトゥーまで彫りやがって。何考えてんだ」

へへ、とだらしく笑って返す。

なにしろ俺は、耳と口だけでなく臍の横にも二本バーベルがとお

っている。左足の太腿の付け根にはタトゥーも入っている。

「昨日、部屋暗かったのによく見てるよね——。変態」

「ああ？ もう一回言ってみる」とリモコンを置き、目を細めてこちらを見下す。

「なんもない。お風呂いただきま——す」と言っ、立ち上がった。「風呂ぐらい自分の部屋帰って入れ」という怒声を背中に受けながら、自分の部屋と同じ造りの浴室でシャワーを浴びた。

身体を洗った後に、一度着た下着や服を身に着けるのが嫌だったので、脱衣所の引き出しから適当に下着と部屋着を借りた。

乾きの悪い長い髪を拭きながらリビングへ戻ると、案の定またヤクザに睨まれる。

「おい。それ俺んだろ」

「ああ、服？ うん。ブカブカだけど、しゃ——なしだよ」

もう言い返す言葉も出ないくらい呆れている。

テーブルを挟んで安藤の向かいに座り、薬局で買ってきた消毒液と包帯を取り出す。

ブカブカの長袖をめくり上げ、赤い横線が無数に入った右手首を露出する。

血は止まっているが、まだ傷口が乾ききっていない部分がある。

さすがに今朝ついた傷なので、湯に沁みた。

テレビを見ながら、消毒液を傷口に塗っていると、両手を後ろについて座っていた安藤がこちらに身を乗り出した。

「何だそれ」

「消毒」

「それは見りゃわかる。その傷だよ」

「知らない？ リストカットってやつ」

少し顔を強張らせながら俺の手首を見つめ、両腕をテーブルに置いた。

「自分でつけたのか？」

「俺じゃなくて、シユンね」

「またそれか。もう一人の自分って奴だろ」

「いいよ、別に信じなくて。」

でもシユンの奴、頭おかしいんだ。あいつのせいで俺達の部屋、今ぐちゃぐちゃだしさ。

精神安定剤みたいな飲んだほうがいいんじゃないのかなあ。安藤さん良い病院知ってたら、シユンに紹介してやってよ」

「そうだな……。勝手に人の部屋の風呂入って、着替えまで勝手に使うようじゃなあ」

「いや、それ俺でしょ？ だから俺はハヤトだって。何回言やわかんのか？ もういいよ」

不貞腐れて、適当に包帯を巻いた。

寝転がってもう一度テレビを見始める。

携帯を取り出して画面を見ると、もう夜の十一時過ぎだ。

「ねえ。もう今日ホント何もしない？ しらないなら、俺今から相手見つけて遊びに行くけど」

昨日の続きが出来ないなら、外へ出て相手を探すだけだ。なぜこんなにイライラするのだろう。

「お前、明日仕事行く気あんのか？」

その言葉で安藤にその気が無い事が分かった。

立ち上がって、連絡がつきそうな奴に電話するため、廊下に向かう。

電話帳から、先週出会ったばかりのサラリーマンを選ぶ。

「もしもし、沢村さん？」

今から会いたいと伝えると、連絡するのを待っていていたらしく、とても喜んでくれた。

ほらみろ。俺の誘い断る奴なんていないんだから。

「じゃあ、この前のホテルでね——」と電話を切った。

リビングに帰って、荷物をまとめる。

安藤は何も言わずに、相変わらず肘をついてテレビを見ている。
横顔に機嫌の悪さが表れている。

「じゃ、帰るね」

これ以上居てもイラつきが増すだけだ。

立ち上がってドアに向かおうとすると「まてよ」と背中低い声がし、腕を強く引っ張られた。

バランスを失い、そのまま引かれた方へ倒れこむ。

倒れこんだ先は、温かく厚い胸板だった。

硬い二の腕に抱き寄せられ、濡れた後ろ髪に通った指が顔を上向かせる。

「んっ……」

上から堕ちてきたキスを深く受け止める。

今までに感じたことが無いくらい、何故かホツとした。

ライスじゃない方（後書き）

昨日拍手のお礼ページにイラストを載せたところ、いつも以上にたくさん拍手を頂きました。+。（o・A・ノノ）パチパチパチ+。

拍手数は今までの合計数を表示していますが、私の方ではちゃんと毎日の拍手数を確認することができます♪

ほんとにありがとうございます（・・・）キュンキュン！

少しでも喜んで頂ける為に、くだらない後書をやめて執筆に向かいます。

では。

自分じゃない方

ベッドサイドテーブルの置時計を見ると、いつも通り朝の六時だった。

起き上がると身体中がきしみ、顔を歪める。

痛みだけでは無く、肌がベトつく。それに微かに香水臭い。ハヤトが夜遊びした証拠だ。

寝る前に風呂に入ってくれる時もあるが、シャワーも浴びずハヤトが寝てしまった日の翌朝は、俺が代わりにシャワーを浴びなければいけない。

浴室へ向かおうとベッドから降りる。

足元にあった紙袋を取り上げて、中を覗いてみると、お菓子の缶が一つ入っている。

紙袋と缶の柄からして、どうやら二駅先の遊園地の土産らしい。

そういえば、昨日俺は会社を休んで昼から眠った。

ハヤトはそれから起き出して遊園地に遊びに行ったのか。

ああ見えて案外律儀なハヤトは、昼間に出掛けると俺への土産を欠かさない。

脱衣所で服を脱ごうとして、初めて自分が見た事も無いブカブカの服を着ていることに気がついた。

ハヤトが新しく買った服かとも思ったが、それにしても使い込んだ感じがある。

深く考えるのをやめて、シャワーを浴びた。ハヤトの行動なんて

読めるはずがない。

これでもかと言う程ぐるぐると包帯が巻かれている右手首を、濡らさない様に気を使った。

浴室から出て身体を拭き、洗面所の鏡に映った自分の上半身を眺めて動きを止める。

胸元一面に、花びらのような内出血の痕がいくつも舞っている。いつも通りだ。

前の情痕が消える前に、また新しい痕が増えていく。

この中のどれか一つでも、安藤が付けたものがあるのだろうか。そう思っ、まだ桃色に熱を宿した花びらを指で触れる。

あまり長く鏡に向かってしているとハヤトが出てきそうなので、さっさと寝室へ戻ることにした。

着替えてリビングへ入ると、思ったとおり昨日のままだ。

床に散らばる陶器の破片。落ちそうなカーテン。裏返った灰皿。

ビールの池に転がる空き缶。

一箇所だけ違っていた。

赤く点滅する電話のボタン。

ほとんど使用しない留守番電話を使うのは、ハヤトくらいだ。

足元に気をつけながら電話の所まで行き、点滅しているボタンを押す。

品のある女性の声が日時を伝え、録音メッセージが一件ありますと続く。

『もしも——し、シュン？ 俺だ、ハヤト。今、安藤さんの部屋からだ。いいだろ？ 安藤さん今入浴中だからさ——。この後ベッティンだ。ああ、悪い。お子様なシュンには刺激が強すぎるか？ えっと、そんな事いうために電話したんじゃないんだ。今週末の

日曜、安藤さんとデートだからお前一日寝ててくれ。それだけだ。てめえはさっさと部屋の片付けしやがれよ？ 土産置いとくから、それ食って頑張れ。じゃな』

壊れるかと思うほど強く、電話のボタンを掌で叩いた。

そのまま床に払い除けると、音をたてて受話器が外れ、棚からコード一本でぶら下がる。

遠くで途切れない電子音が空耳のように唸る。

ソファーに座って頭を抱えた。

出勤前に少しでも部屋の片付けをと思っていたが、無理そうだ。

昨日の晩、ハヤトはまた安藤と会っていた。

恋人同士なのだから自然なことなのだが、体調不良で会社を一日休んだ自分の立場や、録音メッセージの内容を思い出すと、また昨日と同じ頭痛が始まりそうだった。

出来る限り思考を止めて、呼吸を整えることだけに集中した。

会社に出勤して、二日ぶりに課長のデスクを前にする。

安藤のパソコンを立ち上げ、鞆の中から取り出したメモリースティックを挿す。

そろそろ欲しかった報告書が出来上がって、保存されているはずだ。

ログイン画面が表示される。

パスワードの枠にカーソルを合わせ、いつも通りの順番でキーボードを打った。

IDは社員番号。パスワードは『0000』。

セキュリティ意識の薄い新任課長は、初期設定のままパスワードを変更し直さずにいてくれるので、俺に悪用され放題だ。

Enterキーを押すと、珍しくパスワードが違いますと赤字で再入力を促された。

半角と全角を間違えたのかもしれない。

もう一度慎重にゼロを四回叩いて、Enterキーを押す。

『パスワードが違います。もう一度入力しなおして下さい』

同じ作業をあと二度繰り返したが、結局ログインすることは出来なかった。

パスワードが変更されている。

二日前の朝までは普通にログインできたのに。

一昨日と昨日の出来事を思い出し、誰もいないオフィスで一人青ざめた。

昨日社内のトイレでハヤトと会話した時、ハヤトは俺がしていることを知っていた。

ハヤトと安藤の関係。

このタイミングでのパスワードの変更。

安藤に俺の行動がばれているかもしれない。

ハヤトが安藤にばらす可能性は……どうだろう。自分の生活を脅かすような真似をハヤトがするだろうか。何より夜遊びが大好きな男だ。俺が職を失って一番困るのはハヤトに違いない。

それにもし俺が情報を横流ししていることを安藤が知ったら、昨日の時点で俺に何か言うだろう。

目的を失い、これからのことに考えを巡らせながら、久しぶりにオフィスの掃除を始めた。

一年目の頃は毎朝の様にやっていた。大切なデータを盗ませてもらう、せめてもの罪滅ぼしだ。

全員のデスクを拭いていると、入り口のドアが開いた。

「あつ、先輩！ 体調もう大丈夫なんですか！？」

舞野だ。

そういえば一昨日の飲み会の時には、舞野にも迷惑をかけてしまった。

「そんなの僕やりますから、いいですよ。貸して下さい」と、俺の手から台拭きを取り上げようとする新入社員に、一昨日の醜態を詫びた。

「気にしないで下さい。本当は僕が部屋まで送るつもりだったんですが、課長に取られちゃいました。あの後、何もありませんでした？」

「あ、ああ……もちろん」

本当はいろいろあって、そのせいで昨日会社を休んだんだとは言えなかった。

「よかった。あんな遊び人に、あんまり近付きちゃダメですよ」

そう言いながら舞野は俺の頭を優しく撫でる。

「う、うん」と一応返事はしてみたものの、これではどちらが先輩か分からない。

本当は立場をわきまえろと怒る場面なのだろうが、自分のことを心配してくれていたのだし、あまり怒りを覚えない体質なので作り笑いを返しておいた。

舞野は安藤のことがあまり好きではないらしい。

歓迎会の時も課長のことを「ただの女好き」と言っていた。

そういえば安藤はバツイチだ。若い時はラガーマンで、かなり遊んでいて、離婚の原因も女関係だと噂に聞く。

本当にそうだとしたら、遊び人のハヤトとお似合いかもしれない。恋人が出来ても夜遊びはする。そういう奴だ。

今更ながらノーマルの安藤が、ハヤトと付き合うなんてちょっと意外だと思った。

昼休みの時間になり、皆が席を立ち上がり部屋がせわしくなり始める。

斜め前の席で舞野が勢い良く立ち上がる。

パソコンモニターの間から顔を覗かせ「せんぱ——い。お昼ごはん……」と言ったところで、窓際の方から「おい、雪菜！」と野太い声が飛んできた。

声のする方を振り向くと、やはり安藤だった。

「たまには昼飯付き合えよ」という課長の声に、舞野の顔が渋い表情をしてモニターの向うに下がって行った。

自分の中のもう一人の人格と安藤が付き合う事になっても、俺が安藤を避けたいことに変わりは無かった。ただ安藤が自分の上司であることにも変わり無く、食事に付き合えと言われれば付き合わなければいけない。

ハヤトと安藤の間でどういう風に取り決めに交わしたのかは知らないが、安藤は俺に対して普段と変わらない態度を崩さないでいてくれた。

今朝一番で昨日の欠勤を謝りに行くと、至って普通の対応をして見せた。

階段で上の階にあがり、二人で社員食堂へ入る。

安藤が食券機に千円札を一枚入れ、点灯したボタンの中からB定食を選んだ。

「雪菜は何にするんだ」と光ったままのボタンにもう一度指を向け

る。

おごつてもらうつもりは無かったので慌てた。

日替わり定食の内容を確認していなかったと後ろのガラスケースを振り返ったが、自分の背中に続く長蛇の列で見えない。

「すみません。じゃあ……俺、カレーうどんで」

食堂に入ったときから漂うカレーの香りを何故か懐かしく感じていた。

安藤がこちらを振り向き、無表情のまま一瞬間があいたが、何も言わずにカレーうどんのボタンを押した。

どんぶり鉢を乗せたトレイを持って、喫煙席へ行こうとすると、安藤が反対の方向へ歩いていったので後続く。

向かい合わせで空いている席を見つけて座った。

「カレーライスじゃなくて良かったのか？」

割り箸を割っていると、向かいの席から聞かれた。

「あ、はい。俺カレーライスよりカレーうどんの方が好きなんで…

…それにこっちの方が安いし。週に一回は食べてますよ」

何を食べるか悩んだら、カレーうどんと決めている。

「そうか……」と言った安藤の反応が少しきこなかった。

「でもこのカレーは少し甘いだろ」

「そうですか？ 俺辛いのがダメなんで、これくらいがちょうどいいです」

俺の顔を見つめたまま、安藤の箸が止まった。

なんだろうと見つめ返していると「あ、いや。雪菜が仕事以外の話するの珍しいからな。ちょっと驚いた」と、不自然に笑った。

ハヤトとは別の人格として扱われているようなので、少し安心する。

食事中何の話をするのかと不安を感じていたが、大した話はし

なかった。

主に仕事の話だ。

変更されたパスワードについて何か情報が得られないかと耳を澄ませたが、そう上手くはいかない。

人に隠してこそそのパスワードだ。

初期設定はゼロ四桁だが、小文字ならローマ字も使える。

単純に誕生日にでも設定してくれていればいいが、それ以外ならお手上げだ。別の手段でデータを入手する方法を考えなければいけない。

隣の社員が席を立ち去ると、椅子にもたれていた安藤が身体を起こした。

「なあ……シユン」

「は、はい」

いきなり下の名前で呼ばれたので、驚いて姿勢を正した。
急にどうしたんだ。

舞野も飲み会の時に俺を下の名前で呼んだ。流行なのか。

驚いて返事をする俺を、安藤が神妙な面持ちで眺めている。

「何ですか？」

「いや……お前、体調はいいのか」

俺から目をそらして湯飲みに口を付ける。

「もう大丈夫だと、思います」

席に着いてから安藤の様子がどうも、たどたどしい。

ハヤトとこのことがあるので仕方ないと言えば仕方ないのだが。

安藤はポケットを探り、小さなメモ用紙を取り出した。

それを俺の方へ差し出す。

受け取ったメモを見ると「木村メンタルクリニック」とあり、下に診療時間と住所が書いてあった。

安藤の顔を見上げると、やはり気まずそうな表情をしている。

「お前の体調が心配だから病院を紹介してやって欲しいと、その…ハヤトがな」

「ハ、ハヤトが！？ ハヤトが……そう、言っただけですか……？」
初めて安藤の口からハヤトの名前が出て、立ち上がりそうになるほど驚いた。

「……ああ。あいつも心配してる。俺もだ。その病院は知り合いに教えてもらった。良い医者らしいから一度行ってみるといい」

俺の手元を指差す。

あいつというのは、俺の中の、俺じゃない方のことだ。

俺を下の名前で呼んだのは、ハヤトと区別するためか。

本当に信じているかどうかは別にして、俺とハヤトを区別して扱ってくれることは実に喜ばしい。

それなのに、何故か身体がどこかに堕ちていくような嫌な感覚に襲われる。

手を伸ばして何かにつかまりたい気分になる。

安藤が心配しているのは俺じゃなくて、同じ身体と顔の、自分じゃない方の男だ。

ハヤトが心配しているのは俺じゃなくて、知らないうちに傷ついていく、この肉体だ。

堕ちていた身体が打ち付けられた場所は、誰も自分を必要としていない真っ暗な闇だった。

今、目の前にいるのが俺では無く、ハヤトだったら安藤は喜んだらうか。

ハヤトの曇りない笑顔が浮かぶ。

俺が消えれば二人は喜ぶだろうか。

広い背中の後姿を眺めながら

いつのまにか一人立ち尽くしていた。

自分じゃない方（後書き）

今回はあまり展開の無い内容でしたね……。

あ。R指定を楽しみにして下さっていた方。申し訳ないです（；

△）エ．．．．．

毎度の事、週末は更新できませんが、月曜日の第十話が二話を一話にまとめた分なので、長さも二話分。週末無かった更新の分だと思つて許してやってください。二話分面白いかどうかは……保証致しかねます。

あ、一足先に読みたいって方は、ブログの方へ♪

今週はブログの方も週末更新なしです。

では。

雨天決行

「好きだ……ユキナっ。……ユキナ……」

「あっ……ああ！……アン、ドー、さん……いい……すごい」

雫を弾く広い背中に両腕を回す。

打ち付けるように響く断続的な騒音と共に、快楽が身体を貫き、
徐々に墮とされていく。

口元を濡らし、もつれる酒気帯びの粘膜。

小刻みに揺れるランプシェードからの淡い光に照らされる。

浮く身体。

波立つ室内。

耳元をざわつかせる熱い息。

からむ下肢。

湿る暖気の中で目を閉じた。

「パパ——！ ユキナちゃ——ん！」

小雨が上がった曇り空をバックに、長い鎖で繋がれたブランコが
上昇し始める。

ブランコから小さな少年がこちらに手を振っている。

陽気な音楽が流れ、今朝から降り続いていた雨を吹き飛ばすよう
に、日曜日の遊園地は賑わっていた。

「リョ——タ——」

口の横に手をあてて、もう片方の手を大きく振る。

それに気付いた少年は、嬉しそうにもう一度こちらに手を振った。

「なんでバツイチだつて教えてくれなかったの？」

ベンチに腰をかけながら、隣に座っている二日酔いの男に問いかけた。

「なんでバツイチだつて教えなきゃいけないんだ」

ブランコに乗る自分の息子を見上げながら、安藤が答えた。

「バツがイチだからだよ。ミドルネームくらいに思つて、喋り歩いた方がいいよ。何も知らずに付き合つた人が迷惑じゃん」

例えば俺とかな。

日曜の朝十時。

今週始めに交わした約束通り、今朝安藤の部屋へ出向くと、雨だというのに遊園地に行くと言い出した。

安藤は昨日の夜にずいぶん酔っ払つて帰つて来ていたので、まだ酔っているのかと思い、酔い覚ましのつもりで酒臭い顔に消臭スプレーをかけると、腹を一発殴られた。

そうこうしているとチャイムが鳴つて、玄関で女の声がしたと思つたら、小さな男の子が一人部屋に駆け込んできた。

安藤の息子で、来年から小学生だという。

別れた妻が面倒を見ていて、名前はリョウタ。

「お前この前行つてたから、分かるだろ。案内しろ」と三人で遊園地に出掛けることになった。

雨が小降りになるまで、一時間ほど部屋で遊んだ。

リョウタが「逮捕ごっこ」がいいと、妙な遊びの名前を出してきたので、適当に合わせて部屋中を走り回り、安藤を怒らせた。

ベンチ横の灰皿を引き寄せ、回り始めたブランコを眺めながら、煙草をくわえる。

安藤からもらったジッポをポケットから取り出し、火を点けた。
「雪菜。俺は今、禁煙中だぞ」

開いた足の間に両手を垂らし、前のめりの姿勢で座る安藤がブラ
ンコを眺めながら言う。

「は？ 知ってるよ」

「禁煙中の上司に対する気遣いってのはないのか。せめて風上で吸
うのやめろ」

「ああ、気付きましたでした。さーせん」と言って、安藤の反対側
に座りなおした。が、コントのようにタイミング良く、風向きが逆
に変わった。

安藤は溜め息混じりに開いた足の間から地面に視線を落し、頭を
垂れた。

「お前……それ。俺の吸ってた銘柄じゃないのか。わざだろ？」

「ああ、忘れてました。これはわざとです」

煙の向うの強面が、身を起こして後ろに持たれ、背もたれに両肘
をかけた。無表情のままゆっくりと一度天を仰ぎ深く息を吐いた後、
目を細めてこちらを向く。

遊園地に入場してはいけない人種だ。

「お前に一つ教えとく。そのライターは六万五千円だ。俺が禁煙失
敗したら、返してもらうからな」

「これ……俺のライターです。先週買ったんです。六万五千円で。
安藤さんからもらったやつは捨てました」

せっかく手に入れた豪華絢爛ジッポを、六万五千円と知って手放
してたまるか。

軽蔑の眼差しを横切り、風上からは反対の、先ほど居た席に座り
なおした。

知らぬ間に終わっていたアトラクションから、リョウタが走って
帰って来た。

「ゆきなちゃ——ん！ 楽しかった！ ねえ次はどれ——？」とり

ヨウタが腕に絡み付いてくる。

「よし、リヨウタ。次は急流滑り行こ！ あれならリヨウタも乗れるぞ」

リヨウタはまだ小さいので、あまり過激なアトラクションには乗せられない。

小学生以下の子供でも乗れて、それでいて男の子が喜ぶような動きの大きな乗り物がいい。

「ゆきなちゃんって、すごいね——。何でも知ってるね。僕もゆきなちゃんみたいになりた——い！」

俺の腕に軽い全体重をかけて引つ張る。

「おい、リヨウタ。冗談でもそういうこと言っちゃだめだ。そのお兄ちゃんらはな、仕事をずる休みする上に、人の物はバイキング形式で何でも取り放題だと思ってるような奴なんだ」

「そうなの……？」とリヨウタは足を止める。

膝についてリヨウタと同じ目線になり、両手を小さい肩へ置いた。
「リヨウタ。いいか？ 男には世界中を敵にまわしても、やらなきゃいけない時があるんだ。『やらなくても、やりかえせ』これだ。分かるか？」

「うん。分かるよ。『やらなくても、やりかえせ』だね！」

少年は目をキラキラと輝かせた。

「おい、そこ。変な言葉——」と背中では怒声が響いたので、「リヨウタ競争だ！」と言って走って逃げた。

それからアトラクションを続けて三つ回った。

その後、一休みして三人で喫茶店へ入る。

俺とリヨウタはメロンソーダを飲み、安藤はコーヒーを飲んだ。

安藤がトイレに立った隙について、向かいに座るリヨウタの方に身を乗り出す。

「なあ、リヨウタ。パパの誕生日って知ってるか？」

「知ってるよ——」

「いつだ？」

「なんで——？」

安藤の息子だけあって、なかなか疑り深い。

「いやさ。リヨウタのパパの誕生日に、こっそりプレゼント用意して驚かせようと思ってさ」

真っ赤な嘘だ。

今朝携帯を開くと、自室の固定電話から録音メッセージが一件入っていた。

「あ、ハヤトか？ シュンだけど……。その……。ちょっと頼みがあるんだ。

俺が会社の情報持ち帰って来てるのは知ってるよな？ 課長のパソコンからデータを落してただけど、急にパスワードを変えたみたいで……。ログイン出来なくて困ってるんだ。

あの、明日デートだよな……。？ 何気なくでいいんだけど……。パスワードに関係しそうな事、聞いたら聞いて欲しいんだ。誕生日の日付とかでもいい。

パソコン見れないと、ちょっとまずいからさ。……。じゃあ、明日楽しんで来いよな」

何が楽しんで来いだ。辛そうな声で、無理してるのがばれただ。

「ほんとに——！？ じゃあリヨウタと一緒にプレゼント買いに行く——！ ねえねえ、どこでパーティーする？」

リヨウタは内緒話にワクワクし始めた。

「そうだな……。でも日付が分からないと用意出来ないぞ？ パパの誕生日いつなんだ？」

「えっとね——」と小さい顔を傾けたと思ったら、隣で椅子を引く音がした。

「リヨウタ。トイレ行っとけよ」と安藤が座った。

慌てて身を引き、座りなおす。

トイレに走る小さな背中を眺めながら、安藤が溜め息をつく。

「ダメだな、あいつは。誘拐犯に連れて行かれるタイプだ」

「なにそれ」

「子供から俺の誕生日聞きだすとは、中2の脳ミソで少しは考えたじゃないか、雪菜君。でも残念だな。ログインパスは誕生日じゃない」

ニヤリと笑って腕を組む。

「気付いてたなら教えてよ。パスワード、何？」

シユンには何気なくと言われたが、もう面倒くさいので直球ストレートだ。

「おい、雪菜よ。お前は面白い奴だな。人生楽しくて仕方ないだろう？俺もバカに生まれりゃよかったな」

そう言って俺の顔を、まじまじと見つめる。

「誰がバカだよ。シユンが困ってんだから教えてやってよ。余計体調悪くなんじゃん」

「あいつには良い病院教えといた。パスワードは情報流出を防ぐためだ。それを教えたら意味ないだろ。お前の正体を黙ってやってるだけでも在り難く思え」

「安藤さんって、ホント凶悪だよね——。シユンと一緒に病院通いなよ。その内絶対、笑いながら人殴ったりしだすと思うよ」

「おおいいな、それ。一番におまえの前で発症して、最初に殴つてやる」

畜生。

なんとかパスワードを知りたい。

安藤と付き合っていると嘘言ったからには、それくらい軽く聞き出せないとシユンに関係を疑われそうだ。

「ああそっぴや」と安藤がこちらに顔を向ける。

「何？」

「誕生日は三ヶ月後の今日だ」

ニヤつく顔がうつとしい。

「いや、知らねえよ。おっさんが一つ年取るの誰の興味ないよ？
一歩棺桶に近付いたと思って、もっと厳格に生き直すとかした方が
いい」

「アホな部下にそんな忠告受けるとはな——俺も歳だ。まあ、プレ
ゼント楽しみにしてる」

リヨウタがトイレから出てきたのを見て、立ち上がる。

俺も「バカじゃないの？」と言って立ち上がった。

喫茶店から出て、最後にオバケ屋敷に入ることになった。

先に駐車場の車に帰って待っていると言う安藤に「ね——パパも
一緒に行こうよ——」とリヨウタがこねる。

「そうだよ。安藤さんも行こうよ。俺達同じチームじゃん」

「なんだよ、同じチームつてのは。『メロンソーダ友の会』かなん
か？ 勝手に俺をいれてくれるな」

まさかと思い「もしかして……怖いのか？」と小声で聞いた。

「なあ、リヨウタ。パパがびっくりした拍子にオバケ殴って、逮捕
されたら嫌だろ？ な？」と息子の肩に手をやる。

いくらオバケ屋敷でも、そういう類の恐怖はお断りだ。

「安藤さん。加齢でお疲れでしょうから、車で休んで下さい。『
チーム・若さ』でオバケ屋敷に行つて参ります」と小さな手を握つ
た。

「雪菜君。加齢じゃなくて過労の間違いだろ？ 終わったら携帯に
かける。出口に車まわす」

「はい喜んで——」と居酒屋よろしくダルい口調で返す。

安藤の携帯番号を聞いて、自分の携帯のアドレス帳に登録した。

今週二度目の遊園地を出て、ファミレスで夕食を済ませ、リヨウ

夕を家まで送る。

三十分ほど車で走った住宅街でリョウタを下ろすと、大きな三階建ての家の門に入ってから、こちらに手を振る。

きつと離婚前は家族三人で暮らしていた家だろう。

助手席から手を振り返した。

「ねえ、なんで奥さんに捨てられたの？」

運転席に聞くと横目で睨まれる。

「俺が捨てたとかは思わないのか？」

「安藤さん外見もいいし、ちゃんとした役職だし、エッチも上手いのね——。極悪非道って弱点除けば完璧なんじゃない？　もしかして、それに釣られて寄って来た女と浮気しちゃった、とか？」

「さあな」とはぐらかされた。

それは半分、凶星ですと言ってる様なもんだけどな。

しばらく流れる景色を眺めていた。

すっかり日が暮れて外は暗く、目の前に赤いテールランプが連なっている。

「雪菜。昨日の夜のことだがな……」

安藤が正面を向いたまま、静かに話し始めた。

「何？　安藤さんの部屋でやったこと？」

「ああ、まあそうだ。俺、何か変なこと言ってたか……？」

昨日の夜、厳密に言えば今日だが、遊んでマンションへ帰ると、タクシーで帰宅した安藤と偶然出くわした。

明日は一日付き合々と約束していた日曜だ。朝何時に部屋を訪ねればいいのか、帰りに寄って直接聞くつもりだったので、そのまま部屋まで付いて行った。

あまり酔いつぶれるタイプには見えない安藤が、昨日は珍しく酔

つていたらしい。外見では気付かなかったが、部屋に帰ってからの行動がおかしかった。

あわよくばと思っていたのは確かだが、意外にも玄関から直接寝室に連れ込まれ、安藤の方から押し倒してきた。

ベッドの中で執拗に身体を求められ、耳元で低く囁かれる「ユキナ」という優しい呼び声が、麻薬のように脳ミソを洗脳した。

「好きだ」とか「愛してる」とか。

いるんだ、たまに。身体を重ねた時だけ、そういう思ってもみないことを口走る奴が。

そうやって相手を勘違いさせて、割切った関係に終わりを告げる。後々、詐欺師呼ばわりされる運命だ。

まさか、こんな近くにいるとは思わなかった。

運転席に顔を向ける。

「うん……言ってた。まあ、あんな言葉を真に受ける程、俺遊び慣れてない訳じゃないし、安心していいよ。」

でも俺以外とは酔った勢いで寝るの、やめといた方がいいかな。

安藤さんにあんなこと言われたら、きつとみんな本気にしちゃうよ？」

何となく離婚の原因が分かる気がした。

「あと名前呼ぶのはいいけど、ちゃんとハヤトって呼んでよね。ユキナって呼ばれると、シユンのことみたいで嫌だからさ」

「ああ、分かった」と指示器を点滅させ、大きくハンドルをきる。

今日一日、安藤は俺とシユンをちゃんと区別して会話を合わせてくれた。

本当に信じているかは別として、そういうタイプの人間は今までに少なかったので嬉しかった。

だからこそ、会話の端々に見え隠れするシュンの存在や、俺の知らない会社の話が気に触る。

他の人間相手なら普通に許せてきたことが、安藤相手だと何故か腹が立つ。

目の前にいるのは、シュンじゃなくて俺なんだ。

俺の知らない世界の話なんて聞きたくない。俺が知っている事だけを話して欲しい。

今からマンションに帰って、昨日の続きが始まらないかと期待する、甘い自分がいる。

口先だけの戯言だと分かっているけど、昨日のベッドは心地よかった。

「俺も好きだよ」と返すと、まるで恋人同士の様で笑えた。

毎日があんな夜なら、俺は外に遊びに出掛けなくなるだろう。

バカだ俺は。これじゃあ勘違いして本気になる奴とそう変わらないい。

何処かに堕ちかけていた身体を持ち直し、一歩足を後ろへ引いた。

「安藤さんて、好きな人いるの？」

見たかった表情が逆方向に振り返り、右後ろをチラリと目視確認する。車がスピードを上げて走行車線に合流した。

こちらに向かぬ顔。

返事が無い、という返事。

今朝、安藤の部屋の玄関から聞こえた、上品な女のを思い出す。その後何故か、昨日耳元でずっと鳴っていた甘い囁き声を思い出して、身体が浮いた。

「ねえ。もしかして別れた奥さん、ユキナって名前じゃないよね？」

安藤は横顔のまま鼻で笑い、アクセルを踏み込む。

エンジンが唸る。

赤く光ったメーターが制限速度を軽く振り切り、煌^{きらめ}く夜景に続く
高速道路の先に、黒のBMWが吸い込まれていく。

雨天決行（後書き）

またまた長い駄文を読んで頂きありがとうございました。

性描写があまりに少ないのではないかと思ひ立ち、突発的に気休め程度の性描写を入れてみました。まあ、遊園地との雰囲気ギャップもいいかな、なんて……（；・ω・）

本当は酔っ払いの話で一話入れるつもりでしたが、結局、遊園地の話と合わせてしまいました。

って事で、話二話分。五千文字強あります。

ここまで読んで辿り着いてくれた方。す、好きだ（〃　〃人　〃

〃）（ダキッ

勇気が無くて具体的に書けない性描写を、如何にエロく書けるか。常に自分の課題です。

男はより色っぽく、女はよりかつこよくがモットーです。

今回の小説のキーワードは「堕ちる」ですので、一話に一回は出来るだけ使うようにしています。

強引に変な使い方してますが（´。　。　、　；）意識して読んで頂くと少しは面白いかもしれません。

資料室の微熱

キーボードを打つ手を止めて、視線を窓際に流す。

それ程大きくないオフィスの中に、八つのデスクが向かい合わせで二列に設置されている。部屋全体を見渡せるように入り口を向いて、デスクの列の一番奥の窓際、そこに課長席がある。

パソコン画面と隣に座る社員の間、遠く三四メートル先の横顔をさり気なく眺める。

机に肘をつけて顎を触りながら、モニターを覗き込む強面。何のデータを見ているのだろうと気になった。

ジッと見つめていたら、安藤の目もこちらに向いて一瞬目が合い、身体に電流が走った。

急いでパソコンに視線を戻し、画面とキーボードを交互に見て、あたふたと平常心を取り繕う。

一瞬目が合ったただけなのに、動揺する。身体の花が沸き立つ。

今朝からずっとこんな感じた。

普段通り二時間早く出勤して安藤のパソコンを立ち上げたが、やはりパスワードが違ってログインできない。

昨日安藤とデートに出掛けたハヤトからは、パスワードに関して何の音沙汰もない。

結局またオフィスの掃除をして、就業時間までを過ごした。

「課長おはようございます」という女性社員の声に混じって、自分も挨拶をしようと振り向いたが、安藤の姿を目の前にして何故か声を失った。

いつも通り身体にフィットした、オーダー物らしい落ち着いたス
ーツ。

二日空いただけなのに初対面のような感覚を覚え、自分の上司は
こんなに格好良かったらどうかと寝惚けた事を考える。

見惚れていると「雪菜。体調、大丈夫か？」と通りすがりに聞か
れ、その低音に身体はとてつもなく反応した。

ドツドツと地響きのような鼓動を震源に、身体中の血液がビリビ
リとさざ波立つ。

指先まで熱が脈打ち、急速に発熱を促す。

熱に浮かされて、脳が火照る。

身体が、細胞の一つ一つが何かを思い出している。

恐らくは——幾度と無く越えてきた、俺の記憶には無い、二人の
夜を。

熱を帯びた唇で「はい」と言うことだけで精一杯だった。

それから一日ずっと安藤を遠くから眺めている。

長く見ていると身体が熱くなる。目が合えば、雷に打たれたよう
に身体が反応する。

見ないように努力しても、視線がそちらに吸い取られていく。

とつくに就業時間も過ぎ、半分以下の人数に減ったオフィスで未
練たらしく、はかどらない仕事に向かっている。

帰ろうと思うのに、帰れない。

こんなにも、身体が忘れられなくなるほど、二人は愛し合ってい
る。安藤とハヤトだ。

もう一つの人格が持つ、甘い記憶に思いを寄せる。

不意に、ハヤトが俺の記憶を夢みたいに思い出せるように、努力すれば俺にもハヤトの記憶が思い出せるかもしれないと思い付いた。今までそんなことを考えたことは一度も無かった。ハヤトの行動を知ることが、醜い自分を見るようで嫌だったからだ。

でも……でも、もし思い出せてしまったら、俺は……どうすればいい。

軽率で誰とでも寝る浅はかな記憶を、嫌悪感さえ抱く男の肌を、甘くて深いであろう二人の夜を、明るくて誰にでも愛される同じ顔のハヤトを……俺は、受け入れられない。

絶対に触れてはならないパンドラの箱を見つけて、神経が萎縮する。

しばらく治まっていた強烈な頭痛と吐き気が、何日か振りに身体を襲う。

ポケットからハンカチを取り出し口にあて、パソコンの電源を切って、俯いた。

急いで帰ろうとも思ったが、マンションまでは三十分程かかる。

マウスパッドの上で爪が刺さるほど拳に力を入れて治まるのを待つが、そう簡単に治まった例が無い。

やばい。

社内だというのに、本格的に発作が始まった。

やはり早く帰るべきだったのだ。

一番上の引き出しを開け、ガシャンツと音を立てて乱暴にカッターナイフを取り出し、スーツのポケットにしのをばせる。

俯いたまま席を立ち、早足で廊下に出る。

奥歯を食いしばる。

冷や汗が背中を伝う。

同じ階の奥にある、使われていない資料室へ向かった。

誰からも忘れらされているせいで、いつも鍵が開いている。横流しに値する資料が無いか、何度か足を運んだことがあったので思い出した。

突き当りを曲がると、人通りの少ない廊下は電気が消えていた。

人目が無くなったのを確認して目的地まで走り、そこ一帯だけ古臭いドアに手を伸ばした。

中に入り、ドアの脇にある流し台に直行して、シンクに頭を落す。昔は休憩室として使われていたらしく、小さな部屋なのに水まわりがあり、使われなくなったソファ一床である。

一二度排水溝に向かってえづいたが、唾以外何も出てこない。

ハアハアと乾いた息だけを吐き出し、ジャケットのポケットからカッターナイフを手探りで取り出す。

同じ手で、もう片方の手首のボタンを外し袖をめくり上げた。

眩暈を我慢しながら顔を上げて親指で刃をいっばいまで押し出し、呼吸を抑える。

薄くなった前回の傷跡の上に刃をヒタリとあてた。

部屋のドアが開く音。

虚ろな視界を上げて目を凝らすと、開いたドアの向うから姿を見せたのは安藤だった。

この資料室に入るのが初めてだったのだろう、珍しそうに部屋全

体を軽く見回し、その延長上の視線が、流し台前の俺で止まった。視線が俺の手元へ移ると、状況を把握したらしい上司は厳しい顔付に変わり、「おい」と言っただけに歩み寄る。

手からカッターナイフがすり抜ける。

教師に怒られた小学生のように、俯いて床を眺めた。

「雪菜。こういう事はやめろ。家でも会社でもだ。どんな理由だろうと、自分の身体を傷つけるなんてのは間違ってる」

きつくそう言っただけ、持っていたカッターナイフを仕立ての良さそうなスーツのポケットに落した。

「……まだ体調、良くないんだな。俺が教えた病院へは行ったのか？」

下を向いたまま首を振った。

「原因はなんだ？ 俺か？」

ハッとして頭を上げる。

「ちっ、ちが……」

違いますと言いたかった。が、目が合った途端また身体に電流が走る。それに加えて、忘れかけていた鈍痛が頭を叩き割る。

原因が安藤だとはつきり認めて口に出すことは、安藤が好きだと認めることだと思った。

そんな事したら、自分が自分でなくなる。

底の見えぬ深い谷を覗き込んでいるような気がした。

小さな箱を持って、崖の近くに立っている。

箱の中には思い出してはいけない、もうひとつの記憶。

崖から足を踏み出すことも、箱を開ける事も出来ずに、どうしようもなく立ち尽くしている。

頭痛と身体の火照りが、動こうとしない俺を追い立てる。

顔を歪めた。

精神的にも追い詰められ、痛みと苦しさが入り混じる。
目頭に熱を感じ、また俯いて噛み締める下唇。

「大丈夫か？ どうして泣くんだ」

二十四にもなって人前で涙を流し、自分の上司を動揺させた。

広い掌が後頭部へ回り、抱き寄せられ、大きな温もりにふんわりと包まれる。

何故か懐かしいと安堵した。

目を瞑り、襟元に顔を埋めて、肌触りの良いスーツ生地を濡らす。

頬を温かい手に包まれ、視界が上がる。

唇に熱い肌が触れた。

触れ合わせるだけの優しいキスが、角度を変えて何度も堕ちてくる。
心地よい。

時折自分の唇をほんの少しだけ動かし、感触を確かめる。
隙間の無い相手との距離に酔いしれる。

男とキスするなんて気持ち悪いと思っていた。

自分が男と抱き合うなんて考えられない。そう思っていた。
なのに。

きっとこの人は特別なんだ。

ハヤトが好きになった人だから。

「シュン……？」

自分の名前を呼ばれて薄っすらと目を開け我に返ると、いつのま

にかキスが終わっていた。

「やっぱり俺じゃ効き目ないか……。お前のおまじないは効果抜群なのにな」

親指の腹で俺の唇を撫でる。

苦笑するその顔が、あまりにも優しい。

いつのまにかうるさく昂っていた身体が静寂を取り戻し、痛みも吐き気も感じない。

ただ唇を始め、触れられた全ての部分が熱を持ち火照っている。

熱気を帯びた息を吐き出し、もう一度襟元に頬をあててうつとりと瞼を落す。

広い背中に両腕を回し、微熱を帯びた身体を厚い胸板にあずける。ジャケットの上から硬い背筋を指でなぞる。

自分の背中にもまた、安藤の腕が回っている。

少しでも温もりを感じたいと、スーツ越しの胸元に頬を摺り寄せ
る。

何度も抱き合った事を証明するかのように、安藤の身体の中に自分の身体がすっぽりとパズルのようにあてはまる。

身体の細胞が思い出している。

隅々まで流れる血が欲している。

スーツの下で熱い肌を。自分の名を呼ぶ優しい吐息を。

安藤の肩にそつと手で触れる。

何故かここに傷跡があることを覚えている。その傷跡が愛おしいと感じる。唇で触れたいと思う。

「あつ……」

濡れた襟元に頬を預けていると、首筋に口付けされて声が漏れた。首元から耳の下にかけて、何度も優しく吸われる。意識が遠退く。

ダメだ、こんな事してちゃ。

言わなければ。「俺はハヤトじゃありません」と。

ハヤトが知ったらきつと怒る。

安藤は、また俺をハヤトと勘違いしているのかもしれない。

俺は。

俺は……。

薄れる視界の持て余し、小さく呟く。

「課長……。もっと……。もっと、下さい……。……キス」

大きな手がいざなう。

さっきよりもずっと深みへ堕ちていく。

目を開けると、暗くて何も見えなかった。

顔をしかめて目の焦点が合うのを待つと、暗い部屋に突っ立っているのだと分かる。

小さな水音をたて、口元で誰かと深く繋がっている。

自分の背中と腰に回る腕。

掌に感じるサラリとしたスーツの生地。

広い背中。

目の前の耳元。

からむ舌を離し、体重をかけて厚い胸板を押した。
押し離れたスーツの男は――やはり安藤だ。

「何してんだよ」

低い声で呟く。

問い質さなくても知っている。

起きる寸前まで見ていた夢を、鮮明に覚えている。

不思議そうだった表情の安藤が、俺の口調を聞いて眉を寄せた。

「ハヤト……か？」

「悪いかよ。何で……何で、シュンとキスなんかしてんだよ……」

何故か怒りが込上げ、さっきまでキスしていた相手を責める口調になった。

安藤は俺から一二歩離れ、ポケットに両手をつっこみ床を睨んで
浅くハアと息を吐く。

開き直った表情で顔を上げる。

「こつちこそ何か悪いか？ シュンがキスしてもいいって言ったからしたんだ」

「嘘だ。シュンは安藤さんのこと嫌いだから、そんなこと言わないよ」

「嘘じゃないさ」

怒りで煮える俺に向かって、冷淡に言う。

知っている。

でも信じたくない。信じられない。あんな夢。

まるで浮気現場を目撃した女のように一人苛立つ自分が、醜くて仕方がない。

それでいて、やけに冷静な安藤の表情に憤りが増す。

一度二度寝た男がその後誰と寝ようが、そんなことを気にした事は無い。

身体を合わせた奴が誰を好きだろうが、俺の前で誰と姿を消そうが関係なかった。

付き合うという言葉は、定期的な性行為を約束する契約でしかなかった。

タイプの男と寝れると嬉しい。それが好きということだと思っていた。

付き合ってもいないこんな男が他の奴とキスしたくらいで、なぜこんなにも腹を立てなければいけないのか。

例えその他の奴がシュンだったとしても、だ。

よりによって何でシュンなんだという苛立ちが、また沸きあがる。

怒りだけでは無い。

悔しくて、恨めしくて、憎い。今死んだら確実に化けて出る。

どうして俺がこんな思いをしなきゃいけないんだ。

お前のせいだ。

1メートル先で挑戦的に自分を見下ろす男を睨みつけた。

「俺を嫌いなのはシュンじゃなくて、ハヤト。お前だろ？」

嘲笑うように言う。

「ああ。嫌いだよ。大嫌いだよ、安藤さん」
大嫌いだ。

安藤も。シュンも。

俺にこんな思いをさせる奴等は、みんな。

「忘れてたよ。安藤さんが人を脅迫して弄ぶ、最悪な奴だってことをさ」

安藤は特に表情を変えず、首を傾け何かを考えている。

「そつだな……」と言ってドアの方へ歩き、中から鍵を閉めた。

「俺も忘れてたよ。秘密を黙ってる代わりに、お前は俺の言う事を何でも聞くんだつたな」

そう言いながら、俺の方を振り返り歩み寄った。

「確か、俺の喜ぶこと沢山してくれるって言ってたよな」とスーツのジャケットを脱ぐ。

「もういっぱい遊んでやっただろ？」

挑発的に睨みつけると、安藤がせせら笑った。

「そういう生意気なところ好きだぞ。ハヤト。いい声で鳴かせてみたくなる」

右手でネクタイをゆるめながら続ける。

「嫌われついでに、いいこと一つ教えてやる。」

正直言つと、うちの課から情報が流出してる事は、ここに配属される前から気づいてた。

本当は最初からパスワードは設定し直すつもりでいたんだが、お前のアクセス記録がおかしい事に気付いて気が変わったんだ。これは上手くいけば脅せるかもつてな。

だから雪菜。俺は最初からお前とこうなるつもりでいた。

お前がちゃんと俺のパソコンからデータを盗んで、脅せるようになるまで待つてたんだよ。

どうだ。もつと嫌いになつただろ？」

絶句した。

シユンは何でこんな男を好きになつたんだと思い、吐き気がした。喉元にせり上がる怒気を抑えて、声を搾り出す。

「あんた……ホント、最低だな」

目を細めて安藤を射抜く。

怒りで、握りこんだ手が小刻みに震える。
それを見て安藤がニヤリと口角を上げた。

「いいねえ、そういう目。そそるよ。」

大嫌いな奴に犯されて歪んでいく表情、たっぷり見せてくれ」

右手で左肩をさわり、準備体操をするかのように首をコクリと鳴らす。

全てを見透かすような冷気を含んだ視線に、半歩後ずさった。

ブラインドから差し込むオレンジ色の光が、男の足元により深みを増した影を堕とす。

資料室の微熱（後書き）

もう、一話が長いなんて気にしない。

いや、お前はな！って感じでしようが……（´。°。°。°。°）
だって、きりのいい所まで書くところなっちゃうんです（↑開き直った……）

読者様の読みやすさを考えると三千字前後がベストなのでしょうが・
・σ（・・ー・・）・○○（悩）

たまに勉強&趣味を兼ねて、他の方が書いたBL小説を読むのですが、その度に自分の文章力の無さに落ち込みます。先週の土曜日にそれがあって、未だに引きずっています——
●
もう自分の文章見るのが嫌！溜め息もんです。

畜生。とりあえず酒だ！とか言いながら、なんとか書いてます（＃

・
D・
＃）シツカリセ・ヨ！！

でもちよこちよこ増えてきた拍手に答えられるようにがんばらなければ！！

たまに思いついて、ブログのランキングを確認したら、びっくりするほどランクアップな時がありまして……コワ（（・。°。D（（
）！！

ああ、何かの陰謀だな（o^ー^o）って思つて、一瞬で画面を消します。

あれ以来、怖くて覗いていません。

ではでは。

やや落ち込みながらも執筆に向かいます。

ココロノヤマイ？

「じゃあ、軽い安定剤を二週間分と……鎮痛剤と吐き気止めも出しておくから、これは症状が酷い時に飲んで。あとは――夜は眠れるのかな？」

白髪交じりの白衣の男が、パソコン画面からこちらへ目線を移した。

「あ、はい。夜はちゃんと眠れます」

俺は早めにベッドに入るが、それからハヤトが起き出すので、睡眠時間は実際のところ四時間程度だろうか。

マンションからバスで二十分。そこから歩いて十五分。

立地的には不便だが、紹介された通り評判が良い病院なのか、診療時間終了十分前だというのに待合室には何人も人がいた。

「木村メディカルクリニク 内科・精神神経科」と入り口のプレートにある。

内科と一緒に上っている上に、精神科という表記が無いので人目を気にせず入りやすかった。

木村医師は優しい物腰の初老の男性だ。

問診票に目を通してながらいくつか質問して、俺の病状を確認した。日中、何のきっかけも無く酷い頭痛と吐き気に襲われると話す。

原因として思い当たるのは、仕事が忙しいことだと伝えた。

自分の中にもう一人違う人格が入っていますとは、口が裂けても言わない。

ここへ来た目的は、発作を止める薬をもらうことだ。

「うん。最近は精神的なストレスでそういう発作を起こす人が、若

い人達が増えてるからねえ」と納得している様子だ。

「はあ」と気のない返事を返した。

処方箋を入力し終わったらしく「じゃあ他に聞きたい事や、話しておきたい事はないかな？」と回転椅子を回して、身体をこちらに向けた。

診察終了の合図だ。

「特にありません」

腰を浮かそうとすると、木村が「うん……」と頷きノンフレーム眼鏡を外す。

あまり印象の変わらないにこやかな表情で、俺を一度上から下まで眺める。微笑んではいるが、眼差しが鋭い。

「今までに急に意識が遠退いたり、気が付いたら別の場所に居たという経験は、ないですか？」

ぞっとした。

生唾を飲み、下唇を噛む。

自分を見る細い目が、全てを見透かしているように感じた。

「いえ、ありません」

かすれた声で言う。

「そうですか。分かりました。では、また二週間後。お大事になさってください」と、眼鏡をかけ直す。

「ありがとうございます」

椅子から立ち上がると、軽い眩暈がする。

ドアノブに手をかけたところで「椎名さん。何か変わったことや相談がありましたら、いつでもいらして下さい」と後ろから愛想のいい声が飛ぶ。

首をひねって後ろに会釈し、診察室を出た。

待合室の長いすに腰をかけ、壁に持たれかかってぼんやりとする。

自分で自分の両腕をそつと抱き締める。

太い腕に抱き寄せられた感触を思い出す。

月曜に、会社の資料室で自分の上司とキスをした。

それから今日を含めて二日間の内に、同じように二度も別の場所でキスをした。

一度は二人きりになったエレベーターの中。

もう一度は「雪菜。ちょっといいか？」と呼ばれて付いて行った、トイレの個室。

二度とも触れるだけの優しいキスで、トイレの個室ではキスした後にしばらくギュツと抱き締められた。

その度に全身が溶けて意識が遠退く。眼鏡を外され、何も考えられずにキスが終わるまでじっと瞳を閉じている。

ハヤトはそんな安藤と俺の不自然な関係に気付いている。

月曜などはキスの最中に気を失って、次目覚めたのは翌朝だった。きつと、あれからハヤトが目覚めたのだろう。安藤とキスをしている最中に……。

どんな気持ちだっただろうと考えて、また苦しくなる。

そんな俺の疑問に答えるかのように、あれから朝目覚める度に部屋の散かりがひどくなっていく。

いつも以上に夜遊びが派手になったのか、毎朝身体に色濃く残る情事の痕に頭を悩ませる。

俺の存在を薄れさせたいかのように、身体に染み付いた香水の香り、腰の辺りまで点在するうつ血痕。

安藤が社内で何故そんなことをするのかは——正直よく分からない。

可能性として考えられるのは、最近また仕事が忙しくなってきた残業が増えたせいで、ハヤトと二人になる時間が減ったから。

そうだとすると、やはり安藤は俺達が二重人格だとは信じていないのだろう。

キスしている間だけでもハヤトに身体を明け渡してやろうと思う気持ちとは裏腹に、安藤の後ろ髪に指を通し、必死に唇を動かしている自分がいる。

お互い何も喋らず、何も無かったかのようにオフィスへ戻る。

火照った身体でデスクに帰る度に、整理できない自分の気持ちとハヤトの気持ちを考えてやれない自己嫌悪に苦しむ。発作が起らないのが不思議だ。

ふと気付くと、隣に座っている少年がこちらを向いてニコニコしている。

中学生くらいに見える。少年の向うに付き添いらしき男が座っているが、その男も大学生くらいで俺よりも若いと感じた。

少年は行儀良く揃えた足をたまに浮かせて、ワクワクしたような面持ちでこちらを見つめる。

待合室を見回すと、いつのまにか自分と隣の二人以外に人は居なかった。

診療時間を二十分も過ぎている。

受付の看護師が閉院を告げるプレートを入り口に掛けに行った。

「こんにちは」

少年が急に話しかけてきたので、驚きながらも「こんにちは」と

返す。

向うの青年がチラリとこちらを見たが、すぐに手元の手帳に視線を戻した。

「ここ、初めてですか？」と少年。

「うん。人に紹介されてね……」

「そうですか。僕はもう、ここに通って三年目です」

そう言いながら右手の指を三本立てる。

話してみると、見た目以上にずっと幼い感じがする。

「そ、そう。あんまり悪そうには見えないけど……。俺もしばらく通うことになりそうだよ」

少年の顔から不意に表情が消えた。

「僕の兄もここに通ってるんです。黛って苗字なんですが、今日そういう名前の人見ませんでしたか？」

「おい……カズト」

向こうの男が顔を上げて低い声で制するが少年は聞く耳を持たず、真剣な表情のままこちらに寄って来た。

「さあ、そういう名前の人が呼ばれてた記憶はないけど……。俺も診察時間ギリギリで入ってきたしね」

「じゃあ次来た時に、もしそういう人に会ったら、家に連絡するよ
うに言っておいて下さい！」

「カズト、やめないか。迷惑だろう」

先程までののにこやかな表情を一変させて必死な形相の少年には、
青年の声が届かない。

「まあ、気にはかけておくけど……写真とかないの？ そのお兄さ
んの」

少年はしばらく宙を見つめて考えた後、「あります」と言って立
ち上がり隣の青年の前に立った。

「貸して！ 携帯！！」

「カズト……」

「知ってるんだから！ ユキ兄の写真保存してあるの！！ 早く貸

してよ！」

いきなり少年が大声を上げたので、受け付けの看護師がこちらを睨み付ける。

少し戸惑いながら「カズト……ここは携帯禁止だ」と興奮した少年を抑えるように青年が静かに言った。

少年が何か言おうと口を開けたが、「黛さん、お入り下さ——い」と看護師が診察室へ呼んだ。

「すみません。弟が迷惑な事を……精神的にちよつと不安定であれでも少しましになった方なんです」

青年が申し訳なさそうに頭を下げた。
どうやらさっきの少年の兄らしい。

「いえ。でも大変ですね。連絡とれないんですか？ ご兄弟」

「ええ」といいながら、青年は受付に人がいないのを確認しながら携帯を取り出した。

しばらく携帯を操作して「これです」と、こちらに画面を向けた。先程の少年が笑いながらピースしている。その後ろにもう一人少年が写っていた。

浴衣を着てうちわを持ち、どこかをぼんやり眺めている。無表情な整った顔が悲しそうに感じられた。

「ずいぶんお若いですね」

手前の少年より少し背が高いが、中学生くらいに見えた。

「それは一昨年の夏祭りの時の写真で……。今はもう高校生なんです」

「通ってる高校は分らないんですか？」と聞くと「分かるには……分かるんですが」と気まずそうに答えた。

先程の少年との会話といい、少し複雑な関係なんだと受け取る。

「分かりました。見かけたら声をかけてみますよ。家に連絡するよ
うに言えばいいんですね？」

「ありがとうございます。そうだな……」としばらく考える。

「ちゃんと謝りたいって兄が言っていたと……そう伝えてもらえますか」

「わかりました。見かけたら必ず」

「すみません。変なこと頼んで」

「いえ構いません。元気にしていってくれるといいですね」

「ええ」と言った青年の顔が寂しそうだった。

ちょうど受付から名前を呼ばれて、立ち上がる。

会計を済ませて薬と診察券を受け取った。

入り口の前で先程の青年に会釈すると、向うも深々と頭を下げた。

病院を出て、バス停まで歩く。

すっかり日が堕ちて暗くなり、街灯が燈っている。

もう夏の香りがした。

途中で、伝言を伝える少年の、下の名前を聞くのを忘れたと気が付いたが、引き返さずにそのまま歩いた。

ココロノヤマイ？（後書き）

後々山場を控えているので、今日は息抜きの内容が少ない短い話になりました。

久し振りに三千字弱で長さになりましたが、内容が内容だけに我ながら面白くねえ（*。*）オイ！

まあずつと長い話が続いていたので、たまには……（ゝ。ゝ。ゝ）

このお話に出てきた兄弟は前作の「キングの買い物」にちよつと登場いたします。

気になるという方はチラツと読んで頂いても良いかもしれません。

いや、初対面ですけど気にはならねえ……という方、この二人を知らなくても今後一切差し支えありませんのでご安心を。むしろ関係ない人出しちゃってごめんなさいですm（――）msマン！

昨日の拍手コメで「毎日楽しませてもらってるのに、拍手とランキングくらいしかしてあげられなくてすみません」という内容のコメント頂きました（；；D）なんですとー！！

いや、ほんと。私が悪かった――。弱音ばっか吐いて……。

読者様に謝らしちゃダメだよねΣ（；；Dノ）こちらこそ本当に申し訳ないです。

ダメ人間の妄想発散にお付き合い頂いてるだけであり難いことです。

拍手コメも非公開が多いので返信できなくて残念ですが、すごくすごくパワーを頂いております！

これからもよろしくお付き合い下さいませ。。

夢うつ

「ん……」

舐め取るように、ゆっくりと唇を離す。

下を向いて口を薄く開けると、粘度の高い液体が唾と一緒にト口リと線を引き、少し丸めた掌に堕ち溜まる。

大きな手に頬を包まれ上を仰がされると、ぼんやりとした暗い視界の中で、男が冷ややかな目でこちらを見下ろしていた。

硬い親指の腹で、俺の口から垂れていた粘液を唇全体に塗り広げる。

目を閉じる。

顔が熱い。顔だけで無く身体中が火照っている。

舌の先端を出して、唇を弄ぶ親指を舐めた。

夢うつつに薄目を開くと、男が「良い眺めだ」と満足そうに言うて鼻で笑った。

丸めた右手の指の間から、先程受け止めた液体が流れ堕ちている。左手を床につき、ひざまずいた姿勢から身体を起こした。

流し台に行き、手と口元をゆすぐ。

ここで目覚めるのは今週に入って二度目。

手から流れたものが、白と透明の渦を描いて排水溝に吸い込まれていく。

濡れた口をワイシャツの袖で、手をスーツのズボンで拭いた。

「悪いな。あんまり遊んでやれなくて。あと二十分で会議だ」

男が力チャリと金属音を立ててベルトをしめる。

「別に」と素っ気無く返事をする。

一息おいて振り返り、腰でシンクにもたれる。

傾いたソファ―に座り、背もたれに両肘をかけて足を組む安藤を眺める。

「一人で帰れそうか？」とジャケットの内ポケットを探る。

この間初めて目覚めた時は、知らない場所でかなり戸惑った。

自分のオフィスも分からなければ、どうやって家まで帰ればいいのかも分からない。

仕方なく、脅されて身体を繋げた男と嫌々マンションまで一緒に帰った。

「駅からそのまま遊びに行くし、大丈夫だよ」

「ガキは元気でいいな」と言っ、取り出した煙草を一本くわえている。

「あれ。禁煙終わり？」

「まあな」

「何で？」

「……お前のせいだ」

スーツのポケットを探る。

やはりシユンは煙草を持ち歩いてはいない。

今更ハンカチがポケットから飛び出した。既に口と手を拭いて、スーツはジツトリとしている。

「ごめん。あのジツポ、家だわ。返すの今度でいい？」

「やるよ」と煙を吐いて、投げやりに言う。

「シユンは……病院行ったのか？」

天井を仰ぎ、少し間をおいて安藤が言う。

「知るかよ。シユンに直接聞け。」

「これってさあ。時間外勤務ってやつで、残業代つくの？」と返してやった。

安藤の口からシュンの名前が出て、不思議と怒りは感じない。前回ここで目覚めた時は、それこそ吐き気がするほどシュンと、目の前の男が憎かった。

今は何をしても実感がなくて、ぼんやりしている。シュンが飲み始めた薬のせいかもしれない。

シュンはあれから、俺が覚えているだけで二度、安藤とキスをした。

その夢を思い出すだけで、切ないという気持ちはこのことかもしれないと、純愛ドラマの主人公張りに沈んでみたりする。

苦しい。しんどい。早く楽になりたい。

時々無性に辛くなって、悲しくなる。こんな感情はほとんど今まで持ち合わせていなかった。シュンの担当だと思っていたのだ。

それでも安藤に抱き締められると温かいと感じるし、抱かれれば快楽に酔いしれる。

堕ちかけている。

身体も。心も。

生ぬるい空気が上がってくる深い谷底の闇を、覗き込んでいる。

あと一步、二歩、踏み出せば、真っ逆さま。

楽になれるだろうかと考えるが、こんな男に本気になったところで身を滅ぼすだけだ。

自分の革靴を見つめて、重たい息を吹きかける。

「お前も体調悪いのか？ ハヤト」

そう聞く煙越しの顔が、本気で心配してくれているかのように真剣だ。

時折こうやって優しくされると、余計にしんどさが増す。

流し台に寄りかかったまま座り、膝の上に両腕をまっすぐ置いて垂れる。

「ねえ。パスワードだけど……」

今となつてはシュンが直接聞いたほうが安藤は教えるかもしれないと考えたが、これ以上優しい言葉を受けるのが嫌だった。

「同じ事何度も言わすな。教える気はない」

安藤が面倒臭そうに言う。

「せめてヒントくらい教えてよ。俺これでも結構、素直に言う事聞いて頑張つてんだよね。さっきのだって金貰わずにしたの初めてだし」

自分の快樂はさて置き、何の見返りも無く相手のためだけに奉仕する主義ではない。

俺がしたいかしたくないか、気持ち良くなりたいたいかなりたくないか、それが全てだ。

パスワードのヒントのためだと思えば、強要される奉仕も我慢が出来る。

「お前は会社の情報だけじゃなく、自分の身体まで売ってんのか」と顔をしかめて、煙草を吸いつける。

向こうが金をくれると言うから貰うだけだ。

だいたい情報売ってるのは俺じゃなくてシュンだしな。

俺が悪者でシュンが良い者みたいな言い方をされて、また溜め息をつき立ち上がる。

「病院の薬つたつて、すぐ効く訳じゃないし。シュンの悲しそうな顔みたくないだろ？」

しばらくおいて「そうだな……」と呟き、転がっていた空き缶に煙草をもみ消す。

そこは拒否しないんだなと、また苦しくなる。
悲しくなる。

この感情を忘れるために、最近夜は前以上に、派手に遊んでいる。何杯も強い酒を煽り、続けざまに男を変えてホテルに入ることも珍しくない。

何とか堕ちる前に、この男を忘りたい。若しくはこの男に消えて欲しい。

相手を堕としたと思った瞬間が、自分が罠に堕ちた瞬間だったと、今更になって思う。

あるうことが、自分を罠にはめた男に堕ちかけている。本気になりかけている。

本気の……恋愛。

考えるだけでもゾツとする。

何よりくだらないと今まで軽蔑してきた響きだ。

相手の言葉や態度に一喜一憂して、嫉妬して、愛憎で自分を見失う。

嫌だ。絶対に。

俺は嫌だ。

愛の亡者になんて、なりたくない。

堕ちたくないんだ。

安藤は吸殻を入れた空き缶を持って、膝に手を付きソファから立ち上がった。

ポケットに手をつっこみ二三歩あるいて、俺の隣で立ち止まってこちらを向く。

「パswードの言葉はお前の一番近くにある。言えるのはこれくらいだな。結構なヒントだぞ？」と笑った。

「へえ。謎解きみたいで面白いね。シュンに言っとくよ」

視界が黒い影で覆われ、口元に温もりが触れる。煙草の臭いが鼻

をつく。

それはチュツとわざとらしく音を立てて、すぐに離れていった。

「うちの会社はサービス残業だ。さっさと帰れよ」

部屋のドアが閉まる音。

何度目かの溜め息を吐き出し、その場にうずくまる。

夢見心地で、ヒヤリと柔らかい自分の唇に指で触れた。

いつも出歩く繁華街に着くと、夜の八時をまわっていた。

堅苦しいスーツのままだったので、ネクタイを外して襟元を開き、鞆の隅に入っていた輪ゴムで後ろ髪をくくった。まるでホストだ。

平日の夜にしては人通りが多い。半身を引きながら歩いてくる人を避けて、風俗街の路地に入る。

通い鳴れたクラブのドアを勢いよく押し開けると、向うに男が二人立っており、迷惑そうな顔をされた。恐らくカップルだろう。

男同士のカップルなんてこの辺りでは珍しくない。堂々と手を繋いで歩いたり、暗がりで抱き合ったりしている奴等もいる。自分がその一人であることもしばしばだ。

そんな所に立っているお前らが悪いと、二人を睨みつけて奥へ進む。

入り口は狭いが、中は二階建ての吹き抜けで両方の階にバーカウンターがあり、意外と広い。

二階にはいくつかテーブルと椅子があり、一階が見渡せる。

脳ミソに直接響く爆音に合わせて、暗い中で大勢の身体が揺れ、建物自体を揺すっている。

音楽とはお世辞にも呼べない、リズムだけを刻むうるさい電子音。

沢山のしゃべり声。女の高笑い。グラスや布が擦れる音。あらゆる騒音が入り乱れる暗闇を、幾何学模様の光が飛び交っている。

人混みを掻き分けて入って行き、周りを見渡すが知った顔はいない。

しばらく周囲に合わせて適当に身体を揺する。ここまで来ると、身体を揺らさずに突っ立っているほうが難しい。

少し様子を見ていたが、とりあえずつかまりそうな奴に連絡でもしようと携帯の電話帳を探る。

「今日は一人？」

知らぬ間に前にいた人影が、かがんで耳元で囁く。騒然とした中で低音がよく響く。

携帯から顔をあげてみると、さっき入り口にいた二人組みの一人だ。自分より少し年上に見えて、背が高い。

携帯を閉じて、笑顔で頷く。

「よかったら、今夜どう？」

「あいつはいいの？」と言ってはみたものの、自分の声が相手に届く自信が無かったので、壁際を指差した。

先程まで目の前の男と一緒にいたきゃしゃな男が、リズムに揺れることなく腕を組んでこちらを睨みつけている。

俺の指差す方を振り返った男は、関係ないと言うようにおどけて首を振った。

そんなはずはない。恨みを買うのは嫌だと感じたが、恋人がいたということは、そう変な奴でもないのだろう。

「君の方こそ、あの子はいいの？ さっきからずっと見てるけど」と、次は向こうが人差し指を突き出す。

何のことだろうと男の指す方を見上げると、二階の手すりからじつとこちらを見つめている男がいる。年齢は俺と同じが、少し若い

くらい。可愛らしい顔だがスーツ姿だから社会人だろう。俺と目が合うと、意味深に微笑む。

そういえば見た事がある気もする。が、最近寝る相手の入れ替わりが激しくて、いちいち覚えていない。

どうでもいいと、先程の男のように笑って首を振った。

「良かった。君いつも他の男連れてるから声かけなくてさ……」と、苦笑いする。

店を出ようという意味を込めて、男の腕に手を回した。これ以上知らない奴に睨まれるのも嬉しくない。

壁際で俺達を睨むきゃしゃな男の横を通り過ぎると、そいつは涙目になっていた。参ったなと思いつながら二階を振り返ると、スーツの男も微笑が消えて無表情のままこちらをずっと見ている。

どいつもこいつも未練がましくていけない。

だから本気になるのは嫌なんだと、足元に堕ちるピンクの幾何学模様をまたいで、店を後にした。

夢うつつ（後書き）

えっと、一応この回の後に、冒頭の第一話の内容が入る感じです。だいたい半分くらいですかね、今。

頭の中だけでの適当なプロットなので、ちゃんと第一話につなげられるか不安でしたが、何とか繋がった……ってか、こじつけた……（ - - ; ; ）

「そうなんだ」と言って、第一話を読み返してはなりません！
いろいろ矛盾点が出てきてしまいそうなので……。

基本的に一度公開した文章は読み返しません。公開前の文章も丸一日程しか手元に置かず、数えるほどしか読み直しません。アホタレ！（。 。 ）ノ ホント、文章書き失格ヤロウなんです、私。

明日からは、ちょっとずつお話が動き始めます。THE・山越え

では。ペコ

THE 本性

説明に使った書類を、トントンと長机の上で揃える。
舞野が使い終わった紙コップを片付けている。

「悪いね。手伝わせて」

今回のプレゼンを仕切ったのは自分なので、後片付けも自分の仕事だと思った。

「何言ってるんですか。こんなのは一年目の仕事です。先輩は優しい過ぎますよ」

舞野はよく働く。

一年目とはいえ、テキパキとみんなが嫌がる仕事をこなすし、二年目の俺の仕事も手伝ってくれる。

朝早く来て俺の掃除と一緒にするのは余計だが、新入社員らしく見た目も可愛く、明るい性格なので先輩受けがすこぶる良い。

「あ、これ安藤課長のだ。あの人、がさつだから、後片付けしててもすぐ分かるんだよね——。何であんなにデリカシーが無いんだろ」
毒舌なのはご愛嬌だ。

課長のそういう部分も魅力の一つだと一瞬思ったが、口に出すことは愚か、自分自身の中で囁くことにも拒否をした。

「でも、今日の先輩かつこよかったです」

顎を引いて、少し上目遣いに俺を見つめる。舞野の身長は俺と同じくらいだ。

「そ、そうか？」

「はい。雪菜先輩っていつも大人しいのに、会議の時は上の人に結構はつきり言いますよね。安藤課長を黙らせられるのは、先輩だけです」

「でもあれくらい言わないと、上には中々伝わらないからね……」。

舞野もこれからプレゼン組む時は、しっかり反対意見の予想立てて、自分の主張ぶつけた方がいいよ」

先輩らしく助言してみた。

本音を言つと、企画の仕事を頑張るのは、情報を盗んで横流ししている事に対する、せめてもの罪滅ぼしだ。

万が一捕まった時には言い訳にもならない馬鹿な考えだが、それで本来汚い行いに目を背ける弱い心を保っている。

今日の会議でも、出ない声を搾り出して自分の意見をぶつけてみた。手ごたえは……まあまあといったところか。

安藤の反論はもつともだったが、用意していた資料を使って前回の企画を引き合いに出し、何とか納得させた。もつと細かい所まで突っ込まれるかと予想していたので、あそこで安藤が押し黙ったのは意外だった。

「先輩、今から時間ありますか？ その……今度のプレゼン初めてで、先輩に相談に乗って欲しいな——なんて……」

舞野が恥ずかしそうに俯く。

時計を見ると夜の七時だ。九時までに会社を出れば、日が変わる前には充分ベッドに入れるだろう。

「うん。俺でよければ、相談に乗るよ」

「ありがとうございます！ 資料取って来ますね」と嬉しそうに舞野が部屋を出る。

窓から夜景を眺める。

夜景といっても、鏡張りのようなビルの小さな四角い灯りの中で沢山の人間が動いている、オフィス街の風景だ。

この会議室は十三階にあるので、自分がいつも働いているオフィスよりずっと見晴らしが良い。

向うからもこちらが丸見えだろう。

ブラインドを下けたところで、ドアが開いて舞野が帰って来た。紙コップを両手に持って、小脇に書類を挟んでいる。

「先輩コーヒーでよかったですよね？」と言って、机に黒い液体が入った紙コップを置いた。

舞野の隣の席に座り、置かれた書類の表紙を覗き込む。

「発表は来週の金曜で――」

説明を聞きながら、コップに手を伸ばしコーヒーを飲む。

苦い。ブラックだ。

苦手な独特の後味に舌が痺れるのを我慢して、頷きながら舞野の話聞く。

一通り解説を聞いてから、自分が気になる部分の質問をした。

悪くない内容だが、主張が弱くて分かりくい。あと一歩だ。

「――で、この補足説明は入れたほうがいいと思うよ」

ページをめくり何箇所かアドバイスをする。

舞野が急に静かになったので手元から隣に視線を移すと、ジッとこちらを見つめている。

「ん？」と顔で返事すると、気まずそうに視線を泳がした。

「雪菜先輩って甘党ですよ？ すみません。俺コーヒーに砂糖入れるの忘れてました。苦かったですよね？」

「取り替えてきます」とこちらに伸びた手を、右手で制して「大丈夫だよ」と左手で紙コップをつかむ。

舞野は申し訳なさそうに、背中を丸め「すみません」と言った。手に持ったコーヒーに口を付ける。

舞野も自分の紙コップを持ち、ゴクゴクと飲む。向こうは茶色に透き通る液体、紅茶だ。

俺も紅茶で良かったのと思いつつながら、舞野に気を使わせないようにブラックコーヒーを飲み干した。

それを見た舞野は微笑んで、また書類に向き直る。

「このグラフなんですけど……」

いくつかやり取りをして、舞野が細かくメモを取る。

「このサブタイトルは——」と指先を紙に落したところで、視界が歪む。

顔をしかめながら、サブタイトルの変更を勧める。何とか喋り終えて、そこで初めて身体がおかしいことに気が付いた。

眩暈がして、体内が沸騰するように熱い。火照る唇から吐き出す息も熱風だ。

頭がのぼせて舞野の言葉が入ってこない。

いつもの発作とは違うが、とにかく薬を取りに行こうと立ち上がった。

「舞野、ちょっと悪い。一回オフィスに——」戻ってくるよと言えないまま、身体のバランスを失う。

「先輩!？」

舞野が支えようとしてくれたが、間に合わず床に崩れた。

「痛っ……」

肩を強打して顔を歪ませる。

ゆっくりと上半身を持ち上げ、カーペット敷きの床に座って壁に持たれかかった。

手足に力が入らず、全身が重たい。

「大丈夫ですか……?」と俺の前に屈み、不安そうにこちらを伺う。オフィスに置いてある薬を舞野に取って来てもらうしかない。何とか声は出る。

「身体……動きませんか?」

「ああ。悪いんだけど……」

話終わる前に、舞野がスクリと立ち上がる。

「よかった」

今、何と言ったんだ。

ぼんやりと見上げると、意味ありげに微笑んで俺を見下ろす。

「全部飲んでから……だいたい十分くらいか。前より量を増やした
甲斐がありました」

舞野は腕時計をかざし、不可解な笑いを浮かべた。

ドアの方へ歩き、中から鍵をかける。

「まい、の……おまえ……」

俺の声を聞いて、また正面に両膝を抱えてしゃがみ込む。

「雪菜先輩。さっき忠告したでしょ？先輩は優しすぎます。そんなに可愛い顔して、警戒心が無さ過ぎますよ」

「なに……したん、だ」

「コーヒーに薬を入れたんです。前の歓迎会の時と同じ薬です。本当はあの時こうなるはずだったんですが、薬の量が少なかったのと、邪魔が入ったので失敗しちゃいました」

無邪気に笑う。

言われて、歓迎会で舞野からもらったカクテルと、さっき飲んだコーヒーの独特の後味が繋がる。

「どうして……そんなこと」

舞野が笑顔を消して、目を細める。

「先輩仕事は出来るのにホント、鈍いですね。どうしてって、決まってるでしょ？先輩を犯すためですよ」

啞然として言葉が出ない。

ガタンと頭の中でブレーカーが落ち、乱れ飛んでいた伝達信号が遮断。暗闇に堕ちる。

本当に地球は自転しているのかと疑うほど、室内が静かだ。

背筋に違和感を覚え、後頭部が痺れる。

首の後ろに冷や汗が噴出するのが分かる。

目の前に、よく知る可愛い後輩の面影は、もう無い。

『どうしてこんなに口が大きいかって？　それはね。お前を食べるためだよ』

慣れ親しんできた童話も、現実の世界で同じ状況になると、とてつもなく残酷だ。

赤ずきんの女の子も、俺のように震え上がったに違いない。

「色……白いですね」と言いながら、舞野の細い指先がゆつくりと頬に触れる。その瞬間が、先輩後輩のほどよかった距離感を強引に崩壊させられた瞬間だった。

小さな接触面が冷たい。

歓迎会の時と同じように、黒フレームの眼鏡が取り去られた。

前髪を横に撫でつけられて顔の上半分が露出し、裸眼で向き合うにはあまりにも辛い状況に、目を背ける。

「舞野、俺……男だぞ？」

「バカにしてるんですか？　知ってますよ」

「じゃあ、何で……」

笑いながら立ち上がり、長机の上に腰を下ろす。

「愚問ですね、先輩。僕が先輩と同じ種類の人間だからですよ」

両手を後ろについて俺を見下ろす童顔を、軽蔑の眼差しで見上げる。

「俺は、男なんて……好きじゃない」

舞野は冷笑しながら足を組む。

「昨日はあれからどうしたんです？ あの前の高い男と。また駅裏のラブホテルですか？ 先輩が今週に入って寝た男の数、教えてあげましょうか」

足をほどいて、上半身を乗り出す。

「昨日の男で、六人目です」

ドクンと一度跳ね上がる鼓動。

顔を硬直させる。

きつとハヤトのことだ。昨日もまた男とホテルに行ったに違いない。

毎晩ハヤトの行動を監視していたのか。こういうのをストーカーって呼ぶんだろう。

ハヤトもどうせ夜遊びするなら、この男と遊んでやればよかったのに。

投げやりな気持ちが漏れ出て、滅多にしない舌打ちをした。

「ほら！ 顔が変わった。知ってるんです、僕。毎晩お洒落して別人みたいな顔で遊び歩いてるの。」

先輩、夜の世界では結構有名ですよ？ 選り好みの激しい美人だって。みんな指くわえて遠くから見てるんですから」

ハヤトがそんな風に見られていたとは知らなかった。出来れば知りたくもなかった。

「どうして夜、声、かけないんだよ」

舞野は唇を尖らせて横を向き、浮いた足をぶらつかせる。

「声かけたら、僕の相手してくれましたか？ 先輩、年上の格好良い男が好きなんですよ？」

それも初耳だ。

刹那、安藤の顔が過ぎった。

机の上から降りて、俺の前に立つ。

「舞野……くだらない事は、やめろ」

「そうですね。確かに、くだらない……。今からそんなくだらない事をされて、泣き叫ばないように気をつけて下さい」

ネクタイをつかまれ、熱い身体を床に倒された。

仰向けの俺の上に舞野が馬乗りになる。

伸びてきた両手が首元で止まり、ネクタイを緩める。

シルシルと布が擦れる音。

忘れかけていた恐怖が染み湧き出す。

顔の下にかかる両手。

糸が切れる音。

飛ぶボタン。

笑い声。

あの時と同じだ。

入学したばかりの中学校の暗い教室。

手足が動かない分、今の方が状況は悪いかもしれない。

肌蹴けた胸元を冷たい指がなぞり、いきなりの刺激に皮膚がピクリと萎縮する。

「こんなにキスマーク付けたまま会社来て、何考えてるんですか？

……変態ですね」

蛍光灯の青白い光を逆光に、さげすむ様に俺を見下ろす。

何かを思い出したように右斜め上を見上げて、舞野がスーツのポケットを探りだした。

ジャケットから白い小さな物を取り出す。

コーヒー用のクリーム。

パッチリとした二重の前で、小さなカップに爪をかけて蓋を開けた。

「シユン先輩は甘党でしたよね？ さつき苦いコーヒー飲ませちゃったお詫びです」といって、目の高さに持つ手を更に上げて、クリームを傾ける。

「んっ……」

頬で跳ねる生温い雫に、顔をしかめて目を瞑る。

鼻腔に流れ込む、コクのある乳製品の臭い。

堕ちる雫は口元に移動し、首を伝って胸元に溜まる。

地肌を犯す微弱な刺激が全身を粟立たせ、下唇を噛んで耐えた。

「肌がピンクになってるから、白が映えてとても綺麗ですよ。先輩」
首を傾げながら、クリームが這った上を指でなぞる。
ヌルリトした感触が唇から首筋へ滑る。

白い液体の滴る自分の人差し指をかざして見つめた後、俺の口元に指を近づけた。

「舐めて」

感情の無い静かな声に、横たえた身体がすくむ。

「早く」

無表情で見下ろす後輩の顔。

怖い。

単純にただ恐怖を感じる。

瞳を閉じて出した舌先に、外気が冷たい。

「目、開けて下さい。今から僕の前で目を瞑ることは許しません」
瞼を上げて、唇に触れる指のクリームを舐め取る。
甘くともなんとも無い、不愉快なほど濃厚な液体。

「そう。ちゃんとこっち見上げて」

視線が合って、ニヤリと笑う男。

指が口内に侵入してきて、唾と微量のクリームをかき混ぜる。

「やめっ……」

舞野が身体を倒して、胸元のクリームを舐め始めた。動かない身体に力を入れ、全身が張り詰める。

舞野の柔らかい茶髪が口元にあたる。

ヒヤリと濡れた舌の感触は徐々に首元へ這い上がり、顎を経由して、下唇を子犬のようにペロペロと念入りに舐めた。

ひとしきり舐めて、満足したように身体を起こす。

「甘い……。甘党の人は肌まで甘いんですね」

離れた茶髪に少し安堵し浅い息を吐くが、俺の上から退く気配は微塵も感じられない。

「舞野、もう、こんなこと……やめるんだ」

かすれた声で訴えると、嘲笑うように目を細める。

「人をお願いする時は、命令しちゃだめです。やめて下さい、でしょ？」

残酷な幼い表情を睨みつける。

「そんなに睨んだって無駄ですよ。余計に興奮するだけですから逆効果です。」

ほらっ、ちゃんとお願ひして。声は出るでしょう？　そういう薬を選んだから、当然ですけど」

俺の前髪に指を通して、顔を固定する。

「も、もう、やめ……やめて、くださ、い」

窓際を見つめたまま、途切れ途切れに呟いた。

「嫌です。」

残念ですけど、今晩は遊びに行くの我慢して下さい。僕の相手してもらいますから」

ニコリといつも通りに明るく笑う。

その裏に渦巻く黒い本性を隠そうともしない。

両手を俺の顔の横につき、真正面から見下ろす。

「安心してください。昨日の男なんかより、ずっと先輩を満足させてみます」

口を耳元に寄せる。

恐怖で呼吸が乱れる。

カチャリと鳴るベルト。

「その涙目、いやらし過ぎます。僕の事誘ってるんですか？ そうやっていつも男を誘惑するんだ」

目の前の惨状から、逃げるように強く瞳を閉じる。

小さな水音が耳朶をなぞる。

直接脳に息を吹きかけて、言う。

「先輩の……淫乱」

THE 本性（後書き）

また微妙な……。

書くの楽しみにしていた回だったのですが（それもどうかと思うけど……）、書いてみるとイマイチ（・´ω´・）シユン。もっと色気のある文章を書きたい。何か文章が淡々としてしまいました。ただの腐れ小説になってます。もっとドキドキする内容に出来たらいいのですが……。

徐々に閲覧して下さる方が増えているのに、申し訳無い事です。

まあ数字を増やすことに欲は出さず、我慢して読んで下さる方のために細々と頑張っていけたらいいかな、なんて思います（・´・´・
、；）すみません。基本ネガティブなんです。

まあ、そう言いながら、明日も腐るんですけどね（・´<´>´）>（
（エへ

悪夢の続き（前書き）

＊性描写・暴力的な描写が含まれます。苦手な方はご遠慮ください。

悪夢の続き

カメラのシャッター音で目が覚める。

硬い絨毯の上に、横向きで倒れている。

重たい瞼を持ち上げると、暗闇で強い光が顔を照らし、眩しくて顔をしかめる。

カシャリ。

顔の前30cmで、またシャッター音が闇を刻む。

眉をひそめて目を凝らすと、顔の前でこちらを照らしているのは携帯電話のピクチャーライトだ。

「いいのが撮れました」

楽しげな若い男の声。

顔の表面が濡れていることが分かる。

唇にも雫が滴っているが、ただの水滴とは違う粘性を感じるので、舐め取る勇氣は断じて無い。

携帯画面に青白く照らされた、幼い顔に見覚えがあった。

昨日クラブの二階で俺を眺めていた男だ。

こいつだったのか。

シユンを苦しめていたのは。

ついさっきまで夢を見ていた。

それも忘れられなくなるような悪夢を。
十年も前のデジャブを。

悪夢は目が覚めても続いている。

「声出す前に気を失って良かったですね。警備員さんに気付かれなくて済んだ」

「てめえ……」

低く唸るように言うと、携帯画面から驚いたように顔を上げる。

シュンの会社はこんな奴ばかりなのか。

安藤といい、コイツといい。

人を自分の言いなりにして何が楽しいんだ。

窓はブラインドが上がっていて、一面にオフィス街の夜景が広がっている。まだまだ残業し続ける働き蟻を照らす、小さい無数の光で部屋の中は割りと明るい。

それほど広くない、シュンの会社の一室だろう。

白い壁と敷き詰められたカーペットの床、長机の周りに椅子が並び、奥にホワイトボードが置かれている。

シュンの苦痛に満ちた声が耳に残る。

ふざけやがって。

自分も散々シュンを苦しめておきながら、他の奴が同じことをすると無性に腹が立つ。

性格は合わないが、同じ身体で暮らすよしみだ。

「お前、こんなことして、後でどうなるか分かってんだろっな」
舌を巻くと、男は無表情で立ち上がる。
途端、腹を蹴り上げられて、身体が浮く。

「うっ」

呻いて身体を丸める。

腹を抱えた腕に、続けざまに二発革靴がめり込む。

「言っただでしょう？ 挑発されたら余計興奮するって。出来るだけ傷つけたくないんですよ？」

上から、悪意に満ちた加速をつけて靴底が堕ちてくる。横顔を踏みつける。

弄ぶように頭を転がしては踏みねじる。

「綺麗な顔して、身体は淫乱ですね、先輩。誰に調教されたんです？ まさか安藤課長なんて言いませんよね？」

少年のような笑い声。

そうやって人を煽るのがコイツのやり方らしい。

どこまでも頭のおかしい奴だ。

「そうだ。さっき、言う事を聞いていい子にしてたご褒美です。おもしろいもの見せてあげますよ」

退いた靴底を見上げると、男はまた携帯を覗いている。

「これ、誰かわかります？」と向けられた小さな画面には、人の顔のアップが写っている。

暗い中でぼんやりと照らされて、顔を背けて目を伏せている。その小さな顎を浅黒い大きな手がつかんで、無理やりこちらを向けている様子だ。

虚ろな顔の少女の写真。

清楚な顔の口元に白い雫が飛び散り、卑猥な印象を与えている。

「昔過ぎて覚えてませんか？」

その言葉が起爆剤となり、嫌な記憶に次々と引火する。
蘇る十年も前の記憶。

少女じゃない、少年だ。

まだ中学生の、変声期の少年。

俺でもシュンでもない、十三歳の「雪菜 隼」。

呼吸を忘れて画面に見入る。

「お前…… どうして、こんなもん……」
もうあれから十年も経っている。

「思い出してくれました？　ずっと前に友達から買ったんですよ、この写真。」

天使みたいな子ですよ——。この子が大きくなったらどんな人になるんだろうって、毎日ベッドで眺めてました。勿論、一人で変な事しながらですけど……。

だから、入社して先輩に会ったとき、やっぱり神様はいるんだと思いましたよ」

男はうつとりと微笑みながら、携帯の画面を指でなでる。

いるとすれば、神ではなく悪魔だ。

「消せよ…… そんな写真」

怒りを抑えて、低く言う。

「嫌にきまつてるでしょ。宝物なんです。それにいくら払ったと思ってるんですか、この写真手に入れるのに」と口を尖らす。

先程蹴られた時に気が付いた。シュンが起きている間には動かなかった四肢に、僅かだが力が入る。

「悪いけどな。俺はお前みたいなガキっぽい奴タイプじゃないんだよ。さつさとママのところに帰りな」

「やけに威勢がいいんですね。自分の置かれてる立場、分かっているのかな……」

予想通りまた靴底が降って来たので、両手でつかんで力任せに投げ飛ばす。

男はバランスを崩して、背中から倒れ、両手を後ろに尻餅をつく。一緒に椅子が奥にずれて、机を押す。

勢いをつけて立ち上がるが、やはりまだふらつく。壁を手で伝いながら、ドアの方へ走る。

ドアノブをつかんで、回した。と思った瞬間、何の気配もなく後ろから引つ張られる。

視界がひっくりかえって、あっという間に前向きで上半身が長机に縫い付く。

後ろ髪をつかまれ、顔面を机の上に叩きつけられる。

一度。二度。三度。

「痛つ……」

背中を押さえられ、腕を後ろに捻り上げられたまま、長机に突っ伏す。

鉄の味がする。口の中が切れたのだろう。

打ち付けた頬骨がジンジンと余韻を残す。

「歓迎会の日に言いませんでしたっけ？ 僕、合気道習ってたんで同じくらいの体格だけど先輩よりずっと力はあるんです」

余裕の声を背中から浴びる。

脇腹から腕が回りこんできて、全開のズボンから出たYシャツの裾に滑り込んだ。

細く冷たい手が腹を撫で上げる。

空いている方の手で制しようとするが、体制が体制だけに腕に力が入らない。

「やめっ……ろ」

首筋に感じた吐息をはらうように首を振ると、髪を驚つかみにされて顔を無理矢理上げさせられる。

背後から覗き込む、子供のような薄ら笑いの顔。

「そういう反抗的な先輩も好きですよ。めちゃくちゃに汚して、壊したくなる……」

「んあっ……」

耳の下を舐められ、声が漏れ出る。

「身体だけじゃなくて、声も最高ですね。さっきは聞けなかったから、次はいっぱい聞かせて下さい」

這い回る手を振り払おうと、もがいている間に、下半身が外気にさらされ、腰の後ろで布が擦れる。

「い、や……だっ……」

今から起こることを知りたくも無いのに、経験豊富な脳はたやすく正解を導き出す。

例え毎晩同じ行為に明け暮れていても、無理やりされて喜ぶ趣味は無い。

命一杯首を振って抗う。

「あぁっ……んうぁア——ッ」

身体を縦裂きにしながら押し入ってきた激痛に耐えかね、額を机に押し付けて悲鳴を上げる。

首筋から汗が一筋、喉元へ伝う。

鋭利な痛みが肉を貫き始める。

生理的な理由で涙腺が緩む。

ひずむ視界。

外の夜景が光線になり、目の前を何度も往復する。

「うつぁぁっ……あっ……」

握りこんだ両手に爪が食い込み、顔を歪ませて歯を食いしばる。

机に額を擦り付ける。

長机が重い弾性をつけ、鈍い音で軋み始めた。

「夜景、綺麗ですね。向こうからは見えるのかな……後ろから犯してるとこ」

背中からする涼しい声に殺意を覚えるが、痛みと振動にまぎれて消えていく。

粘性の低い、サラリとした水滴が太腿から内膝に伝い流れる。

恐らくその水滴は、白い肌によく映える赤。

熱を帯び始めた空気を媒体に、淡々と響く二拍子。

肌があたる音。

布が擦れる音。

ベルトの金具が揺れる高音。

自分の荒い息遣い。

苦痛の内で漏れ出る、悩ましい声。

冷たい指で大腿に触れられ、ビクリと背筋が脈打つ。

「そういえば、さっき聞き忘れました。ここに彫ってある英字のタトゥー、日本語でどういう意味なんですか？

まさか、大人しい先輩がへそピアスして、タトゥー入れてるとは思いませんでした」

耳障りな弾む声。

誰が教えるか。

遠退く意識で嘲笑う。

「うる、さい……死、ねっ……」

揺さ振られながら発する涙声。

いつのまにか頬と机の間に水の膜が張っている。

鼻筋の奥がツンとする。

「先輩。泣いちゃだめですよ」

揺れに乗じて、項を吸うなわれる。

柔らかい髪が耳に触れ、舞野の顔が回り込んでくる。

口元で溜まった涙を、ヒヤリとした舌ですくい上げる。

「そんなに泣かれたら……僕……」

女のようにきしゃやな手で、両側から腰骨を強くつかまれる。

耳元でひそめた声に、身体が悶える。

「もっと泣かしたくなっちゃいます……」

悪夢の続き（後書き）

前回・今回と痛い内容になってしまいました（´・`・;）
でもこの内容が無いと話が進まないんだ、これが。

思いついて久々に前書きに注意を入れてみましたが……今更ですよ。目次に「性描写あり」の注意も書き忘れてるし。

苦手なのに頑張って読んで下さったという方、ありがとうございませす。

次回からは本筋が進みますのでご安心を♪

あ、小説の中で十年前にカメラ付き携帯が登場していますが、もちろん十年前にそんなもんは普及しておりません。ストーリーの都合上、あったことにしちゃいました。リアリティーが無くてごめんなさいm（――）m まあ探せばもっとおかしい所がボロボロ出るので、氷山の一角だと思って許してください（-A- - #）ユルサネエ！！

先週末にブログの方を予約更新しましたので、ブログの方が二話先行になります（´・`・;）

でもちゃんと同じ内容をアップしますので、気長に読んで頂きますとあり難いです。

堕ちます……あなたに。

「八千四百円になります」

メーターを確認して運転手が振り返る。

カバンの中を探ってシユンの財布を取り出し、中を覗いてため息をつく。

「部屋から金持ってくるんで、ちよつと待っててもらっていいスカ……？」

喋ることすら億劫だ。

運転手は俺の格好を一目して、軽く頷いて前へ向き直る。

疲れた身体をタクシーから引きずり降ろすと、すぐにドアが閉まった。

いつのまにか大雨だ。夏特有のゲリラ豪雨。

こんなに降ったところで、嫌な思い出一つ流れない。

ボタンが飛び、引きちぎった様に開いた胸元を、雨が強打する。

マンションに向かおうと振り返ると、よくもまあこんなタイミングでと思う男が、傘を差してエントランスから出てくる。

前髪から顔に流れる雨をそのままに、ポケットに手をつっこみ俯いて歩き出す。

「おい。タクシー待たせとくのか？」

案の定、声をかけられた。

俺を降ろしても走り出さないタクシーを不審に思っただけらしい。

「……金、取りに」

何とか浮かんだ言葉を二言、目も合わせず小さく呟く。雨の音にかき消される。

安藤はタクシーに近付き、助手席の窓をたたく。

窓が空いて運転手と一言二言、会話を交わすと、傘を首で支えてポケットから財布を取り出す。札を一枚渡して、釣りも貰わずこちらに帰って来た。

グレーの大きな傘の背後で、タクシーが動き出す。

「今度、返すよ」と雨に呟き、また歩き出す。

安藤は俺が濡れるのを気にしてか、隣で傘をさして入り口まで付いて来た。

明るいエントランスに入り立ち止まると、眉を寄せて俺の姿を凝視する。

「何か……あつたのか」

気を使った喋り方だ。

どう見えるのだろうか。

Yシャツが破れて、顔に痣がある、びしょ濡れのボロボロなサラリーマン。

まさか童顔の同僚にレイプされたようには見えないだろう。

脇腹の鈍痛。

下半身や腕も痛い。

痛いところを挙げだせば、きりが無い。

とにかく全身痛くて、雨を含んだスーツがずっしりと重い。

「別に」と答える。さつきから二つ以上の単語を話していない。
「ハヤト、か？」

今更かと思っただが、力なく頭を縦に振った。

安藤は部屋着らしいニットのカットソーとスラックス。いつも上げている前髪を下ろしているの、若く見えた。

足元がスリッパなのは、一番近くのコンビニに煙草でも買いに行くからだろう。

「タクシー、会社からか？」

値段を見てそう思っただのか。

「うん」と適当に漏らして、エレベーターに向かう。

乗り込んで振り返った時に安藤と目が合ったが、また溜め息をついて壁にもたれかかった。

部屋に入り、電気も点けずにソファに倒れこむ。

煙草臭い布張りに顔をうずめた。

生まれて初めて、同じ身体の、か弱い青年を心配する。

ただでさえ安定剤で保っていた脆い神経が大丈夫なはずがない。

シユンの苦痛に満ちた、震える声を思い出す。

もっと早く気を失って俺に代わってれば、辛い記憶を残さずに済んだのに。そう考えてはみたものの、どちらにしても無力な自分達を思っただけで情けなくなる。

怒りとは違う、悔しさや、悲しさ。

最近俺の中で流行の、今までには無かった感情ってやつだ。

目尻が熱くなり、目の周りの布だけが体温と同じ温度に湿る。

暗闇にチャイムが響く。

このまま眠ろうと思い、放っておく。

二度目のチャイム。

目を閉じる。

三度目。

傷んだ身体から古い空気を吐き出し、玄関へ向かう。

ドアを開けると、さっき別れたばかりの部屋着の男が立っていた。「安藤さん。悪いけど、今日俺、疲れてるから——」相手できないよと言う俺を押しつけて、勝手に部屋に上がる。コンビニの袋を提げている。

「電気も点けずに何してんだ」と呆れたように言って、壁のスイッチに手をやった。

明るくなった室内で、俺の頭からつま先までを眺める。

「風邪ひくから風呂入って着替える。夕飯まだだろ？ うどんくらい作ってやるから、それ食って今日はもう寝ろ」

早口でそう言って、安藤は台所へ向かった。

あのまま眠りたかったのにと吐息を漏らすが、濡れたままでも気持ちが悪かったので、勧められた通り風呂に入ることにした。

湯船を張るのが面倒臭くて、熱いシャワーを浴びるだけにした。全身のあらゆる場所に沁みいる。

排水溝に吸い込まれる渦の中に、一筋赤い線が混じる。

Tシャツとハーフパンツをはいて廊下へ出ると出汁のいい香りがあった。シャワーでは温まらなかった身体の深い部分がじんわりと温もる。

髪を拭きながら絨毯の上に座ると、安藤が近付き、上から何か降ってきた。

テーブルの上に放られた物を見ると、平べったい紙の袋――大判サイズの湿布薬だ。

礼も言わずに、湿布薬に手を伸ばす。

引き出しから鏡を取り出しテーブルに置いて覗き込むと、思ったとおり右の頬が青ずんでいる。口の端も少し腫れている。

ハサミで湿布を半分に切って頬に貼り、脇腹と腕にも一枚ずつ貼った。

安藤は台所のカウンターに腕を組んでもたれかかり、目を細めてこちらを睨む。

「お前はいつも傷だらけだな」と言っ、コンロへ向かった。

しばらく待っていると、うどんが運ばれてきた。

幸いカレーはかかっていない。

コンビニで売っている、葱と揚げが一枚入っただけの簡単な物だが、これが格別に上手かった。

右頬の裏が切れているらしく熱い出汁が沁みたが、食欲が無いのを忘れて全て飲み干し、ふうと息を吐く。

どんな物でも、自分のために誰かが作ってくれた料理は美味しいのだと気付かされた。

「会社で何があった。そんな、上司にも言えない事なのか？」

台所からの声が聞こえない振りをして、底に残っていた短いうどんを箸でつまんで、口に入れる。

返事をしない俺に溜め息をつき、「アイス買ってきたんだ。食うか？」と言って奥へ行く。

冷凍庫からビニール袋を取り出す。

「何が好きか分からないから、リョウタが好きなのにした」と言
って、こちらにアイスを放る。

ソファアの上から拾い上げると、銀紙で包まれたミルクバーだっ
た。

腰を浮かせて、ソファアに腰かける。

甘いのが苦手なんだけどなと思いつつ、包みを外した。
クリーム色が目に優しい。

安藤は俺の隣に座り、同じミルクバーに噛り付いている。小さい
アイスなので、安藤の口では三口くらいで終わりそうだ。

噛まずに舌先だけで溶かして、少しずつねぶる。

甘い。

冷たい牛乳の甘みが、何かを塞ぎ止めていた感情を溶かす。
溶けて流れ出す。

鼻筋の奥がツンと痛んだ。

やばい。

下を向いて、静かに両足を上げる。

ソファアの上で両膝を抱き込んで、俯き顔を隠す。

閉じた瞼が熱くなる。

睫毛が潤う。

情けなくて、悔しくて、苦しい。

鼻をすすり上げると、安藤の大きな手が背中を優しくさする。

もっていたアイスが溶け、棒を伝って親指と人差し指を濡らす。

安藤が俺の手からアイスを抜き取り、テーブルの銀紙の上に置く。

そっと肩を抱き寄せられて、ニット素材の胸元に顔をうずめる。

温かい。

「明日は仕事休め。休養したほうがいい」
何もかも見透かしているような優しい深みのある声に、心がまた
トロリと形を崩す。

親指についたアイスをなめる。

甘い。

甘い。

甘い。

この人は俺にもシュンにも甘すぎる。
どこまでも、止め処なく、ただ甘い。ミルクアイスのように。
この身体を甘やかす。

甘いかすれた声と温もりで溶かされる。

凍りかけた心を溶かして、甘い甘い思いに変えようとする。

銀紙の上のミルク色の正四角柱が、少しずつ角を無くしてミルク
の溜まりに沈んでいく。

クリーム色の塊に刺さっていた木の棒が、支えを失い傾き始める。

自分の涙で変色した生地に、また頬を摺り寄せる。

広い背中に両腕を回す。

温かい掌が落ちてきて頭を撫で、前髪に指を通して濡れた髪を梳
く。

ずるい。

ただ息をするしかできなくなる。

殺伐とした荒野にたたずんでいる。

眼下に広がる黒々とした谷底から吹き上がる風で、顔が温かい。
足は半分崖からはみ出て、宙に浮いている。

ミルクバーは抗うことなく溶けて、クリームの小さな山に木の棒が斜めに引っかかっている。

それが、今にも堕ちる。

温もりの中で、ぼんやりと止まない雨音を聞いている。

「眠たいなら、このまま寝ていいぞ」

そんな掠れた言葉一つで、完全な液体に溶ける。

アイスの棒が傾く。

臉を墮とす。

宙に一步、踏み出す。

遠い雨音。

……コトリ——。

初めて、人が人に堕ちる音を聴いた。

堕ちます……あなたに。（後書き）

やっと痛い内容を抜けて落ち着きました。（。d）ホウ

一山越えたのは越えたんですが、また次の山がありまして、下る間もなく連峰に入り込みました。

「寝たら死ぬ」を合言葉に遭難しないようにがんばります

先程、第十七話を書き終えたのですが……なんと、6600文字！
！（、・・、）エー

どうしょ。どないしたらええねん。

二つに割るか、そのまま出すか。悩みましたが結局泣く泣く二話に割りました。ヤダヤダ、凹。ヤダヤダ

なので、明日はちよつと変な所で切れちゃいます。

明るい夜

『シユンか？ ハヤトだ。』

えつと……。昨日はいろいろと大変だったから、今日は仕事休め。湿布、買ってあるから使えよな。病院でもらった薬も、ちゃんと飲めよ。

あと……。お前に話さなきゃいけないことがあって……。

俺が安藤さんと付き合ってるって話、あれ……。嘘だ。俺が無理言っ
て抱いてもらっただけ。

俺、安藤さんのこと、本気で、好き、なんだ。

でも、安藤さんが好きなのは、俺じゃなくて、お前だ……。シユン。
だから、いつまでも意地張ってないで、頑張って安藤さん捕まえるよな。

それだけだ。じゃな』

電子音。

『このメッセージを消去しますか？』

女の声に返答するように、消去ボタンを押す。

金曜の朝に聞いた留守番電話のメッセージを、もう一度だけ確認して、消去した。

留守電が発した、ハヤトの無感情で暗い声。話が進むにつれて声
が小さくなり、最後の方は消えてしまいそうな呟き声だ。

衝撃的な内容だが、大した実感はなく、薬のせいかな何も頭に入っ

てこない。わかったのは湿布が買ってあることくらいだ。
言われた通り、金曜は仕事を休んだ。元々そのつもりだった。出勤できる状態じゃない。

ハヤトはこのメッセージを残して以来、遊びに出掛けていない。
毎晩、映画鑑賞をして時間を潰しているらしく、洋画のDVDが二本、毎朝テーブルに置いてある。

顔のうつ血痕は薄くなったが、腹や腕の痣はまだ目立つ。夜遊びをしなくなったのはそのせいかもしれないと思ったが、あのハヤトがそれくらい理由で出歩くのをやめるとは考えにくい。

『俺、安藤さんのこと、本気で、好き、なんだ』

消去したはずのハヤトの切なげな声が、頭の中で繰り返し流れる。
舞野の前で俺が気を失った後、次に目覚めて、最終的に部屋まで帰って来たのは、恐らくハヤトだ。身体を殴られたのも、ハヤトが起きている時だろう。

俺の生活の中で起こった最悪な事態を、ハヤトにまで引き継いでしまった。気を失ったことを後悔する。

金曜の仕事を休んで、思わぬ三連休ができたと思っていたら、あつという間に時間が過ぎて、もう日曜の午後だ。

だからといって明日から会社へ行く自信はない。

自分を犯した男と同じオフィスで働けるほど、強くはないからだ。

ずっと部屋でテレビを見ては眠り、最低限の食事だけをして、それ以外はぼんやりとして過ごした。

もう浮き上がれないかと思っていたが、病院でもらった薬のおかげで自分でも不思議なくらい精神的に落ち着いているし、よく眠れる。

同時に忘れっぽくなったのは、安定剤のせいだろう。

自分が何を悩んでいたのかを忘れる。それでも「まあいいか」と流すことが出来るのだから、かなり薬の効果があると言える。

木曜にレイプされても、週末にはもうテレビを見て笑っていられる。

前向きに次の仕事を考えたりしてみる。

ただ、現実味はない。

夕方の四時を回ったので、近くのコンビニに夕飯を買いに行った。サラダと春雨弁当を買い、家にあるのと同じ湿布が売っていたので、もう残り少ないだろうとそれも買った。

コンビニで浴衣の女性がミネラルウォーターを買っている。

そうか、今日は花火大会だ。

駅には臨時列車の運行表が貼られ、道路にも通行規制の看板があったことを思い出した。

引越して来た町で、大規模な夏祭りが年に一度に開催される事を知ったのは去年だ。

七宵川という大きな川の河川敷で盛大に行われ、花火大会もあるので、かなりの来場者だとニュースでやっていた。

去年は部屋から、太鼓や笛、花火の音を聴いていた。

にぎやかで楽しいであろう夏の明るい夜に思いを馳せながら、エントランスでエレベーターを待つ。

降りてきたエレベーターに、男の子と母親の親子が乗っていた。

扉が重たく開き、入れ違いに乗り込もうとすると、母親と手を繋いだ少年が俺の顔を見上げて「あっ」と漏らす。

足を止めてジッと俺を見つめる。

「やっぱり！ ユキナちゃんだ——！」

少年に抱きつかれ、一步踏み込んでいた箱から降りる。戸惑いながら少年の顔を覗きこんだが、見覚えは無い。

背中でエレベーターの扉が閉まる。

二重生活を送っているせいで、面識の無い人間から声をかけられることは極まれにある。

ただ例外無く、相手は自分の身体を変な視線で見る男と決まっていた。

こんな小さい子供とハヤトに面識があるのとは思えない。

「ねえ、ママ——。これがユキナちゃんだよ！」と俺の腕に絡みつく。

母親はポカンと口を開け、目を丸くして俺を見ている。

化粧は薄く清楚な雰囲気の女だ。

パーマがかった長い黒髪を耳の横でくくっている。

「あつ。すみません。ちょっと驚いちゃって……」

女が我に返って言う。

「この子がユキナちゃんユキナちゃんって言うから、私てつきり女の人だと思って。ごめんなさいね」

どうやら母親の方とは初対面らしい。

向こうは俺の正体に気づいたようだが、こっちは未だ少年との繋がりが判明しない。

「この間是一緒に遊園地を案内して下さったみたいで、ありがとうございます。ございました。もうリョウタもすごく喜んで……」

あ、ごめんなさい。私は初対面よね。

安藤の妻の京子です。あつ違う、元妻です。主人がいつもお世話になってます」

明るい笑顔が美人だと思った。

なるほど。そういうことが。

「いえ、こちらこそ。安藤課長には会社でいつもお世話になってます」と頭を下げた。

「本当にあの人の、仕事ばかりで……今日も子供との約束、平気ですっぽかすんだから」

京子が困ったように笑う。

「課長、部屋にいらっしやらないんですか？」

「そうなの。今日この子とお祭りに行く約束したみたいなのに、部屋にいらなくて。さっき携帯にかけたら、今会社だって……」

どうやら一度安藤の部屋を訪ねてから、引き返して来たところらしい。

忙しくなったのは確かだが、休日出勤までするような仕事があったらどうかと不思議に思った。

「ママ——。ユキナちゃんとお祭り行きたい」

リョウタと呼ばれた少年が、俺の腕から顔を覗かせる。

「ダメよ。せつかくのお休みなんだから。ねえ？」

本当はせつかくのお休みどころか、三連休だ。

どう断るか思案していたら「そうだわ」と京子が顔を輝かせた。

「主人の浴衣を持って来たの。きつとあの人の人よりユキナ君の方が似合うわ！」と、どこをどう間違ったのか、いつのまにか一緒に祭りに行く流れになっていた。

まあ明日から仕事に行くかも未定だし、せつかく近くで有名な祭りがあるのに行かないのは勿体無いと思っていたところだ。

安藤がいないのなら、親子の付き添いくらいしても問題はないだろう。

三人でエレベーターに乗り込み、安藤の部屋へ向かった。

リョウタと手を繋いで廊下を歩く。

「ユキナちゃん、また逮捕ごっこしよ——！」

「リョウタは逮捕ごっこ好きね——ユキナちゃんともやったの？」

「うん！僕とユキナちゃんが警察でね、パパがヤクザの組長なんだよ——！」

ハヤトは何を考えてるんだ。こんな子供にヤクザなんて言葉教えちゃ駄目だろう。

「あら、パパ逮捕されちゃうの？」

「うん。極悪組の組長だからね——。部下を脅して、心と身体を弄ぶ悪い奴なんだ！それを僕とユキナちゃんが『やられなくても、やりかえす』の精神で逮捕するんだよ！ねっ？」

ね？と言われても困る。無邪気な笑顔でそんな事を言うリョウタが、少し怖くなってきた。子供は案外残酷だ。

京子はいつもの事、とでもいうように笑っている。

「ごめんなさいね。この子ユキナ君のこと大好きで。ユキナちゃん美人で可愛いんだよって言うもんだから、主人の新しい彼女だと思いい込んでしまった」

京子はリョウタに聞かれないように、小声で囁き苦笑いした。

苗字を女の名前に間違われる事はよくあるが、内容が内容だけに顔が熱くなる。

初めて入った安藤の部屋は、俺の部屋とは真反対の間取りになっていた。

煙草臭いのが難だが、室内はこぎつぱりとして、台所も綺麗に片付いていた。京子が片付けたのだろう。

本棚に入りきらない数冊の本がテレビの横に積み上げられている。

京子は慣れた手つきで、リョウタに浴衣を着せた後、俺にも浴衣を着せてくれた。

少し大きいが、濃紺に細い縞が入ったシンプルな柄だ。「髪、鬱陶しいでしょ？」と言って、後ろ髪をゴムでくくってくれた。眼鏡も外す。

この浴衣を着た安藤を想像して、鏡を見ながら吐息を漏らす。

祭りが始まるまで、浴衣が着崩れないように気を付けながらリョウタと逮捕ごっこをした。

浴衣の袂が震える。携帯の着信だ。

嫌な予感がする。

袂から携帯を取り出し、表示を見た。

「着信 極悪ヤクザ」

やっぱりだ。

怖い。

昨日の夜にも同じ着信があり、ベッドの中で震えた。

こんな着信名を登録した覚えは無いので、ハヤトの仕業だ。

どんな奴なんだ、極悪ヤクザって。それはまあ、極悪なヤクザなのだろうが……。

まさかハヤトがヤクザと付き合いがあるとも思えない。

何となく相手を予想出来ないこともないが、本当に相手が極悪なヤクザだった時のリスクが大き過ぎるので、電源を落して携帯を袂に直した。

寝室から京子が出てきた。

白地に金魚が泳ぐ浴衣を着て髪をアップにし、うちわを扇いでいる。

清楚な黒髪はやまとなでしこには、恐ろしいほど浴衣がよく似合う。

一瞬見惚れた。

そりや安藤が結婚しようと思った女性だもんな。

何故かズキリと脇腹の内出血がうずいた。

リョウタの右手を俺が繋いで、反対の左手を京子が繋ぐ。まるで三人家族だ。

小さな手を引きながら、人混みを掻き分け歩く。

すっかり日は暮れ、両側に並ぶ出店の間の通りを沢山の人が行きかっている。

浴衣のカップル。子供連れの夫婦。笑いながら駆けていく少年達。通りの奥の広場から太鼓や笛の音が聞こえる。盆踊りが始まっているようだ。まだ盆踊りには時期が早い、夏祭りには欠かせないのだろう。

「ママ。林檎飴食べる——」とリョウタが言ったので、少し歩いた所で見つけた林檎飴の出店へ並ぶ。

「あれ！ 姉さんお久し振りです」と飴売りの若い男が立ち上がった。

スキンヘッドにアロハシャツとサングラス。どう見てもその筋の者に見える。シャツから出た太い二の腕に、鮮やかな錦絵が覗いているのが決定的だ。

特に驚く気配もなく、京子は「あら、ジュンちゃん久し振り」と軽く返した。

「マサトの旦那はお元気で？」

「たぶんね。しばらく顔見てないから知らないわ」とサラリと流す着物の女が、先程までの清純な印象を変えていく。

「こちらは？ リョウタ坊の新しいパパですかい？」

男はサングラスを外し、笑顔のままなのに鋭い眼差しで俺を品定めする。

「そうなの。若くて可愛いでしょ」と京子が笑いながら俺の腕に手を回した。

どうか冗談が通じていますようにと願いながら、林檎飴を二本買った。普通の林檎飴はリョウタには大きいので、小さな姫林檎の棒飴を選んだ。

「京子さんのお連れから金はもらえませんか」と、男は出した千円札を両手で押し返す。

男との関係を聞くに聞けないまま、出店から離れた。

その後出店をはしごして、金魚すくいとヨーヨー釣り、輪投げして、もうすぐ花火が始まるというので、よく見える場所を探しに花火会場へ向かった。

突然リヨウタが立ち止まったので、手を繋いでいた俺も立ち止まる。

リヨウタの顔を振り返ると、小さな瞳は人混みのずっと先を見つめていた。

ぱつと表情が輝き「パパー！」と手を離して走り出した。

明るい夜（後書き）

昨日言っていた、長くて二話に割った話の前半です。

長くても気になりませんという、嬉しいコメントをブログの方で頂いたところなのですが、今週はちよつと家を空ける予定もありますので、時間稼ぎに割っちゃいます。

変な場面で終わってごめんなさい。

リアルではもう秋ですが……最近涼しくなってきましたね ε - d

（ - - 、 ）ファイ

夏真っ盛りに考えた話なので季節はずれです（o、エ、o）ゞエへ
明日も夏祭りのお話でございます。

姫林檎の憂鬱

「パパ——！」

向こうからYシャツ姿の安藤が、煙草を吸いながら歩いてくる。スーツのジャケットを腕にかけ、抱きつくリョウタの頭に手をやる。やはり会社に行っていたのは本当らしい。

「遅かったわね」と京子がニヤリと目を細めた。

最初会った時から、ずいぶんとこの女のイメージは変わった。清純そうな第一印象は少しずつ変化をとげ、自分の考えを持った芯の強い女性に変身し始めている。人にはいろんな面があつて、これも京子の魅力の一つなのだと思った。安藤はそんな京子に惹かれたのだ。

「祭りに行くなら行くで、電話くらい寄せ」と機嫌悪そうに安藤が言った。

「ちゃんとメールしたでしょ？ ユキナ君お借りしますって」

「どこに行くか書いてなかったぞ」

安藤の目がジロリとこちらに向いた。

「悪かったな、付き合せて」

怒られることを覚悟して強張っていた身体が緩まる。

体調不良で仕事を休んでおきながら、祭りで人の浴衣を着ていたら当然怒声が飛んでくるだろうと思っていたが、逆に謝られてしまった。

「いえ。あの……、お仕事お疲れ様です。浴衣、お借りしてます」

「ああ。よく似合うよ」

煙草を吸いつけながら、無表情で俺を上から下まで眺めた。

安藤はお世辞を言うタイプではない。きっと本当に似合っているのだろう。顔面に血が湧き上がるのを感じる。

「体調は、もういいのか。心配して電話したんだぞ？ 何で出ない

んだ」

やっぱり。

極悪ヤクザの着信名は安藤だった。

「す、すみません。その……ヤクザかと……」

いたって真面目に答えたつもりが、ただでさえ不機嫌そうだった顔を、さらに怪訝に歪ませる。

「お前……ハヤトか？」意

「い、いえ。シュンです。ご、ごめんなさい」

花火会場へ着くと、すぐに最初の大輪が夜空に咲いて、歓声があがった。

眺めが良い場所を探す間もなく、その場で足を止めて夜空を見上げる。

「パパー、かたぐるま——！」とリヨウタが甘え、安藤はリヨウタを持ち上げる。

身体に響く爆発音とその後パラパラと散る余韻。

息子を肩車した父親と、浴衣の母親。

自分の居場所を見失い、いくらか身を引いて三人の後方から空を眺める。

咲いては儚く散っていく火の粉。それを見ている安藤の横顔を、遠くから見ている。

一瞬照らされはまた暗くなる安藤の顔越しに消えていく火花が、切なく寂しいと感じた。

きつと毎年こうして家族で来ているのだろう。

離婚しても、よりを戻す夫婦は沢山いる。

目の前にいるのは、会社の上司と、その家族。幸せそうな普通の家庭。そこに俺が入る余地は無い事は、分かっている。

花火が終わって早々に河川敷から道路に上がり、京子とリヨウタ

に手を振った。大きな国道に出てタクシーを拾うと言う。

花火の終盤からパラつき出した雨が、本格的に降り始めたのだ。ゲリラ豪雨に襲われた祭り会場はざわめき立ち、沢山の足が砂埃と一緒にぬかるむ泥を跳ね上げて逃げ回る。

「やばいな」と呟き、安藤が俺の手を取って走り出す。

手が触れた途端、身体に電流が走り抵抗できなくなり、素直に大きな背中の上に小走りで付いて行く。浴衣だと大股では走れない。

マンションまでは徒歩で二十分程かかる。今から走っても着いた頃にはちょうど雨が止んでいるだろう。

少し走って、道路沿いの雑木林に駆け込んだ。立派な大木に囲まれて、身体を打つ雨は少し弱まる。

雨霽の中を奥へ進むと、小さな祠がある。ただの雑木林では無く、社の境内だったのだ。祠から道路の方へ伸びる細い石畳は参道だろう。それに沿って祭りの提灯が下げられ、申し訳程度に雨の林を照らしている。

祭り会場から少し入っただけなのに、人の姿は見当たらない。駅とは反対方向で元々人通りが少ない辺りだ。

手を引かれて祠の前を通り過ぎると、朱が剥げかかった格子の間から、片手を上げた白い陶器の狐がこちらを覗いている。稲荷神社だ。酷い雨脚の中で、ここ一画だけ聖域のように空間がシンと閑静を保っている。

社は小さく、雨を避けれる軒下は無かった。

安藤は辺りを見回して、林の奥へ進む。

顔を大粒の水滴が流れ浴衣の襟元に染み込んでいく。下駄を履いた素足は、泥水に浸かったようになっていく。

それでももつかんだ手のせいで、身体は冷えるどころか熱くなっていく。

参道が途切れた裏手に、木造の小屋があつた。安藤が引き戸に手をかけると、ガラガラと音をたてて、すんなり開いた。

埃くさい。会社の資料室を思い出す。

室内は、遠くの街頭と提灯の光でぼんやりと明るい。

小さな納屋だが、靴を脱ぐ場所があり、一段上がってちゃんとした板の間がある。いつもは祭りに使う道具を保管している物置なのだろう。祭りがある今晚は中の物が出払っていて、殆んど何も置いてない。

部屋の隅に数枚重ねられた大きな座布団。壁には色あせたカレンダーがかかっている。一番奥の隅で使われなくなった小さな神輿が布をかぶってひっそりとうずくまっており、その手前に何に使うのか分からない木の道具や丸太が数本並んでいた。

戸口で手を離して、上がり框かまちに腰をかけて下駄を脱ごうと屈むと、安藤が俺の足元にしゃがんだ。泥まみれの俺の下駄を脱がせて、雨で濡らしたハンカチで丁寧に足を拭いてくれた。泥土が取れた自分の足は血管が透き通って見えるほど青白い。

「す、すみません」

子供のように扱われて恥ずかしくなり、両足を曲げて框に上げた。手に持っている物が小さな林檎飴一つだというのも、なおさら子供っぽくて恥ずかしい。火照った顔を俯ける。

横座りのまま身体を曲げて、掃除道具が立てかけられた隣に下駄をそろえて置き、板の間に上がった。

奥にあるガラス窓を開けてみると、縦格子の向こうに、黒々とした深い林が広がっている。林の奥から強い雨音だけが不気味に響く。

雫が滴る前髪を指でぬぐって、雨が染み込んだ袂から財布と携帯を取り出す。どちらもしっかり濡れている。携帯に電源を入れてみると、いつも通り画面が表示されて壊れてはいなかった。

ガラス戸を閉めて、窓際に財布と携帯を干した。

「少し待てば止むだろ」と安藤も板の間に上がってきた。

「ええ」と言つて林檎飴にかかつていたビニールを外す。ずっと緊張しっぱなしで、身体が糖分を欲している。

そつと顔を近づけてなめると、甘い。

ほんのり香ばしい、べつ甲飴の甘さ。

何年ぶりだろう。

割り箸に刺さった赤。それを覆う、べつ甲色の薄い膜。オレンジとも赤とも言えない透明感のある艶めいた色が、子供の頃から好きだった。縁日の時に出店の前を歩くと、この色がちょうど目の高さにくつも並んでいたのを思い出す。

身体がほぐれて、表情が勝手に緩んだ。

背中に気配を感じて振り返ろうとしたら、後ろから腕が伸びてきて抱き締められた。

この前抱き締められたのは、確か会社のトイレの個室だ。

背中に感じる厚い胸板に寄りかかり、飴の効力で緩まった身体を預ける。

「身体、冷えてるな」と太い二の腕にギュツと力がこもり、少し後ろに向けた頭に安藤の頬が擦り寄る。

「浴衣クリーニングに出して、返しますね」

斜め上を見上げて、静かに言う。

「また体調崩さないか、心配だ」

そつといえ、俺は体調不良で仕事を休んでいたのだ。

嘘とは言えないが、病んでいるのは肉体ではなく精神だ。自分でも治る見込みはあまり無いように思う。

舞野との事が頭をよぎった。

「課長……。俺、会社辞めようと思ってます」

少し間があった。

強い雨音が、静かな空間を切り取る。

「どうしてだ。……俺の、せいかな？」

「それは……。それは、違います。絶対に」

「じゃあ、何故だ」

「それは……」

言えなかった。安藤には知られたくない。

無言の室内が重く感じ、林檎飴をまた舐める。

薄い飴の膜が溶けてなくなり、林檎の皮が露出した。前歯を突き立てて、ほんの少しかじると、口内いっぱいには姫林檎の酸味が広がった。

甘酸っぱい。

「上手いか？」と顔のすぐ横で低い声がする。

「はい。食べます？」と聞くと「ああ」と返事があったので、持った割り箸の柄を肩の方へ向けた。

安藤の顔が回り込んできたと思ったら、姫林檎を素通りして俺の唇を塞ぐ。

唇にべと付いていた飴を、分厚く熱い舌が溶かして舐め取っていく。

口の中に残る甘味までを欲するかのように、唇の隙間を舌がなぞる。

唇を開ける勇気が無いまま、瞼を墮とした。

身体の内側で何かにピキリと一筋、ひびが入った。

「甘いな」という言葉に、童顔の後輩の顔を一瞬思い出す。

でもあの時とは比較できないくらい、身体が安心しきって解^{ほど}けている。

濡れた身体を後ろから抱き締められて、目を瞑ったまま、止まない雨音を聞いている。

「シユン。話がある……」

自分の名前を呼ばれて、目を開けた。

「俺は……本当は、お前に触れる資格は無い。ハヤトもお前も、精神的に狂ったのは俺のせいだ。そうだろ？」

何も答えられなかった。

そうじゃないと言えない。

安藤と出会わなければ、俺はリストカットなんてしなかったし、病院へも行かずに済んだ。

初めての体験を沢山して、初めての感情を沢山感じた。

ある意味安定していた精神のバランスが崩れ、それは今やハヤトにまで及んでいる。

雪菜 隼を一つの身体として考えた時、プラスかマイナスで言う
と、今は確実にマイナスに傾いている。

「俺はお前の身も心も弄んだ、最悪な男だ。それが分かっていて、
まだこうやって未練たらしく触れている……」

耳元にかかる熱い息に、瞳を伏せる。

「課長……。俺は……、俺も本当は、課長に触れてもらえるほど綺麗じゃありません。穢れた身体です」

「それは違う。お前もハヤトも綺麗だ。どれだけ汚れても、お前達は美しい。俺の汚い手で、触れるべきじゃない」

いつも余裕があつて落ち着いた上司の、切羽詰った辛そうな声を初めて聞いた。

湿った吐息を吐くと、その分だけ薄い飴細工のような心の膜が乾き、パリパリとひび割れていく。

「一度だけ、俺に抱かれて、くれないか。……馬鹿な頼みなのは分かってる。でも、それで一時の気の迷いだったと諦めがつく。お前にもハヤトにも今後一切近付かない」

一時の気の迷い、か。
何て残酷な人なんだろう。

「どうして。ハヤトじゃなくて、俺、なんですか……」

ずっとこのままの不安定な関係が続くわけがない。俺もハヤトも安藤も。

俺が崩れば、ハヤトも一緒に崩れる。

きっと、今が引き際なのだ。

「好きだ……シユン……」

どうして、どうしてこんな事になったのだろう。

殺伐とした荒野にたたずむ自分を見ていた。

足元が半分、大きな黒い口をぽっかり開けた谷底にはみ出して
いる。

浅く息を吸い込む。

向うの崖に立っていたはずのハヤトの姿は、もう無い。

「課長……あなたは。……いけない人です。ハヤトの気持ちを知
つてて、そんな事……」

胸元に回された腕を、指で触れる。

姫林檎の酸っぱい果汁が、飴の表面の曲線をなぞって、割り箸を
伝い親指を濡らす。

「本当に……それで手を引いてくれますか？」

「約束する」

目を瞑る。

全身から力が抜ける。

だらんと堕ちた手から、林檎飴がすり抜ける。

ハヤト。ごめん。

宙に足を踏み出す。

遠退く雨音。

……コトリ——。

姫林檎の憂鬱（後書き）

読んで頂きありがとうございます♪

こんな長い話を前回分と合わせて出そうとしておりました。自分が未恐ろしい。コワ （；。D（）！！

林檎飴をちらつと調べていると、関西地方特有とありました。ほんまでしょうか！？

関東地区では杏飴だそうな。エッ（。D≡。D；）マヂ？

どう説明すればいいのやら……恐らく杏飴の林檎版です。林檎に割り箸を突き刺して、その上からべっ甲飴をかけた棒飴です。どう工夫しても手と口がベトベトになります。最近はいさ姫林檎や苺も林檎飴のように割り箸に刺して飴をかけて出店に並んでいます。

「林檎飴が分かりません」だった方、申し訳ありません。

月（前書き）

* B L要素の性描写が含まれますので、苦手な方・十五歳未満の方・義務教育中の方はご遠慮ください。

月

雨夜の納屋で、罪深い二つの身体が揺れている。

途切れない雨音に、甘酸っぱい声を含んだ短い吐息が吸い込まれていく。

初めて聞く自分の高い声が嫌で仕方ない。

我慢しようと口をつぐみ目の前の濡れたYシャツに顔を埋めるが、その度に身体が高く浮き上がり、姫林檎の香りがする切ない声を安藤の襟元に染み込ませる。

湿った室内の空気を更に熱っぽく湿らせ、重力に落ちる雨で圧縮された空間を重たく揺らす。

全てがぐるぐると、もの凄いスピードで回っている。

高熱を出したときのように、頭はのぼせて眠りの浅瀬を彷徨っているのに、身体は嫌というくらい覚醒している。

広い背中に回した両腕に力を入れてしがみつき、途切れそうな意識を必死に繋ぎとめる。手を離せば、宇宙で命綱を離すように、二度と戻ってこれないと感じる。

怖い。

自分の身体がおかしい。

肌が燃える。

刺激に酔い、濡れる。

痛みを我慢していたはずの身体が、今は何か別のものに耐えている。

未体験の鋭い感覚が下から上に一定間隔で突き抜けていく。
その感覚を逃がすように、何度も首を横に振って、呼吸に意識を
集中させる。

強く閉じた瞼が湿る。

「……痛いかな？」

耳元で囁かれると、頭の後ろがジンと痺れる。

「……痛くはない、です……。でも、身体、が、……」

太い首筋に顔を擦りつけながら、何とか言葉を繋ぐ。口を開くと
下唇の裏に溜まった涎が滴りそうになる。

言葉を吐き切る前に、口の中に熱い舌が滑り込んできた。

戸惑いながらも安藤の後ろ髪に手をやって、身体を寄せて深く繋
がる。

あれからどのくらい経ったのだろう。

まだ雨は止まない。

「分かりました。……じゃあ……好きに、して、ください」

そう言って、濡れた肌を男に捧げた。

床に仰向けにされ瞼を伏せると、台座の上に横たわった生贄のよ
うに身体が沈静する。頭を空っぽにして、ただの新鮮な肉になる。

両手を俺の顔の横につき、血と肉に飢えた優しい獣が正面からこ
ちらを見下ろす。

「シユン……」

名前を呼ばれると、血がさざ波立つ。

唇、顎、首、鎖骨。触れるだけの温もりが、少しずつ熱をもって
深くなる。肌に種火がともっていく。

浴衣の襟が広く肌蹴る。

合わさった裾の中へ大きな手が忍び入り、雨でしっとりと柔らか

くなつた冷たい太腿の内側を硬い指がなぞる。

首筋を強く吸われて、吐息が漏れた。

性急な手付きで外されるネクタイ。布同士が擦れる音。

Yシャツのボタンが外れて、遅しく張った胸元が露出した。

手を伸ばして指で触れると、熱い。その手を取られ、床に縫い付けられる。

雨が降っている。

背中を支えている薄い板の羅列が軋み始める。

強い雨音に打たれて、しなる身体。

降り止まない雨と唇。

絡む指。

その指は赤い糸で繋がってはいない。

「シユン……好き、だ……」

安藤は俺をとてども気遣ってくれた。

ゆっくりと身体が繋がった後、一度半円を描くように身体が浮いた。

背中を痛く押し返していた木の板が遠退き、代わりに安藤の肌が近づく。

自分の重みが繋がりを深め、身体に入った体積の分だけの熱い息を吐き出す。

「シユン……」

何度も名前を優しく呼ばれ、頬に、唇に、目元に、口付けが堕ちる。

まだ雨は降り続けている。

「好きだ……」

切なげな声が直接耳の奥に吹き込まれる。

「俺も……俺も、です」

小さく呟いた言葉は、滝のように降り注ぐ水流の音に吸い込まれた。

堕ちた場所が地獄であっても、そこが苦しいだけの闇とは限らない。

ぼんやりと照らされる。

快楽を覚え込まされ、忘れられない身体にさせられる。

熱い肌の感触。

自分の名を呼ぶ、かすれた声。

その全てが今夜限りだと分かっている、堕ちてゆく。

地獄は明るい、そして優しい。

一生飢えた身体を持て余せと甘く囁き、洗脳する。

きつと後悔する。

一夜の過ちを忘れることが出来なくなる。

「あんっ……んん……課長っ……」好きですと、どうしても言葉が繋がらない。

Yシャツの襟元に手をかけて汗を弾く張った地肌に頬を摺り寄せると、全身を包む温もりが強くなり、痛いくらいに抱き寄せられる。

もつと直接肌に触れたい。

相手の腕に通った白いシャツや、自分の乱れた浴衣がもどかしい。浴衣の襟は右肘までずり落ちて、反対側は辛うじて左肩に引っ掛

かっている

俺はこの人が好きで、好きで、どうしようもなかったんだ。

自分が自分ではなくなると恐れていた言葉を、いとも容易く心で
呟く。

ただ口には出さない。出せない。

虚ろな意識の中で、唇に触れる熱い肌を貪る。

口元を、はしたなく濡らしながら首筋に甘噛みを繰り返す。

無造作に浴衣の裾から放り出した足の指先に、林檎飴が触れる。

揺さぶられる度に、足の親指が飴の薄膜にピトリとくつつく。

身体が熱い分だけ、暗い中でキラキラと艶のある不完全な欠けた
球体が、ひんやりと冷たく感じた。

足を動かそうとするが力は微塵も入らず、繋がっている身体の中
心から下は感覚がない。

「アッ…… あっ……」

同じ律動の繰り返しのはずが、姿勢が動いて少し角度が変わるだ
けで、背筋に電流が流れたように身体が反応する。

「だッ、だめ……で、す……ああ、ん——っ……やあ……」

自分でも吐き気がするような甘えた声をだして、背中を仰け反ら
せる。膝がビクリと反射的に波打って、足の指が反り返る。

蹴られた姫林檎が、ころろと軽く弾んで転がっていく。

感電し続ける身体は、あまりの刺激に耐えかねて小刻みに振るえ、
内腿は痙攣している。

汗ばむ肌に顔を押し付け、涎が頬に粘膜を張る。

「ん……」

しばらくすると口元を深く繋げたまま、また後ろに身体を倒された。

上から覆いかぶさる肌の息遣いが荒い。

急に強まる雨音と共に、揺れが激しくなる。

「んあやあつ！ …… あつ …… あアツ …… ああ …… ん、っ ……！」
愛しい背中に爪を立てる。

「シュン。今日のこと、忘れないで、いて、くれるか」

辛そうな声が、唇との間隔零センチで響く。

視界が歪む。

表情は近すぎて読み取れない。

頷くように瞳を堕とす。

熱い流れがこめかみに伝う。

頬が焦げるようにくすぶる。

身体の激動に、反応に、意識が付いていかず、遠く取り残される。

雨音が弱まる。

天井がにじむ。

堕ちてゆく。

暗闇の奥に、底が見える。

やけに静かだと気付いて瞼を上げると、安藤が片肘を立てて横になり、こちらをじっと見つめている。この人も、こんなに寂しそうな表情をするんだと思った。

視線が合うと、何も言わずに優しく微笑む。

大きな手が伸びてきて、濡れた前髪を梳き、頬を撫でる。

いつの間にか、部屋の隅に置かれていた大きな座布団を枕代わり

にしている。

安藤の首元に汗が一筋光り、Ｙシャツの襟の中に伝う。

袂にタオルハンカチを入れていたのを思い出して、乱れた浴衣の袂を探った。

四つ折りの小さなタオルを取り出し、太い首にあてると、安藤は俺の手からタオルを取って膝に手を付いて立ち上がる。服装は整っている。後姿で小さな金属音を鳴らしベルトをしめて、戸口へ下り、納屋を出て裏の方へ回って行った。

いつの間にか雨は止んでいる。

帰って来た安藤は、裏の水道で濡らしたタオルで丁寧に俺の全身を拭いてくれた。

その間もずっと目の前の男の顔を眺めている。

名残惜しい唇に触れようと腕を上げると、手を取り優しく甲に口付けされる。その繰り返しだ。

携帯が鳴る。

窓際に目をやるが、俺の携帯は光っていない。

安藤は立ち上がって、丸太に掛けていたジャケットのポケットから携帯を取り出した。

何を馬鹿なことをしているんだと、携帯はせわしく光って、怒り震えている。

画面を覗いて眉を寄せたところを見ると、どうやら仕事の電話らしい。

安藤は溜め息をついて携帯を閉じた。

「出ないんですか？」

声がかすれている。

「ちょっとややこしい相手だ」

「俺は、構いませんよ」と言うと、もう一度鳴り続ける携帯を開いた。

溜め息について靴を履き、引き戸を開ける。
携帯が、安藤を現実の世界に連れて帰った。

起き上がり、肌蹴た浴衣を直す。

軋む身体を持ち上げ窓際に寄り、乾いた携帯と財布を袂に入れた。

足を下ろして、揃えてあった下駄の鼻緒に指を通す。

静かに引き戸を開けると、裏の方から安藤の機嫌悪そうな低い声が聞こえた。

一歩踏み出す。

雨はあがっているが、地面はまだぬかるんでいて大きな水溜りが地面をまだら模様になっている。

微かに煙草の匂いがする。きっと携帯で話しながら、安藤が吸っているのだろう。

その煙草を吸い終わるまでには、林を抜けれるだろう。

「さようなら」

煙草の匂いに振り返り、呟く。

裾を手で持ち上げ、これ以上泥が付かないように気をつけながら静かに歩き出した。

木肌に手をあてがい、遠くに覗く街頭の光を頼りにして滑る落ち葉を踏みしめる。

足元に波紋を揺らせて月が堕ちていた。

見上げると、空の月もまた揺れて見える。

高く浮かぶ小さな月は夜も照らさず、星も無い。黒墨の空がにじ

む。

水溜りに視線を落とすと、水面の向こうに人がいる。

月夜の下で、初めてハヤトの泣き顔を見た。

月（後書き）

これで一山越えた……つもり（´・・・；）

「林檎飴分かりますよ♪」と名古屋在住の読者様から拍手コメントきました。

どうやら名古屋辺りまでは林檎飴が通じるらしいです♪さあ、そのまま富士山を越えられるのか!?

明日もブログの方で予約更新を行いますので、このままではブログが三話先行になってしまいます。さすがにそれは申し訳無いので今日の夕方五時頃に、一話更新させて頂きます。○ペコ

一日に二話も出しちゃってすみません。

急に話が進みすぎてしんどい!という方は、週末にでもゆっくり読んで頂ければと思いますm(_____)m
では。

ラミパス、ラミパス

次の日から、全てが変わった。

朝の眩しい光。

自然光で明るい室内。

満員の通勤電車。

一方向へ歩く人の群れ。

新しく生まれ変わったかのように、世界が違って見える。

美容院へ寄り、伸びていた髪を切った。

外気に触れた顔の表面が薄ら寒い。

眼鏡を外し、初めて自分の手でピアスを身体に通した。ハヤトの引き出しからシンプルなデザインのピアスを選んで、唇の下に二つ、両方の耳に一つずつ付け、それ以外のピアスホールは透明の樹脂ピアスで埋めた。

ネクタイは葬式のように暗い色が多かったので、その中から出るだけ明るい色を選ぶ。

以前の自分が信じられないくらい、周りの視線が気にならなくなった。

会社のエレベーターを降りると、振り返った社員から順に足を止め、沢山の目がこちらを見て、そのうち小声で何か話し出す。

騒然とした廊下を抜けてオフィスのドアを開けると、室内の動きが止まって、またいくつもの瞳に見入られる。その中には、安藤の瞳も含まれていた。啞然とした顔のまま、スーツを脱ごうとしていた手が止まっている。

「雪菜君、髪、切ったんだ——」

席につくと、同じ課の女子社員が寄って来た。

「はい、鬱陶しかったんで。似合います？」と笑いかけると、「うん。すごく」と戸惑いながら頬を赤く染める。

昼食を一緒にどうかと誘われたので、喜んでと答え、パソコンに向き直る。

パソコンの画面越しに、向うの方から童顔の後輩が眉をひそめてこっちを覗いていた。目が合うと、驚いた顔をしてわざとらしく視線を外し、モニターの向うに引っ込んでいった。

そうやって始まった一週間が、気が付けばもうすぐ週末を迎えようとしている。

安藤とは最低限の仕事の会話しか交わさない。

舞野とは会話は愚か視線も合わさないようにした。何度か「先輩、あのぉ……」と小さく呼びかけられたが、勿論無視して立ち去った。

思うようにはかどらない仕事を睨みながら、椅子にもたれかかり両手を頭の上で組んで、溜め息をつく。

十五分ほど静止したままのパソコンの画面が、触ってもいないのに勝手に変わった。

中央に小さいウィンドウが表示されて、封筒が飛んでいるアニメーションが流れる。

『メール受信』

社内メールだ。会議の日程や、上からの通達等にはこれを使う。気晴らしにメールボックスをチェックする事にした。

前までは朝早く出勤した時間を利用してチェックしていたが、今週に入ってから就業時間二十分前に会社に来ている。

受信箱を開けると、十二件もメールがたまっていた。

一週間前のメールから順に目を通していく。

会議の場所変更、節電の呼びかけ、特に大した内容は無さそうだと思っていると、次のメールの題名が『ログインパスワード変更の勧告』だった。

全社員に送信されているメールで、他人のログインパスワードを勝手に使用して個人情報のデータベースにアクセスした形跡が、先週だけで二件も発見されたとあり、速やかに各社員にパスワードの変更を促す内容だ。

一瞬自分の所業がばれたかと思ったが、よく考えてみれば安藤のパスが変更されて情報を家に持ち帰れなくなっってから一週間ほど経つから、このメール内容とは時期が一致しない。第一、安藤のパスでログインしても、個人情報のデータベースにはアクセス出来ない。ホストコンピュータにアクセスできるのは、特定のパソコンからだけだ。それにもまたパスワードがある。俺の企画課は情報システム課と合わせて経営企画部がまとめていて、顧客リストなどのデータベースにアクセス出来るのは営業課が入るIT事業部の一部の幹部クラスだけだ。

俺以外にも情報を盗み見ようとしている奴がいるらしい。最近じや産業スパイなんて珍しくもないのだ。

うちの会社くらい大きくなると、裏献金のルートや表には出せない顧客名簿・空発注だの、怪しい噂はいくらでもある。重要なデータの中に万が一その噂に属する証拠が紛れていたりしたら、それはライバル企業からしたら、目障りな競争相手を消せるネタであり、この上なく嬉しい贈り物なのだ。

企画課の自分が顧客リストなんて大それた物を盗む気は無かったが、手に入ったらどれだけの価値がつくだろうと夢見がちに肘をつく。

最後のメールは、ついさっき受信したメールだ。

送信元を確認して目を見開く。

『舞野悠太』

俺個人宛に送信されている。

席にいたのだろつかと斜め向いのデスクに神経を向けると、モニターの向こうからキーボードを叩く音がせわしなく聞こえている。連日話しかけてくる舞野を完全に無視しておきながら、近くにいるんだから直接話せよと理不尽なことを思う。

内容を見ずに消去しようかと考えたが、万が一にも仕事のメールだと困るので仕方なくメールを開けた。

『今夜、夕飯一緒にどうですか？ 話したいことがあります』

何を考えてんだ。

うちの会社の新人教育に不安を感じ、企業としての行く末が心配になった。

そもそも社内メールは私用で使ってはいけない。

それ以前に、自分がレイプした相手を夕食に誘うってのはどういう神経だ。呆れてものが言えない。

一言『消える』とキーボードを打って、送信ボタンを押したら、一分もしないうちに斜め向いのキーボードを打つ手が止まった。パソコンの隙間から細い手が覗き、マウスをクリックするのが見える。しばらくの間、先程までよりも緩やかなスピードでキーボードを叩く音がして、また舞野の手がマウスを押した。

予想通り、すぐに『メール受信』と表示される。送信元は勿論『舞野悠太』。

『写真ばらまかれなくなったら来て下さい。六時半にイルマールレで待ってます。』

完全な脅しだ。

イルマールレは、会社から十分程の場所にある「ラ・イルマールレ」というイタリア料理店の事で、デザート好きの女子社員に人気があ

るレストランだ。

どうしようか……と考えながらも、結局行くしかないと分かっている。ろくでもない写真をばらまかれる訳にはいかない。

まさか夜とはいえ、明るい街中のレストランで襲われることは無いだろう。

ただ舞野のことだから、何を言い出すか分からない。写真をネタにホテルに連れ込まれる可能性だって無いわけじゃない。

あらゆる道筋を想定して回避策を練っていたら、仕事が全く進まないまま就業時間終了を迎えた。

何も手に付かないので、適当にフォルダの整理をする。

六時十分に舞野が立ち上がり「お先に失礼します」とオフィスを出て行った。

最後の悪あがきで六時半ちょうどまでパソコンの前にねばった後、机の上を片付け「お先です」と課長席に一声かけた。安藤はモニターを向いたままチラリとこちらに目線を向け「おお」と言った。

レストランに入ると、舞野は窓際の席に座り携帯を覗き込んでいた。

声もかけずに、向かいの席の椅子を引いて腰を下ろす。

「何だ話って。さつさと済ませろ」

テールランプが行き交う道路を眺めながら素っ気無く言うと、舞野はメニューを開く。

「先輩、何にします？ 僕はほうれん草のカルボナーラにしようかな」

「俺はコーヒーでいい」

「これいいですか？ ラクダ肉のスペシャルテリーヌ……僕にも一口下さ——あっ……」

身を乗り出して舞野からメニューを奪う。

イタリアにラクダがいるのかと驚いたが、そんなメニューはどこにも載っていない。こいつはどこまで人をコケすれば気が済むのか。

ウェイターを呼んでカルボナーラと、茄子のアラビアータを注文する。

茄子のアラビアータは結構辛かったが、茄子とトマトソースの相性が最高で抜群に上手かった。

舞野はいつも通りの笑顔で昨日終わったプレゼンの話をした。

腹立たしいことに、昨日の舞野のプレゼンは俺のアドバイスをうまく反映し、なかなかの評判だった。「先輩のおかげです」と頭を下げる一見純粹そうな後輩を、手を止めて睨みつけた。

舞野の話を適当に聞き流しながら、皿を空にする。プレゼンの礼を言うために、わざわざ呼び出した訳じゃないだろう。

俺は、その愛らしい笑顔の裏に黒い本性が渦巻いていることを知っている。

「で、何なんだよ。話して」

砂糖を二本入れた甘い紅茶を置いて面倒くさそうに吐き、舞野を見据える。

間をあけて、舞野もミルクティーを置く。

「先輩……変わりましたね」

「何がだ」

「雰囲気も喋り方も、服のセンスも……全部。すごく……前より、魅力的になりました」

少し俯き、微妙な面持ちで俺を見上げる。

「そうか？ 髪切っただけだ」

「僕の、せいですか？」

「どういう意味だ、それ。」

満腹感で抑えられていた怒りが、チリリと小さく火花を散らした。「つけあがるなよ、舞野。そんなこと聞きにわざわざ呼び出したのか？」

俺が変わった理由が、舞野のレイプであるはずがない。
安藤の顔を思い出して、古傷が痛んだ。

「僕、本当はこの会社辞めるつもりだったんです。ちょっといろいろあって、理由は言えませんが……」

舞野は紅茶カップに視線を落とし、寂しそうに微笑みながら話し始めた。

「だから、辞める前にどうしても先輩に近付きたくて……どうせ最後だからって、あんなひどい事……」

俺は犯された言い訳を聞くためにわざわざ呼び出されたのか。反吐が出そうだ。

「許してもらおうとは思ってません。ただ先輩には悪いけど、後悔もしてません。あの時は自分で自分が止められなかった。これで先輩のこと諦めがつくって信じて、疑わなかったんです……」

諦めるために……か、もう一人そんな事を言った男がいたな。

「なのに先輩は、あれからどんどん綺麗になって、魅力的になって……諦めようって決めてたのに……僕」

俯いた人形のような顔が歪み始めたので、泣き出すんじゃないかと内心ハラハラする。

こんな場所で男を泣かせたら、変な目で見られる。それに泣きたいのは襲われた俺のほうだ。

「先輩。どうしたら僕と付き合ってくださいか？」

ラミパス、ラミパス（後書き）

ブログとの兼ね合いで、今日二回目の更新させて頂きました。

例のごとく長くなったので二話に割って、その前半部分の回です。
長くても大丈夫というコメントを頂いたのですが、さすがに730
0文字はよう出さん――。

題名が訳分かりませんが、次回分の題名と内容を合わせて頂ければ、
何となく理解して頂けると思います。そう信じたい＋ア（・・
D・、）メン＋

では。

ルルルルル

「先輩。どうしたら僕と付き合ってくださいか？」

「は？」

久々に開いた口が閉まらない。

突拍子も無い事を言い出した後輩を、脳ミソが二度見して回転を止めた。

「舞野。俺がお前と付き合つと、本気で思ってたの？ それ、脅しか？」

「脅しじゃありません。僕、本気です。」

先輩の事、本気で好きなんです。なんならここで叫べますし、みんなの前で先輩の事抱き締めて、キスだって出来ます」

舞野は真剣だ。思いつめたような表情で、頬と目元を赤くして下唇を噛締めている。

ここで無視したら、本当に大声で愛を叫びかねない。

「ま、待て、わかった。……それじゃあ、とにかく携帯の写真を消せ。今ここでだ」

「それは……だめ」

急に駄々をこねるガキみたいに口を突き出して、怒った顔をする。なんなんだ、こいつは。何でこんな奴が、俺と同じ課の後輩なんだよ。

「あの写真は保険です。」

先輩。僕に条件を下さい。

僕、先輩のためなら大抵のことは出来るし、先輩が欲しがる物、絶対手に入れます。お金だって、ある程度なら用意出来る。

先輩が出した条件をクリア出来なければ、今度こそちゃんと諦め

ます。写真も全部消します。だから……」

どうしようもない子供のような後輩に、溜め息をつく。
考えを巡らせる。

条件……。

今一番欲しいもの……。

そう考えていると、自分の名を呼ぶ低い声の幻聴が聞こえた。頭を振って追い払う。

くだらない。

本当にほしい物は絶対に手に入らない。だから本気で欲しくなるんだ。

しばらく考えて、手元にあつたらかなり嬉しいという程度の物を選ぶ。

「舞野。うちの会社に裏の顧客リストがあるって噂知ってるか？」

「えっ？」

「闇献金を受けた相手の名簿みたいなもんだ。もし、それを手に入れたくれたら、お前と付き合ってもいい」

意地汚い自分の考えに、ニヤつく。

「でもそれ……噂、ですよね？」

「無いなら無いでいいんだ。データベースにアクセスすれば分かる。無いって証拠を見せてくれればいい」

一年目の新入社員には——まあ無理だ。ホストコンピューターへのアクセス権があるのは、幹部クラスのパソコン数台。パスワードもいる。下手すれば足跡が残って、あのメールのように騒ぎになる。付き合う気は無いときっぱり言ってやった方が舞野のためだが、自分を強姦した男を氣遣うほど優しくはない。

舞野はしばらく眉を寄せ、宙を見つて考えたあと視線を上げた。

「分かりました。二週間下さい。それまでに何とかしてみせます」
「期待しないで待ってる」

「でも、どうしてもそんな物が欲しいんですか……?」
不審そうな後輩を「さあな」とはぐらかす。

「あの。一つ確認しておきたいんですけど」

「なんだよ」

「あの……藤田先輩とは、その、まだ付き合ったりしてませんよね……?」

「はあ?」

来る質問、来る質問、全て俺の予想を大きく振りかぶって、場外へそれて行く。その度に俺はまったく予想外の方へ飛んでいったそれを、口を半開きにして眺めるのだ。

藤田というのは同じ課の一年上の女子社員で、今週に入ってから昼食と一緒に食べることが多い。俺はいつも通り、一番奥の席で壁に向かって静かに食べているのだが、藤田が一人で向かいに座って来たり、他の女子社員を何人が連れて来たりするので、最近は昼飯の時間が賑やかだ。

「どうして俺と藤田さんが付き合うんだよ」

「付き合っていないならいいです。他に付き合ってる人は、いないですよね?」

「余計なお世話だ」

「あ、あの……好きな人とかは?」

浮気容疑のかかった恋人のように、いつのまにか尋問を受けている。

好きな人と聞かれて、耳の奥に残る雨音を思い出したが、終わった事だと首を振った。

「よかった」

舞野がホッとして、表情を緩ませる。付き合ってほしいと最初にほざいておきながら、今更にも程がある。

「約束して下さい。二週間経つまでは、誰かに告白されても絶対に

付き合ったりしないって」

「高校生でもないのに、そうはいないと告白されるかよ」

「僕が言うのもなんですけど、先輩は鈍感過ぎます。警戒心の欠片も無い」

舞野が怒ったように言う。

どうして強姦魔にそんなこと注意されなきゃいけないんだ。

「じゃあ。二週間以内にそのリストを渡せば、僕と付き合ってくださいね？」

「ああ」

童顔が俺を真剣に見据える。

「身体だけとか、そういうんじゃないんです。ちゃんと心も、身体も、身体の中身も、全部。先輩の全てが欲しい……」

身体の中身というフレーズがエグくて引つ掛かったが、とりあえず「リスト持って来たらな」と流した。

店内を見回すと、向うの方で煙草を吸ってくつろぐサラリーマンが何人も座っている。

何故か無性に煙草が吸いたくなった。

舞野が制するのを押し退けて二人分の勘定を払い、店を出る。

店の前で舞野と別れて、カバンを取りに一度会社へ戻った。

オフィスに帰ると電気は消えており、社員は一人も残っていない。久し振りに安藤の席に座ってパソコンの電源を入れる。パスワードボックスに、前のパスワードや安藤の誕生日を叩き込んでみるが、やはり違いますと跳ね返される。

諦めて、帰る仕度を始めた。

エレベーターに乗る前に、トイレに寄ろうと思い立った。マンションまでは電車で三十分程かかる。

洗面所で手を荒い、薄汚れた鏡を覗き込む。

ここで一度ハヤトと会話したことを思い出す。

「ハヤト……」

鏡の中の自分に呼びかけてみても、返事は無い。
鏡には俺の顔、雪菜シュンの顔が映っている。

すると自分の顔が、してもないのに勝手に優しく微笑んだ。

「ハヤト……」

そう静かに囁くのは、鏡の中のシュン。

どうして、俺が。

ハヤトはお前だろ？

……………。

違う。

そうだ。

俺は……シュンじゃない。

俺は……

ハヤトだ。

「シュン……俺は……」

どうして。

俺は。

そうか。

俺は、ずっとシュンになりたかったんだ。

シュンになって……安藤に愛されたかった。

「シュン。ごめん、な」

シュンはそつと目を閉じて首を振る。

シュンはいつでも優しい。無条件に全てを許す。

俺はシュンになりたくて

安藤に愛されたくて

知らぬ間にシュンの生活に乗っ取っていた。

シュンの記憶が欲しかった。安藤に愛された記憶が。

シュンと同じ仕事をこなし、同じ記憶を持った。

もう俺は、ハヤトでも無いのかもしれない。

いつのまにか第三の人格になりかけていた。

「お前のこと、嫌いだったけど。

俺は安藤さんに愛されたい。愛された思い出だけでもいいから欲しい。

安藤さんが愛してくれた身体になりたい。

シュン。俺はお前になりたい」

思いつめたかすれた声が、タイル張りのトイレに反響する。
天井の蛍光灯が切れ掛かっているのか、たまに音をたて点滅する。
シユンは切なげな目で俺を見つめる。

「ハヤト……俺もだよ。」

俺もハヤトになりたい。

好きな人に好きって言える人間になりたい。

素直に自分を受け入れられる、ハヤトになりたい」

鏡を表面を振るわせる、細くて高い、小さな声。

「初めて意見が合ったな」と苦笑いすると、シユンも鏡の中で笑う。

初めてシユンの笑顔を見た気がする。

その表情を見て、安藤が惚れたことに納得する。

俺は最低な人間だ。

こんな優しい奴を今まで散々苦しめて、暗闇に陥れてきた。

そして今も、現在進行形で嫌な人間になり下がろうとしている。

人を使って、自分の欲しい物を手に入れようとしている。そいつ

の身も心も弄ぶことになるかと分かっていながら。

どんどん足元を取られて、身体が沈んでいく。

きつとこれからも、更にこの手は汚れて、最悪な人間に堕ちていく。

「シユン。俺はもう素直なんかじゃない。

好きな人に思いも伝えられない。

どんどん嫌な人間になっていく。

それでも、俺と一緒に、汚れてくれるか？」

シユンは頷くように瞼を伏せて、静かに笑う。
綺麗だと思った。

天使が存在するなら、今俺の目の前にいる。
美しい。

「ハヤト。一緒に堕ちよう……」

一つに……戻る……」

小さく消えているその声は、身体の内側から響いている。

天使が鏡に白い掌をかざす。

下瞼が光っている。

俺はこれから天使を堕天させる。もう後戻りは出来ない。

鏡に手をやり、シユンの掌に合わす。

昔のアニメにあった。

少女が小さなコンパクトを使って変身する話。

変身する時の呪文は思い出せるが、元に戻るときの呪文が思い出せない。

なんて呪文だったか……。

思い出せないまま目を閉じる。

あのアニメよりも、実際はずっと簡単に、変身は解ける。

戻りたいと願えばいい。

呪文は思い出せなくてもいい。

また蛍光灯が点滅した。

世界が一度終わりを告げるように、天井がヂヂッと鳴る。

熱い雫がほほを伝って、冷たいタイルに堕ちていった。

ルルルルル（後書き）

（＊´ - ｵ´）ファイ - 3 やつとここまでこれました♪
読んで頂いている皆様に感謝。 +。（o´ ｵ´ノノ´）パチパチパチ。
+。

更新時間が遅くてすみません。更新したものと思っていたら出来て
いませんでした。

そういえば題名ですが「ラミパス ラミパス ルルルルル」で一つの
呪文です。

元々長くて割った回ですので、題名も割ってやりました。

「テクマクマヤコン♪」よりこっちの呪文の方が好きです。

えっ！知らない？ 私よりメイク版しか見た事ないですけど。いく
つくらいの年齢の方にまで通じるんだろうか（´ - ；、´）

雨のち雨

「またカレーうどんなの？」

いつものように上から女の声が掛かる。

味噌汁の水面から顔を上げると、見慣れた先輩の女子社員が立っていた。

小柄なショートカットで、綺麗というよりは愛嬌があつて可愛い顔だ。

今日は食器を乗せたトレイでは無く、小さな巾着袋を持っている。
「あれ、藤田さん。今日は弁当ですか？」

「そうなの」と向いの席に腰を下ろして、巾着の紐をほどき、両手の拳を合わせたほどの小さな二段重ねの弁当箱の蓋を開ける。

「へえ——、藤田さん料理するんだ——」と覗き込む。卵焼き、から揚げ、サラダに煮物。下の段は白ご飯と巨峰だ。

「一人暮らしなんだから、当然でしょ。それでも結構、料理上手いんだから」

得意げに言つて、卵焼きを箸でつかんで口へ運ぶ。

「雪菜君もカレーうどんばかり食べてないで、たまには彼女に手作り弁当持たせてもらつたら？」

「藤田さん。俺、大学出てから彼女いないんです。前言いませんでした？」

「知ってる。前聞いた」

藤田はご飯を頬張りながら、悪戯に笑った。

社会人になってから彼女はいない。彼氏はいたが……。

大学の時にどうしても友達に頼まれて会った女と、なりゆき上付き合つたことがある。何度かデートをしただけで、無理している

自分に気付いて別れを切り出した。

「ねえ。今度、手料理ごちそうしてあげようか？」

「本当ですか！？」と言う声に、派手に椅子を引く音がうるさく重なる。

音源の方を振り向くと、舞野が椅子から立ち上がりトレイに食器を乗せていた。ジロリとこちらをひと睨みし、トレイを持って立ち去って行った。

何なんだ、あいつは。

「雪菜君、家どこだっけ？」

「社宅です。七里駅の近くの」

「あっじゃあ、安藤課長と同じマンション？　すごく新しくてお洒落なところよね」

「は、はい。来た事、あるんですか？」

安藤の部屋に行った事があるんじゃないかと思った。安藤は遊び人で通っている。同じ課の女と出来ていてもおかしくはない。ただそれを本人達の口から聞けるはずは無いが。

「うん。大学の時からの先輩がね、今は庶務課にいるんだけど、その人が七里の社宅で、ずっと前に遊びに行ったの。もちろん女の人だけ」

少しホッとする自分がバカらしくなる。

安藤とは終わったことだ。

「そうですか。安藤課長だけじゃなくて、1課の菅井さんとか青木部長も同じマンションですよ」

人に聞いただけで、あのマンションで安藤以外の社員に会った事はない。きつと違う棟なのだ。

「そうなんだ――。安藤課長ってまだ一人暮らしなわけ？　私、もう二人で暮らしてるんだと思ってた」

「えっ？」

顔を上げる。

「雪菜君、知らない？ 安藤課長、絵島専務の娘さんと婚約してるの。結構有名よ？」

「そ、そうなんですか……」

そう言った自分の声が聞こえなかった。

「確か、来年には式挙げるって噂よ——。絵島専務は次期副社長だから、もしかしたら将来、安藤社長ってことになったりするかも」「でも、課長って、バツイチですよ、ね……？」

「いい男はバツイチでも関係ないの！ 向こうが一目惚れらしいわよ。そりゃ、あの歳で課長っていうだけでも将来有望だもん。ヤヨイ先輩なんて、まだ安藤課長のこと狙って——」

小声で噂話をする女を目の前に、頭の中が真っ白になる。

それ以降も、藤田との他愛ない会話がまったく頭に入ってこない。

無意識の内に社食を出てオフィスに一度戻り、カバンから煙草とライターを取って同じ階の資料室へ向かった。

ドアを開けて中に入ると、埃に加えて煙草の匂いが鼻をつく。

傾いたソファ―に腰を落す。

放心状態のまま煙草をくわえ、火をつけた。

一息目の副流煙を吐き出して、背もたれに身体をあづける。

天井を見上げる。

外界は凄い勢いで時間を消費しているというのに、この部屋だけはいろいろな時間の運動法則を無視して、時計の針を止めている。外の流れに付いて行けない俺には。ぴったりの場所だ。

会社で煙草を吸うようになって最初は喫煙所に行っていたのだが、行く度に殆んど面識の無い女子社員に囲まれて尋問を受けたり、男に話し掛けられたと思ったら合コンに誘われたりする。それが先輩だつたりすると、話を合わせて誘いを断るのが一苦労だ。その上、自分に話しかけてくる人影の向うに、安藤の広いスーツの背中が見えたりする事がある。あそこは煙草を吸うための場所じゃなくて、煙草が吸える交流所だ。リラックスするどころか、余計に疲れる。それに気付いてからは、煙草を吸う時はいつもこの資料室に来る。俺だけのプライベート空間だ。

溜め息と一緒に紫煙を吐き出し、掌の中にあるゴツゴツとしたライターの蓋を開けたり閉めたりしてみる。

ジッポのボディーに彫られた横顔の髑髏が不気味に笑っている。「地獄へようこそ」とでも言うように。

忘れようとしても忘れられない思い出の残骸をポケットになおす。

不意にドアが開いた。

静かな部屋なのに、廊下を歩く足音さえ聞こえなかった。この部屋は静かなのではなく、全ての音を遮断して無音という空間を作っているのかもしれない。

入って来たのは――安藤だ。

ここで会うのは何回目だろう。

向うは俺を見つけて驚いた顔をしている。どうやら俺じゃなくて、この資料室に用があったらしい。

手には見覚えのある小豆色の薄い本を一冊持っている。

安藤は「こんな所で吸ってんのか」と漏らして、手前から二番目のスチール棚に向い、本を直した。

俺の記憶が正しければ、あの本は歴代の役員名簿だ。

「課長。役員名簿なんて何に使うんスか？」

単純に、不思議だと感じた。

安藤は棚の列から出て来て俺の正面に立ち、両手をポケットに入れて不審そうな表情で見下ろす。

「お前……どっちだ？」

「どっちって、何がです？」

「ハヤトか？」

どちらかと聞かれれば……どちらでもない。

自分はもう、ハヤトでもシユンでもない。

それでいてどちらの記憶も持ち合わせている。

ニヤリと笑って煙を吐く。

「安藤さん。」

もう俺はハヤトでもシユンでもありません。どちらでも無い。安藤さんが好きだった奴はもう消えちゃいました」

忘れる。そう決めたんだ。

ニコリとして膝に手を付き、立ち上がった。

安藤は眉間を深くして、俺の顔を眺めている。

「絵島専務の娘さんと婚約されたいですね。おめでとうございます」

床に置いていたコーヒーの空き缶を取って、煙草を入れる。灰皿代わりだ。

「あれは……」と、安藤は何かを言いかけたが、それ以上言葉が続

かず視線を外して顔を歪める。

流し台に行き、蛇口をひねって缶の中に水を少し入れた。

「別に責めてませんから安心して下さい。俺も課長と沢山遊べて楽しかったです」

振り返ると、安藤はこちらを睨みつけている。

「俺のことは……遊びか」

「当然です。ただの暇つぶしですよ。課長だって、そうだったですよ？」

どんどん自分が嫌な人間になっていく。
でもこれでいいんだ。

安藤は俺を見つめる。

何も答えないことに苛立つ。

どうして黙ってるんだ。

言えよ。

遊びだったって。

楽しかったって。

そう言ってくれたら、俺は……。

「雪菜。俺は、遊びのつもりは……」

聞きたくない。安藤が言い終わる前に自分の声で遮る。

「無かったなんて言わせません！ 本気だったなんて、絶対……言わせない。」

安藤さん。

じゃあ俺が好きだって言ったら、婚約解消してくれますか？
抱き締めて欲しいって言ったら、その胸に抱き締めて、みんなの
前で好きだって言って、キスしてくれますか？

無理でしょ？

それは本気って言わないんですよ。

ただ……残酷なだけです」

資料室の冷えた空気が自分の吐いた熱気でよどむ。

安藤は可哀想な者を見るような目で俺を眺める。

少し上がった息を落ち着けて俯き、空き缶を両手でつつむ。

深く息深呼吸して、言う。

「後悔してるんでしょう？ 俺と寝たこと。

こりこりだって思ってる。そう顔に書いてあります。

いいですよ。忘れてあげます。ここでの事も、あの日の事も、何
もかも全部」

だから

だから、後悔しないで。

忘れないで。

俺の肌も。

俺の声も。

雨の日の夜も。

「二人の事は誰にも言いません。

その代わり、俺が情報を漏らしてることも黙っていて下さい。もし誰かに言ったら、俺との事をばらします」

「雪菜。それは……俺を、脅してるのか？」

安藤の声が低くなって凄みを増し、目を細めて俺を見下ろす。

「そう捉えてもらっても構いません。課長次第です」

安藤はソファーに向い、腰を下ろしてポケットから出した煙草を一本くわえる。

火をつけて、天井に向かって煙を吐く。

「そうか、よく分かった。

ガキの相手するのにも、飽きがきてたところだ。ちょうどいい、俺も忘れてやるよ。

お前のことは誰にも言わないから安心しろ。

悪趣味な暇つぶしだったが、楽しかったよ。雪菜」

ソファーへ近付き、持っていた空き缶を安藤の足元に置いた。

男の正面に立つ。

開いた足の間から両手を垂れて俯いていた安藤が、顔をあげた。

「どうだ。脅される方から脅す方にまわった気分は。楽しいか？」

あんなに抱き合ったのが、あんなに求めてくれたのが嘘のように今は刺々しい。

目の前の男が、まったく別人に見える。

自分もまた、あの時からすれば別人になっている。

皮肉たっぷりに嘲笑う男に何も答えず、部屋を出た。

欲しい回答は得られた。

後は待つだけだ。

記憶が腐敗して、身体からはがれ堕ちるのを。

そしたらきつと、忘れられる。そう自分に言い聞かす。

そんな時間はないと、携帯がせわしなくポケットの中で震えた。
開けて表示を見ると、メールを受信している。

『舞野悠太』

そうか、あれからもう、そろそろ二週間だ。

レストランを出て、舞野にメールアドレスを聞かれて教えた事を
思い出した。

メールを開く。

『手に入りました。今晚会えますか？』

手に入った。何がだ？

まさか、リストか。

同時に俺自身も手に入れたつもりでいるのかもしれない。

確か、心も身体も、身体の中身も、全部。全てが欲しいと舞野は
言っていた。

そう簡単に全てが手に入るのかな。

挑発的に冷笑して、携帯を閉じる。

俺は、愚かで浅ましい。

そして、もっと醜くなるために、沢山のをこの手で汚しに行く。

雨のち雨（後書き）

連休前に完結する予定でしたが、長くて二話に割った回が何度かありましたのでちよつと予定が狂いそうです。

まあ予定なんて、しょせん未定です。

何とか九月中には終わる……といいね（。ゝ。エ。）。ゝ――（ウン

昨日は初めて閲覧者様の数が90人を突破しました!!。+。（o

・d、ノノ` パチパチパチ。+。

いやゝ夢のようです。もうGE出るかと思た（汚くてすみません）もうこんなに沢山の人に読んでもらえるなんて……いつ死んでも本望です。

あともう少し！ お付き合い下さいませゝm（――――）m

GO TO HELL

『CLUB BLUE HELL』の二階で、午後八時半。

BLUE HELLは以前、舞野と会った事がある風俗街のクラブだ。会社からは電車で一時間ほどかかる。

一度家に帰らずに直接向かう事に決めて、七時過ぎに会社のビルを出た。

夜、出歩くのは久し振りだ。

毎晩、夕食と一緒にビールを一本飲んで風呂に入ってから、撮り貯めたテレビ番組や洋画を見て十一時には布団に入るといいう、判を捺したような規則正しい生活を送っている。

見慣れたはずの繁華街が懐かしいようでいて、新鮮に思えた。週末のせいか風俗街も賑わっている。

クラブへ向かう途中で男に一人と女に一人、声をかけられたが、約束があると断った。男の方は夕飯に誘って来たが、女の方はホテルに行こうと露骨に腕を組んできた。最近はその女の方が度胸があるらしい。

ホストの勧誘は日常茶飯事なので、笑ってごまかし通り過ぎる。

店内に入ると、いつも通り音楽とは呼べない爆音が身体に痛い。時間は早い、やはり週末はすごい人だ。

以前は毎晩のように出入りしていたのに、初めて足を踏み入れる場所のように感じて、何故だか緊張した。

おどおどと辺りを見回していると、沢山の視線がこっちを向いていることに気が付いた。しばらく奥で揺れる人の群れを眺めていたが、こっちを見ていた視線が近付いて来て、声をかけられそうだと

横目で判断し、階段へ急ぐ。

確か舞野が指定したのは、この店の二階だ。腕時計を見るとちょうど八時半を指している。

階段を上がりながら二階に目をやると、一番端の席に童顔の後輩が座っている。舞野は今日有休をとっていたから、家から来たのだろう。スーツではなく私服を着ていた。

「待ったか？」

隣のスツールに腰をかける。

「いえ、さっき来たところです。けど、すみません。先に飲んでます。何か取って来ましょうか？」

円形の小さなテーブルに、オレンジ色のカクテルが置かれていて三分の一程減っている。

「いや、いいよ。自分で取りに行く」

カバンだけ置いて、バーカウンターへ向かった。

この店は一階にも二階にもカウンターがあるので便利だ。

カウンターに置いてあるドリンクメニューを手に取ると、正面から声がかかった。

「あれ、久し振り」

顔を上げると、カウンターの中でグラスを拭いている若いバーテンダーだ。

「最近見ないと思ったら、ずいぶん雰囲気かわったね」

「えっ、ああ。そうですか？ 髪切ったからかな」

誰だったかなあ、こいつ。

前にも何度か喋った事を思い出し、適当に話を合わせる。

「なんか前は底抜けに明るかったけどさ――、良い意味で影が出来たってか、ミステリアスな感じになったよ」

「きつとスーツのせいですよ」と苦笑いして、メニューで顔を扇い

だ。

「あれ、新しい恋人？」とバーテンは目線で舞野を指す。

「いえ、え——と……会社の後輩です」

正しくは「新しい恋人」になるかもしれない、会社の後輩だ。

男は拭いていたグラスを新しいものと取り替えて、舞野の方に視線を向けたまま「ふ——ん」と漏らした。

「何にする？　いつものでいい？」

男は手にしていたグラスと布巾を置いて、カウンターの縁に両手をつく。

「あ、じゃあ、いつもので」

何を飲むか決めかねていたので、思い出せない「いつもの」にした。

全てが慣れているようで、初めてのように感じる。

しばらくすると、ワイングラスの中に不透明の赤い液体が充填された。赤ワインより濃い赤で、トマトジュースよりもサラサラしている。

男は、そのグラスをコースターの上に乗せて「はい」と言って、中指でこちらに滑らせた。

コースターの中央に印字された店名の下に、手書きの数字が並んでいる。始めの数字は090。携帯の番号だ。

はてなマークを顔で描いて男を見ると、男は舞野の方を気にしながら意味あり気にウィンクして微笑み、親指と小指を立てた拳を耳元で振った。電話しろってことか。

どうやら、今夜のお誘いを受けているらしい。

作り笑いで適当に頷き、コースターをポケットに入れた。後で捨てよう。

グラスを持って、舞野が待っている席へと戻る。

俺とバーテンのやりとりを見ていたのか、舞野の視線は俺の肩横をそれで奥のカウンターに刺さっている。

「……手に入ったって？」

俺が席に着いても舞野はずっとカウンターの男を睨んで口をきかないので、仕方なく俺の方から話を切り出した。

納得いかないといった表情で目線を俺に戻し、足元に置いていたカバンを膝に置いて中を探る。中からA4サイズの茶封筒を取り出した。

本当に一年目の新入社員が、顧客リストなんかに手が届くのか。半信半疑で右手を差し出し茶封筒を受け取ろうと迫ると、それに怯えたように封筒が舞野の腕の中に戻って行った。

「なんだよ……」

封筒の中身が気になって苛立った口調で聞く。

舞野は大きな封筒を胸に抱き締め、気まずそうな面持ちで俺から視線を外して俯く。

「あの……。渡す前に、約束を確認させてもらっていいですか？」

「ああ？」

事前に契約を確認して、後々言い逃れ出来ないようにするつもりらしい。

「顧客リストを手に入れたら、先輩は僕と付き合ってくれる。間違いないですよネ？」

「ちゃんと俺の欲しがってたリストなら、な」

それを聞いて緩んだ腕の中から茶封筒を奪い取り、中身を確認する。

A4サイズの紙が三枚と、CD-ROMが一枚。

紙にはびっしりと表が印刷されていて、企業名や個人名、住所、電話番号、IDナンバー、その他特記事項——と項目が並ぶ。間違はなく顧客リストだ。

普通の顧客リストと違っていているのは、表の縦半分から右側には項目名がふられておらず、その項目名が無い欄に数字や銀行名が並ん

でいる。数字は三桁ごとにコンマが打たれているので金額だろう。……、じゅう万、百万、千万……。その横には銀行の支店名と口座番号と思しき七桁の数字、口座の名義人であろう個人名、西暦で書かれた日付。日付で一番新しいのは先週だ。このリストが最新バージョンである事を示している。

名簿は企業名がほとんどで、「あ」行から順に並び、三枚目は「た」行に入ったところで終わっている。

「これ、全部じゃないな。続きは？ ROMには入ってるのか？」
「リストは全部で十二ページあります。僕にもいろいろ事情があって、一度に全ては渡せません。三回に分けさせてください。ROMには、その用紙と全く同じ内容がデータで入ってます」

もう一度、三枚の用紙にざっと目を通す。

恐らく俺の言っていたリストで間違い無い。項目名の無い数字と羅列と、企業名とはまったく関係ない個人名義の口座がそれを教えている。企業名の中には、俺でも名前を聞いたことのある取引先の大手の社名がいくつか入っていた。

どうやって手に入れたのか、なんて野暮なことは聞かない。俺も正体を聞かれたら困る身分だ。

「わかった。全部のデータが揃うのは、いつくらいになりそうだ？」

「再来週までには、なんとか……」

「よし。じゃあ、それを待つよ」

書類とCD-ROMを封筒になおし、自分のビジネスバッグに入れた。

全てでは無いが、思いがけず欲しい物が手に入った。

改めて椅子に座りなおし、名前も知らない酒に口をつける。赤ワインの味に甘酸っぱい果実の味が混ざって、そう悪くない。

舞野は緊張した表情で俺を見つめている。

「携帯の写真、消すって約束だよな？」

一番気になるものをさつさと抹消してもらおうと思って声をかけると、舞野の顔が強張った。

「先輩。それは……、僕が条件をクリア出来たってことで、いいですか？」

「そうだな」

「じゃあ……僕と、その、お付き合いしてもらえますか」

「ああ。約束だからな」

さぞかし憎たらしい笑顔で喜ぶだろうと思っていたら、予想に反して舞野は眉を寄せ、ホツとした顔で疲労に満ちた吐息を吐き出した。それから姿勢を正し、両手を膝の上に行儀よく揃える。暗い店内でも、目元が赤く染まっているのが分かる。

「えっと、あの……不束者ですが、よろしくおねがいします」

そう言って頭をちょこんと下げた童顔は、紛れもなく俺の会社の後輩で、可愛い新入社員の男だった。

付き合うとなった途端、下克上よろしく態度が一変するかと思っていたので、調子が狂う。

苦笑いをして「こちらこそ」と返し、もう一度グラスに口をつけた。

相変わらず店内はリズムだけを刻む爆音が鳴り響いており、二階から見下ろす、暗闇を走る光の中で沢山の頭が揺れる光景はいい眺めとは言えない。

「写真は消します。本物が手に入るなら、もういいません」

嬉しさを含む声で言い、舞野はポケットから携帯を取り出して操作し始めた。

しばらくしてから操作し終わった携帯を渡され、自分の目で写真が消去されていることを確認する。

マイピクチャの中に『先輩』という個別のフォルダが作成されており、その中身は空っぽだった。念のため他のフォルダをチェック

するが、どこかの綺麗な風景写真や新人歓迎会の時の写真だけで、変な写真は見当たらない。携帯を閉じて舞野に返した。

「それじゃあ、とりあえず——」と、舞野が大きく息を吸い、右手がこちらに伸ばした。

どうして握手をするんだろう思っていたら、「さっきのコースター出してください。浮気は絶対許しませんから」ときた。さすがにそのへんは目ざとい。

さっきはまだ付き合う前だったから浮気にはならないだろうと言おうとしたが、やめておいた。どうせ捨てようと思っていた物だ。

携帯番号が書かれたコースターをポケットから出して渡すと、舞野はまた後ろのカウンターの方を睨みながら、これ以上無理だろうというくらいにコースターを細かい塵にした。

「先輩。この土日は何か予定あります？」

「いや、特にないけど」

「じゃあ今晚から、先輩のこと独り占めしてもいいですか？」

舞野が照れながらオレンジ色のカクテルに口をつける。まあ当然の流れだろう。

一応「それ、俺に拒否権あんの？」と聞き返すと、舞野は表情を曇らせて「……もちろんです。恋人同士ですから」と寂しそうに言う。

正直言うと、リストが手に入れば舞野に用は無い、向こうの気が済むまで適当に遊んでやればいいと考えていた。ここへ来て、データが三回に分けられたのは想定外だ。とりあえずリストが全て手に入るまでは、舞野自身を残りの顧客名簿だと思って大切に扱おうと決心した。自分には、それで悲しむ恋人がいるわけでもない。

携帯を取り出して電話帳を開ける。

「プラザ・オリエンタルでいいか？」

ホテルのグループに登録されている中から、ラブホテルでは無く、駅に直結しているシティーホテルを選んだ。ここはルームサービスの料理が上手い。

舞野が少し驚いた顔で頷いたのを確認して席を立つ。トイレへ続く奥まった廊下へ入り、騒音が若干弱まったところでホテルに電話をした。足元にスタンド灰皿が置いてある。空室を確認してもらっている間の保留音を聴きながら、煙草に火をつけると、ごっこつした大きなジッポが手に馴染む。奥で男同士のカップルがいちゃついていたので、気を使って壁を向いた。

保留音が止んで「お待たせいたしました」と女の声が聞こえる。最上階のスイートが空いていたので、その部屋を予約した。

席に帰ろうと振り返ると、目の前に舞野の顔があつて驚いた。踏み出そうとしていた足を引っ込める。

声を出す間もなく正面から抱き寄せられ、ぐるりと身体が回って壁側にあつた自分の身体がホールに背を向ける形になり、気がつけば舞野の背の裏に壁がある。

「好きです、先輩。キスしてください」俺の肩に頭を乗せて、耳元で囁く。

「舞野、あのなあ。そういうことは、ホテルに着くまで——」
言い終わらぬ内に、柔らかい唇で口を塞がれた。

1——2——3——4——5秒。

チュツと音を鳴らして離れた顔は、うつとりと微笑んでいる。

「次は先輩からキスして下さい。ほらっ、みんな見てますよ。さっきのバーテンも」

どうやら俺達が恋人同士だということを、周りに見せ付けたいらしい。

そんなガキっぽいところが少し可愛く思えて深めのキスをしてやると、俺の背中に回っていた細い腕がビクリと一瞬震えて徐々に力

が抜けていく。目を閉じてキスしているせいか、涼しくなってきた背中に痛いほど視線が刺さっているのが分かる。

店を出てタクシーを拾い、ホテルへ向かった。チェックインを済ませて最上階へ上る。

夕食を食べていなかったたのでルームサービスを頼んで、夜景を眺めながら二人で食べる。舞野はその間もずっと身体を寄せてくるので、食べづらくて仕方ない。珍しい焼酎があつたので、それも注文して飲んだ。

今晩は眠れないものと覚悟して風呂から上がり、髪を拭きながら部屋へ行くと、驚いたことに舞野がバスローブのままベッドで寝息を立てていた。お世辞にも穏やかな寝顔とは言えない。疲れた表情で眉を少し寄せたまま寝ている。

そういえば店にいた時から幾分しんどそうだったと、今になって気が付いた。休みの日に身体を休めないでどうするんだ。会社の先輩として先輩が心配になる。

起こさないようにそつとベッドに寄り、サイドボードの光源を落した。

ゆっくりと舞野に背を向けてベッドに入る。

同時に後ろから腕が伸びてきて、背中から抱き締められた。やはり、そう上手くはいかないか。

「悪い、起こした。舞野疲れてんだろ？ 寝ろよ」

俺もこのまま眠りたい。眠らせてくれ。

「ユウタです」

「ん？」

「下の名前。舞野 悠太」

首の後ろに熱い息がかかる。

「ああ。じゃあ、ユウタ。今日はもう遅いから寝よう。明日も明後

日も、時間はいくらでもある」

「先輩。……一晩中、抱き締めててもいいですか？」

「別にいいけど……。俺、実はあんまり寝相良くないから、一晩中は無理かもな」

少年のような笑い声。

「正直ですね。そういうところも大好きです」

こっちが恥ずかしくなるような台詞を吐いて、俺の後肩に頬を摺り寄せる。

顔の下で組まれた舞野の細い両手首に、まだ新しそうな擦過傷が巻いている。

「明日は昼前にチェックアウトして出掛けましょう。知り合いに借りた車を、駅前の駐車場に停めてあるんです。海の方までドライブして、オーシャンビューのレストランで昼食を食べませんか？ 大きな映画館もあるから、そのあと映画を見てもいいし」

昼前までベッドの上かと思うと、少し気が滅入った。

「いいんじゃないか？ ……明日、晴れると、いいな」

「そうですね」と舞野が言いながら、うなじに口付けをする。

「なんか夢見てるみたいです。……おやすみなさい。先輩」

目の前の白い手をとって、偽りのキスを堕とす。

「おやすみ。ユータ」

GO TO HELL(後書き)

読んで頂きありがとうございます♪

順調に読者様が増えております(*´エ`*)っ。+。愛。+。
サイトのリニューアル版も公開されましたし、早く全面リニューアルしなかな(´o`´、)(o)(wkwkwk

そういえば先日の林檎飴の話で、関東には無いかもしれない心配しておりましたが、関東地方の方数名から「こっちにも林檎飴ありますよ」とコメント頂きました♪よかった!!

案外全国に広がっているのでしょうかね 青森とかは林檎の産地だから、林檎飴ありそう……(↑単純)

何はともあれ、少しずつ話が動いてきました。というか、動かしてただけだね。オラアア・Σ(。ノ)ノーッ! イツケエエ-

-!!!!

連休前には、もちろん!……終わりません。(・・)シッテル

!!

DEEP BLUE

姿勢を正してパソコン画面に向き直り、見飽きたログインボックスにカーソルを合わせる。

『パスワードの言葉はお前の一番近くにある』
確か安藤はそう言った。

舞野から二回目の顧客リストを受け取り、全く検討もつかない謎解きはすっかり諦めていたが、昨日初めてパスワードに繋がる言葉を一つ見つけた。

「僕もタトゥー入れようかな。身体が一番近くにある文字が、恋人と同じってロマンチックですよね——」

俺の左大腿に刻まれたタトゥーを見て、舞野が言った。

俺が一番近くにある言葉。それはタトゥーの文字列だ。

何度も寝た事があるのだから、安藤が俺のタトゥーを知っていて当然だ。

身体を重ねて、足を折り曲げた時にちょうど目に付く位置に刻まれた、挑発的な言葉。

その意味に気づいた奴はみんな言う。

「もう堕ちてるよ」と。

キーボードを叩く。

エフ。エー。エル。エル——。

最後に「J」の右斜め下のボタン、「D」の上のボタン。

浅く息を吐き出す。

本当にこの言葉がパスワードだったら。安藤はどうして、こんな言葉を選んだのだろう。

ただの気まぐれか……。

もし言葉通りの意味だとしたら。

安藤さん。もう、俺はとっくに……。

Enter。

今までとは違う間。反応。

微かな作動音をたてて、パソコンの本体が何かを読み込んでいる。

画面が一度、真っ白に光る。

「しつれいしま——す」

ダルそうに断りをいれて個室のドアを開け、バーテン姿の若い店員がティーカップを二つ乗せたトレイを持って部屋に入ってきた。

唇で深く繋がっていた茶髪を無理やり引き剥がし、スーツの袖で

口元を拭う。

店員の男は特に驚いた表情も見せず、何も見なかったかの様な澄ました顔でローテーブルにカップを置く。

薄暗い部屋の中でも、その店員の顔がやけに若い事に気が付いた。がたいは良いが、顔付が幼い。下手したら高校生くらいじゃないかと驚く。

DEEP BLUEは、俺も何度か来たことがある小さなバーだ。一晩の相手を探す男と、そういう奴等を食い物にする男がわんさかいる。不況だというのに、この店は衰えというものを知らない。

店内のホールは狭いの、奥にこんなに多くの個室が並んでいたことは今日初めて知った。

会員制で、表向きにはあまり存在を公にしていらないらしい。ただ内装は、いかにもカラオケボックスを改装したのが丸分かりで雰囲気が良いとはいえない。

どうしてそんな所に舞野が出入り可能なのは謎だが、軽食やデザートが美味しいと言うから、会社の帰りに二人で寄ることにした。教えられた通り、なかなか満足のいく食事だった。下手なホテルなんかよりずっと美味しい料理だ。何よりデザートがいい。

『くるみパンのフルーツグラタン 苺のワインコンポートのせ』
とりあえず俺の中で今年、上半期一位なのは間違い無い。自分のデザートを五分で食べ終え、舞野が頼んだ『ホワイトチョコといちじくアイスクリームのスープ仕立て』を横目で追っていたところ「食べますか？」とアイスが乗ったスプーンがこちらにやってきたので、断れる訳も無く、空腹の子犬のように尻尾を振ってがつついてしまった。

「クリームが付いてますよ」と唇を舐めとった舞野の舌が、そのまま口内に侵入してきて、深いキスが長引いていたのだ。いいタイミングで食後の紅茶が来て良かった。

「今、あいつのこと見てたでしょ——」

舞野が口を尖らせながらソファアの上で両膝を立て、ティーカップを取り上げる。

「いや、だって。あれ下手しりや高校生だろ……」

こんな物騒なゲイバーの奥の個室で働くには、さっきの男が若すぎるように思えた。

「先輩の浮気者……。年下が好みになったんですか？」

嫉妬深い恋人がティーカップ越しに、こちらを睨みつける。

二週間前にできた俺の恋人は、我がままで嫉妬深い。

夜の町では絶えず手を繋いで周りに恋人同士であることをアピールするし、二人になればキスしてキスしてとうるさい。歳は俺より二つ若いだけなのに、やたら性欲旺盛で、夜寝かしつけるのに身体が壊れるかと思うほど身を捧げて、酷い苦勞を強いられる。

これが恋人でも無い不細工な男なら、何としてでも逃げる事に専念するのだが、幸い顔はフランス人形のように可愛く、年下なので甘えられると悪い気はしない。更に、残り一回の顧客リストの受け渡しを控えているので、我慢しながらも、出来る限りこの生活を楽しもうと努力している。

しかしまだ、恋人というよりは弟のような存在に近い。勿論ベッドでの下克上な関係を除けばだが。兄弟はいないが、弟がいたらこんな感じだろう。いつか病院の待合室で出会った兄弟を思い出した。

その恋人の首筋に、自分がつけたものでは無い内出血の痕があることを、俺は知っている。

耳元の髪の毛で隠れているが、キスをした時にチラリと見える位置にある。

「ユータさあ、そう言うけど。お前の方こそ何なんだよ、そのキス

マーク」

別に好きで付き合いだした仲では無いので黙っていても良かったのだが、自分はなんとか本当の恋人らしく振舞おうと努力しているだけに、他にそういう関係の人間がいるのは腹が立つ。

舞野の顔が青ざめる。きつと耳の後ろのキスマークに気が付いていなかったのだろう。首筋を手で触れながら眉を寄せる。

「先輩。それって妬いてくれてるんですか……？」

謝罪の言葉でも聞けるかと思っていたら——どこまでも食えない男だ。

「お前、俺に本気で付き合えって言ったよなあ？　俺はそうしようと精一杯努力してる。なのにお前は——何なんだよ、それ。そっちがその気なら、俺だって——」

「違います！　僕は先輩だけです。先輩のことしか見てません」

舞野が懸命に取り繕う。

まるで本当の恋人同士だ。

「じゃあ、俺が納得いく説明をしるよ」

内容によっては、貰う物だけ貰って、さっさと恋人ごっこから一抜ける。

束の間、ガラス玉のような大きな瞳を泳がせて思案し、溜め息を吐いて舞野が話し始めた。

「このキスマークを付けた人は、僕に顧客リストを流してくれている相手です。絶対に痕は残さないって約束したのに、そんなことも守れないような、情報の横流しくらいしか利用価値の無い、くだらない男です。僕はその男の愛人なんですよ」

舞野は開き直ったように表情を明るくして、顔を向ける。

他の男の愛人。

全く気が付いていなかったと言えば嘘になる。

時折、恋人の身体に残る、知らない香水の匂い。情痕。両手首の擦過傷。

俺と寝る前は必ずシャワーを浴びたがるし、年上の男を妙に毛嫌いする。

最初は舞野のことだから、毎晩会いたいと言い出すだろうと予想していたが、実際に会うのは週の半分程。

その分、会った時の交わりが濃密になるが、それがかえって他の男の存在を、恋人の身体の変化で気付いてしまうきっかけになる。

「先輩は、どうしてあんなリストが欲しいんですか？」

恐れていた質問がきた。

自分の秘密をばらす代わりに、俺の秘密を喋れと促している。黙っていると「当てましょうか——」と舞野が軽く言う。

「先輩は僕が渡した顧客リストを横流ししている。産業スパイって奴ですよね。」

でもフリーでそんな仕事をするようには見えないし、入社してから金で釣られてって事も、先輩じゃ考えにくい。

きつと一度どこかの企業に入社して、何かの事情で今の会社に産業スパイとして就職し直した。先輩が大学を卒業してから今の会社に勤めだすまでに一年ブランクがあるのはそのためです。違いますか？」

今まで秘密を守ろうと必死だった自分が笑えた。

全てお見通しだ。何一つ間違っていない。

「舞野。お前探偵に転職しろよ」

「ありがとうございます」

苦笑しながら、内ポケットの煙草を取り出す。

「お礼に、先輩が知らない、先輩自身の秘密も教えてあげます」
嫌な予感を覚えながら、煙草を一本くわえてジッポを握る。

「どうして素人の先輩が、いきなり産業スパイなんか選ばれたか、考えた事がありますか？」

それはね。スパイ活動を行うターゲットが、ある人物に絞られているからです。

ＩＴ事業本部の山崎部長。知ってますか？」

意外な人物の名前が飛び出した。

くわえていた煙草を口からはずす。

「何度か、会ったことはあるけど……」

取引相手が主催するの大掛かりなパーティーで一度、あと一度は……エレベーターに乗り込もうと走ってきた山崎を無視して、安藤がエレベーターのドアを閉めたことを思い出した。

「山崎部長は営業課をまとめる本部長だから、殆んどの資料を閲覧することが出来ます。もちろん顧客リストもね。それに自分の口利きで入社させた社員が沢山いるから、総務や経理にも顔がきく。

そして、あの人は妻帯者のくせに男が好きなんです。特に先輩みたいなタイプがね。

先輩は、山崎部長の相手をして情報を得るために、今の会社に入り込まれたんです。そうじゃなきゃ、何の専門知識も無い先輩を選ぶはずがない。

普通、産業スパイを送り込む時っていうのは、それなりの専門知識を持ったやり手の社員を、金と裏ルートのコネで課長クラスにポンと入社させるんです。大した情報に触れられもしないのに、いちいち新入社員から就職させるなんてやり方、聞いたことがない」

舞野の話を聞いて血の気が引いた。

前の会社の上司には、配属された課で身の回りにある適当な情報を、月に一度送ってくればいいと言われただけだ。今更になって、自分の置かれた状況の本当の意味を知る。

「じゃあ、お前が、顧客リスト貰ってる相手って……」
「そうですよ。山崎部長です」

舞野は本来、俺が行うはずだったやり方で、山崎から顧客名簿を得ている。俺は舞野を通して間接的に、山崎から情報を買っているのだ。それも金で買っただけじゃない、代わりに差し出すのは心と身体だ。

知りたくも無い真相を知って、吐き気がする。

俺は、どうすればいいんだ。

煙草を箱に直して、内ポケットにしまった。

「そんな顔しないで下さい、先輩。せつかくの綺麗な顔が……」
そう言っただけでキスされ、抱き寄せられる。

「あんな男の相手は退屈で仕方ないけど、でもそのおかげで先輩を手に入れることが出来た。だから僕は山崎部長に感謝してます。

先輩が望めば他にもいろんな情報を貰ってきますよ。何が欲しいですか？」

純粹無垢な可愛い顔が、俺の鼻先数センチで似合わぬ台詞を小声で吐く。

「ユウタ……そんなことは……」やめる。そう心から言えたら、俺も舞野もどれだけ幸せだろうと考える。

そんなことは金輪際やめろ。お前は俺の恋人なんだから。本当の恋人なら、間違いなくそう言っている。可愛い舞野に、そう言ってくれる素敵な男はこの世に山ほどいるというのに、よりによって俺みたいな男を、舞野は好きになっただと嫌になる。

本当に俺は最低だ。

舞野が山崎の愛人をしているのは、顧客リストを手に入れるため、要するに俺のためだ。誰が好き好んで妻帯者の愛人なんかをするか。

ずっと前に、今の会社を辞めようと考えていたと舞野は言った。その理由が何となく山崎に繋がるような気がして、苛立ちが増す。

「やめろって言うてくれるんですか？　僕が山崎部長と別れて、情報先輩に渡せなくなっても……僕の隣にいてくれますか？」

舞野の声に影が落ちた。

フランス人形のような、愁^{うれ}いを帯びたビードロの瞳。

『ああ。もちろん』その一言が、どうしても言えなかった。

俺を見つめていた舞野が、軽く噴出して、張り詰めた表情を崩した。

「嘘ですよ、先輩。そんな顔しちゃダメです。」

僕がいなければ、山崎部長は確実に先輩に近付きます。もしかしたら、もう目をつけてるかも……そういう男なんです。

あんな男が先輩に手を触れるなんて、僕が絶対許しません。だからあの人には近付かないって約束して下さい。

欲しい情報は僕があげます」

背中に回された腕に力が入り、耳元で優しく囁かれる。

「先輩に触れられるのは僕だけです。あんなジジイに先輩の貪欲な身体を満足させるなんて、出来るはずがありません。」

僕だけです。先輩を満足させてあげられるのは。ねっ？」

細く冷たい指が俺の前髪をさらい、童顔が覗き込む。

何も出来ない自分に嫌気がさす。

せめてもの罪滅ぼしにと、舞野の首に両腕を回して唇を奪う。偽りのそれがまた、新たな罪を上塗っていく。

ノックする音――。

「しつれいします」と店員が入って来たので、また身体を離す。さっきの若い店員ではない。慣れた手付きで食器を片付けていく。

この男も俺達のキスを見て、表情一つ変えない。余程しつけの行き届いた店なのか、それとも日常茶飯事の出来事で慣れているのか。腕時計を見ると、もう夜の十一時を回っている。

バーテン姿が部屋から消えたのを確認して、触れるだけの軽いキスを恋人に落す。

舞野は夢見心地の表情で俺の腕に絡まり、肩に頭を乗せてきた。携帯を取り出して、発信履歴を開ける。

「いつもの部屋でいいか？」と聞くと、舞野が嬉しそうに頷く。

舞野からリストを受け取ったのは、計二回。全部でA4用紙七枚分だ。

先週末にそれをいつものように郵便で送ると、すぐさま送り先の上司から家の固定電話に着信があった。

表には出せない内容の顧客リストを、この上なく喜び「ボーナス振り込んでおくから」と上司は勝ち誇ったように笑った。次の日に口座を確認すると、いつも振り込まれる額よりも単位が一桁多い金額が振り込まれていて驚いた。

おかげでデートの日は、いつもプラザ・オリエンタル最上階のインペリアルスイートに泊まることができる。茶髪が地毛の色じゃないかと錯覚する程の、人形のような容姿の恋人には、擦れたラブホテルよりこっちの方が似合っている。

ホテルに電話すると、当然のように部屋は空いていた。

この不況の中で、週の半分をホテルのスイートで過ごせるのは、先祖代々の金持ちか、悪人くらいだろう。

ソファから立ち上がってスーツを整え、財布を出す。

「トイレに寄って行くから、先に支払い済ませてタクシー呼んどいてくれ」

クレジットカードを舞野に渡すと、「はい——い」と言って足を弾

ませ部屋から出て行った。

自分もカバンを持って部屋を出た。

奥へ進み、廊下を曲がってトイレに向かおうとすると、トイレ入り口の少し手前に男が立っている。

ホストのような派手なワインレッドの上下のスーツを着て、明るい茶色の長髪を後ろにくくっている。壁にもたれかかって煙草を吸い、灰を床に落した。

目を合わせないように、素知らぬ顔で前を通り過ぎる。と、いきなり腕をつかまれた。

振り向くと男がニヤニヤと笑みを浮かべている。

「よお。俺と遊ばない？」

典型的な、絵に描いたようなナンパだ。

「やめとく。外に恋人待たせてるし」

適当に作り笑いをして、典型的に断りをいれる。

だが男はひるまない。それどころか不気味な笑みは深みを増す。

「久し振りに会ったのに、つれねえな――」。

また鬼ごっこしてお兄さんと遊んでくれよ。あつ、忘れてた。ユキナちゃんは、トイレでかくれんぼする方が好きだったっけ？」

DEEP BLUE (後書き)

はい。6300文字。オラアア・Σ(。ノ)ノーッ！イッケエ
エエー……！！

最近読んで下さる方が増えてドキドキでございます。

あつ！ 念のための注意ですが。

あらゆる教科の中で、英語が何より苦手な私ですので、英文にはま
ったく自信がありません。一応自分なりに調べましたが、合ってい
る可能性はファイファイファイです。(；。d)(エ。。

間違っても「fall into me!」と言って告白してはい
けません。

あと、産業スパイに関する記述も、事実には基づきません。間違っ
ても、新入社員だからスパイでは無いと安心しないように……違っ
間違っても、新しく転任して来た上司を産業スパイ扱いしないよう
に……違う。とにかく「産業スパイってこんならしいで」て人
に話しちゃ、だゝめよゝ

最近朝晩涼しくて、冷え性の私は分厚い靴下を手放せません。

皆様も、季節の変わり目で体調を崩されぬようお気をつけ下さいま

せm(――)m

深海視察

「久し振りに会ったのに、つれねえな――」。

また鬼ごっこしてお兄さんと遊んでくれよ。あつ、忘れてた。ユキナちゃんは、トイレでかくれんぼする方が好きだったっけ？」

その言葉で、身体が動かなくなる。

呼吸が乱れる。

つかまれた手を引いて身を離そうとすると、男の身体が前に回り込み、壁に手首を押し付けられた。

男の顔が目の前に迫る。

嫌でも視界に入る目障りな顔に、見覚えは無い。

当然だ。

十年前のことだ。

それでも、自分を犯した男の顔なんてすぐにでも忘れない。

「今からユータとホテル行くんだろ？ 俺も連れてってよ――、あの時の仲間もみんなユキナちゃんに会いたがつてるしさあ。団体割引使えんじゃん？」

「舞野のこと、知ってる、のか……」

舞野は、あの時の画像を持っていた。

この男と舞野がグルってことも考えられる。あいつは裏で何考えてるか分からない男だ。

「当然だろ。あいつにユキナちゃんの写メ売ったの俺だからな。上手く撮れてただろ？」

いやらしく笑う男の顔に怒りを覚えるどころか、恐怖しか感じな

い。

こいつは舞野の友達で、俺があの写真を見た事も知っている。

暗いトイレの個室。

男の笑い声。沢山の足音。

ひんやりとした教室の床。

背中に感じる人の気配を思い出して、脊髄を冷たい血が駆け上げる。

「ユータの奴、ひどいんだぜ。ユキナちゃんに最初に唾付けたのは俺なのにさあ、あいつ横取りして、調子の上で独り占めしやがんの。ユキナちゃんから言っちゃってよ——。気持ち良いことは大勢でした方が楽しいってさ——」

顔を横に向けて、接近する酒臭い男の顔を少しでも遠ざける。

身体が密着する。

腰に回る男の手。

唇の間隔、残り五センチ。

「おい。邪魔だ」

静かな声で、空気が一度止まった。

低く凄みのある男の声に聞き覚えがある。

顔を上げると、いるはずの無い、同じ課の上司が立っていた。

「マ、マサトさん……！ すっすみませんっ」

目の前に迫っていた男は怯えた声を出し、身体は慌てたように遠

退いた。

「トモヤ。お前はくだらない事しかしないな。邪魔だ。トイレに行けねえだろ」

冷気を帯びた表情が、自分の知っている上司の顔ではなかった。

「いや、そのちよつと。こいつと話を……」

俺の肩に手を置き、男がたどたどしく言う。

「聞こえないのか？ 邪魔だ。さっさと失せろ」

トーンを抑えて迫力を増した声に、トモヤと呼ばれた男はひるんで後ずさり、逃げるように廊下の奥に消えた。

トモヤ……。そうか、あいつは十年前に俺が隠れていた個室のドアを蹴った男だ。そしてトイレの外で待ち伏せして、一番に俺の肌に触れた。

嫌な思い出が染み出して、身体が重たくなる。

「雪菜。こんな所で、何してる」

安藤は振り返って、男が姿を消したのを確認した後、俺に詰問した。顔をしかめてはいるが、先程の押し潰されそうなオーラはもう無い。

ピンストライプが入ったダークグレイのスーツに、品のある黒いワイシャツ。上から二個程ボタンを外し襟元を開けて、たくましい喉元がいつも以上に強調されている。

そのせいか、会社での印象とはずいぶん違った。少し闇の匂いがあると云うか、色気がある。着ている物はいつもとさほど変わらないのに、清潔な会社員には見えず、この場所にいるべくしている人物のように感じた。

壁から背中を離して、自分のスーツを整える。

「何って……その、夕飯を食べに……。課長こそ、こんな所で、何を……」

少し間を置き、安藤が俺を見据える。
舞野と来たとは何故だか言いづらい。

「俺は野暮用だ。ここのオーナーと腐れ縁でな」

「オーナーって、キング……ですか？」

このバーのオーナーはキングと呼ばれる悪名高き男だ。顔を見た奴に会ったことは無いが、キングといえば大抵の奴には話を通じる。金と犯罪にまみれた裏社会の住人。どうしてそんな男と安藤が繋がってるんだ。

『安藤さんて、本当はヤクザだったりする？』いつか自分が口にした冗談が、あの時とは違う重みを宿して身体の内部で響く。

「キング？ ああ、そう呼ぶ奴もいるな。今じゃその名に相応しくない、清潔なただのガキだ。恋人に惚れこんで骨抜きになってやる」

「それなら、俺も聞いたことがあります。キングの買い物でしょ？」

少し前だったか、俺がまだこの店によく出入りしていた頃に聞いた。

あのキングが本気で人に惚れて、そのせいで裏社会がこたごたしているらしい、だから最近このバーの周りには物騒な輩がウロウロしているんだと、そんな内容だったように思う。

ここのオーナーが本気で人に惚れると何故裏社会が荒れるのかは知らないが、キングの人間味ある噂を初めて耳にしたので、キングも一応人間なんだと在り来たりな感想をもった記憶がある。

キングは人を金で売買する。買われた人間はキングの持ち物で「キングの買い物」とみんなが呼んでいる。

キングが本気で惚れたのは新しいキングの買い物で、若い男だと

いう噂だ。

「でも本当にいるんですか？ キングの買い物なんて。俺、ただの噂かと……」

「いるな。そいつが来るから俺は部屋を追い出されたんだ」

「キングの買い物にも、会った事があるんですか？」

「知らなくても顔見りやすぐに分かる。若いし、熱に浮かれて溺れた目してるからな。あんな顔してるのは、こんな店の中じゃあれくらいだ」

顔を知らないのに表情だけで人の見分けがつくとは思えない。

安藤はキングの買い物に会った事があるから、そう言えるんだ。

キングだけじゃなく、キングの買い物にまで会った事があるなんて。一般の人間ではまあ無理だ。仕事上の付き合いとも思えない。

裏社会との繋がり……。

ずっと不思議に思っていた。

本当に安藤は普通のサラリーマンなのかと。

肩に残る大きな傷跡。

高価なジッポに仕立てのスーツ。

根拠の無い噂。でもそれは事あるごとに俺の頭をよぎる。

携帯で誰かとあぶない会話をしていた事もあった。

やけに社内のネットワークシステムに詳しく、俺が情報を流していることにも赴任早々気付いている。それでいて、今もそれをばらす気配は無い。

資料室から持ち出した、役員名簿。

そして何より、今朝ログインした安藤のパソコンの中身。

キングの知り合いで、キングの買い物にも会った事があるほど親

しい関係にある。

今まで安藤に対して、違う感情をもっていたから気付かなかった。ある視点から見ると、安藤にはあまりにもおかしな部分が多過ぎる。

「安藤さん……、あんた、一体……」

「一体……何だ？」

「給与台帳のデータなんて……何に、使うんです……？」

声がかすれた。

自分が安藤のパソコンを覗き見た事がばれることもいとわず、思ったことが口をついて出た。

今朝、俺は安藤のパソコンにログインした。

パスワードはやはり、自分の身体に刻まれたタトウの言葉。

パソコンの中は、確かに俺が欲していた報告書やデータで溢れていた。

ただ、一点だけおかしいな部分があり、その内容を見て衝撃を受けた。

ログアウトのためにメニュー画面を開こうとすると、画面の右下に「！」マークが点滅している。

それをダブルクリックすると『ドライブ（：D）に書き込む用意ができたデータがあります。書き込みを始めますか？』と表示が出た。

どうやら安藤が前回パソコンでディスクにデータを移し変えた時に、移し忘れたデータが残っているらしい。何のデータだろうと無題のファイルを開く。

画面が数字の羅列で埋め尽くされる。

縦軸に個人名。横軸に一月二月三月と並んでいる。

従業員の給与管理台帳。

どうしてそんなものが、企画課の課長のパソコンに保存されているんだ。さらに安藤はこのデータを何かに移し変えている。

安藤は俺の独り言のような声を聞きいて、不適に笑った。

「パスワード、わかつたらしいな」

「どうして……あの言葉なんです？」

「別に深い意味は無い。言葉の通りだ」

嘲笑うように軽く言った。

言葉の通り……それにこそ深い意味があるように思えたが、今はどうでもいい。

それよりあのデータだ。

「給与台帳は経理課が管理していて、限られた人しか触れないはずです。どうして、企画課のパソコンに……それが、入ってんだよ……」

質問の核心に触れると、感情が混乱して敬語を忘れた。

ひと月前、安藤が俺にデータを持って帰って何をしていると問い詰めたように、今は俺が安藤を同じように問い質している。

立場逆転。

この男には、俺よりもずっと底深い裏がある。

『普通、産業スパイを送り込む時っていうのは、それなりの専門知識を持ったやり手の社員を、金と裏ルートのコネで課長クラスにボンと入社させるんです』

あまりにもタイムリーな後輩の言葉が、耳の奥で反復する。

嫌な汗が背中を伝う。

「雪菜。お前に一つ忠告しとく。裏のことに足を突っ込みすぎるな。変な好奇心は身を滅ぼす」

「それは、脅しですか……？」

安藤は笑った。

「脅しですか……か。聞き飽きたな、その言葉。俺もこの前使ったしな」

そう言いながら、内ポケットから煙草を取り出し、くわえて火をつける。手に握られているライターが、俺のポケットにあるジップポよりずっと高価そうに見えた。

ひと息目の煙を吐き出した男の顔が、先程までとは違って見える。部下に好かれる、やり手の上司の面影は微塵も感じられない。

こちらを見下ろす無表情の裏に、触れてはいけない黒い闇が見える。

舞野といい、この男といい、裏が無い人間なんて、俺を含めてこの世はいないのかもしれない。

「はつきり言っとく。これは脅しじゃない。警告だ。

俺のパソコンの情報はくれてやるから好きにしろ。

ガキはあれくらいで我慢して、大人しくしてくれ。俺も優秀な部下を失いたくはないんだ。いいな？」

一度関係を持ったのが嘘のように、今は目の前の男に恐怖を感じる。

俺は、なんて危険な男を好きになっていたのだろう。

煙草を吸いつけて、安藤が俺の横を通り過ぎる。

振り返ることさえ出来ずに、足を前に進める。徐々にスピードを持って、逃げるような足取りで廊下の突き当たりを曲がる。

息を整えながら、個室の前を足早に歩く。

前から歩いてくる男の顔に目がとまった。

見覚えがある気がする。

いつか病院の待合室で見せられた、携帯の写真画面に写っていた男によく似ている。

でも確か高校生だと言っていた。こんな場所で出会うはずがない。

ところが近付くにつれて、男の顔が高校生のように幼いことに気付く。男じゃない、少年だ。背もまだ低い。

それに着ているのは……。

戸惑ったが、思い切ってすれ違いざまに少年の二の腕を取った。

「君学生？ それ制服だろ」

振り返り、こちらを向いた顔を見て、ゾツとした。

虚ろに瞼を堕とし、開ききった瞳孔は底が見えない程黒くて深い。まるで深海を覗き込んでしまったかのような感覚に襲われる。

「あつ……。いや……。何も無い」

少年から手を離して、踵を返す。

安藤の言っていた意味がわかった。

熱に浮かれて溺れた目。こういう目を言うんだ。

初めて、表情だけで個人の判別が可能なのだと知った。

「何？ 俺まだ何も言っていないけど……」

少年の声はどこかふわふわとしていて、現実味が無い。

待合室で見せられた写真の少年とは、似ても似つかない幸せに溺れた表情だ。

やはり人違いだと苦笑が漏れる。

間違いとは言え、手を触れるには危なすぎる人物だと知り、首を振って身体を離す。

俺もまだ海には沈みたくないからな。

「いや、いいよ。その溺れた目見たら誰でも分かる。
俺もキングに喧嘩売る程バカじゃないからな。」

君、あれだろ？ キングの買い物」

深海視察（後書き）

前作はここで、「完」でしたね。なつかすい。

前作「キングの買物」を知らない方、今後小説を読む上でまったく差し支えありませんのでご安心下さい。

余談ですが、久しぶりに「天空の城ラピュタ」のDVDを鑑賞しました。

いやゝいいなあ。ムスカは。キュピ——（。A。）——ン

そして改めて、ドーラのように歳をとりたいと感じました。目指せドーラ一家。

ムスカは百パー、マザコンで友達いない男でしょうが、何よりも眼鏡が好きなんです、私。（ゝー、）チラネーヨ 同じ眼鏡でも、タイガーモス号のメカニックのじーさんは眼鏡違いでタイプではありません。

ムスカの、一応レディーファーストなとこや、たまに垣間見る我を忘れた顔がたまらんです。

どんな女が好きなんだろうとか、私にも流行のドレスを買ってくれとか、もういろいろ下心丸出しでDVDを見て——

バルスッ！！（。ゝー、）ノえいゝ

放す手

「え———！ 雪菜君、彼女できたの！？」

俺がはめている指輪から端を発した会話に、藤田が声を上げる。口紅が付いたワイニンググラスの水面が揺らいで、床にちゃぷりとダイブした。

藤田の大きな声に、その後ろに広がる宴会会場を行き交っていた多くの足が止まり、沢山の顔がいつせいにこちらを見る。

窓際で1課の企画課長と険しい顔付で立ち話していた安藤とも目が合った。

「あれ、藤田先輩知らなかったんですか？ 僕は知ってましたよ」隣で終始ご機嫌な童顔が、ビールから口を離して白々しく言う。

俺が指にしているのと同じ指輪が、銀の鎖に通って、こいつの胸元に隠れている。

昨日は舞野の誕生日だった。

ちょうど週末だったこともあり、近場にある海沿いのリゾートホテルのプレミアムスイートに一泊し、苦勞して予約を取ったフレンドチレストランのディナーを食べて、ブランド店が並ぶショッピングモールで舞野ご希望のペアリングを買った。

金は有り余るほどある。

シルバーのリング一つで、弟感覚な恋人の機嫌が取れば安いものだ。

俺も舞野と同じように指輪を胸元に隠していたのだが、この宴会場に来る前に指にはめて欲しいとせがまれた。恋人いわく『先輩に群がる害虫よけです』だそうだ。

「どんな子？ 写メは？」

藤田が連れて来た女子社員二人も、興味深そうに俺の顔を覗く。

「いえ……写真は、まだ撮って無くて……すみません」

というか実物が隣でビールを飲んでいます。面倒臭いので、そう言っただけだった。

質問攻めをかわすために、持っていたデザートに手を付けた。

経営企画部の部長が今月いっぱい退職する。

その送別会が、会社から十五分のホテルの小ホールを貸し切り、仕事終わりの時間を利用して盛大に催されている。小ホールと言っても、会議室が四つは入る広い会場だ。企画課だけでなく経理や総務の連中も来ているので、総勢で七十名程はいる。

白い布が張られた長テーブルには、ホテルらしく上品な料理が銀色の大皿に乗って並んでいる。グラタンから生春巻き、ローストビーフや炒飯、寿司まである。バイキング形式で、ホールの中央と壁際に円卓と椅子がいくつか置かれているが、席の場所は決められておらず、椅子の数も少ないので、立食パーティーに近い。

グレイプフルーツを口に頬張ると、口の端から果汁が滴った。手もベタベタだ。ハンカチを出そうとしていると、舞野が「はい」と言っただけで自分のハンカチを差し出すので、ありがたく受け取った。

「どうやって知り合ったの？ もしかして、この会社の子？」

その通り。会議室でレイプされたのがきっかけです。とは口が裂けても言えない。

「いえ、友達の紹介で……全然違う職種のOLです」

無難な答えを返しておいた。

「いくつなんだ？」

「可愛いのかよ。どんな子なんだ？」

いつのまにか、藤田の後ろに立っていた同じ課の先輩二人が会話に加わっている。

「えっと……歳は二つ下で、どんな子って言われると——」

隣を見ると、舞野がわくわくした表情で俺の言葉を待っている。

「まあ、顔はかなり可愛い、と思います。フランス人形みたいだし、男二人から「お——」と感嘆がもれた。

「性格は……、ちよつと裏があるっていうか——」

「裏がある？」と藤田が食いつく。隣で頬を赤くしていた茶髪の眉間が寄る。

「いやその、いい意味で、です。まあ、子悪魔っていうか、自分の気持ちに素直な、いい子です」

あまりにも自分の気持ちと欲望に素直過ぎて、こっちは身体が大変なんだ。

「ふ——ん」と藤田が気の無い返事をする。

舞野の顔がまた緩んでいる。

「雰囲気が急に変わったのって、その彼女の影響か？」

「いえ、それは……」

少し迷ったが「まあ、そうです」と適当に答えておいた。あまり深く突っ込まれても困る。

「そのYシャツも、買う時に恋人と一緒に選んでくれたんですね

——？」とニコニコな舞野。

「ああ、うん」

スーツには白地のYシャツと決めていたが、舞野の好みで今日はダークグレイのシャツを合わせている。一緒に買い物に行った時に、こっちの方が似合うから着て欲しいと甘えられた。

「舞野君は雪菜先輩の彼女さんを見た事あるの？」と食ってかかったように言うのは、1課の新人社員だ。名前は忘れた。

気が付けば、大勢の人に取り囲まれている。

数回しか喋ったことがなくて、名前しか知らない顔が全体の約半分。何が害虫よけた。逆に指輪のせいで人が集まってるじゃないか。「もちろん知ってますよ」と、実は恋人の男が得意げに言う。

「どんな子？」

「可愛い？」

「そりや勿論、すつごく可愛いですよ――。雪菜先輩の恋人だから当然です。可愛いし、気が利くし、一途だし、先輩にぴったり。すごくお似合いのカップルです。ねっ先輩？」

そこまで自分で言えたら大したものだと感心した。

気が利くつてのは、さっきハンカチを差し出したのを言っているのだろうか。

一途なのは間違いない。

こいつは俺に会社の機密データを渡すために、妻帯者の愛人をしている。

それを思い出す度に、出来るだけこの人形のようなつくりの顔を、笑顔でいさせてやりたいと感じる。

「雪菜君から告ったの？」

「いえ、一応向こうから告白されました」

久し振りにまともに答えを返せた。

「その彼女のこと……本気で好きなの？」

「えっ」

神妙な面持ちの藤田が、核心をつく質問をした。さすがに女は鋭い。

豪速球のストレートに身体がすくみ、すぐには言葉を返せない。

多くの顔がこちらを睨みつけて、俺の返事を待っている。

舞野の顔に影が射して、不安そうな表情になる。

しばらく考えて「まあ、本気で好きじゃないと付き合いませんか……」と答えた。

無数の溜め息と共に、舞野が俯く。両手でグラスを包み、ビールに口を付ける恋人の首筋が真っ赤だ。

一瞬静まった空間の中で、また安藤と目が合った。こちらをジッと見つめながら、話の相槌を打って頷いている。

「先輩。僕、飲みすぎちゃったみたいで。気持ち悪いからトイレ行つて来ます」

耳朶まで桃色にした舞野が、恥ずかしそうに言う。
「一緒に行くよ」と恋人らしく言い、二人で会場を出た。

舞野の後を付いて行くと、同じ階のトイレの前を通り過ぎて、人気がない一階下のトイレに入った。
手をつかんで、足早に奥の個室に俺を引っ張り込む。

ドアを閉めて鍵をしたと思った途端に、きつく抱き締められ、キスされた。

こんなことだろうと思った。
「先輩、好きです……さっきの言葉、すごく嬉しかった」
本心から出た言葉とは言えないが、舞野が喜んでくれたのは嬉しかった。

また唇が重なる。

徐々に繋がりが深くなる。

背中に戻っていた舞野の手がジャケットの中に滑り込み、Yシャツ越しに背中を撫で付ける。もう片方の手が俺のベルトにかかった。
「んんっ……ん……っ。おい、ユウタ」

舞野の胸板を両手で力いっぱい押し、性急になりはじめていた細い腕をつかんで引き剥がした。が、またぎゅっと抱き締められる。
俺の肩に茶髪の頭が乗る。耳元で感じる呼吸に熱がこもっている。

「……ダメ……？」

「ダメ」

切なくかすれた声で小さく囁かれ、背筋がゾクリと震える。いつも可愛い少年のような顔をしておきながら、こういう時だけ獣じみた男の色気を感じさせる。

「なんで？」

「なんでって、こんな所でダメに決まってるだろ！ 何考えてんだよ。ホテルに行くまで我慢しろ」

至近距離で舞野を睨みつけると、大きな憂いを帯びた瞳が完全に欲情している。これが恋人同士でなかったら、確実に力尽くで押し倒されている。同じような体格でも、力ではこいつに敵わない。恋人という名の契約の下、舞野は俺の意見をちゃんと聞き入れてくれる。そういうところは偉い。

「……どうしても？」

「どうしても！」

「ごねる子供を叱るように言うと、「ケチ」と舞野が口を尖らせ、そっぽを向いた。

しばらく抱き合ったまま、フワフワの茶髪に指を通していると、スーツ越しに舞野のジャケットが振動しているのに気付いた。

「ユウタ。携帯鳴ってる」

しばらく俺を抱きしまったまま反応を見せなかったが、あまりにもしつこく震える携帯にため息をついて、舞野が身体を離れた。

携帯を開いて着信相手を確認すると、ただでさえご機嫌斜めな顔が更に歪んで嫌そうな表情をする。

何となく相手の予想が付いた。

「山崎……か？」

恐る恐る聞くと、舞野は何も答えず、電源を切って携帯を閉じた。

舞野から約束の顧客名簿を受け取ったのは過去二回。まだ最後の一部を受け取っておらず、舞野が手に入ると言っていた期日からは一週間が過ぎようとしている。

「なあ、ユウタ。顧客リストだけど……最後の分、そろそろ手に入りそうか？ 別に急かすわけじゃないけど——」

「リストはちゃんと渡します。先輩という時間が多いから、ジジイの相手するのがちょっと嫌になってただけです。今週中には必ず手に入れます」

義務的に早口でいう言葉の裏に、棘と寂しさが垣間見える。

当然だろう。

言い方を変えただけで、早く山崎と寝て顧客リストを持って来いと言っているようなもんだ。本気で好きな相手には、絶対そんなことを言える訳がないと承知の上で。

俺は舞野を利用している。

舞野が俺に惚れているのをいいことに、身体を売らせて、欲しい物を手に入れようとしている。

身体を売れば、心も磨り減る。そう分かっていてもまだ、こいつを利用しようとしている。

恋人という甘い嘘で騙して優しくするのは、同情と罪滅ぼし、何よりこれから先も獲物を持って帰って来るように舞野を自分の下に縛り付けておくためだ。

可愛いとか笑顔が見たいとか、好きかもしれないと考えてしまうのは、そんな汚い自分の本性から眼を背けるために、本能的に見ている錯覚なのだ。

錯覚と分かっているでも舞野に優しくする。それこそが、この上なく重い罪なのだ。

舞野はどんどん俺から離れられなくなる。深みにはまっていく。俺は暗い地獄の底から、優しい顔で「おいで」と恋人に手を差し

伸べて、引きずり込もうとしている。

もう既に、舞野は俺のためなら何でもする。死んでくれと言えば喜んで死ぬかもしれない。人に堕ちるとは、そういうことだ。

自分の立っている場所が、這い上がれない深い穴の底だと不意に気付く恐怖。そこにもう一人引きずり込もうとしている恐怖。

元々低めの平熱が、なおも下降して肌が凍る。

「それとな、ユウタ。携帯の待受け、俺の写真にするのはやめろって言っただろ？」

本能の錯覚に従い、話を変えて恋人の機嫌をとる。

予定通り機嫌を直した舞野は、澄ました笑顔でまた抱きついてくる。

やっぱり笑顔の方が可愛いと思う。それも錯覚だ。

「いいじゃないですか——。先輩の寝顔、可愛いんだから。あの写真は誕生日の夜撮ったやつです」

さっき携帯を開けた時に、チラリと見えた自分の寝顔。

俺の知らない間に写真を撮っては、その度に待受け画面に設定する。会社で舞野が携帯を開く度に、こっちはドキドキして仕方ない。

「ねえ、先輩。今日もホテルに帰ったら、ちゃんとお薬飲みましようね——」

とびきりの笑顔を傾けて、甘えた声を出す。

可愛くしてもダメだ。その手に乗るか。

「病院の処方薬みたいに言うな！ 畜生、変な薬ばかり飲ませやがって。誰が二度とあんな薬飲むか」

どこから手に入れてくるのか、こいつは変な薬をだましだまし俺に飲ませるのが趣味なのだ。

この間は、誕生日プレゼントのお返しだからどうしてもと言われて仕方なく自分から飲んだが、それがいけなかった。あんな薬を毎回飲んでいては、いくつ身体があっても足りない。

「え——やだ。あの時の先輩可愛かったですよ？ もっともっとおって腰振って。もう食べちゃいたくなるくらい可愛かった」

こいつなら真顔でフォークとナイフを持ち出しかねないので、二度とあんな薬は口にすまいと心に誓った。

「もういいから。ユウタ、先に会場帰ってろよ。俺はホテルに予約入れて、一本吸ってから行く」

運良く言うべきか、薬を飲んだ時の醜態はあまり覚えていない。下手に思い出す前にお喋りな恋人を一旦遠ざけよう。

トイレの外で舞野と別れ、喫煙コーナーに行くと、同じ会社の連中で溢れかえっていた。

また質問攻めにあうのも嫌なので、外で吸おうとエレベーターホールへ向かうと、安藤が分厚いドアの前でエレベーターが来るのを待っている。煙草でも買いに行くのだろう。

なんだ。もう俺とキスしなくてもエレベーターに乗れんのかよ。くだらない感情を鼻で笑って踵を返す。

急に身体をかえたので、後ろにいた人影に勢いよくぶつかってしまった。目の前に現れたスーツの襟元に顔から突っ込む。

「すみませんっ」と鼻を押さえながら身体を離して見上げると、日頃会わない珍しい男が立っていた。

焦げ茶のスーツに銀縁の眼鏡。白髪交じりの髪をオールバックにしている。

山崎だ。

経営企画部長の送別会にIT管理本部の部長が顔を出しているのは当然なのだろうが、まさか会うとは思ひもなかった。

さつき舞野の携帯に山崎から着信があった。きつと舞野を探しているに違いない。

「すまない。大丈夫かい？」

眼鏡の奥の切れ長の目が、何事にも動じない余裕のある男の表情を作っている。

歳は五十前だろうが、洒落た服のセンスが若く見せている。舞野と並んで歩いていたら、ダンディーなパパと可愛い息子といったところか。

「すみません。後ろ見てなくて……」

「いや、いいんだ。えっと……雪菜君だったね。舞野君は見なかった？」

数回しか会った事が無いのに、山崎が自分の名前を知っていて驚く。

山崎は俺にもう目をつけているかもしれないと舞野は言っていた。あながち間違いではないのかもしれない。

「舞野ならさつき家に帰りました。飲み過ぎて気分が悪くなったみたいで」

例えば上辺だけの恋人でも、自分の目の前で舞野を連れ去るのは許さない。一応俺にも意地がある。

「そうか……」と顎に手をやって、山崎が何かを考えながら天井を見上げる。

「舞野に何か用でも？」

「いや、大した用じゃ無いんだ。その……この後、一杯付き合ってもらおうかと思ってね」

「そうですか……。もし良ければ、俺が代わりにお付き合いしますけど？」

勝負に出た。

「えっ、いいのかい？ 君がそう言ってくれるなら——」

案の定食い付いた。

こんな男一人、堕とすのは簡単だ。

「今から二人で抜け出しませんか？　ここ退屈だし、まだ終わるまでには時間もかかりそうですから」

悪戯な笑顔を作って誘惑する。

舞野を見つけられたら、元も子もない。

「そうだな……。実は今日、車なんだ。今ちよつとホテル住まいでね。ここから少し遠いが、一度ホテルに車を置いて、その近くで飲まないか？　海も近いし良い場所だよ」

海も近いし、すぐ部屋に連れ込めるから良い場所、なんだろう？

「もちろん、構いません」と、自分が出来る一番可愛い笑顔を返した。

「じゃあ、行こうか。嬉しいな――、君と飲めるとは思ってもみなかった」

「俺も山崎部長と飲めるなんて、夢みたいです」

色っぽく囁き、周りに人がいないのを確認して山崎の腕に手を回す。

山崎は少し驚いた表情をしたが、すぐに落ち着いた含み笑いを浮かべた。

二人でエレベーターホールへ行くと、安藤の姿はもう無い。

一度ロビーに降りて、フロントで預けていたカバンを受け取る。

地下駐車場に向かうためにもう一度エレベーターに乗り込むと、

山崎の手が俺の腰に回った。舞野にもこんな事をするのだろうか？　若干苛立つ。

地下二階でエレベーターを降りると、生温かい空気に混じって微かな煙草の匂いがした。

腰に手を添えられたまま、明るい自販機の横を抜けて駐車場へ入る。

車はエレベーターから降りてすぐの場所にあった。

音を立ててロックが解除された赤のジャガーに見覚えがある。
舞野が知り合いに借りたと言って乗っていた車だ。俺も運転した
事がある。

改めて舞野は山崎の愛人なのだと教えられた気がした。

でも、それも今日までだ。

もうあの可愛い恋人を、この男からも、俺からも、解放してやる
う。

例え舞野はそれを望まなくても、これ以上可哀想な人間を増やし
ても仕方が無い。

暗い穴の底にいるのは俺一人で充分だ。

自分が欲しい物を、自分の身体を売って手に入れる。シンプルで
いいじゃないか。なんにも間に人を挟んで、そいつをボロボロにする
ことはない。

それに山崎と直接交渉した方が、ずっと効率がいい。ある意味、
もう舞野に用は無い。

醜い自分には似合わない、シルバーに輝くリングをそつと指から
抜き――舞野の手を離れた。引きずり込もうとしていた、細く白い
手を。

底深い沼で、可愛い童顔を見上げたまま、ゆっくりと自重で身体
が沈んで行く。

その可愛い顔はきつと今頃怒っているだろうな。そろそろ携帯が
鳴るかもしれない。

携帯の電源を落して、全てを断ち切った。

動き始めた車窓から、無機質な駐車場のコンクリート壁を眺めて

いる。

先程自分達が降りてきたエレベーターの横にあるのが、煙草の自販機だと気付いた。

エレベーターを降りた時に煙草の匂いがしたのはそのせいかと思った直後、嫌な予感に心臓が跳ねる。

目を凝らす。

エレベーターの入り口とは反対側の自販機の隣。非常階段の前の暗闇に、赤い火が浮遊している。

非常口の場所を知らせる淡い緑の光にぼんやりと照らされて、男が一人煙草を吸う。

流れる景色の中で、見知った顔の上司がこちらを見つめていた。

放す手（後書き）

今日は旦那が家にいるので文章を書く事はおろか、パソコンも見れません。携帯から更新しております。旦那は今日、ギックリ腰で欠勤です。月曜にまだ一歳にもならない息子と遊んでいてギックリいっちゃいました（－|－）なので、この連休は小さい怪獣と自分の男の面倒をみて平日以上に忙しい日を過ごしました。三十二歳の男がギックリ腰だなんて、本当に情けない限りですが、これでも一度は世界一好きだと思い込んで一緒にあった男ですので、畜生、てめえと思いながらも好きになった弱みで看病しております。小説の事はカミングアウトしていませんが「俺のこと、邪魔や思てるやろ？」と私の苛立ちに薄々感づいています。面倒な男やで。

光線

運命は、暗闇を貫く一筋の強い光のようなものだと思う。

どんなに曲がりくねった暗がりの道を歩いても、ある時サーチライトに見つけられたように、強い光の中に一人迷い込む。あまりの眩しさに顔をしかめて、逃げるように足を踏み出し、また闇を歩き始める。

どれだけ忘れていたつもりでも、一瞬照らされる強い光で、不意にこれが運命なんだと思い知らされる。

どれだけ抗ったつもりでも、人は運命を照らす光源に向かってしか歩けないのかもしれない。

真夜中に突然、強い光に照らされる。

眩しくて目を覚ます。

瞳を閉じているのに目がくらみ、顔をしかめる。

手をかざして光を遮る。

「んっ——」

寝返りをうって光に背を向けると、肩を引っ張られ、また眩しくなる。

「んん——、山崎さ、ん。……ちょっとは、寝かせて……下さい」

眠りに堕ちる直前まで繋がっていた男の名を呼ぶ。

今度は肩を揺さぶられる。

「おい」

低く静かな、どこか凄みのある声。

最大限に眉をひそめて、仕方なく薄目を開ける。
どこまでしつこい男なんだ。

ぼやけた視界の中、ベッドの脇で自分を見下ろしている男が、ス
ーツ姿だという事に気が付く。

さらに目を開けると、その男は、さっきまで自分の身体を揺さぶ
っていた男ではない。

その男の顔を知っているはずなのに、絶対にあり得ない条件下で
の出会いが、脳の顔認識機能をフリーズさせる。

「さっさと服着ろ。五分でここを出るぞ」

その声で現実に取り戻され、完全に覚醒した。

飛び起きて座位のまま後ずさると、左手の布団の感触が突如消え
て、かぶっていた毛布ごと背中から床に転げ落ちた。

「いつ……」

何も着ていない身体に激痛が走り、顔を歪めながら窓際に寄る。
怯えて小さくうずくまり、男を見上げた。

床に脱ぎ捨ててあった俺の服を、男がこちらに投げる。

足元におちたスーツの中から、とりあえず下着に手を伸ばす。

「どうして……ここに……」

「雪菜。遊びは終わりだ。お前は裏の事に足を突っ込み過ぎた」
冷気を宿した視線を細めて、俺を見下ろす。

最後にこの男と会ったのは、送別会が開かれたホテルの地下駐車
場。

淫らな遠い記憶を呼び覚ます。
明るい部屋。

大きな窓。夜景。

ダブルベッドの上。

ホテルの一室。

『最上階でね。夜景が綺麗なんだ。酒も沢山種類があるし——私の部屋で飲まないか？』

そう言つて、山崎は俺の肩を抱いた。

ホテルの駐車場に車を置いてから、外に飲みに行くのをやめて直接この部屋に上がって来たんじゃないかったか。

それから一二杯酒を飲んで、お決まりのように二人でベッドに入つた。

ネチネチと執拗に続いた山崎との行為を思い出す。

気持ち悪くて、苦しかった。

舞野の手首にいつもついているのと同じ擦過傷が、俺の両手首にも巻いている。

あいつの言つたとおり、山崎はろくな男じゃない。

舞野と寝る方がずっとマシだと思った。今更になって、舞野との行為は愛に満ちていたのだと気付く。

ところが、直視するのも嫌だった男の裸体が、今はベッドの上に無い。

寝具の乱れを確認すると、先程まで隣にいたのは確かなのだろうが、部屋を見渡しても姿は無い。

代わりに何故か、同じ課の上司が目の前に立って、こちらを見下ろしている。

DEEP BLUEの奥で出会った時のように、近寄り難い危険な雰囲気だ。

まったく状況が把握できないまま、とりあえずスーツを着る。

そういえば、寝ている間にドアの方で男の話し声が聞こえた気がした。廊下で誰かが喋っているのだと思っていたが、あれは山崎の話し声だったのかもしれない。

服を着終わると「付いて来い」と言われ、二人で部屋を出た。

安藤は廊下に人がいないことを確認して大股で歩き出し、その背中に付いて行った。

眉を少し寄せた横顔。神経がピリピリしているのがわかる。

エレベーターホールを通り過ぎ、「関係者以外立ち入り禁止」とかかれたドアを押す。

入ってすぐの暗闇に、スタッフ用のエレベーターがある。

下向きの矢印ボタンを安藤が押すと、分厚いドアの向うでワイヤーが巻き取られる低音が響いた。

「あの……山崎部長は……」

思い切って口を開く。。

山崎の居場所を知りたかったが、安藤は何も答えない。聞くなということだろう。

山崎はいつたいどこへ行ったんだ。大きなスーツケースやその他の荷物も部屋に置いたままだ。

エレベーターはなかなか来ない。

「そんなに会いたいのか。あんな男に」

安藤からの返事が、時間差をもって返って来た。

地下のマグマがうごめくように、何かを宿した静かな声だった。

「いえ……そういう訳じゃ……」

やっと明るい口を開いた箱に、二人で乗り込む。

「一階だ」

先に乗り込んだ安藤が、後ろから支持する。

言われた通り、一階のボタンを押した。

空気を軽くしながら、箱が下へ堕ちていく。

「もう、エレベーター平気なんですか？」

「ああ」

この質問にはすぐに答えが返って来た。

安藤と二人でエレベーターに乗るのはどれくらい振りだろう。

あれからいろんな事があり過ぎて、もうあの時の自分が別人のよう
うに感じる。

「じゃあ、もう俺は必要ありませんね」

自分でも何故そんなことを口走るのか、分からなかった。

何かを確認するため。

ただ「ああ」と一言答えて欲しかった。

いきなり後ろから抱き締められる。

たくましい二の腕。

硬い筋肉。

煙草の匂い。

ゆるりと囲む温もりに、自分の身体がとてつもなく冷えていたの
だと気付く。

懐かしい。

まだ俺が別々だった時の記憶。

あの時とは比べ物にならないくらい、心も身体も汚れ堕ちてしまっている。

「やめてください。穢れた身体です……」

人工的な粘液とそうでない粘液で、身体中がベトベトしていて生臭い。

回された腕に手をやると、いつそうきつく抱き締められた。

「どうしてこの箱が、嫌いじゃなくなったか知りたいか？ 乗るたびにお前とのことを思い出せるからだ、雪菜」

抑えている感情が染み出した声を出して、耳元で囁く。それを感じて目を閉じる。

「安藤さん……俺は、もう……」

「あんな男と寝て楽しかったか？ どんなことしたんだ」
張り詰めた言葉がどこか自虐的に聞こえる。

いつも冷静な上司が出す感情的な声に、ああこの人はまだ、この箱が怖いんだと気付いた。

「ビジネスの話です。課長には関係ありません」
目を開いて現実を見る。

「俺が甘かった。こんなに後悔する事になるなら、お前を監禁してでも止めておくんだった」

その言葉が含む裏の意味の多さに、背筋がゾクリとする。

未だに状況が全く飲み込めずにいるのだ。

それでいて、もう自分がいるのは表の世界では無いことを知っている。置かれた現状を知るのが怖い。

エレベーターが一階に着いて扉が開くと、そこは暗い倉庫だった。従業員しか入れないバックヤードだろう。

安藤の背中を追って、床に詰れたダンボールの間を歩いていく。

「山崎はどこに行くと言っていたいたか？」

前に行く安藤が、歩きながら聞いた。

エレベーターでの声とは違い、冷静さを取り戻した感情の無い声だ。

「……そういえば、沖縄に行くと言っていました」

少し考えて、山崎がベッドで話していたことを思い出して言う。すると安藤は鼻で笑った。

「一緒に行こうと言われたんだろ。付いて行くと言ったのか？」
答えられなかった。

ベッドの中の話なので本気にはしていなかったが、確かに週末から旅行に付き合わないかと言われた。

どう答えたかは覚えていない。でも断りはしなかったように思う。

「一緒に行かなくて正解だ。帰って来れなくなるとこだったぞ？」

「どういうことですか？ それ」

「あいつは沖縄に高飛びして、しばらく身を隠すつもりでいた。海外じゃ足がつくからな」

どうりで大きなスーツケースが二個も部屋にあるわけだ。旅行なんてのも大嘘か。

「どうして、山崎部長が隠れなきゃいけないんです」

「危ない連中に追われてるからさ。沖縄に飛んだところで、あっちにだって極道はある。お前は山崎と、沖縄で心中させられるところだったんだぞ？」

軽く笑って言う安藤の話に、現実味が無い。

「じゃあ部長は……」追っていた連中に連れて行かれたのか。

その連中と安藤はどういう関係なんだ。安藤は極道という言葉を使ったが。

俺をどうしようとしているのか……。
知れば知るほど謎が深まる。

錆びた扉の前で安藤は立ち止まる。扉のすりガラスの向こうが、やや明るい。きっと扉の向こうは外だ。

安藤が振り返って、正面から俺を見据える。

「雪菜。いいか、一回しか言わないからよく聞け。

このドアから国道に出れる。お前はそこでタクシーを拾って、真っ直ぐマンションへ帰れ。

部屋に帰ったら鍵をしめて、二十分以内にパソコンの中のデータを全て消去しろ。舞野から貰った顧客名簿も全てだ。

それから風呂に入って、いつも通りテレビ見て寝ろ。

今後何があっても、誰に何を聞かれても、データの事と今夜の事は知らぬ存ぜぬで通せ。何をされてもだぞ？

今晚お前は送別会から帰って、マンションの部屋でずっと大人しく一人で過ごしていた。そういう事にしておけ。いいな？」

「ど、どうして、顧客名簿のこと……」

驚いて言葉が続かない。

リストだけでなく、舞野の名前まで飛び出した。

この男は何をどこまで知っているのだろう。

それに全てを無かった事にしろだなんて、何故そんな事を言うのかも分からない。

「あのリストは表に持ち出していいもんじゃない。あのデータひとつで、いくつも会社が潰れるんだ。

盗む方も盗まれる方も躍起になって手段を選ばなくなる。そこに

金の匂いを嗅ぎ付けた輩が加わって、血生臭く奪い合う。

そうならなあ、雪菜。お前の命なんて紙切れ以下の扱いになっちゃうんだよ。

忠告しただろ？ 足を突っ込むなって。好奇心は身を滅ぼすって。そうやってニユースにもならず消えていった奴はいくらでもいるんだ。

お前はあまりにも多くのことを知り過ぎた」

血の気が引く。

「俺は……俺は、消されるん、ですか……？」

「そうならないように、俺だって努力してる。とにかく、俺がしてやれるのはここまでだ。

今からここを出て、俺が言った通りにしろ。それが唯一、お前が助かる方法だ。

分かったら、行け」

背中を押されて、扉を開ける。

風が冷たい。

安藤に言われた通り、国道に出てタクシーを拾い、マンションへ帰った。

エントランスに入ると、壁に並んだ郵便受けが一つだけ開いている。近付いてみると、自分の部屋番号の郵便受けだ。鍵が壊されて中に入っていた電話会社の請求書の封が破られていた。

誰がこんなこと……。安藤の言葉が現実味を増して重く押し掛かる。

怖くなって急いでエレベータに乗り、部屋に帰った。

部屋に入り、ドアに鍵とチェーンロックをかけて、パソコンを立ち上げて片っ端からデータを消していく。メモリースティックの

中身も全て消去した。

シャワーを浴びてから、とりあえずテレビをつけて、缶ビールを開ける。

ビールは水のように無味無臭で、テレビの音も頭に入ってこない。ただひたすら自分の置かれた状況を考えている。

山崎は情報を横流ししたのが原因で、何かのトラブルに巻き込まれた。そして沖縄に高飛びする前に、あのホテルから連れさらわれたのだろう。

安藤は俺の身を案じ、俺をホテルから逃がした。俺は狙われている。

俺の持っていたデータと命、どちらもだ。もしかしたら山崎はもう死んでいるかもしれないと思い、ゾツとする。

突然携帯が鳴った。

タクシーの中で電源を入れたのを忘れていた。画面を見ると、見た事もない携帯の番号からかかってきている。しばらく放っておくと、鳴り止む。

また電話が鳴った。次は部屋の固定電話だ。さつきと同じ番号。

留守電に切り替わり、すぐに回線が切れる音がした。

電話会社の請求書には、携帯も固定電話も番号が明記されている。あの郵便受けを壊して請求書を見たのが、俺を追っている連中だったら。

生きた心地がしない。
さっきの着信が、もう逃げ場はないぞと言われているように感じられた。

もしかしたら、もうマンションの近くにいるかもしれない。

チャイムの音――。

心臓が飛び跳ねる。
息をひそめる。

二回目のチャイム。
吐き気を抑えて目を閉じる。

三回目。
四回目。

安藤の言葉を思い出す。
『今後何があっても、誰に何を聞かれても、データの事と今夜の事は知らぬ存ぜぬで通せ。何をされてもだぞ？』
『それが唯一、お前が助かる方法だ』

五回目。
立ち上がって、玄関へ行く。

ドアスコープから覗くと――立っていたのは、安藤だった。
ホッとしてチェーンロックと鍵を解除し、扉を開ける。

「安藤さ……」言いかけて、動きを止める。

安藤の後ろにスーツ姿の若い男が二人。一人はがたいが良く、もう一人は眼鏡をかけている。どちらも厳しい顔付で、普通のサラリーマンには無い重たい雰囲気だ。

誰なのか聞きたかったが、そういう空気では無い事に気付く。

見慣れた安藤の顔がやけに余所余所しい。

安藤が内ポケットから何か取り出す。

「夜分にすみません」

まるで初対面のような挨拶。

緊張がはしる。

胸の高さに掲げた、黒い物を開く。

上の面に制服を着た男の顔写真。下面には、金属製のバッジのような物。

見上げた顔が、その顔写真と同じだ。

同じ企画課の自分の上司。

一度好きになって、まだ忘れられない男。

落ち着いた静かな声で安藤が言う。

「警視庁刑事部、捜査二課です。」

雪菜さん。勤め先の企業情報の流出について、二三お聞きしたい
事がありますので、署の方までご同行願えますか」

光線（後書き）

読んで下さりありがとうございます。

可哀想なぎつくり腰野郎も、今日は腰を押さえながら出勤いたしました。

昨日は沢山の方から励ましの拍手コメを頂きまして、本当に救われる気持ちでした。

ありがとうございますm（　　）m

案外主婦の方が多く閲覧して下さっていることも分かって嬉しく思いました♪

祝　B L大好き主婦同盟♪

子供を育てながら、B L小説読んじやうし、書いちゃう。いや、素晴すい。

うちの息子は、昼寝中もちょっとした音で薄目を開けて睨んでくる、年寄りのような神経質野郎です。子供が寝ている時間に家事終わらしちゃう♪という方々が羨ましい！　キーボードを打つ音にも気を使います（ノド。）シユン

起きている時もなかなか態度のでかい御子で、周りからは「社長」と呼ばれたりしています。

今は教育テレビの「いないいないばあ」という番組を録画したやつを見させて、だましましたましパソコンに向かっております。この番組では、ワンワンと呼ばれる犬の着ぐるみが、汚れるのも厭わず積極的に外口ケに出ており、なかなか感心させられます。（・　・）エライ！！

すみません。ただの育児日記になっちゃいました。

次回は月曜！！

気になるところで終わって申し訳ありませんm(_____)m

ハッピーエンドの裏

「つまり……他の誰かが、雪菜さんのパスワードを勝手に使用して社内のデータを閲覧したと、そういう事ですか？」

「はい。俺は人のパソコンのデータなんて覗き見してません。だから、考えられるとしたら、それくらいです」

「ふ……ん。雪菜さん、失礼ですがパスワードには、どのような文字を？」

「生年月日です」

想像していたよりもはるかに、取調室は明るく清潔だった。

椅子と机はオフィス用の丸みを帯びたデザインで、壁にかかったマジックミラーと思しき鏡が無ければ、商談に使う小さな会議室に思える。

向かいに座っている男は、緑のファイルにとじられた書類に目を通しながら俺に質問を続け、時折ペンで何か書き込んでいる。

安藤と一緒に部屋に来た、眼鏡の若い男だ。

言葉遣いも対応も丁寧な男だが、言葉に抑揚が無く、どこか義務的で冷たい印象を持った。

「雪菜さんは今の会社に就職される前年、今の会社のライバル企業にお勤めですね？ 何故前の会社を辞められたのです？」

さつきから、割りとするどい質問が飛んでくる。厳しい追求を受けるわけではないが、一つ一つの質問が的確で、回避するのに苦労

した。

向こうが持っている自分の情報の多さに一々驚かされる。アクセス履歴がおかしい事や、俺が二時間早く出勤していた事まで知っている。

安藤が警察の人間だったのだから当然と言えば当然だが、初対面の人間にこうも自分の行動を根掘り葉掘り聞かれると好い気はしない。

「それは……。前の会社に将来性を感じなかったというか……。今の会社の方が自分に合っていると思って……」

「なるほど……。前の会社の人とは連絡を取ったりしますか？」
言葉とは裏腹に、まったく納得した様子はない。

「いえ、してません」

「……三田さんという方をご存知ですか？ 三田市郎さん」
顔が強張る。

三田は、俺が毎月情報を送っている前の会社の上司だ。
何も答えずにいると、男は尚も質問を続ける。

「雪菜さんの部屋にあった固定電話の通話記録を調べさせて頂きました。月に一度程、この三田市郎という前勤められていた会社の方と通話されていますが、これはどういった内容でしょうか」

「……。世間話です。部下だった俺を心配してくれて、電話してくれるだけです」

「でも、三田さんはあなたの直属の上司ではありませんでしたよね？ 課も部門も全く違う。どういう接点でお知り合いに？」

「それは……。たまたま……。飲み会か何かで……」
嘘だ。

三田とは、今の会社に就職してくれと部長室に呼ばれた時に、初めて紹介されて知り合った。

「その飲み会というのは？」

やばい。

あまり多く話を作りすぎると、後々同じ質問をされた時にぼろが出る。

「よく覚えていません」と言葉を濁した。

ノックの音――。

部屋のドアが開き、別の男が顔を覗かせる。マンションへ安藤と来ていたもう一人の、がたいの良い男だ。

「ちょっと失礼します」と眼鏡の男が立ち上がって部屋を出て行く。

「あ、コーヒーと紅茶、どちらになさいます？」

もう一度ドアが開き、眼鏡が覗く。

「コーヒーで」

まだまだ家には帰さないという意味なのか。溜め息をつく。

男が帰って来るまで、小さな部屋で一人ぼんやりとしていた。

壁の鏡に目線を向ける。

あの向こうから安藤が見ているのではないかと思うと、目が離せなくなる。

暗い鏡に映る自分の姿。

驚くほど肌は青白く、漆黒の髪が余計にそれを際立たしている。

髪と同じ漆黒の瞳は虚ろで、感情が無い。

不気味で、それでいて妖艶。

おぞましい魔物が、極上の美貌に化けている。

どんなに綺麗に化けても醜悪な本性は隠し通せない。

生気のない表情、爬虫類のような目、人離れたヌルリと透き通る白い肌。きつと舌は先が二つに分かれていて毒々しい赤色。血は黒い。

ハヤトでもなく、シュンでもなく、雪菜隼でもない。

美しいということが、この上なく醜い。

孤独に蝕まれ、堕ちきった一塊の肉。

俺はこの身体を乗っ取って、どうしたいのか。

鏡の中の綺麗な悪魔が微笑した。

ドアが開いて、さっきの眼鏡の男が紙コップを二つ持って入ってきた。

香ばしいコーヒーの香りが部屋に広がる。

壁の時計を見ると、もう日が変わろうとしている。

「お待たせしました」

浮かない表情でコーヒーを俺の前に置いて椅子に座り、また先程と同じように緑のファイルを開く。

中指で眼鏡の位置を直す。

「雪菜さん。今日は仕事が終わってから何をされてました？」

ひと息おいて、また取調べが再開する。

「今日は会社の近くのホテルで送別会があったので、それに出席していました」

「その送別会は最後まで？」

「いえ。しんどくなったので途中で抜けて、マンションに帰りました」

「それからずっとマンションの部屋に？」

「はい」

安藤が言ったとおり、山崎とホテルに行ったことは伏せておく。

「雪菜さんは、IT事業本部の山崎部長をご存知ですか？」

唾を飲む。

「はあ。何度か顔を見た事は……」

「今日の送別会では会いました？」

背筋が凍る。汗が一筋、喉元を流れた。

山崎と二人でいた証拠を出されたら、終わりだ。

「さあ……。酔っていたので、あまり覚えていません。もしかした

ら挨拶くらいはしたのかも……」

「そうですか」と、男はページをめくる。

浅く息を吐いて、また眼鏡を中指で押し上げ表情を曇らせる。

「今日帰ってきてから、自宅のパソコンは触りましたか？」

きつと俺を部屋から連れ出した後、部屋のパソコンの中身を確認したのだ。こんな夜遅くに、いきなり任意同行をかけたのはそのためではないかと読んでいる。

いきなり車に乗せられ、任意とは名ばかりの同行を余儀なくされた。

パソコンの中身を見るために俺を部屋から連れ出したのだ。本当の捜索なら令状がいるはずだから、俺に見せられない不当な捜査だ。さつき一度席を立ったのは、パソコンをチェックした結果報告が何かだろう。

パソコンのデータは安藤に言われた通り全て消去した。何も残っていないかったはずだ。

「あ……そういえば、メールのチェックをするために、一回だけ触りましたよ。パソコン」

「しんどくて帰って来たのにですか？」

初めて男が不信感をあらわにした。

きつと目当てのデータがパソコンに無かったので焦っているのだ。「毎日の日課みたいなものですから」

「メール以外は触ってません？」

「はい。たぶん……」

「たぶん？」

「酔っていたので」

男が溜め息をつく。明らかに苛立った様子だ。

「あの……安藤課長は……」

「はい？」

胸の奥につかえていた事を口に出す。

これだけ詰問されているのだ、一つくらいはこっちから訪ねても罰はあたらないうらう。

「その、安藤さんは、警察の人、です、よね……？」

シルバーフレームのレンズを乱反射させて、男はしばらく視線を泳がせる。

「すみません。捜査員の情報に関しましては、教えられない決まりになっていまして……。こちらは沢山質問に答えて頂いていますのに、申し訳の無いことです」

「あ、いえ」

男は心底申し訳無さそうに頭を深く下げた。

元々簡単に教えてくれるとは思っていなかったが、逆に謝られるとは思ってもしなかったので少し気後れした。

聞かなくても安藤が警察の人間であることは、動かしようの無い事実だ。情報漏えいの証拠集めのためだとしたら不審な行動にも、何となくだが説明がつく。

「では、今日部屋に帰ってからの事を、詳しくお聞かせ願えますか」
男はファイルを閉じて、紙コップを手にとった。

取調べは二日続けて行われた。

二日目は昼過ぎから呼ばれて、一日目とほぼ同じ質問が繰り返される。夜の暗さではつきりとは見えなかった警視庁の建物は、昼間見ても全貌がつかめないくらい巨大なビルの群集で、自分には到底立ち向かうことが出来ない圧倒的な組織だということだけが理解できた。

昨日と同じ回答を繰り返して、圧迫されるような大きなビルから吐き出されたのが夜の九時過ぎ。

マンションの玄関で会って以来、安藤と顔を合わすことはなかった。

警察から開放されたその足でDEEP BLUEへ向かう。

何となく安藤に会えるのではないかと思ったからだ。

ちゃんと会って話が聞きたい。慌しく変化した状況だけで、自分の立場を全て理解出来るほど物分りは良くない。安藤の口から直接説明をしてもらうのだ。

DEEP BLUEのドアを開けると、平日だというのに前が見えないくらいの人で混み合っていた。

腕時計を見ると、もう十一時になろうとしている。

馴れ馴れしく話しかけてくる男達に余裕の無い返事をしながら、人混みを掻き分けて奥へ進む。

カウンターで忙しそうにしている金髪のバーテンダーをつかまえて、身を寄せる。

「すみません。今日、安藤さんは……」

安藤の名前を出した途端、優しそだった表情が一変して怪訝に目を細める。

「失礼ですが、どちら様でしょうか」

「……元部下です。安藤さんに会いたいんですけど、携帯も繋がらなくて……」

昼に何度か携帯にはかけてみたが、電源が入っていない。

「安藤さんは、今日はいらしてません。滅多にうちには顔を出されませんか」

「そうですか」

「何か伝言があれば、お伝えしましょうか？」

「いえ、大丈夫です。ありがとうございました」

カウンターから離れて、喧騒に踵を返す。

肩と肩がぶつかる中を進みながら携帯を取り出し、もう一度安藤の携帯に発信した。

昼間かけた時とは違い、予想外に呼び出し音が鳴ったので足を止めて聴覚に神経を注ぐ。

……五回、六回、七回――。

やっぱり繋がらない。

そろそろ留守電に切り替わるところだろうと諦めて顔を上げると、人混みの中で見知った白い顔を見つけた。

「ユウ、タ……？」

舞野がドアの前に立ってこちらを見つめている。

混み合うバーの中で、青白い顔とサラサラとした茶髪が妙に浮いていた。

「ユウタ！」

携帯を閉じてポケットにしまう。

名前を呼びながらドアの方に寄るが、飛び交う話声や笑い声に声がかき消される。左肩を引いて人の間を縫うように歩き、人影の向うに見え隠れする童顔を目指した。

何とか舞野の前にたどり着くと、舞野はじっと俺を睨みつけたまま喋らない。

憂いを帯びたガラス玉の瞳に、鋭い怒りと悲しみが入り混じっている。

何から話せばいいのかわからなかった。

二日前に送別会で会った時とは、まるで状況が違っている。

俺が警察に引っ張られたのだから舞野も警察に呼ばれたかもしれない。だとしたら、それは俺のせいだ。

「ごめん、な」

そっと手をかざして茶髪を撫でると、人形のように整った顔が一

瞬、下唇を噛んで苦しそうに歪み、ドンツと正面から身体をぶつけて飛び込むように俺に身を寄せた。二日前まで恋人だった男の背中に腕を回して抱き寄せると、小刻みに震えている。

「先輩。どうして……。ずっと一緒にいてくれるって言ったのに。絶対山崎には近付かないって約束したのに……。どうして。どうしてですか……」

耳元で響く消え入る声。

辛そうで、悲しそうで、悔しそうで静かな、少年のような声。

こんなにも人を傷つけて、自分はいたい何がしたかったのか分からなくなる。

「ごめん……ごめんな」

茶髪に触れようとすると、するりと腕の中から身体が抜け、背中を向けて離れていく。

「ユウタ！ 待ってくれ！ ユウタ……」

ドアを押して出て行く舞野の背中を追おうとするが、足が動かない。声もかすれる。

あまりにも無力な自分に絶望して、閉まるドアを見つめたままその場に立ち尽くした。

俺は人を傷つけられても、救うことはできない。

恋人を深い穴に引きずり堕とせても、引っ張り上げることは出来ない。なぜなら自分が穴の底にいるからだ。

分かりきっていたことが、今更ながら無力感となって冷たい血液と一緒に全身を駆け巡る。

しばらくして、身体の違和感に気が付いた。

脇腹が濡れている。

シャツに何かが染み込み、地肌まで濡らしている。

誰かのドリンクがかかったのかと脇腹に手をやると、濡れたシャツが妙に生温かい。

薄暗い店内で目を凝らして掌を見下ろすと、黒い液体がべったりと滴っている。

この世の者ではない、真っ黒な体液。
石油のように、どす黒く照っている。

黒い掌を眺める。

やっぱり俺は、もう、人間じゃないんだ。

温かい液体が、布の内側で太腿に伝うのを感じる。

「ねえ。お兄さん一人？　もしかして、さっき振られちゃった？
良かったら僕が慰めて——」

俺の顔から腰あたりに視線を下げた、知らない少年の表情が青ざめて引き攣り、甘えた声がそのまま悲鳴へと変わる。

下半身の感覚を失って、その場で膝をついて倒れる。

白む天井。

騒然とした空気の中で視界がにじんでいく。

身体のまわりで響く、数え切れない足音、少年の悲鳴、誰かを呼ぶ声。

美貌を繕っていた魔法が剥がれ落ちていく。

醜く汚らわしい獣が剣で一突き。その後世界はハッピーエンド。
そうだな。

最初からそういう風に決まっていたのかもしれない。

誰もがその結末を知っていて、話にのめり込む。
その為に悪役はいる。

無性に眠たくなってきた。

そういえば最近ろくに寝ていない。

耐え難い睡魔に瞼を落す。

喜びも悲しみも何も無い、ただ静かで暗い。

そんな夜が欲しいと思った。

ハッピーエンドの裏（後書き）

ε - (。・A・。) フー。

まあ、こんな感じです……。

ここで「完」ではありませんのでご安心下さい。

先週末に気になる所で終わったと思ったら、今日もまだですね……

許されたし m (――) m

明日からはいよいよ完結に向かって突っ走ります♪♪

生まれ変わり

会社のトイレで洗面台に向かって立っている。

薄汚れた鏡の向こうから、こちらを見つめているのはシュンだ。

『ごめん……ごめん……』

何を謝っているのかは自分でも分からないが、かすれた声でただその言葉だけを繰り返す。

鏡の中の男は優しく微笑んでいる。

視界が水没して、温かい水滴が頬を伝う。

『隼。 また 生まれ変わって 最初から 何度でも やり直せば いいわ』

シュンが消えていて、知らない女の顔が鏡に映っている。

自分と同じくらいの歳の清楚な女で、どこことなく雰囲気はシュンに似ている。

『生まれ、変わって？ ねえ、お母さん。 ……お母さん、死ぬの…？』

いつの間にか自分の声が幼い子供の声になり、言おうとした覚えの無い言葉を吐いていた。

これは……俺の母親、か……？

物心ついた時に、既に母はこの世にいなかった。

顔も知らない母親に、あなたはとても似ているわと祖母がよく言っていたのを思い出す。

その祖母も四年前に他界した。

『お母さん……死んじゃう、の……？ 死なないよね……？』

すると女は鈴の音のような声で笑う。

『何言ってるの？ 隼。』

お母さんも隼も、毎日死んで、毎日生まれ変わってるじゃない。人は毎日別人に生まれ変わっているの。昨日とまったく同じ人間なんて、一人もいないわ。

世界は毎晩一度終わって、毎朝新しく始まって。気付かないだけ。

ねえ、隼。

だから人はみんな、死んで…… 生まれ変わるの。

生まれ変わりたいと思えば、毎日生まれ変わるのよ。そして何度でもやり直せる。何度でも何度でも。

何度でも…… 何度でも……』

トイレのタイルに女の声が反響する。

『何度でも…… 何度でも……』

鏡にピキリと一筋の亀裂が入る。みるみるうちに亀裂は網を広げ、知らぬ間に女と代わって映って

いた自分の顔がひび割れていく。

後ろに映るテーブルで、ミルクバーが溶けて傾いていく。

落ちそうなそれに手を伸ばそうと一歩踏み出すと、何かが素足にあたった。

ころろと転がる、林檎飴。一口だけ小さくかじられた、不完全な球体が板の間の上を回転する。

突然、床が抜けて身体の支えを失った。

バランスを崩して、真つ逆さまに堕ちていく。

『何度でも……何度でも……何度でも——』

女の声がエコーを効かせて何度もこだまする。

凄いスピードで上昇していく暗闇と、重力に従順な自分の身体。がむしゃらにもがいて、何度も空気をつかむ。

「……ユン。」

シュ……。シュン……。……隼」

誰かが呼んでいる。

「隼。……隼」

聞き覚えのある深く優しい声。

何度目かの手探りで、やっと温もりのある確かなものをつかんだ。

温かくて、全てを任せられる力強さ。

『何度でも……何度でも……』

水面から突如浮上したように、ハッと目を見開いて、息を吸う。

眩しい。

また運命の強い光に照らされている。

けたたましい警報音が鳴り響く。

真っ白な視界の中に天井が現れた。

そうか。ここはエレベーターの中だ。

下降する箱の中。

息を吐こうとすると、意思とは逆に強引に空気が肺に送り込まれる。

息が出来ない。

喉の奥まで刺さる何かが、強制的に換気をしようとしている。

苦しくて涙がにじむ。

やっとなんだ温もりを離さないように手を握り込むと、向うもぎゅっと握り返してくれる。

明るい天井がエレベーターよりもずっと広いことに気が付く。

すぐ横で人の気配がして、話し声が聞こえる。

突然目の前にナース服の女が現れた。

心配そうにこちらに覗きながら、小さな小瓶に注射器を突き刺し、振って何かの薬品を溶いている。

女は視界の端に映る細いチューブを手に取り、そこに注射器をあてがう。

あのチューブはどこに繋がっているんだろう。

そう思っているうちに、また意識が薄れて遠退いていく。

月も星もない、静かな深い夜。

『何度でも……何度でも……何度でも……』

ずっとその声だけが遠くで響いている。

終わりが無いと思っていた夜が明けたのは、朝方の五時。秋雨だった。

病院の一室。

無数の細い管が身体に繋がっている。

チューブが全て外れるまでに一週間。

それからリハビリをして、また一週間。

全治一ヶ月の内、有に半分程の期間を意識が無いまま過ごしていたらしい。

意識が戻って喋れるようになると、男が二人見舞いに来た。

一人は刺される前日まで警察で俺の取調べをしていた、眼鏡の男だ。幹田という名前らしい。もう一人は林という初対面の男だった。

あの日あなたに監視をつけなかったのは我々の不手際ですと謝罪され、刺された夜のことを詳しく聞かれた。

『会社の顧客情報を持ち出し横流ししたとして、警視庁は1日、営業事業本部長、山崎義彦（48）容疑者を、不正競争防止法違反（営業秘密の不正取得など）容疑で逮捕した。

また山崎容疑者には、事業費の一部を不正に流用していた疑いもかつており、警察は捜査を進めている。

これは架空取引に対する強制捜査段階で偶然浮上したもので、氷山の一角と考えられている。

同社には元役員を含めた不可解な資金の流れや、架空社員の存在が取り沙汰されており、今回の捜査執行により企業ぐるみでの大規模な違法行為が摘発されると予想される』

俺が刺された二日後に会社に強制捜査が入り、翌朝の新聞の社会面に山崎の逮捕が大きく載っていた。

あの日、ホテルから山崎を連れ出したのは警察だった。その中で安藤は俺を逃がしてくれたのだ。

それから一ヶ月ほどたった今でも、新聞の一面に自分が勤めていた社名が載ることがある。

巨額脱税の疑い、社長辞任、取締役逮捕、存続の危機。

俺が手に入れていた顧客リストに関する記事はどこにも無かった。

日々新たな逮捕者が出る中で、明日は我が身だと怯えていたら、幹田が俺への疑いが晴れたことを報告しに病室を訪れた。

そして俺を刺した犯人がまだ捕まらないことを詫びた。
当然だ。

色黒の年配の男。刺した犯人の特徴を聞かれて、舞野とは正反対

の特徴を伝えておいた。

幹田は、データを狙った奴らが山崎が警察に引つ張られたことに焦り、何かの間違いで俺に狙いを定めたのだろうと疑わない。

郵便受けを壊したのはそうかもしれないが、俺を刺したのは俺が裏切った元恋人だ。

幹田はその後も、見舞い客が全くいない俺を気遣ってか、三日に一度は顔を出した。

防犯上、売店に行くこともできない俺のために日用品や菓子などを買ってきてくれる。毎回病院の前の花屋に寄ってから来るので、花瓶の花を切らすことは一度もなかった。

「花は安藤さんから預かったお金で買っていますので」と、花瓶を置くときにいつも幹田は付け加える。至って真面目な男だ。映画鑑賞の趣味が合うので、よく洋画の話をした。

幹田の話には、たまに安藤の名前が出る。

「退院したら安藤さんと三人で食事に行きましよう」

そう言ってくれるのは嬉しかったが、きっと安藤はそれに応じない。一緒に食事に行けるくらいなら、見舞いに来ているはずだ。

それでも、そうやって幹田を通じて安藤と繋がっていることが嬉しかった。少しでも安藤の存在を感じられることに満足した。

運命なら、きっといつか会える日が来る。

そう考えては安堵した。

退院の日の午前中に、隣の病室へ向かう。

防犯上からか、個室のドアはどこも全開にされている。俺の部屋だけネームプレートが外され、誰が入院しているのか分からないようにしてあった。

隣の部屋には『三木 聡』ときちんと患者名が記載されている。

廊下から部屋を覗くと、男がベッドに座って新聞を読んでいる。

「すみません」と声をかけると、男は顔を上げた。

茶髪で左頬にガーゼを貼っており、首には火傷痕のようなケロイドが露出している。歳は、俺より少し下だろう。

「あの。隣の部屋の雪菜といいます」

「はあ……」男は気の抜けた返事をする。

「今日の午後退院するんで、この雑誌、カオル君に渡してもらえますか？」

「カオ、ル……？」

「えっ、はい。カオル、くん……。いつも見舞いに来てますよね……？」

「あいつ……カオルって名前なんですか……？」

意外だった。

毎日のように見舞いに来る相手の名前を知らないなんて事があるのだろうか。

隣の部屋のこの男は俺同様に訳ありなのか、ほぼ毎日見舞いに訪れる少年が一人いるだけで、それ以外には見舞い客が一人もいない。少年は毎日夕方に隣の部屋を訪ね、面会時間終了と同時に帰っていく。

極まれに、俺にもお菓子や花の差し入れを届けてくれる。その時に幹田が買ってきてくれた映画雑誌を興味深そうに覗いていたので、どうせ捨てるならあの少年にあげようと、さっき思いついたのだ。

少年は自分の名前を「カオル」と名乗った。

「カオル君とは、親戚か何かじゃ……」

少年はいつもこの男のことを「聡さん」と親しげに呼んでいたのだ、近い親戚か何かだと思い込んでいた。

「あ、いや……。親戚です。たぶん」

「たぶん……？」

「事故の後、記憶がちよつとはつきりしなくて……あいつが見舞いに来てくれるの、俺が寝てる時ばかりだし……ずっと誰だろうって……」

男の顔が苦しそうに歪んだ。

隣の部屋が、こんな複雑な患者だとは知らなかった。

「すみません。なんか……」

「親戚なのは、たぶん間違っていないと……死んだ弟に少し似てるんです、あいつの顔。歳も同じくらいだし。最初見たとき、俺、自分も死んだかと……」

男は宙を見つめたまま、独り言のように話す。

もしかして余計なことをしたのではないかと不安になってきた。

「カオル……。カオル……」

何かを思い出そうとするように、男は少年の名前を何度も呟いている。

「あの、この雑誌お願いしても……」

「ああ、すみません。ちゃんと渡します。ありがとうございました

……あいつの名前、教えてくれて」

我に返った男は、嬉しそうに礼を言った。

その笑顔で不安は消えた。

病院を出る前に会計に寄ると、お支払い頂く必要はございませんと言われた。おそらく警察に請求が行くようになっていたのだ。

自分の不始末が引き起こしたことだから、かなり気は引けたが、甘えることにしておいた。今からは金がある。

退院してから一週間で、退職と引越しを済ませた。

オフィスには寄らず直接会社の人事に行くと、余程退職者が多いのか、慣れた手つきで事務処理をしてくれた。

社宅を引き払い、とりあえず駅近のウィークリーマンションを借

り、次の仕事が決まるまでの繋ぎのバイトを探すために求人情報誌をあさった。

全てが新しく見える。

色付きだした木の葉が、アスファルトに溜まる雨水が、四角く切り取られた空が、こんなにも綺麗だったかと思っほど輝いている。

自分はシュンであつて、ハヤトであつて、雪菜隼でもある。
今までとは何もかもが違つて思えた。

『何度でも…… 何度でも…… 何度でも……』

また耳の奥で、女の声がこだまする。

扉が開いて、来客の知らせる鈴がカラカラと鳴る。

「いらっしやいませ」と静かに言つて、顔を上げた。

薄暗い店内に入つてきたのは、一人の女だ。

モデルのようにスタイルが良く、黒のパンツスーツが似合つてい
る。芸能人が顔を隠すためにするようなサングラスかけているが、
外さなくても美人だと分かる。

客は他に三人。

カウンターと小さい丸テーブルが四つ。マスターが厳選したジャ
ズが流れている。

狭いながらも趣きのある喫茶店で、夜はそのままジャズバーにな
る。

この店でバイトを始めてから二週間が過ぎ、コーヒーや紅茶の入

れ方にもやつと慣れてきた。

一番忙しい時でもテーブル席が全てうまることはない。それでもマスターの男は、俺がバイトを始めてから客が増えたと喜んでいる。拭いていたコーヒークップを置き、ギャルソンエプロンを手で掃ってから、女が座った奥の席に向かう。

「お決まりでしょうか？」

大声で愛想良くしなくてもいいのが、このバイトの良いところだ。

女は形の良い唇の片端を上げて、ニヤリと笑った。

「久しぶりね」

透き通った声で言って、女はサングラスを外した。

生まれ変わり（後書き）

ふうε・（´ωノー）遅くなりました。

書くペースが低迷気味。

どうも指が止まってしまいます。

昨日の夜は、家のチビラが夜泣きして大変だったので、その寝不足のせいかもしれません。

ああ。二三話書き溜めていた頃が懐かしい。

今回の内容に登場しますカオル君と三木という男は、「キングの買い物（番外）」で登場します。

「知りませんわよ。そんな人達」とおっしゃられる方、今後のストーリー展開に全く差し支えありませんのでご安心下さい。ちよつと気になるかも……な方は、「キングの買い物」本編と、番外「ガージェ越しの運命」をドウゾ♪（っ・ω・）っ）

お知らせですが、明日もしくは明後日の更新をお休みさせて頂きま
す。ペコ

チビラのアレルギー科の受診が明後日に控えておりますので、明日書いた分を明後日出すか、明日出して明後日休むか、ちよつと未定です。本当なら急いで完結に突っ走りたいのですが、この執筆ペースでは、受診の日に一話書き上げるのがちよつと無理そうです。

ちなみにチビラは卵アレルギーです。この前、マヨネーズを台所に撒き散らして、その中で泳ぎやがりました。案の定マヨネーズがついた皮膚にブツブツが出来てやんの。アホタレ！（。・。・）ノ

なんか愚痴ばっかの後書ですみません「――」・

明日はついにサイトの大リニューアル！！楽しみ〜ワァ——（〃

v ") — Y ! !

ではでは。

始動

「久しぶりね」

透き通った声で言って、女はサングラスを外す。

「元気だった？ 雪菜君」

視線が合っても、しばらくは誰だか分からなかった。

彫りの深い顔立ちに映えるブラウンのアイシャドウ。ベージュゴールドの口紅。

「京子……さん？」

五秒かかった。

女はにっこりと笑う。

京子は安藤の元妻だ。

会ったのは、夏祭りの日。俺にとっては忘れられない夜だった。

あの日浴衣で一緒に出店の前を歩いたが、あの時の印象とはかなり違っている。

清纯そうな優しい母親が、大人の雰囲気があるモデル並みの美人に変身していた。とても子供がいるとは思えない。

オリジナルブレンドの紅茶を頼み、京子は俺の仕事が終わるまで奥の席で待つと言った。

夕方の六時になり、マスターが喫茶店のメニューを下げ、アル

コールドリンクが書かれたメニューを代わりに並べる。

俺は壁にかかったスイーツのメニューボードに、今晚のお勧めメニューを書き足して仕事を終える。

私服に着替えて京子が待つ席に行くと、マスターがコーヒーと俺の好きなフランボワーズのケーキを二人分サービスしてくれた。

「本当に久し振り。元気にしてた？」

カップを置いて、京子が目線を上げる。一つ一つの動作に色気がある。

「はい。京子さん、どうしてここへ？ 俺がバイトしてるの知って来てくれたんですか？」

「ええ、まあそんなところ。かつこいい子がバイトで入ったって友達から聞いてね。主婦の情報網ってすごいよ」

何となく誤魔化された気がする。京子とリョウタが住む家は、ここから車で一時間以上離れているのだ。

「会社、いろいろと大変だったみたいね」

元妻だけに安藤の仕事をよく知っているのだろう。含みを持たせた言い方だ。

「そうですね。まあ、いろいろと……」

「でもこのバイトの方が、雪菜君には合ってる気がする」と京子は微笑む。

「リョウタ君や安藤さんは、お元気ですか？」

「リョウタはすごく元気よ。元気過ぎて付き合うこっちが逆に大変！

安藤は……そうね、元気にしてるわ。最後にあったのは先週だけだ」

安藤が元気だと聞いてホッとする一方、何故か少し寂しくなった。

コーヒを一口飲んで、ケーキをフォークで切り取り口へ運ぶ。
甘酸っぱくて美味しい。

「ユキナ君、新しい恋人でも出来た？」

「ど、どうしてですか？」

突拍子もない質問に、木苺に刺そうとしていたフォークを止めた。
「前と、ずいぶん雰囲気が違うから」

「そうですか、ねえ……」とはぐらかしてはみたものの、京子はニヤニヤと笑っている。

この前京子と会った夏祭りの夜から、あまりにも多くの出来事があり過ぎて、自分がどういう風に周りから見られているのか、久しく考えた事がない。シュンよりはずっと明るくて樂觀的になったし、ハヤトよりも落ち着いて大人になったと思う。毎日が楽しいと感じ、この一ヶ月自分出来る事を精一杯やってきた。今の生活にある程度、満足している。

「ねえ。恋人、できたの？」

京子が内緒話をするように顔を寄せて、小声で話す。アップにも充分耐え得るほど整った顔立ちは、化粧の崩れ一つ無い。薄暗い店内で、清純な少女のようでもあり、成熟した大人の女のようにもある京子の魅力を感じるたびに、ここしばらく安泰だった胸の奥が古傷を思い出すかのようにズキリと疼く。

そりや安藤が好きになった女性だもんな。諦めにも似た感覚を何度も持て余した。

「恋人は、まあ。今は、いませんね」

「今はってことは……付き合う予定があるんだ!？」

さすがに女だ。するどい。

「予定って訳じゃないけど……、前付き合ってた人に、もう一度やり直して欲しいって言われて……」

前の会社の先輩に駅で偶然会ったのは、二週間ほど前だ。

話が弾んでそのまま昼食へ行き、それから二度一緒に夕飯を食べた。俺がバイトを始めてからは、この店にもたまに顔を出してくれる。

ずっと前付き合っていた時、ひどい振り方をして別れてしまったことをちゃんと謝ることが出来た。先輩は俺を一言も責めずに優しく微笑んで許してくれた。物静かだが男気のある良い男だ。

もう一度ちゃんと付き合っただけと欲しいと言われたのは前回一緒に食事をした時。返事は次会った時でいいと言われたが、正直どうすればいいか悩んでいる。

「その人のこと、まだ好きなの？」

鋭い質問の連続に、同じ課だった藤田の顔を思い出した。

「それが……自分でも、よく分からなくて」

「なるほどね」と小さく言っただけ、京子は木苺ごとケーキをザックリと突き刺した。

「京子さんは、どうなんですか？ 安藤さんと復縁したりは？」

いつもなら聞けそうにない質問も、渋味のあるコーヒーの力を借りて、さりげなく口に出す。

「どうして？」

京子は目を細めて意味ありげに笑う。店内の雰囲気のおかげで、ちらほらこの女の影の部分が覗く。

「だって、すごく仲良さそうだし……」

「ねえ。ここって禁煙？」

「いえ」

京子がカバンから煙草ケースを取り出した。

立ち上がり、カウンターから灰皿を取って帰って来ると、カラフルな宝石でデコレーションされたライターがテーブルに置かれ、タバコの先に小さな火種がともっていた。

「そうね……。仲は良いわよ。彼とは幼馴染だから」

ひと息目の白い煙と一緒に言葉を吐く。

「そ、そうなんですか」

幼馴染と結婚。ドラマでよく見るシチュエーションが、安藤と京子をこの上なくお似合いな夫婦に感じさせた。

「うん。幼馴染でね、長く一緒にいたから、お互いかけがえの無い存在だって思い込んで……この人のためなら死ねるって思ったこともあったわ。でも……」

十センチ前の空中を睨みつけたまま、女は煙草を吸いつける。

「でも。熱が冷めたら……。気付いちやったの。同じ年のあんな男より、ユキナ君みたいな年下の可愛い男の子が好きだって」

不意に流れてきた射抜かれるような視線にドキリとした。

意味深な言葉と、誘惑するような眼つき。

どう返していいのか分からず躊躇していると、京子がふき出すように笑ったのを見て、自分がからかわれた事に気が付いた。

「それにね、あの男って最低よ？ 遊び人だし。その癖、仕事バカだし。入籍だって私の一存で無理やりさせたようなものよ。結婚指輪だって最後まで付けてくれなかったわ」

そう眉間を寄せる京子の顔は、愚痴を言う主婦以外の何者でもなかった。

「安藤さん、あんまりそういう風には見えないけど……」

実際、安藤が遊び人だと感じたことは無い。

「そう？ ユキナ君の目から見て、彼どう見える？」

「そりゃあ……。仕事もよく出来るし、格好良いし、すごく優しいし……」

自分の立場もかえりみずに俺のことを助けてくれるし、傍にいてくれるだけで安心する。安藤とのことを思い出すだけで、身体がじんわり火照ってどうしようもない気持ちになる。

今はもう、遠い存在だけだ。

「へえ。あの人、ユキナ君には優しいんだ——」

いつのまにか京子が悪戯な少女の笑顔に戻っている。

「いやっ、あの。上司として、ですよ？ 変な意味じゃありません」
俺は安藤の元妻を前にして、何言ってるんだ。

「じゃあ、もう挨拶は済ませたの？」

「えっ、挨拶？」

「安藤には会った？」

「いえ。安藤さんには、一ヶ月以上会ってません」

最後に会ったのは、マンションの部屋の玄関。上司としてではなく、俺に任意同行を求める警察としてだ。

「じゃあ、会わなきゃ」

「でも安藤さんが会ってくれるかどうか……俺、すごく迷惑かけちゃったし。ほとぼりが冷めたら、きつとまた何処かで、そのうち会えるかなって……」

「そのうちって。もう出発は来週よ？」

「出発？」

「ユキナ君知らないの？ 彼、来週からイギリスよ？」

「イギリス？」

「そう」

「イギリスって……。いつまでですか？」

「さあ——、知らない。でも彼の仕事って一度始まると長いから……二年とか、三年とか？」

京子は軽く言う。

二年か、三年……。

ほどよく温もっていた頭から血が引き、視界が真っ白になる。

思い続けていれば、また何処かではったり会えるだろうと考えていた。幹田との繋がりもあるし、今までだって安藤とは思いがけない場所で会うことが多かった。なのに……。

もう会えなくなってしまう。下手をすると一生会えない。

でも、これは……もう会わなくなってことなのか。運命がそうしろと教えているのか。

もう一生。あの人とは……。

「ねえ！ 雪菜君、今晚家に泊まりに来ない？ リヨウタがすごく会いたがってるの。ユキナちゃんユキナちゃんってうるさいんだから、あの子」

「えっ。あ……はあ」

京子の話は突然思いもよらない方向へ飛ぶ。夏祭りに行った日もそうだった。

「じゃあ決まり！ 待ってた甲斐があつたわ。本当は、今晚ユキナちゃんを連れて帰るってリヨウタに約束しちゃったの」

嬉しそうに立ち上がり、両手を上げて伸びをした。

二人で店を出て、駐車場に停めてあつた京子の車に乗り込む。京子の実家に預けているリヨウタを迎えに行くのだ。

車の中で、リヨウタの幼稚園の話や俺のバイトの話をしたが、殆んど上の空でまったく気持ちに伴わない。

安藤のことばかり考えていた。

一時間ほど車を走らせて、閑静な高級住宅街に入る。一つ一つの家の敷地が広く、幅のある門がたまに通り過ぎたと思ったら、暗い中でも鋭く光を反射させる外車が何台も並ぶ。

しばらく途切れなかった白い土壁が途切れて、日本家屋特有の瓦葺きの立派な門構えが現れた。ブレーキランプを点して車が止まる。さすがにぼんやりしていた頭が冴えて、助手席から窓の外を覗く。

「ちょっと待ってて」と京子が車を降りると、門の分厚い板戸が開き、中から出てきた着物に割烹着姿の女がうやうやしく京子に頭を下げた。その家政婦と思われる年配の女と連れ立って、京子は門の中に消えていく。

板戸の奥は日本庭園のようになっていて、瓦屋根のある石畳の外廊下に沿って足元を照らす小さなライトが並んでいる。松の木が邪魔で廊下の先は見えづらい。玄関口の明かりが見えないから、母屋はずっと奥にあるのだろう。まるで寺院のような造りの家だ。木の表札には「椎名」と墨で書かれている。京子の旧姓だろう。離婚したのだから、もう旧姓ではないが。

しばらくすると京子がリヨウタを連れて門から出てきた。さっきの家政婦も一緒だ。もう一人、スーツ姿の若い角刈りの男が一緒に、リヨウタを肩車している。ボディーガードのように体が大きな男で、俺に気付くとジッとこちらを睨んで目を離さない。夏祭りで会った林檎飴の出店の男を思い出す。あの男と同じ鋭い目付き。

京子とリヨウタが車に乗り込むと、男と家政婦は深く頭を下げた。

「ユキナちゃ——ん！」

リヨウタが助手席の後ろから抱きつく。

「おう！ リヨウタ。久し振りだな——」と、腕を後ろに回して小さな頭を撫でた。

「立派なお家ですね——。俺、寺かと思いましたよ」

リヨウタが後部座席で寝静まったのを確認して、運転席に話しかける。

「そう？ あれでも両親が隠居暮らしするからって小さく建て直したのよ」

「あれで……？ それに、初めて見ました。家政婦さんなんて」

「あの人は私が生まれた時から住み込みで働いてくれるの。あの人のご主人が父の執事をしてくれていますね」

あんな家、お手伝いがいなりや、ただ不便だけよ――。

隣の老夫婦は家政婦もいないのに、だだっ広い家に住んでるけど…… あれは、理解に苦しむわ。

召使がいらないなら、１LDKのアパートの方がずっと住みやすいのに。客を迎えに行くだけで疲れるような家に、どうしてわざわざ自分達だけで住むのかしら」

本当に分からないと京子は高速道路の先を見つめたまま首を振る。京子がこんなにお嬢様育ちだとは思わなかった。金持ちには一般庶民の気持ちは理解できないのだろう。

こんな人と一緒に暮らすときつと大変だろうなと思って、また安藤のことを思い出し、心が沈んだ。

それからずっと安藤のことばかり考えていた。

寝ている時以外は、意識しないのに優しい男の声が脳内に反響して苦しくなる。

歯を磨いている時も、テレビを見ている時も、紅茶を入れている時も。どうしてこんなに暇なバイトを選んだのだろうと後悔するほど、寸暇を惜しんで、思い出が洪水のように押し寄せて来ては流される。

不思議と涙は出ない。

悲しくも無い。

ただじつとしてられない。

このままでいいのか。

ずっと……ずっと、好きだったのに。

何処かで偶然ばったり会うという、僅かな可能性が消えてしまっただけで、こんなにも動揺して何も手につかないのに。

もう会えない。

一生……。

京子の家に泊まってからちようど一週間。土曜の午後。

部屋を見渡してから「よし」と息を吐く。

忘れ物はない。

パスポート。携帯。財布。金はあまり入っていないが、いる分だけ明日空港でおろせばいい。

身の回りの物を全て詰め込んだ小さいスーツケースに手をかける。元々社宅に住んでいた頃から大きな家電は備え付けだったので、ウィークリーマンションに越しても全て備え付けの物を使っていた。最低限必要な物以外は全て処分し、部屋の契約は明日で切れる。

ドアの鍵を閉めて、廊下で一つ深呼吸する。

大丈夫。

もう迷わないと決めた。

一週間死ぬほど悩んで下した決断は、半年前の自分なら考えもしなかっただろう破天荒極まりないものだった。

自分がいつからこんな非凡な人間になったのだろうと思った時にはもう、辞める事を伝える電話をバイト先にかけていた。

もしダメだったら、また最初からやり直せば良い。

何度でも、生まれ変わってやり直せる。

何度でも……何度でも……何度でも……。

国道に出てタクシーを拾い、京子から教えてもらった国際空港に

近いホテルへ向かう。

穏やかな気持ちで流れる景色を眺める。

ホテルの前でタクシーが止まり、ドアマンに笑顔で迎えられた。回転ドアをくぐって中に入ると、吹き抜けのロビーは明るく、高級感のあるソファや背の高い観葉樹が並んでいる。荷物を持ったベルボーイやスーツ姿のビジネスマンが忙しそうに行き交い、夕暮れ前のロビーは慌しかった。

とりあえずフロントに頼んで、安藤の部屋番号を聞こう。無理なら安藤をここに呼び出してもらおうのだ。

ラウンジの方を眺めながら、スーツケースを引いて歩く。ハッとして足を止めた。

見覚えのある横顔。

安藤だ。

ラウンジの窓際に座っている。

煙草の煙をくゆらせて、難しい表情で正面に座るスーツの男と何か話している。

フロントを素通りして、足早にラウンジへ向かう。

胸が高鳴る。

心臓が喉元までせり上がるのを抑え、ラウンジへ入った。

全身の血液がさざ波立って沸騰しているのに、それでいて落ち着いている。

舞野も俺を刺す前は、こんな気持ちだっただろうと無神経な事を思う。

今から好きな人の人生を変えてしまう怖さと喜び。どちらも絶対値は大きく、プラスマイナスゼロで感情の起伏が無い状態。

安藤のすぐ横まで行つて立ち止まると、向かいに座つて話していた男が先に俺に気付いてこちらを見上げる。

男の視線を追うように、安藤が膝に乗せていた腕を持ち上げ、振り向き見上げる。

懐かしい顔。

ずっと待ち焦がれていた顔。あまりにも恋しくて、自分から会いに来てしまった。

しばらく見ない間に、安藤の顔は少し日に焼けている。

「安藤、さ、……ん」

安藤は驚いた表情のまま、ゆっくりと立ち上がった。

「お前、何で……………おいっ」

広い背中に両腕を回して抱きつき、大好きな人の襟元に頬を寄せ
る。

「安藤さん、好きです」

そう言つて、半開きになっていた安藤の口を自分の唇で塞いだ。

背後に感じる全ての動きが、三秒で停止した。

一瞬の静寂。

どよめき出すラウンジ。

興奮した女の囁き声が遠くで聞こえる。

安藤と話をしていた男が、視界の端で口を大きく開けたまま呆然としている。男が持っていたコーヒークップが、指を軸に半円を描いて床に転がり堕ち、視界から消えた。

顔を離して、至近距離で安藤を覗き込むと、眉を寄せたまま、まだ状況が飲み込めていないようだ。

「俺も……俺も、一緒に、イギリスへ行かせて下さい。安藤さんがダメって言っても、絶対、付いて行きます」

始動（後書き）

今日は早朝の更新です!!

昨日はお休みいただきました。ペコ

今から子供のアレルギー科の定期受診へ走ります。

つ、てゆいに……リニューアル致しましたね!? 小説家になろう♪
SUGEEEEEE (。d (EEEEEEEEE!! 管理者様あ
りがとうございます。こんなサイトに出会えて幸せです。(●・
ω・o)。

まだ使い方はマスターしていませんが、辞書へのリンクがついてた
り、活動報告なんて結構便利そうじゃないですか? 更新予定や今
後の予定を書いたりできますね(@・。艸、(ウフウフ

それでは♪

いよいよ本編はラストに向けて暴走していますが……。

また明日 m (_ _) m

決戦前

「とにかく……先に部屋へ行つてろ！」

腕を引つ張られながらエレベーターホールへ行き、立ち止まる。
イギリスへ付いて行くと聞かない俺の言葉を低く制し、安藤がポケットから取り出したルームキーを押し付けてきた。

「安藤さん。俺……本気です」

腕をつかんでいた大きな手を振り払う。安藤の顔を正面から直視して、真剣に言い放った。

「話は部屋に帰ってからだ」

エレベーターの扉を睨んでいた険しい表情がチラリとこちらに向いたところで、「チン！」と鐘を鳴らしてエレベーターが明るい口を開けた。

中から降りてきた家族連れを見送ってから、背中を押されてエレベーター内に踏み込む。

上半身を回り込ませて十六階のボタンを点灯させた安藤に、向き直つて言う。

「じゃあ部屋で待つてます。絶対に、来て下さい」

厳しい口調で念をおした。

ここまで来て安藤を逃がすわけには行かない。

俺のことを鬱陶しく思つて、しばらく部屋に帰つてこないことだつて考えられる。入院中見舞いに来なかったのだって、面倒な元部下に愛想を尽かしたからかもしれないのだ。

まあいい。

安藤が部屋に帰って来るまで、いつまでだって待ってやる。

「三十分以内には帰る。」

お前の方こそ。逃げんなよ」

威圧して見下ろす視線と決戦前の張り詰めた空気を、重たい扉が切断していく。

十六階の角部屋の鍵を開けて中に入ると、部屋の奥から小さな足音が駆けてきた。

一週間ぶりに見る幼い表情が、ドアから入ってきたのが自分の父親では無いことに気付き足を止める。

「ユキナちゃん!？」

一瞬抜けた表情がパツと晴れて俺に走り寄り、腰に抱きつく。

まさか部屋にリョウタがいるとは思わなかった。

こんな子供の前で修羅場を繰り広げるわけにはいかない。安藤もどういふつもりだろうと、内心疎ましく思った。

「リョウタ。ママはいないのか？」

「ママは今日、お仕事——」

部屋の中に入ると、普通のシングルルームにしてはやや広い。

ベッドの他に二人掛けのソファとローテーブル、ステーションリーデスク。大きなチェストの隣にはスーツケースが置いてある。

安藤は少し前に社宅を出た。

イギリスへ発つまでの間、ホテル暮らしをしていると京子は言っていたが、その割には荷物が少ない。そういう自分は小さなスーツケースに身の回りの物が全て収まっているのだから、人の事は言えないが。それにしても、以前マンションの部屋で床に積み上げられていた大量の本は全て捨てたのだろうかと思議に思う。

安藤のスイーツケースの隣に自分のスイーツケースを置いてソファに座ると、リヨウタが冷蔵庫からペットボトルを抱きかかえて来て、俺に烏龍茶を注いでくれた。

「リヨウタは明日、パパのお見送りに行くのか？」

「明日はユイちゃんの誕生日会だから行かないよ——。ユキナちゃんに行くの？」

「あ、ああ。うん」

しばらく父親とは会えなくなってしまうのに友達の誕生日会を優先させるとは、なかなか冷たい。家族をかえりみず仕事に没頭するタイプだ。さすがは安藤の息子。いい会社員になるだろう。

俺なんて、見送る勇気が出なくてイギリスまで付いて行こうと言うのに。

「寂しくなるな。パパ、いなくなっちゃたら」

「うん……。でも二週間だから我慢する」

「二週、間？」

「うん。二週間。……違うの？ 二週間でパパ帰って来るでしょ？」

聞いていた話と違うので一時混乱に陥りそうになったが、小さい幼稚園児の手前、何とか動揺を隠して倒れる気持ちを立て直す。

リヨウタはまだ子供だ。安藤が何年も帰って来ないと知ったら大泣きするに違いない。だから二週間だと嘘を教えているのだろう。

安藤が海外出張でしばらく帰ってこないと俺に教えたのは京子だ。リヨウタには悪いが、ここは就学前の子供より京子を信じよう。

『奇跡はね。待つものじゃなくて、起こすものよ』

俺が泊まりに行ったあの日。京子はそう言って、リヨウタがトイレに行っている間を狙い、リヨウタが開けようとしていたオマケ付

きのお菓子を箱ごとすりかえる。

トイレから帰ったリヨウタは箱を開けて、ずっと欲しかったパトカーのキーホルダーが入っていたと大喜びした。

ちよつとした何気ない事。小さな奇跡。

俺は奇跡を起こしに来た。

安藤と出会うという奇跡を。

「ねえ！ ユキナちゃん、逮捕ごっこやる——！」

グラスを置いて立ち上がり、リヨウタが身体を弾ませた。

気は向かなかったが、子供に大人の都合を押し付けるのもどうかと思い、ジャンケンをした。

ジャンケンの結果、俺が人をだます極悪詐欺師でリヨウタがそれを追うヤクザの一味だ。もはや逮捕される側の人間しかないが、本人が楽しそうなのでそれでいい。そしてなかなか風刺が効いている。ついこの間までは、俺はそれに近い状況だったのだ。

チャイムの音——。

「パパだ——！」と、リヨウタがドアの方へ走っていく。

来たるべき戦闘態勢に備えて、全身が強張る。

強い決意を頭の中で復唱する。

必ず明日は安藤と同じ飛行機に乗る。

絶対に家には引き返さない。もう帰るべき場所も無いのだ。

「リヨウタ。さっきママに電話して迎えに来てもらうように言ったから、帰る用意しとけ」

安藤は部屋に入ってくるなり厳しい顔付で言った。

「ええ——！ 一緒に晩御飯食べるんじゃないの？」と安藤の手を

握ったままりヨウタが口を尖らせる。

「大事な仕事が入ったんだ。仕方ないだろ」

安藤が一瞬ギロリとこっちを見た。

仕事では無く、本当は俺との話し合いだ。リョウタには申し訳ないが仕方ない。

「……わかった」と小さく不貞腐れたように言い、リョウタはトイレの方に向かう。

「あの……、イギリスはどれくらいの期間、行く予定なんですか？」
トイレのドアが閉まる音を確認してから、恐る恐る聞いてみた。

「二週間だ。……お前は、そんな事も知らずに、一緒に行くって言うてたのか？」

安藤が信じられないという顔をする。が、信じられないのはこっちの方だ。

「う、うそ……。だって、二年か三年って……」

啞然として言葉がうまく繋がらない。

全然話が違う。

「何で学会聞きに行くのに、二年も三年も向うにいくなくちゃいけないんだ。」

誰だ？ そんな事教えたの」

京子さんが……と言いかけてやめた。

厳密に言くと、京子は分からないといったのだ。二年か三年と言ったのは京子の推測で、俺はそれを何の根拠も無く確定だと思い込んでしまった。

リョウタが知っていて、どうして母親の京子が二週間だと知らなかったのだろう。

「……京子か？ 京子がそう言ったのか？」
俺の表情から何かを察したのか、安藤が溜め息をつきながら鋭い質問をする。

水が流れる音がして、トイレのドアが開いた。

「ねえパパ——。アイスだけ食べて帰ってもいい？ 持って帰ったら溶けちゃうでしょ？」

気まずい空気に気付かないまま、機嫌を直したリヨウタが父親に甘える。

「食ったらさつさと支度しろよ」

それを聞いたリヨウタは、はしゃいで冷蔵庫に向かう。

何も考えられないままソファーに座って、一点を見つめたままフリーズした。

「はい」とリヨウタに渡されたのは、銀紙に包まれた見覚えのあるミルクバーだった。

「ありがとな」

囁くような声を搾り出して受け取り、放心状態のまま銀紙をむいた。

クリーム色の正四角柱を舌の先で舐めると、あの時と何も変わらない。やっぱりヒンヤリとして甘かった。

携帯が鳴ったので、安藤は腰を下ろしていたベッドから立ち上がりドアの方へと歩いていった。

硬直していた全身が、ミルクの甘さで溶かされていく。

ピンと張っていた神経が急にほどけて、ぐたぐたに緩み始めた。鼻の奥がツンとする。

瞼が液体をすくい取るのに気付いて下を向く。

今までの自分の行いが総じて恥ずかしくなり、更に顔面が熱せられる。

どうかしていた。

俺は何をしているんだろう。

やっぱり、あのまま静かに暮らしていればよかったのに。

一度溢れ出た涙は一方通行で止まらず、頬を伝ってアイスの棒を持つ指先に堕ちていく。

「ユ、ユキナちゃん……どうしたの？　ねえ」

俺の異変に気付いたリョウタが慌てふためき、駆け寄った。

「どこか痛い？」

まさに「心が痛い」と答えたかったが、いたいけな子供を意味不明な言葉で混乱させるのは宜しくない。俯いたまま首を振った。

それに、本当に痛い時は何も答えられない。

痛くて。切なくて。情けなくて。悲しい。

リョウタが小さな掌で俺の頭を撫でてくれる。

子供に心配をかけるなんて大人失格だと思っているのに、頬を流れる熱水が止まることはない。

「もしかして逮捕ごっこが嫌だったの？　警察官で正義の味方の方が良かった？」

リョウタは自分のせいで俺が泣いたと思い込み、必死で原因を探ってくれている。

優しい子だ。

「違うよ。警察官で正義の味方はリョウタのパパだろ？　俺は悪者役だ」

鼻をすすりながら濡れた顔を挙げ、強引に笑顔を作って少年の頭

に手を乗せた。

リヨウタは目を丸くして俺に身を寄せる。

「ユキナちゃん、何で知ってるの？ そうだよ。パパ、本当は正義のヒーローなんだ。影で悪者を退治してるの。……これ、誰にも内緒だよ？」

リヨウタは父親の職業を何となくだが理解している。きっと秘密にする約束なのだろう、顔を寄せて声を潜めた。

しばらくドアの方でしていた話し声が止んで、安藤が部屋に戻ってきた。

機嫌が悪そうな顔をして入って来たが、俺が泣いているのに気付いてひるみ、気まずそうに視線をそらした。

いい大人の男が泣いて幼稚園児に慰められているのだから、引いて当然だ。

「リヨウタ。ママがもうホテルに着くそうだ。ロビーで待つぞ」

父親に言われ、リヨウタは慌てて部屋中を走り回り、持って来ていた玩具や絵本をリュックに詰め込む。

「あ、あの。俺も……俺も、帰ります！」
ソファから立ち上がる。

「なんでお前が帰るんだ。おい、リヨウタ。用意できたか」

眉間に深い皺を寄せながら安藤が後ろを振り返ると、ちょうどリヨウタがリュックサックを背負ったところだった。

「あの……でも、ほんと。帰ります。俺、ちょっと勘違いしてて……」

「ダメだ。ここにいろ」

「でも……」

安藤の出張が長期でないと判明した今、もう自分がいるべき場所はない気がした。

「リヨウタ。お前一人でロビーまで降りれるか？ パパはユキナちゃんと大事な話があるんだ」

俺を一人にしたら逃げると思ったのか、安藤はしばらく考えて自分の息子を一人でロビーまで向かわせることにした。

「うん。降りれる」

「じゃあ一人で行ってくれるか。ロビーに行けばママが待ってる」
「わかった」

何て聞き分けのいい子だ。

本当は、無理だと駄々をこねて、俺を一人にして逃がして欲しい。帰りたくないと言ってくれればもっと良かったのに。

自分勝手なことを考えながら、濡れた顔を袖口で拭った。

ドアの外までリヨウタを見送った安藤が、部屋に帰って来る。

「座れよ」

ずっと突っ立っていたら、トゲトゲしく言われた。

もう一度ソファに座る。

安藤はベッドに腰を下ろし、スラックスのポケットを探って煙草を出す。

くわえた一本に火をつけると、ライターと箱をローテーブルの上に放り投げ、手を後ろについて煙と溜め息を同時に吐き出した。

険悪な室内に、白い煙が四散していく。

「新しい仕事は上手くいってるのか？」

当然だが俺が会社を辞めたことを知っている。

「仕事は……バイトです。昨日で辞めました」

「辞めたって……。まさか部屋も解約してきたってんじゃないだろうな？」

何も答えずにいると、また安藤が深く息を吐き出す。

「お前。前の恋人とより戻して、上手くいったんじゃないのか？」

「そつ、そんなこと！ 誰が言ったんです？ ……京子さんですか？」

どう考えても京子しかない。どういう風向きで、離婚した元夫婦間でそんな会話になるのか。

「やり直したいって言われたのは、確かですけど……あれは、ちゃんと断りました」

先輩にはきちんと会って、付き合うのは無理だと言った。前回のひどい別れた方を引きずったまま対等な交際なんて在り得ない。また先輩を傷付けてしまっただけだ。

「その相手つてのは……舞野か？」

心臓がズキリと収縮する。

「ち、違います。前務めていた会社の先輩で……。舞野とは、その……ビジネスの関係っていうか、そういうんじゃない……」

「ビジネスの関係か……。そういう風には見えなかったけどな。舞野本人もそうは思ってたんじゃないのか？ だからお前を刺した……」

ハッと顔を上げると、両足の間にだらりと両腕を下げて鋭い眼光がこちらを睨み据えている。

元上司の面影はない。

これは……事情聴取なのか？

やましいことだらけの自分が警察の人間と二人きりだという現状に気が付いて、こめかみに汗がふきでる。

「もしか、して。舞野を……」

舞野は悪くない。悪いのは俺だ。そう叫びたかった。

「安心しろ。舞野を引っ張るつもりは無い。こっちにもいろいろ事

情があつてな。そう暇じゃないんだ」

頭を落とし、目を瞑って息を吐く。

危うく俺のせいで舞野が逮捕されるところだった。これ以上自分のせいで舞野を苦しめることがあれば、俺はあの時あのまま死ねばよかったと後悔する。

「安藤さんの言う通り。俺は舞野を利用して、あいつを裏切った……。自業自得。刺されて当然です」

分かっていたことだが、改めて人の口から聞いて確認すると、卑怯で浅ましい自分の愚かさに嫌気が差す。

そうだ。俺は最低な奴なんだ。

急死に一生を得て舞い上がっていたから忘れかけていた。そう簡単に人は生まれ変わらないのかもしれない。

ひと息ついてソファから立ち上がる。

「やっぱり帰ります。部屋はもう一度契約すればいいし。仕事は新しいバイトを探します」

「待て」という声を振り切り、チェストに向い歩いていく。スーツケースに手をかける。

「待て。待ってくれ」

気配を感じる間もなく腕を強く引つ張られ、ぐらりと視界が揺らいでだと思ったら、後ろからきつく抱き締められた。

懐かしい感触だった。

太い二の腕。

硬い胸板。

煙草の香り。

極上の安心感。

「やめて下さい。……俺は最低な人間です」

「それは、俺も同じだ。

俺はお前を利用した。お前が舞野を利用するよりも、ずっと汚い方法で……。もう少しでお前を死なせるところだった」

耳元でする男の声が、思いつめたように余裕が無い。

「それは違います。

安藤さんは俺を助けてくれた。新しい自分になれたのは安藤さんのお陰です。

俺を救って、生きる意味を教えてくれた。俺にとっては……」

俺にとっては……。

ヒーローで……。正義の味方で……。悪役にとっては、あまりにも遠い存在。

「んっ……！」

くるりと身体が回転したと思ったら、熱くて少し硬い感触が唇に荒々しく押し付けられる。

煙草の匂いを間近に感じて状況を把握すると後頭部が痺れていく。顔が離れたと思ったら、またギュッと抱き締められる。

「あの言葉。本当、なのか……好き、って……」

張り詰めた重々しい声。

唇の数センチ先にある安藤の首筋を意識するだけで、麻酔が効くようにじわじわと全身の機能が麻痺していく。

正義の味方は、さすがにすごい。圧倒的で、全てを吸い取る強引な必殺技。

のぼせる脳ミソが半回転。

下瞼が熱い。

「本当、です。俺、安藤さんの、ことが……好き。
好きで好きで、どうしようもなくって。とにかく傍にいたらいい
って思っ、それで俺……」

かすれた涙声で囁くと、身体を包む温もりが熱に変わった。

「いいのか？ 俺は、お前を死なせかけた奴だぞ？ この先も、守
ってやれないかも、しれない」

俺を抱き締めている身体にぐっと力がこもり、緊迫している。

「傍に……傍に、いれるだけで……」

嬉しいのか、悲しいのか。よく分からないまま涙が頬を伝う。

熱い位の温もりが離れたと思った瞬間、身体ごと持って行かれて
ベッドに押し倒される。

上からかぶさってきた影が視界を覆い、驚いた拍子に開いた唇の
隙間に分厚い舌が進入してきた。

口内を弄り犯すような、性急な行為。

煙草の香りを、舌に、上顎に、粘膜に擦り付けて、染み込ませて
いく。

それに応えるように、熱くて恋しい相手の一部に、必死になって
舌を絡ませた。

「んんっ……ん……」

組み敷かれたまま、声と共に口の端から飲み込み切れない涎が溢
れ出て、顎を伝っていく。

男の口に吸い込まれる息が、徐々に荒く湿り気を増していく。

やっと解放された時には、隠し切れないくらいの興奮で全身が火

照り、胸板を激しく上下させていた。

何も考えられないままうっとり、こちらを見下ろす男を仰ぐと、その顔が苦しそうに引き攣り歪む。

「そんな顔、するな。俺の理性を、飛ばす気が……？」

途切れ途切れの搾り出したような言葉に、こっちが理性を手放しそうになった。

この人に自分の全てを捧げたいと、本能が身体を全部差し出す用意を始めている。

熱くなつて、魂ごと絡まって、一つの生き物になればいいのに。

「俺を……安藤さんのことが忘れられない身体にして下さい。安藤さんがいないと生きていけない身体に……早く、になりたい」

好きな人が眉をひそめて奥歯を食いしばる。思いつめたように俺の顔の横に頭を落とすと、耳の後ろから汗が一筋伝う。

「いいのか……？ 途中で泣き叫んでも、たぶん、止められないぞ…

…」

返事をする代わりに、広い背中にきつく両腕を回し、愛しい首筋にキスを堕とした。

決戦前（後書き）

今日は予定より早く旦那が帰って来てしまいましたので、今日は後書き省略です（<―>）

ついに林檎飴、宮城越えのコメント頂きましたー！！！！（＾Ｏ＾）
ノヤッホーい♪♪

リミッター解除（前書き）

「注意…B L要素のド性描写が含まれますので苦手な方、15歳未満の方、義務教育中の方はご遠慮下さい」

リミッター解除

静かな部屋の中で、布が擦れ合う音と、酸素を求めて息継ぎしてはまた男の口腔に消えていく荒い息づかいが繰り返される。

接触面積を増やすため、たくましい首に両腕を回すと、高ぶった指先の血がジンジンと脈打ち僅かに震えた。

本能が歓喜している。

「んう……」

シャツの中をまさぐる手が触れた部分に火種が点り、線香花火のようにぱちぱちと小さな火花を放って発火していく。

肌の薄い敏感な部分を硬い指の腹が擦るたびに、際どい声が漏れ出る。

フアスナーを下げる音。

下腹部が外気にさらされた。

飢えた大きな掌が布越しの感覚に飽き足らず、下半身の素肌を求めて下着の中に進入してくる。

「あつ……」

一番隠しておきたい、むき出しの本能に触れられると、そこに神経が集中して四肢が硬直し、さっきまでとは明らかに違う艶のある高音の音が体内に響く。

とつくに自分の身体は欲情しきっていた。

急速に熱がまわる全身を、好きな人の触手が俺の存在を確かめるかのように這い回る。

繰り返される荒々しいキスに翻弄されながら、慣れた手つきにで身につけていたものを全て剥がされていく。

あらわになつた裸体が、二人の間を埋める空間に熱放射して直に空気を暖める。

剥いだ肌を愛おしそうに見下ろしながら感触を確かめていく男の顔を見て、余計に感情が昂った。

「あ、んっ——あ……！」

当然のように身体の内側を撫でだした太い指を体内に感じて血液が沸き立ち、意識が高みに追いやられて蒸発寸前を漂う。

「——ああ……ん、……うあ、んっ……」

抑えていても漏れ出る、嫌になるほど甘い自分の声が男を少しずつ狂わせている。時折吸い込む息の浅さに、それを感じた。

こじ開けられていく身体。

眉をよせたままギュツと瞼を閉じ、下唇を嚙締める。

今までに何人も受け入れた事があるのはずなのに、まるで処女のように脈打ち敏感なのは、規則正しい入院生活で身体が一度リセットされたせいと、俺を抱く相手のせいだ。

首元を強く吸う安藤の髪に熱い息を吐きかけながら広い背中に両手を回すと、薄いはずのYシャツの生地が疎ましい。自分は裸なのに……もつと、もつと直接触りたい。

加熱した指先を安藤の襟元に滑らし、呼吸と声を我慢しながら、わなわなとボタンを外そうとするが、沸騰した頭で視界が歪み上手

く視点が合わない。手間取っているうちに、密着していた身体が突如離れた。

馬乗りになったまま俺から欲情した目線をそらさず、性急な手付きで安藤がYシャツのボタンを外していく。

興奮を隠すように呼吸を抑えている好きな男が少し離れただけで、ギョツと胸が締め付けられる。

「はや、く……きて」と、すがり付くように両手を伸ばすと、ばさりと脱ぎ捨てられるYシャツの中から解放された引き締まった胸板に視線が釘付けになる。二十分先の未来を思い、ごくりと唾を飲み込んだ。カチャカチャとベルトを外して下着ごと脱いだ衣服を、安藤が荒っぽくベッドの下に落とした。

隔てるものが無くなった高熱の身体が二つ。狂ったように絡み合う。

内腿に、張った硬い太腿を感じる。

しばらく我を忘れて纏れ合っていると、不意に膝を折り曲げて持ち上げられた体勢で空気が止まったことに気付き、全身が強張り始めた。

「っ……！ やあ、んっ……ちよ、ちよっと……待つ……」
「無理だ」

要求は即座に跳ね除けられて、心の準備ができないまま身体が繋がっていく。

首を横に振りながら安藤の腰に手を伸ばして押し返そうとするが、その手をシーツに縫い止めて男は腰を進めていく。

「あつ、アああああ……っ、うああア………」

獣じみた声で喘ぎ、新鮮な魚のように一度ビクンと大きく背中を跳ねさせて、身体の内側に相手の一部を受け入れた。

「……っ、隼。もうちょっと、力抜け……」

水の膜が張った瞳を開けて水面下から見上げると、にじむ視界に苦しそうな表情が映る。

よく溶かされたはずの身体が、ここにきて緊張の糸をピンと張った。相手のことがあまりにも好き過ぎて、身体が壊れるのを恐れている。

息を吐き出して力を抜こうとするが、深く吸い込めなかったため上手くいかない。

「隼……、隼は、俺と一つになりたいのかなのか？」

耳元で落ち着いた低音が響く。

「そっ、そんなこと……！ そんなこと、ない。俺、安藤さんのことが、好きです……ちゃんと……ちゃんと、繋がりたい……もっと深く、安藤さんが欲しい……」

「じゃあ、もつと奥まで俺を入れてくれ。なっ……？」

大好きな優しい顔に覗き込まれたと思ったら、とろけるようなキスをされる。

頬を包む大きな手に自分の掌を重ねる。

沸騰しっぱなしの脳ミソが、沸点ぎりぎり手前で小刻みに針を震わせている。

張っていた糸が緩み始めて、大きな弧を描いてたるむと共に、完全に身体が繋がった。

「ああっ……ああっ、……ああっ……ふあっ……」

アクセル全開のまま唸りをあげていた男の身体が、ブレーキを離れた途端に容赦無く荒れ狂う。

ハイスピードで時間を使い捨てて、燃えた身体が一つになっていく。

身体に新たな容積を迎え入れる度に、その分の容積の暖気を声と

一緒に体内から吐き出す。

いつの間にか座った状態で、下から突き上げるように揺さぶられていた。

肌を打ち付けるハイテンポなリズム。

断片的にしか繋がらない意識。

身体を貫いては内臓ごと引きずり出そうとする、あまりにもダイレクトな接触に、内腿がピクピクと痙攣した。

頑丈なベッドのスプリングが軋む。

揺れるランプシェード。

漏れる嬌声に、激しい息遣い。

濡れるシーツ。

暗い室内。

小さな水音。

「ああっ……………いいっ……………安藤さ、ん……………あっんう……………ふか、い……………」

いやらしく貪欲な身体が、体験した事が無いくらいまで好きな男を深くのみ込む。

「好きだ……………隼……………」

「俺も……………俺も。ああっ……………好きい……………。んっ……………安藤さ、ん、もっとお……………もっとな、言っ。好きって言ってえ……………」

魂が溶け、頬を伝って流れていく。

みだらな涙声に上塗りするように、耳の奥に直接欲しかった言葉を吹き込まれると、たぎるような激震の中で意識がフツと遠退き、

脳ミソがふわりと浮いた。

自分の中で、何かのリミッターが外れた。

限界を軽く振り切って、蒸発するように快樂にのぼりつめていく。

「ああっアッ……好き……安藤さん……あんっ……好き……好き。好き……好き、好き好き……あっあっ……ああっアあっ……」

うわ言のように繰り返しながら、両生類のように濡れた肌をきつく相手に巻きつける。広い背中に爪を立てて、無意識に腰を振って乱れた。

一つの生き物。

一つのカラダ。

何度も何度も瞼の裏で閃光が散って、狂乱にのみ込まれて身体が弾けていく。

気がついた時には、薄暗かった室内に闇が訪れ、窓の外の夜景だけが好きな人の顔をかすかに照らしていた。

全てが終わっても、しばらく繋がったまま抱き合っていた。俺がそうしたいと言ったから。

二人で浴室に行きシャワーを浴びると、湯が冷たいと感じる程まだ身体が火照っている。

明るい室内で丁寧に身体を洗われ、案の定そのまま再び肉体を繋げた。

先程の激しい行為とは違って変わって、オレンジ色の光に照らされてゆつくりと愛されていく。人差し指の第二関節を噛んで手の甲で顔を隠していると、腕をつかまれて顔を正面から見つめられる。イク時の顔を見せて欲しいなんていう無茶な要求も、好きな人が相手だと顔を熱くして素直に首を縦に振ってしまう。

俺の身体の隅々にまで色を帯びた視線を落とし、感じる部分を確かめるように硬い指でなぞっていく。そのゆるゆるした濃厚な行為に持久力の差を見せつけられて、もうイキたいと何度も懇願し、相手に促されるまま卑猥な言葉を言わされてから、やっと望みを叶えてもらった。

「二週間か……」

安藤はそう呟くと、後ろから繋がったままの俺の背中に所有権の証を墮としていく。

前のめりに浴室の床に両手をつくると、背中をチクリとした快感が刺していく。

腰元から首の後ろまで背筋を一気に舐められると、脊髄が痺れて身体を揺さぶられる訳でもないのに背をそらせて甘い声をあげてしまう。

安藤の背中には、俺が爪で付けた引っ掻き傷が無数に這っている。これも所有権の証だ。

部屋に帰ると夜の十時過ぎ。

ルームサービスで軽食を取ってソファでイチャつきながら食べ、ワインのフルボトルを一本空けた。

酔いがまわって全身を赤く染めたまま、また二人でベッドにもつれ込む。

その日最後の行為は、生身の肌がとろけて流れ出しそうな程、優しく温かな愛を溢れるほど注ぎ込まれた。

生きてきた中で一番幸せだと感じる。そんな日が今日訪れるとは思わなかった。

もう、この人を忘れるなんて出来そうもない。

翌朝、朝食を食べた後、安藤の荷造りを手伝い、八時前に二人で部屋を出た。

安藤はフロントで長期宿泊の手続きをしてくれた。安藤が帰ってくるまでの二週間、俺はこのホテルで暮らすことにしたのだ。ホテルを出て、五分ほどの場所にあるエアポータライナーの駅まで歩く。

近代的なデザインの車内は、日曜のせいか混雑している。

ちょうど二つ空いた席に安藤と腰を下ろして、流れる風景を眺めると、あと数時間後に訪れる一時的な別れに向かって行くのを感じて、密着した身体と背もたれの間で手を繋いだ。

しばらくすると、隣の車両から入ってきたスーツケースを引いた男が安藤に近寄り話しかけてきた。

「おう、安藤。松野井は一緒じゃないのか？」

軽々しい口調からして、安藤の同僚らしい。

この男も学会に出席するために、安藤と同じ飛行機に乗るのだろう。年齢は安藤と同じか少し上。金髪に近い色の髪と軽そうな雰囲気、安藤と同じく警察の人間とは思えない。

「あつ、ああ……。あいつは一度職場に寄るらしい」

男に気付いて驚いた安藤が返す。

繋いでいた手を即座に離して、俺との関係を悟られぬように、他人のような顔をして携帯を開く。

男がニヤニヤと笑うので、何か感づかれたのかと怯えた。

「聞いたぞ——。お前モテモテらしいなあ。事件の重要参考人にホテルのロビーで抱きつかれて、キスされたんだって？　女だけじゃなく男にもモテるとは、羨ましい限りだ」

「松野井か……。くだらん事ばかり言い触らしやがって。誰の学会発表を手伝いに行つてやると思つてんだ」

あの時、俺が安藤にキスしたのを見てコーヒークップを落としたのは松野井という奴らしい。

可笑しそうにゲラゲラ笑う男とは対象的に、安藤の顔は渋みを帯びて引き攣っている。抱きつかれた噂の重要参考人と寝てしまったあげく、今隣に座っているのだから仕方ない。

「お前、そのうちストーカーとかに刺されたりしそудな。まあそうなつたら刺した奴を捕まえて、俺が責任持つて不起訴処分にしてやるからな——。乙女心を一網打尽にする女の敵を倒したつてことで表彰しとく」

男はそう言つてへらへらと笑い、また隣の車両に歩いていった。

男の後姿が消えると同時に、気まずい雰囲気だ安藤と目を合わす。「べ、別に……俺、刺したりは、しませんから」

男にキスされた事件で話題沸騰の機内を想像して、恋人に少し申し訳がなかった。

飛行機が飛ぶ二時間前に空港に着き、安藤が搭乗手続きを済ませる。

セキュリティチェックへ向かう平面エスカレーターの前で立ち止まると、徐々に上昇を続けていた寂しさが最高値に達する。

これから先に、俺は入れない。

二週間のお別れだ。

「それじゃあ。いい子にしてろよ」

笑顔で言う安藤の顔は、部下に慕われる明るい上司の顔だった。体格にぴったりと合った高価そうなスーツを着こなす安藤を久々に見て、こんなに格好良かったらどうかと改めて自分の恋人を凝視する。「う、うん。気をつけて。俺、待ってるから……」

消え入りそうな声を出すと、自分が思っている以上にダメージが大きいのか、鼻の奥がツンとするのを感じ、やばいと思って目を伏せる。

突然、太いの腕に抱き寄せられてキスをされた。

驚いて目を見開くと、恋人の頭越しに、人の群れがこちらを二度見して立ち止まる。

搭乗が遅れている客の名前を呼びながら走っていたキャビンアテンダントがトランシーバーを落とした。完璧に施されたメイクも台無しに、目を丸くし口を半開きにした間の抜けた表情。

「ん、んん——っ……」

口を繋げたままこもった声を出してパニクリ、安藤の胸板を力いっぱい押すがビクともしない。

しばらく俺の唇の感触を楽しんだ恋人が、満足したように顔を離す。

「昨日のお返しだ」

ニヤリと笑う男の顔に、また釘付けになる。

安藤が背を向けてエスカレータに踏み込む。

遠ざかっていく後姿を啞然としたまま立ち尽くして眺めていると、背中に無数の視線が刺さって痛い。

寂しさも忘れて、小さくなる愛おしい人の背中を見つめながら、身体に残ったぬくもりを確認するように自分の両腕をそっと抱き締めた。

電話の音――。

飛び起きて、見つめていたサイドボードの受話器を取り上げ耳にあてる。

「もしもし？」

「隼。寝てたか？」

少し遠くから聞こえるような、大好きな音声。

「うん。起きてたよ。テレビ見てた」

見えないとは分かっているけど首を振る。

本当は毎朝七時の国際電話を心待ちにして、三十分も早くに目を覚まし、ベッドの中から電話を睨み付けていた。

「今日も学会？」

「いや、今日は一日施設見学だった。楽しくもないがな」

時差のせいで、俺が毎朝目覚める頃に安藤は一日を終える。

「声、疲れてるね。大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。隼、仕事見つかったか？」

「うん。前のバイト先に電話したらね。また来て欲しいって言うてくれてさ。今日から出勤」

「そうか――。良かったな」

「うん」

「隼。寂しいか……？」

「どうしたの？ 急に」

受話器に耳を押し付けたまま、布団の中に潜り込む。

「いや……。早く会いたいと思ってな」

向うから言ってくれることが少ない嬉しい言葉に、顔が見えないのをいいことに顔を充血させた。

「…………。安藤さん…………寝てたでしょ？」

「ああ…………ちよつとな。うとうとしてた」

どつりで聞こえる声にメリハリが無い。こっちは朝の七時でも、向うは夜の十時。きつと連日の過密スケジュールに疲れているのだ。

「隼の夢を見てた」と言われて、布団の中で受話器を抱き締めるようにして身体を丸めた。

「嬉しい。俺も、早く安藤さんに会いたい。寂しいよ…………」

「俺もだ」

首の後ろがじんわり痺れる。

「じゃあ、ゆつくり休んでね」

「ああ」

「おやすみなさい」

「…………それだけか？」

「安藤さん、だ、好きだよ。おやすみなさい。また見てね、俺の夢…………」

「わかった。おやすみ。隼…………」

リミッター解除（後書き）

久々のR指定でございました……。相変わらず書くのが苦手で、執筆に時間がかかった、かかった（´・`・;）みなさまに喜んで頂けると良いのですが……。

そういえば、リニューアルしてから本文の下部に貼り付けていた拍手タグと、自分のブログへのリンクが消えちゃいましたΣ（。・。・;）ゲゲツ

何ゆえ！？ いろいろ説明や注意を読んでみるのですが、いかんせんネット初心者なもんで訳がわかりません。どないしたらええんじや——、（・・・）ワツケ！！（ノ・・）ノワツカ！！、（・・）ノラン！！

一応ブログのアドレスだけに載せさせて頂きます！

ただ今「堕ちます……あなたと。」一話先行中♪↓http://fn016.blog54.fc2.com/

（もしくは「現実逃避中毒」で検索して頂くと出てくると思います）コメントや拍手コメント頂けると、天にも昇る気持ちで喜びます（

）ルン♪

ブログと違い、読んでくださっている方の反応が返って来づらいのがこのサイトなんです。読者人数の確認だけが唯一の指針（´・`・;）。

この話もあと三話で完結です。

もう少しだけお付き合い下さいませ。

ではm（´・`・;）m

招かれざる客達

弾む足取りで、個室が並ぶ廊下を進む。

あれから二週間。空港で別れる時に抱き締めてもらった温もりと、キスの感触を毎日思い出しながら飢えた日々を送った。今日が来るのを指折り数えては溜め息を漏らし、もうあの人がいなければ生きていけないと再認識した。

安藤との待ち合わせ時間にはまだ早いが、どこかで時間を潰す気持ちの余裕は無く、バイトが終わってから浮き足立った状態で、そのまま待ち合わせ場所の DEEP BLUE へとやってきた。

最後にここを訪れたのは脇腹を刺された晩。苦い思い出だが、その後の幸せな展開のせいか徐々に狭い店内に入っても嫌な気分ではなかった。

安藤が国際電話で予約してくれた一番広い個室のドアを開けると、驚いたことに先客がいる。

クタクタの安そうなスーツを着た短髪の男がソファアに座り、渋い表情で煙草を吸っていた。一度廊下に出て部屋番号を確認するが、先程バーカウンターで金髪のバーテンに教えられた部屋で合っている。

「おい……何してる」

俺の行動を怪訝そうに眺めていた男が言った。爽やかな顔付に似合わず、威圧感のある話し方だ。

同じ台詞をこの男に返したい。

「あ、あの……待ち合わせで……」

「今日は全室貸切だから入ってくるな。待ち合わせなら他の場所ですぐ来てくれ」

男がさも面倒くさそうに言う。

「でも……」

「君みたいなのがウロチョロしてると、今からこの部屋に来る男に捕まって売り飛ばされるぞ」

残念ながら、その今からこの部屋に来る男というのが自分の恋人である可能性が高い。

「その人って、安藤さん……ですか？」

安藤の名前を出すと、男の眉山がピクリと動いた。

ゆっくりと中に入り、男が座る正面のソファに腰を下ろす。

部屋の広さは、ずっと前に舞野と来た部屋の倍ほどあり、中央に応接セットが置かれている。いかにも昔はカラオケ店の大部屋でしたという内装で、今観葉植物が置かれているあたりにカラオケセットとステージがあつたに違いない。

「君。あの男の知り合いか？」

「いえ。知り合いとかじゃなくって……」恋人ですと、声高に言いたかったがやめておいた。

「もしかして俺と同じで、あの男に何かの交渉しに来たのか？ だったら悪いことは言わないから、やめた方がいい。一般人相手に話せる相手じゃない」

男は背もたれに両腕を乗せて、足を組む。どうやらこの男は、安藤に何かの交渉をするためにここで待っているらしい。

「店の外に物騒な輩が沢山ウロウロしてる？ 今から来る男の機嫌を取ろうとして、各組が人を寄こしてるんだ」

このバーの周りが物騒なのはいつものことだが、確かに今日は見るからにその筋の男達が入り口にたむろしていて、俺もここへ入る時に取って食われるかと思うほど睨まれた。あの男達がまさか安藤を待っていたとは。

「安藤さんて、そんなに、危ない人なんですか……？」

「会った事ないのか？ そうだな——」と言って、男は苦笑いしながら灰皿に煙草をねじり付け、ローテーブルに置かれていたグラスを取る。中の青い液体を一口飲んで一息ついた。

「まあ、危ないなんてもんじゃないな。裏社会でも表社会でも関係なく、持つ権力が圧倒的で、あの男が出来ない事なんてないんじゃないか？ その上ヤクザの組長の娘と駆け落ちした挙句に離婚するような変人で、一回瀕死の重傷で死に掛けたのに地獄に入場拒否されるような男なんだ。まあ、その駆け落ちして離婚した娘ってのは今このママしてる女だ」

ひどい言われようだ。

この男の話が本当なら、京子は組長の娘でこのバーのママをしていることになる。このバーにママなんていたのだろうか。

「でも、安藤さんって……警察の人、ですよね……？」

男は嘲笑う。

「お前、何も知らないんだな。警察ってのは極道と同じ人種だ。国家の名の元に権力を振りかざすから、極道よりたちが悪い。そりゃあもうエグい方法で金儲けはするし、俺達よりずっと残酷な方法で人を消していく。だから結局、裏でも表でも警察に睨まれたら生きていけない」

男の口調は教師のようにはっきりしていて、むちゃくちゃな内容も正しいように錯覚してしまう。

「それでみんな、安藤さんの機嫌を取りに？」

外で待ち伏せしていた奴等の目的はそれが。

「まあな。いつもはそうでもないが、今日は恋人も一緒に来るっていうからな」

「こ、恋人？」

ギクリとした。そんな情報まで筒抜けなのか。

「ああ。付き合う女ってのは男にとっちゃ弱点だからな——、その女のご機嫌を取って少しでも自分の組に有利に事が進むようにする。

または、いつか誘拐する時に備えて、恋人の顔を確認しておくつて
とこか……。

まあそういう俺も、女の携帯の番号ぐらいは聞き出せたらいいな
——なんてな。あの男をつかまえて話の席に着かせるっただけでも、
こっちは一苦労なんだ」

男は初めて少年のような笑顔で笑った。が、こっちは逆に笑えない。
い。

「お前も綺麗な顔してるんだから、あの男より恋人の方の機嫌取った
方がいいんじゃないか？」と俺にアドバイスしてくれるのはいい
が、その恋人が俺なんだよな。

「一緒に来るのって、本当に女なんですか？」

「そりゃそうだろ。こんな個室で二人分の食事予約して、会社の同僚
ってことはないだろ……？ 名前は確か……ユキナとか言ったかな。
どう考えても女だ」

「あの……言にくいんですけど。ユキナって……俺のことです」
「は？」

間抜けな返事。

「ユキナは苗字で、下の名前は隼です。安藤さんとは、一応、その、
お付き合ってもらってるって言うか……」

どうせ安藤が来ればバレることだ。思い切って自分から暴露して
やった。

男は口を開けたまま眉間を寄せ、グラスを置いてソファに背を
あずけた。顔色が悪い。

俺の頭からつま先までを、視線を何度か往復させて走らせ、内ポ
ケットから煙草を出して吸い付ける。

ひと息目の煙を吐き出して束の間何かを考えた後、気まずそうに
言った。

「ユキナ君……携帯の番号、聞いていいか？」

複雑な面持ちで男は携帯に俺の電話番号を登録する。俺も自分の携帯に男の番号を登録した。

「君も、なんでまた、あの男と……」

携帯を操作しながら、男が静かに聞く。

「安藤さんは……俺を救ってくれた人です。危険な人かもしれないけど、俺にとっては、正義の味方……ヒーローみたいな……」

顔面が熱くなるのを抑えながら言って視線を上げると、正面の男が携帯を操作する指を止めて顔を引き攣らせていた。

さつきより更に顔色が悪くなった。

登録を終えてから携帯を閉じると、男は俺を見据えて改まって話し始めた。

「ユキナ君。」

君がああ男を想うように、俺にも可愛い恋人がいてね。今日の交渉次第じゃ、その恋人に辛い思いをさせなくちゃならない。だから君にも協力して欲しいんだ。分かるか？」

「はあ」

「よし。じゃあ、あの男が来たら、君の力で精一杯機嫌を取って、穏やかな交渉ができる場を提供してほしい。あの男の機嫌が一番良い時に、俺にワンコールしてくれ。そしたら交渉しに、ここへ飛んでくるよ」

何の交渉かは知らないが、それを断って誘拐でもされたら堪らない。それくらいなら協力しようと、首を縦に降った。

「ありがとう。それじゃあ」と言って男は煙草を消し、膝に手を付いて立ち上がり部屋を出て行った。

それから十分程、男が話した内容を思い出して一人不安になる。組長の娘と駆け落ち。

極道よりもずっとたちが悪い警察。

深い息を吐き出すと同時に、部屋のドアが開いた。

「安藤さん！」

勢いよく立ち上がり、ドアに駆け寄る。

「よお」と言いながら、安藤が大きなスーツケースを部屋に入れた。その明るい笑顔を見るだけで、全身の血液が栗立ち体温が上昇する。さっきまでの暗い気分が嘘のように晴れた。

大好きな人。

やっぱり俺はこの人が好きなんだと自覚する。

本当なら今すぐ抱きついてキスしたいが、安藤の後ろから金髪のバーテンが注文を取りに付いて来ていたので、たくましい手の甲にそっと触れるだけで我慢しておいた。

触れた指先が安藤の体温を吸い取り、ジンジンと痺れる。

二人でソファに座って、とりあえずビールを注文した。

バーテンの姿が消えると同時に、安藤の首に両腕をきつく回して抱きつく。

「お帰りなさい……寂しかった……」

二週間分の想いで胸がつまる。搾り出した声は、消え入るようにかすれた声だった。

「ただいま……隼」

そう言つてとろけるような口付けをくれた。

その低くて甘い自分の名を呼ぶ声と、麻薬のようなキスに、身体の機能が奪われていく。そっと抱き寄せられると、ここが自分の居場所だと感じる。生きていると実感する。

ゆっくり再会を喜ぶ暇もなく、ビールと前菜が運ばれてきた。相変わらずこの料理は美味しい。こんなに本格的なコース料理があるとは知らなかったが、さっきの男の話からすると、これも安藤と俺の機嫌をとるために特別に用意されたものかもしれない。

食事をしながら安藤の土産話を聞いたり、俺のバイトの話をした。店員がない時を見計らっては深い口付けを交わす。

「隼。もう新しい部屋に荷物は運んだのか？」

「うん。荷解きはただだけど……あんな広い部屋、俺びつくりした」
安藤が社宅に移る前に住んでいたマンションと一緒に住まないかと言ってくれたので、家無しの俺はその言葉に甘えることにした。

マンションは駅からは遠いが、静かな住宅街にあり、部屋は最上階。細かく言うと、玄関は最上階の一階下にあり、室内の螺旋階段で繋がったその階と最上階の2フロアが全て安藤の部屋なのだ。

多くない自分の荷物をホテルから運び、バイトの休みを利用しては埃だらけの室内を掃除したが、なにしろ広くて一日や二日では終わらない。社宅の部屋から送って来たらしいダンボールいっぱいの本も、そのままの状態で置いてある。その部屋を片付けて住めるようになるまでは、安藤と二人で今のままホテル住まいだ。

「明日は二人で買い物に行くか。冷蔵庫もあれじゃ小さいし、ベッドも狭いだろう」

安藤は食後のコーヒを飲みながら言う。

硬い二の腕に頬をすり寄せて、大きな手に指を絡ませる。愛しい人を上目使いに仰いで頷いた。本当は、ベッドは狭くてもそれだけ密着して寝れるからいいと思ったが、二人で行く買い物想像すると、玩具を買ってもらう子供のようにわくわくする。

恋人の微笑む顔を見て、さつき男に頼まれたことを思い出した。
店員の男がデザートの皿を下げに来た時に離れた手で、ポケットの携帯の発信ボタンを探りながら押す。

しばらくするとさつきの男がノックをして部屋に入ってきた。
安藤はあからさまに嫌そうな顔をする。俺が機嫌を取った意味はあるのだろうか。別にこの男のためにイチヤついていた訳ではない

から、半分どうでもよかった。

出来るだけその交渉とやらを早く終わらせて、恋人と二人でホテルに帰って甘い時間を過ごしたい。

男は安藤の表情など気にせず、向いのソファ―に腰を下ろしてすぐさま話し始めた。

「義兄さん。この前の話だけ……」

「おい、誰が義兄さんだ。お前の姉貴とはとっくの昔に切れてんだから、俺とお前は赤の他人だ」

安藤の声に凄みが出た。男は浅く溜め息をついて、ひるまず話し続ける。

「今頃ユキヤを直接説明しに寄せさせて、どういふことなんです？」

「知るか。三木のジジイが電話でそう言ったから、俺はお前に伝えただけだ。」

まあ、あんな馬鹿でも息子は息子だからな。いつまでも病院に閉じ込めておく訳にもいかなくて、話を付けたがつてるんだろ」

「無理に決まってるでしょう。あんな男のところに、どうして自分の恋人を送り込まなきゃいけないんです？」

「嫌ならお前が代わりに行けよ。恋人を取られそうになったので、あなたの息子を半殺しにしましたよって説明してこい」

まったく内容が理解できないまま話が進んでいく。

男は安藤のことを義兄さんと呼んだ。ってことは、この男は京子の弟……さらに組長の息子ということになるが、それでいいのだから……。

「そんなことしたら、俺が殺されるじゃないですか。いいんですか？ 可愛い義弟が山中の井戸に沈んでも」

「結構じゃないか。重機借りてきて、上から土かけてやるよ」

あまり関わらない方が良さそうな話だと判断して、素知らぬ顔でコーヒ―カップに手をやった。

廊下で女の声がする。それを追う男の声。

ヒールの音が部屋の前で止まったと思ったら、ノックも無しに部屋のドアがいきなり開いた。

ワイングラスを持つ着物姿の女。

京子だ。

後ろから追って部屋に入ってきたのは、見覚えのある高校生のように若いバーテンの男だ。

「京子さん！　ここはまずいです……帰りましょう」と慌てふためきながら京子止めている。

「また余計なのが来やがった……」

安藤が溜め息混じりに紫煙を吐いて、一人囁く。

京子は俺の顔を見るなりニヤリと笑いながら、フラフラとこちらに近付く。顔は真っ赤で、目は虚ろ。どう見ても、かなり酔っている。

「あらあ——まさとお。私からの誕生日プレゼント、気に入ってくれたみたいで良かったわあ。ずいぶんな人数使って探したのよ、その可愛いお人形さん」

京子の意味ありげな目線で、そのプレゼントが自分自身だと気付く。慌てて安藤を振り返ると、安藤は気まずそうな表情で小さく舌打ちをした。

俺達の関係を知っていて、京子はあの日安藤の出張の期限が分からないと嘘をついたのだ。それで俺が安藤に会いに行くと考えたから。俺はその作戦にまんまと乗った。

そうか、俺が安藤に会いに行った日。

あの日は、俺が安藤とリョウタと三人で遊園地に行ってから、ちょうど三ヶ月目。

「おい、アツキ……。あの女を何とかしろ。血の繋がった姉だろうが。まったく、いらねえ知恵ばかり回りやがって」

交渉途中で割り込んだ京子を煙たそうに見ていた男に向き直って、安藤は呆れたように言う。

「姉貴、やめろよ。飲みすぎだ」

やはりこの男は京子の弟らしい。

そういえば、男の電話番号を登録する時に聞いた椎名という苗字は、京子の実家の表札の名前と同じだ。

「うるせえ、アツキ。だまんな！」

腹式呼吸を駆使した女の声はドスが聞いている。

京子の着物姿を見るのは二度目だが、浴衣の時の清純な印象ではない。極道の妻ばかりが出てくる映画を思い出した。

京子は上座にある一人掛けのソファーに、倒れこむように座った。ここからでも酒臭い。

着物の袂から煙草を出して一本くわえると、鋭い視線でアツキと呼ばれた自分の弟に鋭い視線を向ける。男は溜め息をついてからライターを取り出し、腰を浮かせて京子の煙草に火をつけた。

京子は真つ赤な口紅の間から煙を吐き、俺を向いてニコリと笑う。

「ユキナ君。そんな男さっさと愛想をつかして、お姉さんと遊びましょうね」

また京子が突拍子も無い事を言い出した。どうしていつもこの人はこうなのだろう。

「京子、馬鹿かお前は。お前はもうすぐ再婚するんじゃないのか？あの拾ってきた小汚いシェフと」

「そ、そうなんですか？」

京子が再婚するとは知らなかった。

安藤と京子の復縁の可能性が消えてよかったと、性悪な考えの自分が見える。

「そうなの——」と京子は照れながら口を押さえた。

「今日は隼がどうしても言うから、お前の再婚相手の料理をわざわざ食べに来てやったんだ」

安藤がつまらなそうに話した。

「隼。今日のディナーはお口に合ってます？」

「おい、気安く呼ぶなよ」という安藤の言葉を無視して、京子はこちらに身乗り出す。

「はい。すごく美味しかったです」

「そうですね、そうですね。あの野菜はねえ、今朝私と彼と一緒に市場まで直接仕入れに行ってきたのよ。いつもはコース料理なんて出さないんだけど、隼の為に特別に彼が用意してくれたの」

京子は何度も頷きながら、少女のように嬉しそうに笑う。

「姉貴、分かったからさあ。今俺達、大事な話を——」

「だからうるさいってんだろ、アツキ。とにかく、今すぐ酒持ってくるな！」

少女の笑顔一変、京子はどう猛に言い放ち、ソファーにもたれ煙をくゆらせた。夫婦喧嘩が始まりそうだと思ったら、兄弟喧嘩に移行して安心した。

弟の方は嫌そうに顔を歪め、京子を追いかけて来た、困り果てた表情の若いバーテンに目配せする。

バーテンはそれに気付いてハツとし、酒を取りに部屋を出ようと踵を返した。

と、またノックも無しに、勢い良くドアが開く。

ドアの前にいたバーテンが驚いて二歩下がる。

中に入ってきたのは少年だった。

小柄でパーマがかった髪。どう見ても学校の制服を着ている。前にもここで同じような制服の少年を見た事があるが、あれはキングの買い物で、この少年とは別人だ。

「いつ……！」とその少年を見たバーテン姿が、変な声を発する。

澄ました顔の少年は「あつ。いた」と言つてズカズカと部屋の中に入つて来てしまった。

安藤との再会を祝した、静かな夜のはずなのに。
どうして今晚は、こうも招かれざる客が多いのだろう。

少年は京子の弟が座るソファアの横まで歩き、持っていた紙の束を差し出した。

「しーなせんせ——。はい、レポート」

招かれざる客達（後書き）

今回と次回は前作「キングの買い物」の人達が多く登場します！
前作を読んで下さった方は少しでも喜んで頂けますでしょうか……？
前作を知りませんという方はごめんなさい。・・（ノム）・
・。分からなくても一応話しは繋がると思う……たぶん。
・（；）「いや、誰なのおまえら……」の準目線で読んで下さいませ。ペコ

ついに後残すところ二話になりました♪
明後日には完結です。
あと少し、お付き合い下さいませ。

GOOD NIGHT

「しーなせんせ——。はい、レポート」

紙の束を差し出す澄ました顔の少年を見上げて、椎名は呆然とした。

さっき俺が安藤の恋人だと暴露した時も、こんな顔をしていた。可哀想に、今日は厄日だろう。

「おつ、おい！」

部屋を出ようとしていた若いバーテンが、小声で言って少年に駆け寄る。

廊下で走る靴音が響き、またドアが勢いよく開いた。

部屋に入ってきたのは、またしても制服姿の少年。でもその顔には見覚えがある。

キングの買い物だ。

息を切らせながら部屋の中見まわし、先ほど入ってきた少年を見つけると慌てて近寄って来た。

「シ、シノっ！ 部屋から出るなって言ってるのに……！ ……アツキ、ご、ごめんね。シノの奴、全然言う事聞かなくて……」

レポート用紙を差し出す少年の二の腕をつかんで引っ張り、椎名を見つめて目の周りを赤らめる。

「ユーキは勉強できるから僕の気持ち分からないんだよ！ キングは性格が悪いから、こういう時じゃないとレポート受け取ってくれないの——」

キング。

キングと言ったか？

椎名は……キングなのか？

このバーのママである京子の弟。

恋人のために安藤と話し合いを持とうという男。

ということは、先程この男が言っていた可愛い恋人というのはキングの買物。後から入って来た、この少年のことだろうか。

確かにキングの買物が椎名を見つめる目は尋常じゃない。

まったく状況がのめ込みないながらも、何となくキングとキングの買物、椎名と少年。一組のカップリングが俺の中で成立した。

しかし。

椎名がキング、だとしてもだ。

その男にレポートを提出するというのは、どういう状況なのだろう。確かさつき椎名先生と呼ばれていた気がする。椎名とキング、キングとキングの買物は繋がっても、キングと教師という単語はどうやっても繋がらない。

そもそも、こんな場所に生徒がいるという事が在り得ない。

椎名も、俺が描いていたキングのイメージからは大きくかけ離れている。キングは若いと聞いていたが、まさか三十路前の男だとは思わなかった。俺より二三個上の年齢だろう。スーツもクタクタで、どう見ても真面目そうな貧乏青年。教師には見えても、悪名高きバーのオーナーには見えない。

俺が描いていたキング像は、高級なスーツに威圧的なオーラ、どちらかと言うと安藤のイメージに近い。その安藤も、椎名が本当にキングだとしたら、キングが敬語を使うほどの人間なのだから、今

更になって自分の恋人の存在の大きさに怖気づきそうになる。

「シノ……お前。部屋にいろって……言っただけ、よな……？」

ようやく正気を取り戻した椎名は、途切れ途切れにシノと呼ばれる場違いな少年に言った。

「だってえ、先生がレポート12回も返却するからだろ！ はい。もうサインしてくれるまで、僕出て行かないからね」

「お前……なあ」

キング、キングの買い物、若いバーテン。少年が周りの人間をうるたえさせていく。

「おい、アツキ。いい加減にしろ。ここは職員室じゃないんだぞ」
眉を寄せて状況を見ていた安藤が、業を煮やして言った。

「先生。この人お——？ 歩く大量破壊兵器って」

安藤に視線をやって軽く言う少年。引き攣るキング。

若さって怖い。

京子がそれを聞いて、足袋を履いた足で着物の裾をばたつかせ、苦しそうに笑い始めた。

「お前……自分の教え子にどういう教育してるんだ。人を核爆弾みたいに言いやがって」

音量を下げた圧力のある安藤の声を無視するためか、椎名は少年が差し出していたレポートをふんだくってパラパラとめくり目を通し始めた。

「シノ。これ本当に分かって書いてんのか？ 誰に写してもらったんだ」

「ユーキのん」

少年は事も無げに言う。後ろに立っていたキングの買い物がギョツとした。

「ユキヤ。シノに答え教えるなつてあれほど——」

「ユーキを責めんなよ！　なんだよ。自分は職員室で牧内先生といひ雰囲気になつてゐるくせにさあ」

「おい！　シノ……！　そのことは内緒にしようつて、この前——」
と、若いバーテンが割つて入ったが、時既に遅し。

よく現状が把握できていない俺にでも分かった。今このシノという少年は、驚くほど余計なことを口走った。

案の定、ユーキと呼ばれていたキングの買い物の表情が凍りつく。やはりその顔が、ずっと前にクリニクの待合室で見せられた携帯の写真の少年に似ていると思った。

「な……なに、それ」

「ち、違う！　違うんだ、ユキヤ。なあ、聞いてくれ。あれは勝手に向こうが……」

動揺したキングが慌てて振り返り、ユーキという少年の手をつかもうとするが、その手は「知らない！」という声と共にするりと逃げてしまった。

溜め息をついた椎名は向き直り、元凶の少年を睨みあげて舌打ちした。

「アツキい——いい加減レポート受け取つてやんなさいよお。シノちゃんが可哀想じゃないの」と京子。

「そつだよ。ママもこう言ってるしさあ。受け取ってよ——。」とシノ。

椎名はあまりにも空気の読めない少年をもうひと睨みして、安そうなジャケットの内ポケットからペンを取り出し、レポートの表紙にサインしながら言った。

「おい野木。さつさと二人連れて、出てけ！ で、今日はもう上がっていいから、シノを家まで送れ。ユキヤは俺の部屋にいろ」

「やだ。今日は野木の家泊めてもらう」

「ダメだぞ。そんなの……ユキヤ」

「ダ、ダメだよ！ そんなの……ヒロトと二人なんて……」
初めて高飛車だった少年が、うろたえた。

なんなんだろう、この人達。

「あの。先生……」と、今度は野木と呼ばれた若いバーテンがおずとおずと話始める。

「なんだ」

「この前言った、学際の弓道部の出店の場所なんすけど……」

「野木お前……まあいい。考えといてやるから、さつさと二人連れて出てけ」

まったく男達の関係が理解不能なまま、とりあえず部屋の人数が減るらしいことに安堵する。

「あざ——す！」

バーテンは運動部員よろしく頭を下げ、少年二人を引きずって部屋を出て行った。

キングが俯き、深く息を吐きながら頭を振る。

「最近のガキは、あんななのかな？ この世も末だな……」

「あら、リヨウタはよく遊んでもらってるわよ？ あの子達と」

「おい、やめろ。あんなのにリヨウタを会わすな。その内、組長の愛人になると言い出しかねない……」

「まさか」と京子は笑うが、安藤は真剣そのものだ。

京子はいつの間にか酔いが冷めて、母親の顔に戻っている。穏やかな夫婦の会話が、少しずつ俺の居場所を狭めていく。

「それじゃあ、私も失礼するわ。リヨウタを迎えに行かなきゃ」

「あつ……、京子さん！」

立ち上がる京子呼び止めて、自分も立ち上がり京子に歩み寄る。
「あの……安藤さんに話があったんじゃないんですか？ 俺、邪魔だったら席外しますけど……」

京子が何のためにこの部屋に来たのかを考えた結果、そういう結論になった。

「ユキナ君。邪魔なのはマサトの方よ？ 私もしヨウタも、新しいパパいつでも大歓迎なんだから。それを言いに来たの」

京子は安藤にも聞こえるような大きな声で言って、笑った。

「やめとけ。再婚前のババアがホスト連れてるようにしか見えないぞ」

また夫婦喧嘩。いや、元夫婦喧嘩が始まる。

「あら、マサト。私と隼はね、一緒にベッドで一晩過ごした仲なの。それに『愛人を作るのは仕事の内』って昔私に教えてくれたのは、あなたでしょ？」

その京子の言葉に安藤はピクリと顔面を麻痺させた。

「それじゃあね。隼」と言って、京子は俺の首に両腕を回し、ねつとりとした大人のキスをして、スキップしながら部屋を出て行った。

しばらく硬直したままの視界の端に、本日三度目の唾然とした男の顔が映った。

何とか身体の節々を折り曲げて振り向くと、安藤が血の気の引いた顔で俺を見上げている。

「本当、なのか……さっきの話。一緒に寝たって……」

安藤はぎこちない様子で俺に聞き、煙草を取り出してくわえる。

京子と一晩同じベッドで寝たのは間違いない。間にリョウタを挟んでだが。

「安藤さんこそ、本当に言ったんですか？ 愛人を作るのが仕事の内だなんて……」

誤解を解くのは簡単だったが、安藤に疑われた事に対し胸が軋んだ。

安藤は俺が今まで散々夜遊びしてきた事を知っているから疑って当然なのだが、こんなにも自分は一途に想っていることが伝わっていないと思えて、寂しくなる。

火もつけずにくわえていた煙草を一度口から離し、深く息を吐いた。

その重苦しい反応を受けて、余計に悲しくなる。

せつかく二週間ぶりに会えて嬉しいはずなのに、どうしてこんな事になるんだ。

「アツキ、お前……。邪魔だなあ……」

煙草を箱に戻しながら安藤が遠慮無く言うと、椎名は自分も好き好んでここに居る訳じゃないと返した。

「さっきの話ですけど……」

俺の気持ちを置き去りにして、また交渉が始まろうとする。

「分かった分かった。三木のジジイには俺が一度話してやる。まあ

その時まで、あのガキがお前の恋人ならな。さつさと消えろ、アツキ」

安藤に言われてさっきの痴話喧嘩による不安を思い出したのか、「じゃあ失礼します」と椎名は足早に部屋を後にする。

待ち望んだ二人きりの空間が、嘘のように重力を増して圧迫感を感じさせる。

鼻の奥がツンと沁みる。

「隼……」

久し振りに聞く、優しい囁き。腕を引つ張られてギュツときつく抱き締められると、深い口付けが堕ちてくる。

さっき京子にされた遊びのキスとは違う、本物のキス。徐々に全身の機能が停止して、スリープ状態に陥っていく。懐かしい温もりの中でふわりと身体が浮遊するのを感じて、眠たくなる。優に二十分はそうしていた。

唇が離れた時、あまりにも気持ちよくて夢見心地だった。

「隼……本当なのか？」

ぼんやりとした視野に、安藤の不安そうな表情が映って、現実に取り戻される。

「一緒にベッドに寝たのは、本当です。でも、それはリョウタを挟んで、三人で……」

「……そうか。疑って悪かった」
額に安藤の唇が触れる。

さっきの余韻で口が寂しい俺は、大好きな張った首筋を唇でなぞる。

「安藤さんは、本当に言ったんですか？ あんなこと」

「あれは……。言っただのは事実だ。でもあの頃は若かったし、俺もどうかしてた。今はそんなこと絶対に思わない。隼だけだ……信じられ」

そう言っただけ抱き締められると、また夢の中に引きずり込まれそうになる。

「安藤さん。ホテルに帰る。」

疲れてるでしょ？ 俺、沢山奉仕して安藤さんのこと早く癒してあげたい。俺の身体で、いっぱい安藤さんに気持ちよくなって欲しい……ね？」

何でもする。恋人を癒してあげられるのなら。今まで誰に対しても思っただけの無い感情が、安藤と一緒にいると簡単に芽生えてくる。

身体を離すと、優しい表情が俺の顔を覗きこんだ。

「隼。ホテルに帰る前に、一人だけお前に会わせたい奴がいるんだ。構わないか？」

「う、うん。別に……いいけど」

恋人が思いがけないことを言い出した。

安藤は携帯で誰かに電話して「連れて来てくれ」と一言呟く。その連れてこられる人物の予想がまったく立たない。

安藤はひと息ついて、俺の目を正面から見つめる。

「隼。そいつと会う前に、話しておくことがある。……舞野のことだが……」

「舞野っ！？ 舞野が、ユウタが、ここにいらっしゃるんですか！！ 今から連れてくるって——」

「まあ落ち着け。確かに今から来るのは舞野だ。いいか？ よく聞けよ。」

舞野は、確かに俺を刺して殺しかけた。

でも、あいつはお前を刺した後、自分も死のうとしゃがった」

顔面から血液が引き、毛細血管が空になっていくのを感じる。頬の表面が氷で冷やされたように痛い。

「ユウタが……自殺……？」

「ああ。まあそれは、今から舞野と一緒に来る奴が止めたんだが……」。

お前が舞野をどう思ってるかは知らない。恨んでいても当然だとは思うが。

ただ、舞野はお前の情報漏えいの罪を全部代わりにかぶった。不起訴にするというのと、傷害罪を問わないって条件でな。お前が刺されたのは、危険と知っていて監視を付けなかったこっちの不祥事だ。それを外に出さないために、舞野と取引をした。

お前にしたら悔しいかもしれないが、舞野だって起訴されなかったとはいえ一度は逮捕された。若いあいつの経歴に一生消えない傷がついた訳だ。

許してやれとは言わないが……」

「俺。ユウタを恨んでなんていません！俺がユウタを自殺に追い込む程、傷付けてしまった……」

動転して脳の電気信号が乱れる。

何の前触れもなく、涙が頬を伝った。

ノックの音――。

にじんだ視界を上げると、入り口に立っていたのは見知った金髪のバーテンダーだ。

長い金髪を後ろで一つくりにした男は、女のように繊細な顔立ちをしている。廊下に視線をやり、誰かに「おいで」と優しく言った。

小さな靴音がして顔を覗かせたのは、懐かしい茶髪の童顔だった。

「せ、んぱい……」

怯えたように小さな声で言うと、ガラス玉のような瞳に張った膜が液体となって次々と零れ落ちる。

「ユウタ！」

駆け寄ってギュツと抱き締めた。

懐かしい感触。同じ背丈。同じ肉付き。

生き別れた弟に再会したかのように、気持ちが昂った。

「あの、二人つきりにしてもらってもいいですか？」

安藤も金髪の男も、俺達が抱き合ったのを見て驚いた様子だったが、俺がそう言う顔を見合わせて不安そうな表情で行った。

「ユウタ。自殺しようとしたって本当なのか？」

身体を離してユウタの顔を覗きこむと、俯く童顔からまた大粒の涙が伝って堕ちる。

「だって……僕。先輩の、こと……」声を詰らせて言うが、その先が続かない。

「ごめんな、ユウタ。俺が全部悪かった。お前の事利用しようとして……」

ユウタは俺の言葉に返事するように、一生懸命首を振る。

それを止めるように、フワフワした茶髪を掌で包み込む。しばらくそうして抱き合っていた。

「ユウタ。今はどうしてるんだ？ 働いてるのか？」

腕の力を緩めると、ユウタはゆっくり身体を離して顔少し上げた。「今は……次の仕事が見つかるまで、ここでバイトをさせてもらってます。家は、吉野さんの所に居候です。あ、吉野さんって、あの――」

「さっきの金髪の人か？」

「はい。……あつ。吉野さんは、変な人じゃありません……いい人です。すごく、僕のこと気遣ってくれるし……」

俺が不審に眉を寄せた事に気付いたユウタは、急いで吉野という男のフォローをいれる。その顔が急激に赤く火照った。

不審に思っただのは吉野の方では無く、ここでバイトしていると言った方だ。

ユウタは山崎のような変な輩に目を付けられやすい。こんな場所でバイトするのは心配だが、あの金髪の男が一緒なら大丈夫だろう。

吉野の事を話して耳まで赤く茹で上がった元恋人が、本当の弟のように可愛く思った。

「付き合ってるのか？ あの人と」

興味本位で聞いてみると、ユウタはあからさまに動揺して、大きな潤った視線を小魚の動きで泳がせた。

「えっ、あの……まだ、付き合ってるは……」

泳いでいたガラス玉が止まったと思うと、サッと曇った膜が瞳に張り、悲しい表情になる。

「か、勝手ですよね……先輩の人生めちゃくちゃにしないと、自分だけ幸せになろうなんて……」

自分を責めるように笑う表情が、何とも寂しかった。

「そんなことない。俺のことなら気にするな！ もうこうやってピンピンしてるし。」

それに俺だって、安藤さんの人生めちゃくちゃにしたけど、今は幸せになってる。ユウタが幸せなら、俺も嬉しいよ」

ユウタの頬を両手で包み込み額にキスをする、ユウタはやっぱり涙目のまま微笑んだ。

「先輩……。先輩は、本当に、優しすぎます……」

「おい。面会時間終了だ」

いつから見ていたのか、安藤がドアを開けて立っている。

「ユウタ。俺はお前の恋人にはなつてやれないけど、それ以外なら何でも力になる。だから何かあったら、絶対に俺に相談しろ。いいな？」

小声で囁くと、ユウタが頷いてニコリと笑った。

やっぱり笑顔が一番似合うと思う。

最後にギョツともう一度抱き締めた。

廊下で吉野に「ユウタのことをよろしくお願いします」と頭を下げると、綺麗な顔が少し寂しそうに微笑んだ。

二人を廊下で見送り、部屋に戻る。

安藤は影のある思いつめた表情のまま、ソファーに腰を下ろした。隣に座り、安藤の手からライターを抜き取って、好きな人が口にくわえた煙草に火をつけた。安藤は顔を強張らせたまま、ずっと宙を見つめている。

「舞野とは、どうなんだ……その……」

煙にまぎれて語尾を濁す。

「何がです？」

「その……もう一度、付き合ったりするのか……？」

三十センチ先を凝視しながら男が静かに言う。

何となくだが、安藤が暗い理由は分かっていた。

いくら感動しても、恋人の前で少し戯れが過ぎたと反省する。

「俺は……安藤さんの、恋人じゃないんですか？」

静かに返す。

安藤は視線をローテーブルの上に堕とし、白い煙を深く吐き出す。

「隼。これだけは言っとく。

俺はお前の人生を狂わせた。

この先、俺の存在が必要ないと思ったら、いつでも切り捨ててくれて構わない。

お前の自由を奪うような真似だけは、したくないんだ」

なんて、優しくてもろくて、弱くて、強い人なのだろう。

自分にだけ見せてくれる、弱気な顔や優しい目。この男の全てが愛しい。

目を細めて、大好きな人の腕にそつと手を回した。

「それは……俺も同じです。

俺は安藤さんの未来を変えてしまった。変わってしまったものは戻せないけど、俺のことが飽きたり、いらなくなったら、いつでも捨てて下さい」

「隼、俺は——」

何かを言おうとした口を自分の唇で塞ぎ、言葉を全て吸い込む。チュツと音を立てて離し、明るく笑った。

「安藤さん、帰りましょう。俺達の部屋へ」

廊下の奥の裏口から外へ出ると、外はヒンヤリしていた。

タクシーを拾うために、大きな通りまで歩く。

バーの裏の駐車場を通り抜ける時、鋭く光る高級外車の中でカップルが抱き合ってキスしているのを目撃し、慌てて目をそらした。待てよ。

足を止め、もう一度振り返り確認すると、やはりこちらに背中を向けているのは、先程の椎名という男だ。

目を凝らすと、ジッと目を瞑ってキスに夢中になっているのは、キングの買い物で間違いない。どうやら二人の仲は上手くいっただしい。

「隼、どうした？」

スーツケースを引いて先を歩いていった安藤が振り返る。

「なんでもない！」と走り寄り、腕に抱き付いた。

鐘を鳴らして開いた明るい箱に乗り込み、十六階のボタンを押す。重たい扉が閉まったのを確認すると、安藤の首に腕をまわして深く唇を重ねた。

駐車場の二人を目撃してから、ずっとこうしたいと考えていた。少しでも大好きな身体を感じたいと、口付けが激しさを増す。が、それでも全然足りない。

蓄積された二週間分の欲求が急速に湧き上がって、全身の肌にしみ出し熱をもつ。

「あっ……」

「隼？」

何もかも忘れてキスに溺れていたのに、急に繋がりが解かれて、不安に声が出た。

安藤が面白そうに笑っている。

ハッとして振り返ると、エレベーターの外に立っていたベルボイの顔を見て、恋人と同じように笑えた。

GOOD NIGHT (後書き)

投稿したと思っていたら出来ていなかった衝撃……。
こんな真夜中の更新です。

さらに、今回は八千文字程の長文になってしまいました。 エエエエ
エ (´A`。。(っー、) エエエエ

七千文字で長くて出せないと言っていた自分が懐かしい……。

もう、あまりにも長すぎて一度の手直しで公開しています。どうせ
いつも文章おかしいから、変わらんワイ！ 向上心の無い奴め……

(´・`ー´) #

やっと明日(ってか今日) 完結でございます！！

何も無い、ただの週のなか日に終わるのが、またオツ。

流星群

「リョータく——ん。あんまり深い所いっちゃ危な——、おいっ、シノも！ お前泳げないだろ——。うあっ！」

名前を叫ばれていた矢先、少年が白い水飛沫を派手にあげて、穏やかだったはずの小川のせせらぎにのみ込まれる。

俺の隣で叫んでいたもう一人の少年が「だから言っただけに……」と愚痴りながらたじろぎ、靴を脱ぎ始めた。

「隼さん。俺とシノでリョウタ君見ときますんで、向うで安藤さんとゆっくりしてて下さい」

靴下に手をかけ脱ぎ捨てながら、明るい笑顔を上げた。

「あ、ありがとう」

ジャブジャブと水の流れをジューパンの裾で切って、濡れながら川に入っていく少年の後姿を見送ってから、ログハウスに向かって歩き出した。

秋晴れの朝、約束通り京子の家にリョウタを車で迎えに行くと、連休を利用した二泊三日の小旅行に連れて行くはずの少年が、何故か二人余分に増えていた。

安藤は少年二人を連れて行く事に断固拒否だったが、泊まる場所は俺達とは別だと言うし、片方の少年の誕生日だからどうしてもと言われて、断りきれず俺が安藤を説得したのだ。

小柄な方がシノで、もう一人が野木。どちらも、ずっと前にバーの奥の個室で会ったことがある顔で、思っていた通り高校生だった。シノはリョウタと同じくらい、はしゃぎ回って世話にかかるが、その分野木という男は高校生の割りにしっかりしていて頼れる。何となく俺と安藤の関係にも気がついていよう、俺達を気遣ってはリョウタとシノの面倒をまとめて見てくれる。

そういうあの少年二人も、誕生日だからといって男二人で旅行するというのはどういう訳なのか。まあ聞かなくても二人の雰囲気を見ていたらなんとなく分かるが。

宿泊先は高速で三時間ほどかかる山奥の会員制コテージ。

二階建ての立派なログハウスで、鮮やかな花々が並ぶ庭の前には小川が流れており、それ以外は四方を深い森が囲っている。隣のログハウスとは一キロ以上離れているから他に人の気配は無い。

露天風呂や広いテラスがあって、管理が行き届いているので部屋は塵ひとつ落ちていない。日用品やちょっとした食料も完備されている。

玄関の外から裏のテラスの方を覗くと、木の柱の間から白い煙が立ち上っている。

一度中に入って台所へ行き、二人分のコーヒーを入れてテラスに向かった。

ガラス戸を開けると、恋人がウッドベンチで腕を組んだまま、俯いて目を閉じている。運転を全て任せてしまったから疲れているのだろう。

コーヒーカップをテーブルに置いて、灰皿にあった白い柱を立ち上がりす煙草をねじ付けて消し、安藤を起こさないようにそっと隣に腰をかけた。

コーヒーを飲みながら恋人の寝顔を覗きこむと、あまりの愛おし

さで感嘆が漏れる。

どうしてこんなにも格好良いのだろう。付き合い出してから、毎日のように思う。

気がつけば、寝息を肌に感じるほど顔を近付けていた。

二十センチ先にある唇に重力を感じ、顔の表面が吸い付けられる。

「覗き見は軽犯罪法違反だぞ」

突然見つめていた唇が動いたと思ったら、頭の上に大きな掌が伸びてきた。

「ご、ごめんなさい。起こしちゃった？」

慌てて体勢を直すと、「いや」と言って安藤が上半身を伸ばし首を鳴らす。

「うるせえな。ガキは」

安藤がコーヒークップに手を伸ばしながら、秋風に揺れる風景に目をやる。川岸の方からは少年達のはしゃぐ声が引つ切り無しに聞こえていた。

「いいじゃないですか。あの二人のおかげで、こうやってゆつくり出来るし」

安藤への敬語は未だに取れない時がある。恋人に対して敬語なんでものを使わないように自分でも努力しているが、無意識に使ってしまう。元々上司と部下の関係だという事を思い出すだけで、自分達がいけない関係のようで気分が沈む。

「そうか？　ありやどう考えても、元妻とその弟からの嫌がらせだ。まったく、何考えてやがんのか……」

顔をしかめて言いながら、俺の背中に腕を回した。
あたたかい。

「あの二人、夕飯のバーベキューも手伝ってくれるらしいよ？」

「そりゃいい。メンバーズレストランでも予約して二人でふけるか。」

いつそあいつ等のバンガローに泊まるって、リョウタが言い出しやいいのにな――。そしたら二人で露天風呂でも入ってゆつくりできる」

「今晚は天体観測するって張り切ってるから無理だろうけど……明日はそうなるといいね」

少年達が泊まるのはここから二キロほど離れた、小高い丘にあるバンガローだ。

安藤がコーヒーに口を付けると、指のプラチナゴールドが秋の淡い光を反射する。

同じ金属の輪が、鎖に通って俺の胸元で体温の温かさにぬくもっている。

「ねえ安藤さん。その指輪、会社で何か言われない？」

「いや別に。恋人とのペアリングだって言ってる」

じんと首の後ろが痺れた。

京子は、安藤が結婚指輪を最後までつけなかったとぼやいていた。そういう、絆を形にしてしまうような事が嫌いなのかと案じ、今も無理して付けてくれているのでは無いかと日々気掛かりなのだ。せめてもと思い、自分は指に付けることを控えている。本当は指にはめたいが、恋人の重荷になりたくない。

「それにな。これ付けてないと、名前も知らない男の部下に告白されるなんて馬鹿な目にあわなきゃいけない。俺は男女関係無く、人の心を遊ぶ遊び人ってことになってるから――、誰かさんのせいで。女は振りなれてても、男に泣かれると気まずいからこっちがごめん」

「告白……されるの？ 男に？」

まあ、それも全て俺の責任な訳だが。

「誤解の無いように言っておくけどな。俺は別にお前以外の男が良いなんて、一度たりとも頭をよぎったことはないぞ？ 逆に、どう

してお前が女じゃ無いのかが不思議なくらいだ」

そういえば、安藤は元々ノーマルな男だ。女と結婚していたくらいだから。

だからといって自分の恋人がもてる事には変わらない。

「……心配」

「あのなあ。心配なのはこっちだ、隼。

あの復縁せまられた元恋人って奴もまだ店に来るんだろ？ それに、あの下の階に住んでる男、あいつも怪しい」

「そ、そんな……！ 先輩は……今はただのいい常連さんです。それに、橋本さんは出張のお土産くれるだけでしょ」

「どうだか。上の階の住人にわざわざ土産持つて行くかねえ――。

あいつはマンション中に辛子明太子を配って歩いてるのか？」

「んもお……。ちょっとは俺のこと信じてくれてもいいと思うけど」
そっぽを向いて口を尖らせる。

今まで疑われるような行いをしてきたことを後悔する。が、こんなにも自分は心も身体も捧げているのだから少しは信じて欲しい。

「別に、信じてない訳じゃないんだ……お前はちょっと、警戒心が足りないから――。なあ、機嫌直せよ」

警察の人間に比べれば、一般人の警戒心が足りないのは当然だろう。そこをフォローしてこそその警察だ。

肩を抱いていた温かい手が、許しを請うように頬を撫でる。

それでも顔を背けていると、恋人の顔が回り込んできて急接近し、唇を奪われてしまった。

ずるい。

とろけるような口付けで、どんな感情も幸福感に置き換えてしまふ強引な恋人。

ただのキスなのに、身体が火照るのを抑えられない。

熱に浮かれたように呼吸が乱れ、淫らな甘い声が漏れ出す。相手

は、俺の身体の内も外も敏感な弱点を全て熟知しているから、抑制しようとしても逃れようが無い。

付き合いだしてから一週間。徐々に慣れるはずだった触れ合いが、今では逆に我慢できないほど興奮してしまう。既に自分の身体は、この男無しでは生命を維持できないとすら感じる。

触れるだけで、キスするだけで、細胞の一つ一つが全開になり、全身で恋人の存在を吸収し、隙間なく埋め尽くされたいという衝動に駆られる。

好きで好きで、どうしようもない。

「んっ、うん——っ。だ、だめえ……リョウタが寝るまで、我慢して下さい……」

甘えた声を絞り出して顔を離す。服の中に忍び込んだいけない手を、布越しに押さ付けた。

熱い顔面のまま上目遣いで安藤を見ればニヤニヤと笑っている。

俺が止めるのを承知で、反応を見て楽しんでいるのだ。

ばか。

と言つてやりたいが、好きな人の唾液に犯された唇が余韻に浸つて動かない。出来る限り睨みつけると「可愛いな……」と囁かれ、次は触れるだけのキスをされた。

打つ手無し。

「来月の旅行は二人で旅館にでも泊まるか。また隼の浴衣姿が見たい」

安藤はそう言うつと横になり、俺の膝枕で眠ってしまった。

少し硬い安藤の髪に手をやるだけで指先に熱を持つものだから、この身体は重症で、明らかに手遅れだ。

森の匂いと煙草とコーヒー。

子供の笑い声に抱かれたまま瞳を閉じる。

「リヨウタ君、寝た？」

サンテラスの階段を上がってきた安藤に聞く。

「ああ」と言つて、持ってきた毛布をこっちに投げた。

それを受け止め、背中からくるまる。やや肌寒い。もう夜の十一時を過ぎている。

ログハウスの屋上に設置されたサンテラスに天体望遠鏡とソファーを運び込み、天体観測などという小学校以来のイベントに、子供さながら浮かれたのが夜の十時過ぎ。

天体望遠鏡は先週二人で買物に行き、安藤がリヨウタの誕生日プレゼントに買ったものだ。

俺は星座の本と星の図鑑、星座表をプレゼントした。

安藤は望遠鏡をケースに直した後、俺が座っていたソファアーベツドの背もたれを倒してから毛布に入ってきた。

二人で毛布に包まって仰向けになり、夜空を眺める。

闇に散らばった星屑、もしくは星屑の隙間を埋める闇。視界いっぱい夜空を見て、プラネタリウムのようなところか想像力の無さだ。

体温のゆるやかな上昇は、隣にある人肌とその人に対する個人的な感情が原因だと推測した。

「リヨウタ残念だったね。せっかく楽しみにしてたのに」
「いいさ。あいつには次回がある」

四十九年に一度の流星群。

それを見ることなく、リヨウタは睡魔の誘惑に完敗し、父親に抱っこされて寝室へ強制送還となった。

俺がプレゼントした星座の本を抱き締めたまま、今はベッドの中で宇宙へ行った夢でも見ていることだろう。

四十九年後に同じ流星群を、リヨウタは確かにもう一度見ることが出来るだろう。ただその時に俺と安藤が生きているかどうかは…微妙なところだ。

安藤に腕枕をしてもらいながら、手元に置いてあつた星座表を夜空にあてがう。暗い中でも蛍光塗料が塗つてあるから見やすい。

「ねえ、あれが火星だって」
強くまたたく点を指差す。

「隼。寒くないか？」と、安藤が俺の肩まで毛布を上げる。まるで子供と父親だ。

「っ！」

一瞬の閃光。

息を吸つて、声にならない声を吐き出す。

視界の端。刹那、小さく燃え上がった光源が長い尾を引いて流れ落ちたのだ。

すぐに消えてしまふかと思えば、何度か瞬きしてもまだ流れた跡が薄ぼんやりと闇にとどまっている。

「ねっ！ 安藤さん見た！？ 今の。すごく大きな流れ星！」
俺のはしゃぎように安藤が笑う。

「きれい……。俺、星が流れる間に願い事を三回言うなんて、絶対無理だと思つてた。それくらい願いを叶えるのは難しい事だって意味の、ことわざみたいなものかと思つてたよ」

「願い事、したのか？」

星に照らされた恋人に、首を横に振って答える。

「でもあれだけ長く時間があれば三回唱えるのも、あっ……ほらっ！
また。きれい……」

放物線を引いて消えていく光に呼吸を奪われ、願うことなど忘れてしまう。

この気持ちを共有しようと思い隣を振り向くと、安藤は物思い気に俺を見つめていた。

「な、なに？」

「いや……きれいだなと、思っ」

「俺が？ 四十九年に一回の流れ星より？」

「ああ、それを見てるお前を見てた方が価値がある。俺にはな」

こんな気障きざなことを言う恋人が可愛くて笑えてしまう。いつもはクールなはずなのに、今日の安藤はおかしい。

「ねえ、ちゃんと見てなきゃ。もう一生に一度しか、っあ！」

ほら、また流れたと指差す手を取られ、視野に大きな影が覆いかぶさったかと思うと、満天の星空が半分以上消えていた。

上から降ってきたのは星屑では無く、もつと愛しいもの。

熱い唇が三回分の願いごとを吸い取っていく。

宇宙を漂うような、ゆったりとしたキスに身体がほどける。

魂が溶けていく。

恋人の頭越しに、星が一つ、また一つ、流れ堕ちて消えていく。

火照った頭で、愛する人の中に三度。想いを唱えた。

「隼。話があるんだ」

繋がりが解けて二秒も待たず、唐突に安藤が言う。

「……っ？ どうしたの……改まって」

今日は何か様子がおかしい。

微かに映る目の顔が、いつになく真剣だ。

そんなはずはないだろうと、不意に訪れる別れの影におびえる。
頬をなでる外気が、やけに冷たい。

「あの。指輪、だけどな……」

「……指輪？」

別れ話ではなかった。

指輪が嫌だというくらいの話なら、いくらでも聞き入れる覚悟はある。

「そう、指輪だ。あれを、その……ちゃんと、してほしい……」

「ちゃんと？ 指輪ならちゃんと毎日してるよ。ほら、ここに――」
ネックレスを取り出そうと襟元を探ると、その手を大きな温もりが捕まえギュッと握られる。

不思議に思っただけで上げた視線の隅で、また星が流れた。

「それって、首にだろ？ そうじゃなくって……ちゃんと、左手の薬指にはめてほしい」

思いがけない要求に言葉を失う。

「なあ、隼。大切な話なんだ。

結婚は無理でも、同じ苗字になることは出来るだろ？ 籍入れて、同じ苗字になって、ちゃんと下の名前で呼んで欲しい。

同じ指輪して、一緒に暮らして、名前で呼び合って……ちゃんと
した既婚者として、お前には暮らしてもらいたいんだ。
そういうのって、重たい、か……？」

じつと前を見る。

見つめていたのが愛する人の顔なのか、その後ろの星空なのかも忘れた。

男のシルエットに、いくつものスパークが降り注ぐ。

この男の、こんな不安げな表情を初めて見た。

「おい。何とか、言えよ。一応これ、プロポーズのつもりだ。これでも人生初だからな……」

暗闇の中を気まずそうな視線が泳ぐ。

「隼……?」

「あつ……ごつ、ごめん。ボーっとしてた。あ、あの……嬉しい……すごく。」

何て、言ったらいいのか……。

こんなに早く、願いが叶うなんて、思わなかったから……」

そのとき視界の隅で、一際大きな星がぼわりと一瞬青く燃え、漆黒を滑り落ちていった。

眼で追うと、知らぬ間に湧いて出た熱い液体が、流星と同じ速さの曲線をたどって頬を滑り落ちる。

「それって……OKってことで、いいんだな……?」
眼を伏せて頷く。

「隼。絶対、幸せにする。これから幸せすぎて、いくらでも泣かせてやるから、だから。だから今は……泣かないでくれ」

「そ、そんなこと、言っても……」

勝手に涙は流れていく。流星群が二人の大切な時間を考えずに勝手に流れていくように。

「ほら、星見ろよ。一生に一度なんだろ？ 勿体無いぞ」

「そんなんじゃ……無理」

滲^{にじ}んだ夜空から、また温もりが降ってきた。

夢のような夜空の流れ星よりも、ずっと確かで温かい肌が俺の涙を止める。

黒い水面に揺れる無数のプラチナが、次々に燃えては滑り、尽きていく。

一体どれだけの人数の願いを燃やしながら、流れていくのだろう。

きれい……。

四十九年に一度の奇跡。

俺の恋人は、そんな夢の時間を大胆に使い捨てて生きていく。

二度と訪れないかもしれない神秘的な夜に、嘲笑うかのように背を向ける。

こんなにも罪深く、俺を想っていてくれる。

濡れた顔を少し引いて、唇が微かに触れたまま言う。

「……雅人、さん……」

かすれた声。

初めて呼ぶ名。

会社のオフィスで初めて出合った日。俺が心奪われた日。社員が全て登録された社内ネットのアドレス帳から探し出した名前。実はずっと呼んでみたかった。

「ん？」

流れ星よりも、俺の願いごとを叶えてくれる眩しい光が微笑む。

また堕ちた。

ほら……また。

きれい……。

「愛して、ます」

放射状に爆ぜる星々の活動が、いつのまにかピークに達している。眼で追えないまま滑っていく光と共に、また熱い呼吸が堕ちてくる。

四十九年に一度の奇跡を瞼で遮り、もっと大切なものを全身で感じた。

「……俺もだ」

幾千の流星が降り注いでも、もう二人を振り向かせることは出来ない。

魂が染み出していく。

熱くなった身体を脱ぎ捨てる。

魂が青白く燃えて一つになっていく。

長い尾をからませて、ゆっくりと流れ堕ちていく。行き先は不明。

漆黒の空。

プラチナの星。

煙草の匂い。

流星群。

星堕つ夜に二人で溶けあい、堕ちていく。

例え、一瞬の青白い光源となっても

例え、流れ燃え尽きても

もちろん

堕ちます……あなたと。

「完」

流星群（後書き）

台風と共にやってきました最終話。

とりあえず！ 終わりました！ ってか、終わらせました！

また改めて、【後書＆今後の予定】を「活動報告」の記事でアップさせて頂きます。今後のお知らせなども全て「活動報告」の方に記事をアップ致しますm（――）m

とりあえず、一つお知らせだけ。

お礼を兼ねまして、リクエストの多いカップルの番外でも入れるつもりです。

下のリンクからブログ内の投票箱にポチして頂くか、やっと設置に成功した下の拍手タグから拍手コメでリクエスト頂くと票数に入れさせて頂きます。（ケータイだと案内ページに拍手タグとブログへのリンクが貼り付けてあると思います）みなさまドシドシ投票あそばせm（――）m

とりあえず締め切りは、来週火曜の朝までとさせて頂きます。

ではでは。

読んで頂きありがとうございました（＊、エ、＊）っ。＋。 愛。
。＋。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7323h/>

堕ちます.....あなたと。

2010年10月8日13時57分発行